# 護り抜く少年

開け!ごまドレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
護り抜く少年

【Ｎコード】
Ｎ４３８７Ｓ

【作者名】
開け！ごまドレ

【あらすじ】
突然死んでしまった少年は自分の妄想が叶えられる「ある世界」に行く事になる。そこで出会う仲間や繰り広げられる戦い。
少年はその「力」で何を成すのか・・・。
完全素人の投稿で拙い文章ですが宜しくお願いいたします。
※他作品の台詞や描写等が出ますので予めご了承下さい。

# プロローグ（前書き）

初投稿です。誤字、脱字等ありましたら。指摘お願いします。

# プロローグ

姫菱　雄飛は気がつくと変な状況の中にいた。足元には砂利が敷いてあり、周囲は朝靄の様な霧に包まれている。すぐ傍で小さく水の流れる音がする。どうやら川の近くいるらしい。
おかしい。自分は明日の高校の入学式に合わせて買物の途中だったはず。川原や河川敷には用は無かった。一緒についてきた弟にせがまれてゲームセンターに寄り道したが。
そうだ弟は何処だ。

段々記憶が戻ってくる。

クレーンゲームで散財した後、交差点にいた。

そうだ、思い出してきた。

いつもの帰り道を曲がったら・・・何があった?

「まだ思い出せませんか?」

目の前に人形が立っていた

全身ペンキで塗り固めた様な白い肌

毛髪の生え跡すら一切ないスキンヘッド
形だけで瞳孔すら描かれていない眼球
そうしないと動かないであろう、スリットの入った肩や肘、大腿部の関節。
ショーウィンドウに飾ってある様なマネキンが開けないはずの口を開き

「あなた死んでしまったんＤＥＡＴＨ」

今時小学生でも鼻で笑うようなジョークとともに雄飛は死亡通知をうけた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「は？死んだ？俺が？」

「はい。誠に残念ながら」どこを見ているのかわからない目線をこちらに向けて続ける

「此処は俗に言う、『あの世』への境界線の一歩手前なんです」

聞いてもいない事を喋るマネキン。無表情なのに妙に人間味のある口調で正直気持ち悪い

「ゲームセンターの帰り道に、交差点で女子高生とぶつかって死んでしまったんですよあなた。覚えてないですか？」

「何だよ！その死因！」

どう考えても恋愛フラグ立つトコだろうそこは！そして明日の入学式で偶然の再会。そんな流れだろう！

というか何かにぶつかったくらいで死ぬ様なもやしっ子では・・・

「でも車の免許取立てで浮かれてたのもあって、１００ｋｍ／ｈ近く出してましたよ。彼女」

「ただの交通事故じゃねえか！」

そりゃ死ぬよ。

さすがに。

仮に生き残ったとしても、被害者と加害者ではときめかないだろう。

思い出してきた。確かに甲高いブレーキ音に振り返るとすぐ目の前に車があった。そこから先は覚えていない。即死だったのだろうか。

そうだ一番大事な事を忘れていた

「弟は無事

「無事です。傷ひとつありません」

か？」と言い終わる前に告げられた。

生きている。その言葉に安心する。まあ、目の前で家族が死ねばかなりのトラウマになるだろうが

「自己紹介が遅れて申し訳ありません。私はサイ。『神の代行者』みたいなものです」

「姫菱　雄飛。中学生と高校生のちょうど中間の存在」

まだ入学してないしな。卒業はしたけど。

しかし、ある程度は予測はしていたが『神の代行者』ときたか。こんな存在に代行させていいのか神様？

「というか、落ち着いてますね。自分が死んだのに動揺の一つも見せないとは」

「家族や友人が死んだ。と、いうならともかく自分が死んだといわれても」

実感が湧かないのが本音だ。意識ははっきりしているし、『あの世』に行っても自分の生活する世界が変わるだけの様な気がする。

「まあ、厳密にはまだ死んでいませんしね貴方。」

「はい？」

「肉体は交通事故で荒挽きなりましたが、魂に関してはさっき言った通り『あの世』との境界線たるこの川を渡らないと死んだ事にはならないんですよ。」

さらっと酷い事を言われたがスルー。
あれは三途の川なのか。と指差された方向にある川をみる。ということは此処は賽の河原か。

「で、その『代行者』が何の用だ?アレか?俺に積み石しろと?」

理由はどうあれ親より先に死んだのだ。先立った不幸を赦してもらう為には石の塔を完成させなければならない。
そう思って足元を見る。たしかに積むのに適した平石ばかりだ。この石で水切りしたら面白そうだ。できないけど。
いえいえ。と座ろうとする俺を止め、咳払い一つして告げる。

「おおゆうひよ。死んでしまうとは情けない。そなたにもう一度チャンスをやろう」

「悪い。俺はあのシリーズ、?と?しかプレイしてないんだ」

わざわざ声マネまでして雰囲気はそれなりに出ていたが、全滅しても王様には世話になってはいない。
セーブは教会だ。
ツッコミの後は今までの声に戻し、サイは話を続ける。

「貴方には二つの選択肢があります。ひとつはこの川を渡って『あの世』に行ってこの世への再度の転生を待つか」

そう言って川の向こうを指差す。しかし二つ目の選択肢は真逆の方

向を指し

「川を渡らず違う世界に行くか。この二つです」

「違う世界？」

元々『自分が死んだ』という眉唾物のオカルト話だったが、さらにきな臭くなった。

「貴方は、自分に『気や魔法』を扱う才能が在る事を知っていますか？」

「いや。むしろ知っていても信じない」

オカルトではなくファンタジーだったらしい。『異世界』に『気や魔法』とは。マネキンが喋っていなかったら中二病と診断を下していただろう。

「貴方のその才能ははっきり言って桁違いなんですよ。このまま『あの世』に送るにはもったいないほどに。色々な世界の人間を見てきた私からしても『規格外』と言わざるを得ない程の力、使ってみたくないですか？」

一気にまくし立ててくる。怪しすぎる。

だが確かに使ってみたい。何を隠そう自分も去年中二病を患っていたのだから。

ゲームに出てくる剣技や魔法を使ってみたい。映画のアクションシーンの様にアクロバティックな動きをしてみたい。

勿論、カワイイ女の子やキレイなお姉さんと一緒に！

そんな妄想と共に一年を過ごしていた。

だが高校受験の為とはいえ自主的に勉強する事が日常になると、そんな妄想は何処かに行ってしまった。
自分が只の一般人で『才能』ではなく『努力』を積み上げる人種だと悟ってしまったからなのか。
派手なエフェクトのＲＰＧも、手に汗握る格闘戦も、好きなのは今も変わらない。
だが想いは『いつか自分も』ではなく、ただ『かっこいい』。
画面やスクリーンの中に入っていた自分の心は、いつの間にか感想を言うだけの『観客』の場所に立っていた。
これも成長なのかと達観していた。

だが、もしも

使えるのなら

「使ってみたい」

この言葉を聴いたとき、マネキンであるサイの表情に変化は無かった。
だが間違いなく笑みを、悪魔の笑みを浮かべていただろう。
そう確信している。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

「で、要求は何だ?」

「はい?」

サイは首をかしげる。だが表情に変化が無い為、やはり気持ち悪い。

「お前は『神の代行者』らしいが、『悪魔』は元より『神』だって、見返りも無しに何かをくれる奴はいないだろう」

宗教が生まれる前の精霊信仰の時代から何かに祈り、願うときは必ず『供え物』が必要だった。

神々の世界でも『純粋な善意は存在しない』事の証明だった。

一方、サイは質問の裏が理解できたらしく頷きながら

「『実験』です」

「『実験』?」

オウム返しに聞く俺に、「はい」と、相槌を打ちながら内容を続ける。

「貴方が今から行っていただく世界は『マンガ、アニメ、ゲーム』の世界なのですが、

『主人公』がいて

その主人公の『敵』がいて

ある程度『結末』が用意されている。そんな世界に

『貴方の様な『規格外』の才能を持った存在が入り込んだら一体どんな事になるのか』

という実験です」

サイは変わることの無い無表情のまま、絶句している俺に『実験内容』を話す。

「物語はどう変わるのか。

『主人公』が勝つのか、『敵』が勝つのか。

『規格外』が二人とも倒してしまうのか。

それとも、『規格外』は負けてしまうのか。

はたまた物語に全く影響を与えないのか。

全てが未知数です」

感情が昂ぶっているのか身振り、手振りが入ってくる

「あちらに着いたら後は自由にしてもらってかまいません。
どちらの陣営に加わろうが、その両方を滅ぼそうが
世界平和を成し遂げても、地球を滅亡させてもいいでしょう
主人公のヒロインを横取りしても、途中から自分が主人公になっても
突然心変わりして、普通の生活をするのもありでしょう
今言った事がはたして貴方に『可能か不可能か?』それもわかりません
『それも含めて』見せて下さい。姫菱雄飛さん」

『どうなるかわからない』だからこそ『実験』をする。
サイの俺に対する要求は『異世界に行く事』そのものというわけだ
この『規格外』の実験に俺が抱いた感想は

『面白そう』

それだけだった

『実験』に協力することを誓った俺の顔にも悪魔の笑みが浮かんでいただろう。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

「では貴方の力の『カタチ』をきめましょう」

「『カタチ』？」

「その世界に存在しない『規格外』の才能ですから。『カタチ』を決めないままでは使うこともままならないですよ？」

オウム返しにするとサイの説明が入る

説明を聞いてもよくわからない。

「『カタチ』次第でどんな能力でも使えます。ゲームやアニメ、映画のヒーローが使っていた能力でも思いのままです」

どんな能力が使いたいですか？そう聞いてくるサイに対し

「ＴＯＧｆ　のアスベル・ラントの帯刀技と抜刀術を一通り。それと術関係を全部使えるようにしてくれ」

抜刀術はやはり使ってみたい。ＴＯＶ　も捨てがたいが。

そんな事をこぼしたら

「修行次第では使えるようになりますよ。『カタチ』は似てますから。」

「修行？しないと使えないのか？」

そう言ってから気づいた。『規格外』とはいえ『才能』とサイは言った。鍛えなければ『力』にはならず『才能』のままなのだろう。それに自分は今までの人生で剣も格闘も未経験だ。喧嘩ですら小学生時代にした以来だ。

自分の才能に頼るだけのヤツは大抵負ける。

『マンガやゲーム』ではよくある光景だ。しかも今からそんな世界に行くのだから。

そう思って一人納得していると

「『違う世界』に行くにしても時期を見て送らなければならないので、どちらにしても時間は余りますよ？」

そう言って、どこから出したのか

長さ７０、８０ｃｍ程度の日本刀と帯刀用のホルダー、本というより鈍器に分類されるべき厚さの本を数冊俺に押し付けてきた。

こうして剣も魔法も知らない素人が、『主人公』とその『敵』を超えるための訓練が始まった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

訓練を明け暮れてしばらく経った。どの位訓練を続けたのか正直検討がつかない。場所の所為なのか肉体失ったからなのかわからないが時間の感覚が無いのだ。

今は幽霊の為肉体疲労が無いらしく、精神的につらくなったら座っ

て目を閉じる。しばらくするとそれだけで精神的疲労は完全に無くなる。
そしてまた訓練を続ける。それの繰り返しだった。
『可能な限り鍛える』
サイはそう言い訓練として、体術、剣術、抜刀術、魔術を文字通り俺の体に叩き込込んだ。
一番最初に回復術を教えられた理由が今更ながらにわかった。
そして一対一、一対多の模擬戦で多種多様な魔物を召喚して対魔物、時にはサイ本人が相手となり対人戦術を身につけ俺は実力をつけていった。

そのおかげで、帯刀技は一通り習得。
抜刀術、そこから連携につなぐ剣技も幾つか。
魔術は中級を習得中で、下級にいたっては『無詠唱発動』が可能になるまで成長していた。
訓練は苛烈を極め、実は此処は『あの世』の一歩手前では無く『地獄』ではなかろうか？と、思うほどだった。
しかし、他にやる事が無いのだ。
サイに自分が行く異世界の事を聞いても

「その世界の情報を与えると『実験』に悪影響が出る可能性があります」

そう言ってどんな世界か教えてはくれなかった。
確かに『シナリオ』を知っている状態で『違う世界』に行ったとしたらその情報を元に行動するだろう。
『主人公』に協力するにしろ敵対するにしろ、『主人公が誰だか知っている』時点で『神』の視点での行動になる。
あくまで『規格外の才能を持つ存在がどんな結果を出すか』を知る為の『実験』だから。

しかし、さすがに気になったので食い下がると
『行き先は、現代の日本』
それだけは教えてくれた。
暇をそのまま訓練に当てているが、自分が強くなるのを自覚できていたのでサボる事は無かった。
魔術を一つ修得する度に、模擬戦でサイに一撃入れる度に、ゲームの主人公に近づいている気がした。
そんな充実感に包まれながら休憩していたら、突然

「来た。準備してください。」

そう言って、サイは魔法陣を描き出した。
河原の石で地面をなぞる。その軌跡に淡い光が走っていく。
『本当にいつ、転送できるか判らないので心の準備だけはしておいて下さい』
毎回訓練開始前に言われていたので、動揺はそれほど無かった。
1分もかからず魔法陣は完成。俺は静かに魔法陣の前に立つ。
そして

「同調完了です。陣の中央に立てば転送開始です」

旅立ちの時間になった。
待ちに待った『異世界』での『二度目の人生』。
だが最後に言っておく事があった。

「サイ。

人生二度目のチャンスを俺にくれた事、

そして俺を鍛えてくれた事。礼を言わせてくれ。」

『実験』で手を組んだとはいえ俺の妄想と言える様な夢を叶えてくれた事は事実なのだから。
『ただの十五歳』で死ぬところを救い、それ以上のモノをくれた。
そんな無表情の『代行者』へ
本当にありがとう。
そしていってきます。

「異世界せいぜい楽しんでくるぜ」

サイのマネキンの顔に一瞬浮かんだ感情は驚きだったのだろうか？
最後はわからなかったが、

「いってらっしゃい」

その言葉と込められた感情を受け取れたと思う
俺は、何の躊躇いも無く陣の中央に足を踏み入れた。

## 第一話（前書き）

調子にのって連続投稿です。
停電時ネギとエヴァの戦いの一方、こんな事が起こっていました。

# 第一話

次の瞬間、姫菱雄飛が感じたのは全身に張り付くような冷たさだった。

一拍遅れて鼻と、口から出て行く空気。変わりに息苦しさと、鼻の奥に刺さるような痛みが襲う。反射的に口を押さえるが遅かった。

何が起こっているのか分からない。

辺りを見ようと開いた目には黒しか映らず、しみるような痛み。

パニック状態になり手足を動かしてもがくが、上も下もわからない。

浮かぶような感覚がありそこに顔を突き出すと息が吸えた。

だが呼吸できたのは一瞬で、また沈む。必死にもがき浮く。沈む。

また浮く。何回か繰り返してようやく安定して浮き続ける。

咳き込みながら呼吸を整える。ここでようやく自分は水の中にいたことを知った。

上を見上げると三日月があった。雲で幾らか隠れているが、それでも雄飛を見下ろしている。

周囲を見回すと岸らしい場所がある。雄飛は月明かりの中、何とか浅瀬を目指して泳いだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

俺は何とか浅瀬にたどり着いた。

だが岸に上がる前に再び咳き込んでしまい、そのまま突っ伏す。

飲み込んでしまった水と胃液を吐きそうになるのを堪え大きく息を

つく。
嘔吐感が通り過ぎた後、記念すべき異世界での最初の一言は

「・・・・・・・・・アイツコロス・・・・・・・・・」

『命の恩人』への殺人予告だった。
第二の人生をくれた恩も、修行をつけてくれた感謝の念も、その一切が自分の中から消え去ったのがわかる。
水中に転移させるなんて悪意というより殺意を感じる。
どうやらあのマネキンは交通事故の次は、俺を溺死させたかったらしい。

「・・・次に会ったら車の衝突実験に参加させてやる・・・」

シートベルトをつけないで走らせ、フロントガラスに突っ込んでもらう。決めた。そう固く心に誓う。
息も整ってきたので立ち上がり、辺りを見る。
岸を見ると、そこから土手に続く階段、その先には煉瓦作りの塀と建物が見える。土手の上には道があるのか街灯が等間隔に並んでいるが

「点いてない・・・」

浅瀬から見える建物の窓にもその一切は無かった。その所為かはわからないが人の気配は一切感じられない。
道や建造物が立派な分、灯りが無いだけでゴーストタウンの様に感じる。
岸縁を目で追っていき、１８０度振り返るとそこには小さな湖があった。その中心には小島があり、岸その間を橋がつないでいる。
小島には何か建物が建っているのか、塔らしき建造物がシルエット

を作っている。
やはりというか、小島にも、そこに架かる橋にも灯りは無かった。
しかし人工の光が一切無い月明かりの中、湖の中に浮かぶ建物はとても幻想的で

「ヴェネツィアの教会みてぇ・・・」

そんな感想が自然と口から出ていた。
それほど、その景色に心奪われていたからか

「おい」

声をかけられるまで彼女の存在に気づくことは無かった。

「ここで何をしている？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇？？？　ｓａｉｄ◇

『一応、いつでも動けるようにしておいてくれんかのう』
学園長にそう言われており一通りの準備はしておいた。
今日は本当なら、ロウソクや懐中電灯の用意もする必要があったが、龍宮真名に

「必要ない」

そう言われ見せられたのは、少し大きめのバッテリー式のカンテラ。
野営用の物らしく、所々傷や汚れがあるが停電で電灯が使えない状況でも力強く光続ける様はむしろ頼もしさを感じる。
今夜は『仕事』らしく、部屋を空けている。その為、このカンテラを同室のよしみで貸してくれた。
学園長に今日の警戒について聞くと

「今日の学園の一斉停電に合わせてエヴァンジェリンが行動を起こす可能性がある」

「そちらは魔法先生らが対応するが、行動を起こすのがエヴァ一人ともかぎらない」

との事だった。
どういう理由で力の大部分を失ったか詳しくは知らないが、あの『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』だ。
魔法先生の大半を待機状態にしているらしいが、やりすぎという事は無いだろう。
『何も無いと思うが、イヤな予感がしてのう』
学園長兼、関東魔法協会の理事の予感だ。警戒するに越したことは無い。
このまま何も無ければそれで良し。そう思っていたら、

『刹那君。図書館島周辺に妙な力を感じるのじゃ。行って見てくれんかのう』

「わかりました」

予想は外れ、予感が的中する。
学園長からの念話に内心溜息を吐きながら、返事をする。

行動開始だ。

―――――――――――――――――――――――――

図書館島に近づくにつれ、確かに『妙な力』を感じる。
今まで感じたどの『力の種類』にも当てはまらない。強いて言うなら魔力だが、それとも違う。
そして少し遅れて、『気』の力を感じる。結構大きい。そして

「乱れている・・・？」

戦闘時の肉体強化の様に『纏う』ような出し方ではない。バケツの水を『ぶち撒ける』様に辺りに放出している。
更に近づくとぱったりと収まったが、『妙な力』の残滓は徐々に小さくなってはいるが、確かに感じる。
図書館島周辺に到着。湖の浅瀬に人の気配。岸へ降りる階段近くの塀の端に近づき、『夕凪』を抜く。
切っ先だけを塀の外に出して、鏡に見立てて階段下を確認。人がいる。
刀身越しではよく判らないが、人間らしい。こちらに背を向けながら辺りを見回している。
こちらの存在に気付いていないし、見たところ武器も持っていない。
だが『妙な力』と先ほどの『気』の放出の件もある。警戒するに越した事は無い。
『夕凪』を納刀し、いつでも抜けるようにする。
足音を殺しながら階段を下りていく。まだ気づかない。

「おい。ここで何をしている？」

結局、そう声を掛けるまで『彼』は気づかなかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　side◇

振り返れば美人がいる。
背中まであるであろう黒髪をサイドテールにまとめた頭
１５０ｃｍ程度の体躯を包むのは、赤紫のブレザーと白いワイシャツ。学校の制服だろうか。
チェックのスカートから伸びる脚。肌の白さは月明かりの所為だけではないだろう。
年恰好から推測して同年代だろうか？
容姿だけを見れば『大和撫子』の言葉が似合う女の子だった。
だが、
最後に、左手に持った白鞘の刀を見てしまえば、さすがにそんな感想は出てこない。
こちらに警戒の視線を向けながら、既に左手の親指が鯉口にかかっている。
・・・メッチャ睨んでる・・・
「答えろ。ここで何をしている」
質問に答えが無かったからなのか、再度問いかけをしてくる。
「・・・あー、っと・・・着衣水泳の練習・・・？」

別にしたいわけではなかったが。
彼女の眉間にさらに深いシワが刻まれる。答えを間違ったようだ。

「停電の時間帯は外出禁止だ。先生方に聞いていないのか？」

「停電？」

道理で街灯の一つも点いていない訳だ。辺り一帯が無人なのも外出禁止令の所為か。
一人納得していると、二つ目の質問をオウム返しにしたのがまずかったのか

「貴様、学園の生徒ではないな？」

質問の口調だが、確信を持って聞いてくる。これはＹＥＳと答えても、ＮＯと答えても結果は変わらないだろう。
沈黙を肯定と受け取ったらしい。更に警戒を強めながら

「不審者は警備の先生に引き渡す事になっている。着いてきてもらう」

俺の意思を確認せず決定事項を口にする。反論は受け付けないらしい。
だが、彼女の言う通り警備や警察関係機関に連行されると『身分証明』ができない俺は、当分の間住所不定無職として拘束され続ける。
勘弁願いたい。

「悪いが断る」

彼女はその答えを予想していたのか刀の鯉口を切る。澄んだ音とともに美しい刀身が白鞘から現れる。

「なら無理矢理にでも連れて行くまでだ」

そう言いうと鞘を放り投げ、殺気のこもった視線を向けてくる。
刃ではなく峰をこちらに向けて正眼に構える。どうやら打撃を当てて戦闘不能にする気らしい。
こっちも全身に『気』を纏い、構えをとる。おとなしく捕まる気は無い。が、この時になって気づいた。
『剣が無い』
訓練時に常にあった重さが無い。反射的に左腰を見ても、あるのは帯刀用のホルダーだけだった。
（そういえば休憩中に転送されたんだった・・・）
致命的なミス犯した事に固まっていると、隙と見たのか上段から打ち込んできた。
爆発したかの様に吹き上がる水飛沫。
何とか避けて前方跳躍し振り返る。互いの位置が入れ替わった状態で再度相対する。
相手も『気』で肉体を強化しているのかパワー、スピード共に普通の女の子のソレではない。
二撃目が来た。
真横に振り抜かれる剣を身体をくの字に折って回避。続く連撃も後方に下がりながら体捌きで避け続ける。
段々と苦しくなってきたので、反撃に移る。刀を振り切った動作に合わせて間合いを一気に詰める。
姿勢を低くして、刀が振れない距離まで近づく。対剣士戦の常套戦術。
相手もそれを分かっているのか剣を振った動作に合わせて回し蹴りをしてくる。

低い姿勢を更に低く。四足獣の状態になった俺の頭上をとんでもない速さで通り過ぎる足。翻るスカート。

スパッツだった。

「うお、あぶねっ」

がっかりしたのが顔に出ていたのか、顔に怒気が浮かんでいる。更に苛烈になる斬撃。

だがその分大振りになったその太刀筋は単調で、読みやすい。

容赦ない斬撃が胴に放たれる。峰打ちでも下手をすれば内臓破裂の一撃。

だが、その太刀は俺の脇腹に叩き込まれる事は無かった。

ガキンッ

鈍い音。その音と共に刀は俺の左脇に触れるか、触れないかの位置で停止している。

真横から放たれた一撃は俺の膝と肘で挟み込む様にして止められていた。

彼女の顔に驚きの感情が走る。だがこの距離で、その一瞬の隙は致命的だ。

止まった刀の峰を脇腹へ当て、そのまま滑らせながら前進。

懐に入った俺は左手で彼女の右袖を、右手で左襟を掴み背負い投げの要領で投げ飛ばす。

彼女もただ投げ飛ばされる事は無く、受身を取り、勢いに逆らわずそのまま距離をとる。

だが、立ち上がったその手に刀は無い。右袖を取った時点で奪っておいた。

武器を奪った以上、戦闘はここで終わりだろう。そう思っていたが、彼女の目には刀を奪われた怒りと闘志が映っている。

戦いを止める意思は無いと判断。色々と『この世界』の情報を聞き

たかったが。彼女は戦闘不能まで追い込む必要がありそうだ。
そんな諦めと共に足元の白鞘を取る。最初に彼女が放り投げたものだ。
切っ先と鯉口を合わせ、納刀。鞘を左腰のホルダーに通す。格闘の構えを取る彼女に向き合い、腰を落とす。
抜刀術の構え。
ようやく本来の戦いができる。
そんな考えの中、相手との距離を一気に詰める。
抜刀。急所は狙わず刀を走らせる。バックステップで回避する相手に追撃するも全て避けられる。
構わず連続で刀を振るう。相手を追って階段を駆け上がり、土手の上へ。再び二人の距離が広がる。
レンガ敷きの床を踏み締めながら再び抜刀術の構えを取り、思う。
相手の剣を避けているときは気づかなかったが、この刀はかなり特徴的だ。
俺が訓練で使っていた俗に言う『打刀』ではなく『野太刀』に当たる。
全長７０~９０ｃｍと一般的な長さの『打刀』に対し、この『野太刀』は１３０ｃｍ近くある。
刀の『反り』は、使っていた『カタナ』とほぼ同じだがいつもより約４０ｃｍ、およそ柄一つ分長い。
普通に振るう分には問題無いが、抜刀、納刀に行うにしては正直・・・

「使いずらい・・・」

「なら返せ！」

間髪入れずに言ってくる。
ごもっともです。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那ｓｉｄｅ◇

自分の愛刀を奪っておきながら厚かましいことを言う男を睨む。
構えを崩さず相手を分析する。
体術は自分とほぼ同じくらい。
だが剣の技量は相手が抜刀術に適さない長い刀を使っていることを差し引いても自分が少し上。
間合いを半歩詰めながら考えを巡らせる。
抜刀術は高速の抜刀と、その後に続く速さを重視した理詰めの剣術だ。だが最初の一刀を避ければ無防備になるのが最大の弱点。
そして『武器を選ばず』が信条の神鳴流にとって無手である事は関係ない。（最初の抜き打ちをかわして懐に入り込む）
その瞬間を狙って全身に気を張り巡らせ、集中する。
その瞬間
周りの街灯が一斉に点り、二人の周囲が突如として明るくなる。
互いに相手の出方を伺って緊張していた二人は弾かれた様に疾走する。

（停電が解除されたか）

頭の片隅で考えながら慎重にタイミングを測る。失敗すると文字通り自分の首が飛ぶ。
自分と相手の速度、歩幅、夕凪の長さ、全てを見極め

（今だ）

相手の抜刀の間合いのギリギリ外で減速。抜刀の一撃目をかわしカウンターを仕掛ける。

レンガ敷きの道をローファーで削りながら成功を確信する。このタイミングなら抜き打ちの刀は自分には届く事は無い。

だが相手の『右手』は刀を抜く事は無く、さらに間合いを詰め『左手』で、納刀したままの刀で攻撃をしてきた。

夕凪の柄頭が腹に突き刺さる。全く警戒していなかった『打撃』に動きが一瞬止まる。

放たれた蹴りの三連撃を何とか防御。だが、その衝撃で間合いが離れる。

続く鞘での打撃と突きを後方跳躍で回避。だが、その瞬間、自分の失策に怖気が走る。

（マズイッ・・・）

『打撃』が届かない間合い。それは『刀』の間合い。

左手が瞬間的に腰元に戻り、抜刀。白刃が街灯の光を跳ね返しながら肩口を強襲する。

避けられたのは単に抜刀に不向きな、長い『野太刀』だった事だ。

もし夕凪より短い通常の『打刀』なら反応もできず切られていた。

本来なら利点のはずの『長さ』が、相手の抜刀の足枷になっていた。

自分を追ってくる斬撃を辛くも避けながら思考を巡らせる。

（抜刀にカウンターを合わせる事ができない以上、再び納刀する前に攻撃するしかない）

元より自分は無手。懐に入らなければ攻撃すら届かない。

幸い相手の剣の腕前は自分より下だ。太刀筋はある程度は読める。

再度のカウンターを行うための隙を見つける為、刀を避け続ける。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇雄飛ｓａｉｄ◇

（何か狙ってるな・・・）

剣を連続で振るいながら、そう感じずにはいられなかった。
抜刀に合わせたカウンターを帯刀技で破った後も相手の目からは闘志が消えていなかった。
おそらく納刀時か刀を振るっている状態で、再度のカウンターを仕掛けるつもりだろう。
一気に魔術で圧倒してもいいが、威力と範囲が大きい為遠慮したい。
下手をすると周囲を更地に変える可能性がある。
その時、彼女が都合良く五体満足とはいかないだろう。

（仕方ない）

剣の腕前が自分より上の彼女に通用するかは五分五分だが、剣技で仕留めるしかない。

（決まってくれよ？）

攻めを変え、大振りを連発して相手のカウンターを誘う。

「舞い散れ！」

その声と共に振るわれた大薙ぎの一撃をかわし身体をねじ込んでくる。相手には勝利を確信した笑み。
だが彼女は今まで両手で振るっていた剣から離れた左手が、何を掴んだか見ていなかった。
狙いをつけて、左手で野太刀の鞘を引き抜く。
逆手で振るわれた白鞘は、『打撃』の間合いに入ってきた彼女の顎を打つ。
振った勢いに逆らう事無く、鞘を刀に被せる様に納刀。

「封殺！」

鞘の小尻でとどめの一撃を叩き込む。

納刀の剣技『封神雀華』

抜刀術の弱点である納刀時の隙を埋める技だが、納刀の動作がそのまま攻撃になる為、カウンターとして効果を発揮する。相手と距離を取れない状態でも納刀でき、そのまま帯刀技・抜刀術に移行できる為、訓練で一番練習した技だった。
だが、

「あ、やべ」

そのせいで

「やりすぎた・・・」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇刹那ｓｉｄｅ◇

背中から街灯に激突。金属の支柱がひん曲がる音が聞こえる。
街灯と鳩尾に食らった衝撃の板ばさみになり「か、は」という声と共に肺の中の空気が残らず出ていく。
何が起こったのかわからない。カウンターを浴びせるつもりが、逆に鳩尾に食らってしまった。
体勢を立て直そうにも顎を『何か』で打ち抜かれ、下半身が動かない。何をされたかもわからない。だが確実なのは自分が『負けた』という事だけ。
その事実が頭の中を駆け巡る中、ゆっくりと崩れ落ちる。
頭からぶつかる。そう思っていたが、寸前に抱き止められ優しく仰向けに寝かされる。

「何故？」

視線でそう問う前に、彼は走り去ってしまった。

## 第二話（前書き）

感想受付がユーザーのみになっていた件、深くお詫びいたします。
「刹那スキー」と書いておきながら、今回せっちゃん出番ありません。
それでは第二話どうぞ

# 第二話

「ハァッ、ハァッ、ハァッ、ハァッ・・・」

雄飛は広い階段にだらしなく座り込み、肩で息をする。舌を出していれば炎天下の日の犬の様だ。

彼女からはうまく逃げられたようだが、あくまで『動けなく』しただけだった。携帯で警備の人やら先生やらに連絡して増援が来れば、まず勝てない。そう考えた上での逃走だった。

その後も追跡されないよう直線的に逃げずに何回も曲がり、建物の間をすり抜け、塀を飛び越え、川に落ち、一体どのくらい走ったのか分からない。

そして大通りに出たところで足が止まってしまった。

こんな視界が開けた場所で休むのはマズイとわかってはいる雄飛だが、気力体力共に激しく消耗していた。

訓練とは違う初の『実戦』。相手から放たれる殺気とプレッシャーの中での戦闘は雄飛の想像をはるかに超えたものだった。

身体を休めていると一気に疲労を感じる。だがここでこれ以上は休めない。

速く短い息を、無理矢理深呼吸に切り替える。汗と川の水のせいで額に張り付く髪を掻き上げ、立ち上がる。

そこで雄飛は自分が何を杖代わりにしていたか気が付く。それは彼女が使っていた、『野太刀』。

「・・・忘れてた・・・」

あの戦闘で彼女を寝かせた後そのまま置いてこれば良かったのに、そのまま持ってきてしまった。

これで窃盗罪と銃刀法違反の罪を犯してしまった。不審者ならまだ

言い訳ができただろう。
川に落ちたときは、反射的に側溝の外に投げていたから濡れてはいないのが唯一の救いだった。

「怒ってるだろうなぁ・・・」

返しに行こうにも道が分からない。それにもうかなり時間は経っている。もう彼女も動けるくらいに回復しているはずだ。
今返しに行ったらまず間違いなく第2ラウンドのゴングが鳴る。止めておこう。
返却は後回しにして辺りを見回す。
雄飛のいる階段の中ほどから上を見上げると、横に長い建物がそびえ立っていた。
赤レンガを基調とした三階建ての建物だった。モダンな造りが『中世』ではなく、どこか『明治』を思わせる。周囲の街灯の淡い光を受けて建っているが、その窓は一箇所を除いて全て消えてていた。
その建物のちょうど中央の三階の部屋。
人がいる。らしい。
このまま逃げ回っても埒が明かないし、『この世界』の情報を集めないままこれ以上動いても意味が無い。
せめてここが何処だか誰かに聞いてみよう。そう思って歩こうとしたその時、目の前に人が立っていた。
白いスーツを着た、３０代の男が片手を挙げながら

「君が、姫菱雄飛君。だね？」

まったく緊張感の無い声をかけてきた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

いきなり目の前に現れた男とその言葉に俺は一気に動揺する。俺に気づかれずどうやって目の前に来た？イヤ、そんなことはどうでもいい。この男は今『何と言った』？

何故

「俺の名前を・・・」

そう。ここは『違う世界』。ここに『姫菱雄飛』を知る人間は居るはずが無い。

呆然としていた頭を警戒態勢へ切り替える。距離はおよそ３ｍ。野太刀を持っている俺の攻撃範囲の少し外。

だが俺に全く気取られずにこの距離まで近づいてきている。

それに相手は無手だが、野太刀を見ても近づいてきたという事は確実に先手を取れる自信があるのだろう。

恐らく『速さ』と『長さ』を兼ね備えた攻撃。見極めない内に先制攻撃は危険だ。

抜刀術の構えを取りながら、気による肉体強化を最大限に引き上げる。

一撃は貰う事を覚悟する。魔術を使う事も考えていると

「君が姫菱雄飛君で間違いないかい？」

俺の警戒と緊張など、どこ吹く風とばかりに再び聞いてくる。全くの無警戒である事に少し腹が立つ。

「そうだけど・・・そういうあんたは誰？」

人に名を尋ねる時は自分から名乗るのが礼儀だろうに。

「僕はタカミチ・T・高畑。この麻帆良学園で英語教師をやっている」

そういって後ろを指差す。あんなキレイな建物が校舎かよ。うらやましいなぁ。だが、肝心の問題に答えてもらっていない。

「何で俺の名前を知っている？」

語気を強めながら刀の鯉口を切る。正直言って相手との『実力差』が分からないほどの差を感じる。たぶん逃げる事すら叶わないだろう。

それでも勝てる可能性をさがす。『もう一度』死ぬのは御免だ。

「学園長からの伝言を伝えるよ。『サイから話を聞いて、荷物を預かっている。』とね」

今度こそ、一瞬とはいえ自分の思考が止まるのを感じた。

「付いてきて来てくれるかい？」

その言葉を聞いて、相手の言葉の裏を推考する。

俺とその協力者の名前を出している以上、今の俺に必要な情報に違いない。その言葉を信用して良いものか一瞬考えるが、直ぐに無意味さを悟る。

力ずくで捕らえたければ近づいた時点でできたはず。それをわざわざ『情報を持っている事』をほのめかして話を持ちかけるという事は

（純粋に『会話』がしたいということか・・・）
そして同時に俺を試している。
ここで無理矢理にでも情報を吐かせる様な行動をとれば、その時点で目の前の男に返り討ちに会う。逃げても同様の結末だろう。そもそもこの『交渉』を蹴った場合情報は手に入らない。
この状況と言葉から相手の真意を読めない奴とは話をしないという事だろう。

「分かった・・・」

危険も大きいが見返りは遥かにデカイ。そう結論付けた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは『麻帆良学園本校女子中等部』校舎。そう説明を受けながら長い廊下を歩いている。
高畑さんの少し後ろを付いていく。剣については特に何も言われなかったからそのまま腰に差したままだ。俺が手を出せない事と、『不意を撃たれない』という余裕の二つの理由だろう。
それでも敵味方不確定な奴に帯刀させたまま、背を向けるとは・・・ここまで来ると怒りを通り越して呆れるしかない。一体どれ程の力の差があるのだろうか。
そんな事を考えている内に高畑教員の足は止まっておりこちらを見ていた。顔を上げると『学園長室』のプレートがかかっていた。
準備はいいかい？そう聞いてくる視線に俺は頷きで答える。

「学園長、僕です」

ドアをノックしながら中にいるであろう学園長に声をかける。しかし応答を待つことなくそのまま扉を開ける。いいのかよ・・・俺もあわてて後を追って中に入る。
広い部屋の中程には品のいいテーブルとソファの応接セット。その奥には高級そうなデスクがあり、そこに学園長であろう人物がいた。しかし一目見て高畑さんに話しかける

「Ｈｉ　Ｍｒ，　Ｔａｋａｈａｔａ．」（訳：やぁ高畑さん）

「Ｈｉ　Ｍｒ，　Ｈｉｍｅｂｉｓｈｉ．」（訳：やぁ姫菱君）

「Ｉｓ　ｔｈａｔ　ａ　ｐｅａｒ　？．」（訳：あれは洋梨ですか？）

「Ｎｏ．　Ｔｈａｔ　ｉｓ　ａ　ｎｕｒａｒｉｈｙｏｎ．」（訳：いいえ。あれはぬらりひょんです。）

「君の方が酷い事を言っておるぞタカミチ君！」

英語教師だと聞いていたので英語で聞いたらちゃんと答えてくれた。しかもなかなかの返し方。
しかし、俺は妖怪に例えるのはさすがにマズイと思い頭の形状ネタで聞いたのに・・・上司と部下の関係らしいがフランクな仲のようだ。

「ようこそ麻帆良学園へ。儂は理事長の近衛　近右衛門じゃ」

そういって笑う仙人の様な学園長。だが、あのツッコミの後にキメ顔で言われても威厳は無い。

「じゃあ、僕は席を外させてもらうよ」

そう言って退出する高畑さん。どういう事だと目で追っていくが、手を振られるだけ。諦めて学園長に向き直る。

たっぷり一分経った後、学園長は聞いてきた。

「さて、儂が何故君と『サイ』の名前を知っておるか分かるかね？」

「ああ」

それは、ここに案内される途中に答えは出していた。自分がここに来た経緯と『実験』の内容を考えれば自ずと予想は付く。

「あんたも『違う世界』の出身。そういう事だろ？」

考えれば分かる事だ。

『色々な世界の人間を見てきた私からしても・・・』。サイはそう言っていた。つまり『実験』の候補者は他にもいたという事だ。口振りから推測しても『実験』の計画はかなり前からあったはずなのに、他の候補者をそのまま『あの世』に送るだろうか？

そして『規格外の才能』を持つ存在が必要なら、余計な知識を持ったまま『転送』させるのではなく、才能をそのままに『転生』させた方が実験に支障は出ない。それをしなかった理由は『既に実験済み』だった可能性が高い。

つまり俺は『実験体』の一人に過ぎない。『この世界』に先輩が居たのと同様に、恐らく『違う世界』にも先輩や後輩がいる事だろう。

目の前の洋梨は声高々に笑っている。俺の答えが正解なのがよほど嬉しいらしい。

「まぁ儂は年恰好そのままの『転送』ではなく、記憶だけ持った『転生』だったがのう」

そう言って俺にソファを勧める。自分はそのまま俺の対面に座り話を続ける。

野太刀をホルダーから抜いて脇に置き、着席。ソファが濡れる事は無視する。どうやら腰を据えて話を聞く必要がありそうだ。

「サイからの手紙には『この学校に入学させて、色々便宜を図ってやってくれ』とあったぞい」

どうするかの？老人特有の長い眉毛の奥の瞳が聞いてくる。答えなど決まっている。

「お言葉に甘えさせてもらいます。学園長」

二つ返事で提案を受け入れた。この後どんな選択をするにしても家なき子ではさすがにキツイ。それなりに制限を受ける『学生』とはいえ『身分証』は有った方がいいだろう。必要ないなら退学すればいいだけだし。

「もう夜も遅いし今日の朝7時にまた来てくれんか？。転入云々の話はその時に君の担任の先生と一緒にしようかと思うんじゃが」

壁の時計を見ると既に深夜0時過ぎ。確かに『今日』だ。既に転入のクラスも決まっているらしい。

「学生寮へは下にタカミチ君を待たせているから、部屋まで案内してもらってくれ。そこに一通りの家具なんかも用意しておいたぞい」

至れり尽くせりの対応を聞きながら席を立つ。とその後に、

「君の正体を知るのは儂だけじゃ。無論タカミチ君も知らん。余計なお世話かもしれんが自分の正体は明かさない方がいいぞぃ」

「分かっていますって」

そう。よくわかっている。

この年で『俺、異世界の人間なんだ』なんて言った場合、他人は『信じる』『信じない』の2択ではなく、『脳の心配』をするの一択だろう。俺ならそんな『イタい』奴には病院を勧める。

先輩からの忠告を返しながら、最後に一番聞きたかった質問をする。

「学園長。あなたは『この世界』で何を成したんですか?」

『実験の結果』としてではなく『この世界』に生きた人間として。

そんな意味を言葉の裏に込めた。

だが学園長は俺が何故そんな意味を込めたのか見透かしていた様だ。

「そう言う君は何を成したいのかな?」

鋭い指摘に顔が引きつる。これが年の功なのか。やはりこの老人にはばれていた。

そう、それだけが分からない。『力』は手に入れた。叶えるための『世界』にも来れた。だが、いざその妄想じみた願いが成就しても、この『力』で一体何をすればいいのか。

訓練中にも度々考えていたが、結局答えは出なかった。いや、別に力の有無の話ではなく、本来の世界でも自分は一体何をしたかったのか?

そこだけがすっぽりと抜け落ちていた。

「どんな世界だろうと何も変わらんよ」

俺の心の葛藤も察したのか話を続ける。

「力を誰かの為に使えば感謝されるし、誰かを傷つければ怨まれる。それだけの話じゃ。

儂は魔法協会の長もやっておるし、孫もおる。力を使って得られた幸せもあったし、普通の人間としての日常も手にしておる。それは長い時間の中で手に入ったものじゃ。

それに君はまだ学生じゃろう？その若さで結果なんて出ないし、出たとしても小さな物じゃろうて」

肩の力が抜けた気がした。そしてサイに言った事を思い出す。

『異世界せいぜい楽しんでくるぜ』

そう言ってこっちに来たのだ。どんな結果を選択しようとも、言葉通り楽しみながら見つけていこう。何よりまだ１５歳、進路を決めるのはもう少し時間が欲しい。

「もう少し、色々考えてみます」

今は、そうとしか言えなかった。だがこの世界の先輩は満足そうに頷いていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

学生寮　６階　管理人室前

昇降口前で煙草をふかしていた高畑先生を見つけ、宿に案内してもらった。白のオープンカーで寮まで移動。先生の愛車らしい。
湖と川に落ちた自分がシートに座っていいものかと遠慮していたが、そのまま勧められた。この人は器が広い。
そしてここが君の部屋だと案内された。扉には『ＹＵＨＩ　ＨＩＭＥＢＩＳＩ』のプレートが挟まっている。

「じゃあ僕はこれで失礼するよ。今日の朝６時３０分に寮の入口で待っててくれ」

勿論制服を着て。そう念押しして、帰ろうとする高畑先生。だが最後に聞くことがあった。

「高畑先生。この刀の持ち主知りませんか？」

背を向けそうだった先生を呼び止める。できるなら朝一番に返したい。
高畑先生は一瞬明後日の方向を向いた後

「じゃあ、明日合わせてあげるから。その時に」

なら明日は６時に待っててくれ。待ち合わせが早くなった事を告げて今度こそ帰っていった。
見送りもそこそこに部屋に入る。本来二人で使うのかなかなかの広さだった。キッチン・トイレ・バスルーム完備。学生寮にしてはかなり豪華な設備が整っていた。というかロフトまである・・・。
荷物一式の開封は後回しにしてシャワーを浴びる。二回もずぶ濡れになった為、入念に全身を洗う。
バスルームを出て用意してあった服に着替える。一息ついていると眠気が一気に襲ってくるが、何とか耐える。まだやる事がある。

学園の制服、全科目の教科書、着替え一通り、等の支給された荷物のチェックをしていくと見覚えの分厚い本に行き着いた。外装には何も書かれていない。手に取り中を確認すると『魔術書』だった。どうやらこれはサイから送られた荷物らしい。
他の本を確認すると帯刀技・抜刀術に関する本や、弧方陣に属する魔術書だったりした。こっちに来た後も訓練しろと言いたいらしい。
最後に残ったのは長さ１m位の桐箱だった。
漆塗りの箱を開けると入っていたのは

「日本刀の手入れ道具・・・？」

刀の柄を外すのに必要な『目釘抜き』、刀身のサビを防ぐ『油』や『打粉』といった手入れセット一式が入っていた。
という事は。と、もう一つの箱の中身を確認すると予想通り日本刀だった。桐箱から出して検分する。
鞘と柄が茶色の革で包まれており、それを金糸が巻いてある。鞘を抜いて刀身を確認すると、美しい『湾れ乱刃』（のたれみだれば）の刃文が走っていた。
銘を確認しようと目釘を抜いて、柄を外す。そこに書かれていた銘はあろうことか『国綱』だった。
あまりの事態に頭を抱える。間違いない。この刀は『鬼丸国綱』だ。最も有名な日本刀、『天下五剣』の一振りに数えられる一刀。ゲームや漫画では偶に見かける名前だが、現実でこの刀を持っている事はかなり重大な犯罪行為だ。
この『鬼丸国綱』は皇室御物、つまり天皇家の持ち物なのだ。そのせいで国宝と重要文化財指定は受けていないが、最上級の文化財産である事に変わりは無い。
こんな『歴史的価値がありすぎて値段が付けられない』レベルの美術品を所持しているのが発覚した場合、単なる窃盗罪では済まない

だろう。どんな余罪がつくか想像もしたくない。
違う世界に来て数時間。早くも大犯罪を犯した証拠を持ってしまった。
いや、これは偽者だ。そうに違いない。そんな簡単に本物が用意できるはずが無い。そう自分に言い聞かせる。
自分は何も悪くない。犯罪に巻き込まれただけの被害者なんだ。と無理矢理に納得しながら、最初の夜は更けていった。

## 第二話（後書き）

初投稿したその日に感想もらえたので、なるべく早く書きました。
本当に有難うございました。

## 第三話（前書き）

変なお告げを聞いたのでそのまま連続投稿させていただきます。
せっちゃん再び登場！
第三話ご覧ください。

**第三話**

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

５時３０分起床。今日の私はいつもより早く布団から抜け出し、洗面台で顔を洗う。次に制服に着替えて朝食を食べる。大きく顎を動かした時、鋭い痛みが走る。歯を磨いていたときはまだ大丈夫だったのだが。

まだ鈍く痛む鳩尾に手を当てながら昨日の事を思い出す。

見た事も聞いた事も無い戦い方だった。本来剣士は自分の間合いを保って戦う。その方が剣の技量だけを鍛えればいいからだ。

『神鳴流は武器を選ばず』といっても、あくまで自分の得物が無くなっても戦える様にだ。無手、槍術、ひいては陰陽術まで修得するが、補助として鍛えるのであって、最終的には自分の得意武器を使った間合い取りが重要になる。

だが昨日の男は違った。格闘、剣術、それぞれの技の奥深さは自分と同等だが、間合いを上手く活用して戦っていた。

抜き打ちを空振りさせようとしてもその瞬間に打撃に切り替え、そこから離れれば高速の抜刀術。

刀を抜いた状態であろうと、敵が懐に入ってこれば鞘と納刀の動作で打撃を叩き込む。

どんな間合いになっても攻撃、防御の全てが変幻自在の戦闘スタイル。おそらく剣の間合いの外でも攻撃が可能だろう。

知らず知らずの内に思考の海に沈んでいた。今はあの男に関する情報を集めよう。

まずは、昨日自分を寮まで運んでくれた高畑先生に聞いてみよう。

あの男を追跡してなんとしても夕凪を取り返す。
同室の龍宮はまだ布団の中だ。自分が起きている以上、あちらも起きているだろうがなるべく静かに部屋を出る。
高畑先生はもう学校にいるだろうか。そんな事を考えながら、寮の一階ホールを出ると

高畑先生と、昨日の男が寮の入口に佇んでいた。
一瞬呆気に取られるもすぐに身構える。だがその前に高畑先生に遮られる。

「姫菱君が君に謝りたいらしい」

姫菱？謝る？というか何故その男と高畑先生が一緒に？自分の思考が大量の疑問符に流されていく中

「昨日は、勝手に持って行ってすみませんでした」

そう言って夕凪を私に差し出す。元々自分の物だからか、頭が働かなくても体はそのまま受け取ってしまう。

「行こうか。姫菱君」

じゃあ、また後で。そう私に言い残して二人共行ってしまった。
後に残されたのは、夕凪を抱きしめ呆然としている私だけだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

『麻帆良学園都市。埼玉県麻帆良市に明治中期に創設された幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた世界有数の学園都市である。
一帯には各学校が複数ずつ存在し、下記の都市機能を含め、大学部の研究所なども同じ敷地内にあるため、敷地面積はとても広い。そのため、学園内をブラブラと散歩する部「さんぽ部」というものがあり、クラスでも何人かが所属している。年度初めには迷子が出るとのこと。
多くの生徒が在籍していることもあり、毎朝の通学ラッシュは鉄道・道路ともに大混雑を極め、たくさんの生徒たちが駆け足で登校しているシーンは朝の名物である・・・』

無事に野太刀を元の持ち主に返した後、俺はそんな事が書いてある学園パンフレットを流し読みしながら暇を潰していた。
言われた通り学園長室に時間前に来ていたが担任になる先生がまだとの事。その間学園長にこの麻帆良学園と、学園における『魔法使い』のルールを聞いていた。
纏めると
『元々この学園は魔法使い達によって建設され、魔法の大樹『神木・蟠桃』の根本にあった謎の装置を始め魔法に関連する遺跡が散逸している。現在も学園長、近衛近右衛門始め多くの魔法使いが教師・生徒として在籍し、遺跡の保護、管理や学園の治安維持に従事している。』
らしい。
また、魔法や超常現象が一般の人間に発覚する事態になろうとも専門の対策機関があるため、学園内の異常さが外部に漏れることも少ないらしく

（学園都市がそっくりそのまま檻の役割をしているのか・・・）

魔法や気といった超常現象の情報は外には出さず、また外部からの諜報にはその超常現象で対応する。

情報管理に限って言えばまさしく『陸の孤島』といった様相を呈している。

学園案内を一通り読み終えた後、自分の服装を再確認する。長袖のワイシャツのネクタイを締め、その上にスリーピーススーツのウエストコートのみを着る。袖の部分がワイシャツだけなので、着ていてもかなり涼しげな印象を受ける。

チェック柄のスラックスの左の腰元には帯刀用のホルダー。そこには一緒に日本刀のストラップが下がっている。鬼丸国綱のストラップだ。

あの後同梱されていた説明書を読むと、『来たれ』『去れ』の言葉の切り替えで一瞬で持ち歩ける大きさに変わった。

そのおかげで武器をいつでも持ち歩ける様になり助かっている。まぁ、帯刀用ホルダーについてはファッションで押し通そう。

そんな事を考えていると学園長室の扉がノックされる。学園長が了解の声をかけると

「失礼します」

そう言って中に入ってきた。担任の先生が来たと思い振り向くと、そこには

どこからどう見ても１０歳前後にしか見えない少年が

「初めまして、姫菱雄飛さん。僕が担任のネギ・スプリングフィールドです。今日からよろしくお願いします」

にわかには信じられないコトを口にした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『才能と実力は年齢とは関係ない』

そんな陳腐な台詞は色々な場面で出てくるが・・・

(だからってこんな子供が先生をしていいのか?)

「学園長、『ドッキリ大成功』のプラカードは何処だ?」

一縷の望みを懸けて聞く。これは何かの間違いじゃないかと。しかしこれは現実じゃよ。そこのネギ君は教員免許を持った、れっきとした3－Aの担任じゃ」

マジかよ・・・免許云々の話じゃない気がするが・・・本人のやる気とか才能の問題でも無いだろうが。

「この子は魔法使いの修行として、この学園で先生をしているのじゃ」

地道に魔法の修行をしろと言いたい。どう考えても回り道をしているとしか思えない。

「が、学園長!」

話を遮ろうとあわてて声を出すネギ。この子も魔法使いか。一応フォローしておく。

「安心しろ。俺も魔法関係の人間だ」

そうなんですか？と学園長に聞きながらこっちに顔を向ける。そのあどけなさは年相応だった。教員の顔には断じて見えない。だが、前の世界とこの世界の法律が微妙に違っている可能性も考えられる。暫くは様子を見たほうがいいらしい。ここは年長者から切り出すべきだろう。

「さっきは失礼しました。姫菱雄飛です。よろしくお願いしますネギ先生」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします。姫菱さん」

それぞれ社交辞令を交わす。家名からしてイギリス系だろうか？ずいぶん礼儀正しい。そんな事を考えていると

「でも、良いんでしょうか？ここに転入してもらって・・・」

担任が不安を口にする。どやら俺の転入そのものに何か問題があるのか・・・？

「大丈夫。僕が直接行って説明するよ」

その声に振り返ると高畑先生がいつの間にか立っていた。ノックも扉の開閉の音も聞こえなかったがどうやって入って来たのか？それに『説明』とは？一体誰に何を説明するのだろうか。

「というかもうＨＲまで時間が無いから、早く教室行かないと」

そう急かす高畑先生の後を慌ただしく付いていく。俺を見る学園長の顔は明らかに『笑い』を堪えていたのが引っかかっていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

廊下を歩くネギ先生の後をついていき、俺達は３－Ａの教室前に到着した。だが教室の入口を見て全員の足が止まる。

転校生が教室に入るときに設置されるベタな罠に『黒板消し落とし』がある。引き戸の柱と扉の間に黒板消しを挟みこんで、扉を開けた人間に落ちてくるあれだ。実際に頭に当たるかはさておき微笑ましい悪戯だろう。どこかから転校生の情報を仕入れたのか、３－Ａにも同様の罠が設置されていた。

ただしサイズがおかしい。

一般の黒板消しの長さが約１５ｃｍ、幅5~8ｃｍなのに対し、教室入口に仕掛けられたそれは、長さ約１２０ｃｍ、高さが約３０ｃｍもある代物だった。

柱と扉で挟みこんでいるが幅が５０ｃｍ以上ある為、引き戸は全開に近い。

というか、短辺部分の手指を入れる穴といい、逆さまに記された『１』の数字といい・・・

（跳び箱の一段目じゃねえか・・・）

わざわざ上の布を黒板消し用の紺色の布に張替えている念の入れよう。実際に黒板消しとして使うのだろうか?子供先生の身長では絶

対使えないと思うが。
あまりの大きさに罠としての意味を成さない等、ツッコミ所満載の罠だが実際に食らうのはかなり危険だ。普通の黒板消しの重量が約８０ｇなのにに対し、あの黒板消しは目算５～６ｋｇ。普通の黒板消しが落ちたら頭を白くするだけだが、あれが落ちてきたら首が折れるか、視界が暗くなるかのどちらかだろう。
ネギ先生は黒板消しの下に入らないようにドアを引く。しかし

「落ちないっ？」

ネギ先生の驚愕の声が廊下に響く。黒板消しは鴨居にしっかり接着されているのか、扉が引かれた後も動かない。
インパクトのある罠を仕掛け警戒させておいて、実は『落ちない』という二段構えのトラップ。良く作られている。
しかし、よく考えると俺の転入が決まったのは今日だ。それからこの黒板消しを製作したのでは間に合わない。ということは前々から作っておいた事になる。

（どんだけ暇なんだよ・・・）

気持ちを切り替えて、教室内に入ってＨＲを始めるネギ先生。しばらくするとお決まりの『突然ですが転校生を紹介します』という台詞が聞こえる。

「入ってきてください」

その言葉を聞いて教室の中に入る。
扉を抜けると
そこはクラス全員女子だった

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「「「ええーーーーーーーーーーーーっ！！！」」」

教室内が驚愕の声に包まれる。そんな中、ネギ先生だけが苦笑いをしていた。まるでこの状況を予想していた様に。

「ネギ先生。どういう事ですかこれは！何で女子校に男子が転入して来るのです　！？」

目の前の席の女子生徒が手を着いて勢いよく立ち上がる。鮮やかな金髪をなびかせたすらりとした長身の女子だった。いや待て、今聞き捨てなら無い単語が聞こえた。

「女子校！？ここって女子校なのか！？」

どういう事だネギ先生！何も聞いていないぞ！そう問い質そうと思ったが

「えっ！聞いてなかったんですか？」

と間髪入れずに返してきた。こっちはこっちで聞かされていなかったらしい。ということは・・・

「ここから先は僕が説明するよ」

そう言って廊下側の窓から顔を出す高畑先生。いつ回収したのか、その手には先ほどの跳び箱サイズの黒板消しが脇に抱えられていた。

「高畑先生♪」と嬉しさを微塵も隠さない声が教室の中ほどから聞こえてきたが、今は無視。俺も説明を聞かねば。

「麻帆良学園内の普通科の中等部、高等部には共学のクラスが無いのは知っているね？」

知らない。ここに来たのは一体いつだと思っている。

『そうなのか？』とまだ立ち上がっている女子生徒に目線で聞いてみる。

「え、ええ。麻帆良芸大附属中学の様な芸術や工学関係の学校を除いて中等部、高等部の普通科は全て男女別です」

皆に説明するように話す。どうやら思いが通じたらしい。だが俺と目が合った事が恥ずかしかったのか席についてしまった。

「そこで前々から普通科の男女共の学校を作る計画が挙がっていたんだ。ひとまず一年間テストとして男子生徒を女子校に入れる事になった。というわけだよ」

僕が学生の頃は共学だったんだけど。と苦笑する高畑先生。そこにネギ先生が質問をぶつける

「でも、何で僕のクラスに・・・？」

「昨年の期末テストで学年一位をとったじゃないか。そんな成績優秀なクラスだから白羽の矢が立ったんだよ」

ああ。と納得する子供先生。その後に高畑先生が話を続ける。

「本来なら一学期の始業式に合わせての転入だったけど、手続き等の遅れで今日からの転入になったんだ」

そう言ってこっちに顔を向けてくる。その視線を俺は苦虫を噛み潰した様な顔で睨み返す。

この眼鏡と洋梨にはしてやられたが、いくら学園長職でも生徒一人をいきなり転入させるのは難しいという事だろう。他の学校なら尚更だ。

そしてサイから便宜を図る様に言われている以上、監視の意味も込めて俺を自分の手の届く範囲に置いておきたいだろう。

自分の立場と相手の都合を理解した以上、ここでゴネてもしょうがない。

「先ほど高畑先生の説明にあった通り共学テスト生として来た、姫菱雄飛です。これから卒業までの一年よろしくお願いします」

もう諦めよう。なるようにしかならない。

生活環境が変わった時特有の期待感など全く湧かないまま、女の園での学校生活がスタートした

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

『じゃあ、また後で』。あの言葉はこういう意味だったのか。と考

えながら新しいクラスメイトを観察する。
ＨＲが終わり休み時間。彼は転入生の避けては通れない宿命である質問攻めに遭っていた。最初はあてがわれた自分の席にいたが、隣の席のエヴァンジェリンさんがうたた寝しているのを気遣ってか教室の後ろで質疑応答をしていた。
周りからは「イケメンじゃない？」「え〜ギリ普通だよ」なんて声が聞こえる中、私は思考に没頭する。
一体何者だ？今の私はその事ばかり考えている。高畑先生の説明はそれなりに筋は通っているが、彼が魔法生徒に属するのは昨日の一件からして間違いないだろう。
高畑先生に彼についての情報を聞きたいが上手くはぐらかされそうだ。
夕凪の件でも一度お礼も言いたいから、直接聞いたほうが良い。そう結論付ける。
人気の無い所で話をした方がいいだろうが、今は質問攻めにあっている。昼休みか放課後がいいだろう。一人だと少し心配だから楓にも少し協力してもらおうか。
そんな風に計画を立てていたら、一時間目の授業のチャイムが鳴った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

誤解を恐れずハッキリ言おう。
挫けそうだ。

それが今の正直な気持ちだった。
勉強については問題ない。元の世界では高校入学直前だったから、丁度一年前の授業だ。まぁもう一度中学三年を体験する事になるとは思わなかったが。だが問題は人間関係だった。
クラスメイトの大半のキャラが『濃い』。ハイテンションの明石裕奈や椎名桜子などはまだ被害が少ない方だ。
アッパーな性格の鳴滝風香＆史伽姉妹や『麻帆良パパラッチ』の名を冠するという朝倉和美に付き合っていたら間違いなく体力が持たない。いいんちょの雪広あやかに場を取り持ってもらわなければ、どうなっていたことか。
そしてどう見ても小学生にしか見えない双子がいるかと思えば、那波千鶴の様に母親レベルの包容力を持った女子いる。
１７５ｃｍと１５歳男子にしては背が高い方だと自負していたが、龍宮真名や長瀬楓といった自分より背の高い女子に実際に出会うと少し泣けてくる。夢の１８０ｃｍの大台が羨ましい。
またエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルやザジ・レイニーデイ、古菲や超鈴音などの留学生が多いのもこのクラスの特徴らしい。だが一番驚いたのはこんな事ではなかった。絡繰茶々丸なるどこからどう見てもロボットにしか見えない生徒がいたのだ。
イヤ。これはまだ許せた。この世界の技術水準が分からない以上ロボットも有りだろう。と納得できた。
だが、明らかに膝から下が無い半透明な女子生徒は初めて見た。制服が違うやつがいると何気なく見ていたら、その子を突き抜けて違う生徒が通り過ぎていった。あの時の驚きは一生忘れないだろう。
しかし幽霊にまで市民権を与えているとは・・・、学園長の器の大きさを感じる。というか魔法が有りなら幽霊もありなんだろうか。
なぜ誰もツッコミを入れない？
ここまで来ると絵に描いた様な一般人の村上夏美が逆にイロモノキャラに見えてくるから不思議だ。まぁ担任からして普通じゃないか

ら、そのクラスの生徒も推して知るべしと言った所だろうか。
そんな事を考えていた昼休み。昼食を買うために購買に行こうと廊下を進んでいると目の前に人が立っていた。
見忘れるはずが無い。彼女とは昨日の夜に戦い、今日の朝に野太刀を返したのだから。確か名前は・・・

「桜咲刹那だったか・・・？」

後ろには長身、糸目、ござる口調が特徴的な長瀬楓がいた。付き添う様に一緒にいるという事はヤツも魔法関係者だろうか？
さすがに学校で仕掛けては来ないだろう。そんな事を考えていると

「・・・夕凪の手入れ・・・ありがとう」

桜咲が開口一番にお礼の言葉を述べてきた。昨日の戦闘の一件もあって尋問されると思っていたから意外だった。だが

「別に礼は良いよ。借りた物を返すのだから当然だろう？」

就寝前に鬼丸国綱の手入れと一緒に野太刀の手入れも行った。それだけの話だ。別にわざわざ礼を言われても困る。

「というか、昨日の怪我大丈夫か？まだ残ってないか？」

そう言って彼女の右側の顎と腹に手を当てる。

（快方の光よ宿れ）

「ファーストエイド」

再生術を発動させる。両の指先に新緑の光が灯り彼女の傷を癒す。
だが桜咲は弾かれた様に後ろに下がり、距離を取る。顔を真っ赤にした彼女はそのまま何処かに走り去ってしまった。
長瀬に疑問の視線を向けると糸目のまま

「男子に顔とお腹を触られれば殴るか、逃げ出すかのどちらかに決まっているでござる」

と、冷ややかに指摘してくる。
あー、と呻きながら自分のしでかした事を知る。治療の為とはいえ、女子から見たら言い逃れのできないレベルのセクハラだった。
長瀬はこの状況に溜息をつくと桜咲が逃げた方向に行ってしまった。
話は終わりらしい。
男子生徒という味方のいない学園生活が一体どうなるのかという不安を感じながら、俺は購買に歩いて行った。

## 第三話（後書き）

次回から修学旅行編！
刹那が活躍できるようがんばって書きます。

## 主人公設定（前書き）

前回投稿から二週間以上経ってしまった件、
「次回修学旅行編」と言っておきながら設定を投稿している件
誠に申し訳ありません（土下座レベルですね・・・・）

# 主人公設定

名前　姫菱（ヒメビシ）　雄飛（ユウヒ）
性別　男
年齢　１５歳（享年）
身長　１７５ｃｍ
容姿　やや長めの黒髪、黒目、それなりに精悍な顔立ち（人によって評価が変わる程度）

高校入学式前日に交通事故により死亡するも『神の代行者』サイに魔力と気の潜在能力の高さを指摘された。そしてサイの行う『実験』に協力する事を条件に『魔法先生ネギま!』の世界へ転移する事となった。
（本人は送られる世界の知識を消された状態で転移させられている）
また、自分の『チカラのカタチ』を決める際に　Ｔａｌｅｓ　ｏｆ　Ｇｒａｃｅｓ　ｆ　の術・技を選び、転移前に戦闘訓練を積んだ。

麻帆良学園女子中等部へは共学化のテスト生として転入する。年齢からいえば高校一年だが半ば強制的に転入させられた事もありサバを読んでいる。（その為成績は上位）

戦闘能力
技は『ＴＯＧｆ』のアスベル・ラントの帯刀状態から体術を繰り出す『帯刀技』と抜刀状態から様々な『剣技』を用いる『抜刀術』を使う。
術は『ＴＯＧｆ』作品中の?術・威圧術・再生術・神聖術・法陣術

を使う。ただし転移前の訓練時間が足りず、第三話では下級と中級の一部しか使えない。
（範囲型の回復系神聖術は法陣術、攻撃系法陣術の一部は?術とさせていただきます）

戦術
戦闘時は近距離では抜刀術で戦い、剣が使えない間合いなら帯刀技による体術による攻撃を行う。逆に剣より広い間合いなら?術・威圧術で敵を攻撃する。近・中・遠距離の全てにおいて攻撃とその瞬間的な切替えが可能なオールラウンダー。

武器
刀／サーベル・鞘
サイの魔法により『来たれ』、『去れ』の言葉で本来の大きさと携帯ストラップ程度の大きさに切替えが可能で、戦闘時は剣を左腰のホルダーに通した状態で戦う。
第三話では『鬼丸国綱』を使用中

# 第四話（前書き）

ようやく四話目投稿・・・
ぜんぜんコンスタントに投稿できない・・・

# 第四話

４月２２日　ＡＭ　０９：００　ＪＲ大宮駅。
ここに麻帆良学園女子中等部３－Ａを始めとする、他４クラスが集合していた。
皆、思い思いのザックやバックを持っている。先生方も空港等で見かけるキャリーケースを横に連れている。
今日は修学旅行。京都・奈良へ五日間の旅だ。
ネギ先生も楽しみにしていたのか、ハイテンションで佐々木まき絵や大河内アキラと話している。先週修学旅行の準備で神楽坂明日菜、近衛木乃香、姫菱の四人での買物をしていた時から張り切っていたので気持ちは分からなくも無いと雄飛は思う。
他の生徒も自由行動の見学場所や土産物の購入場所、果ては持ってきた小遣いの金額についてまで話している。そうこうしている内にネギ先生が号令を掛ける

「それでは３Ａの皆さん、班ごとに点呼をとってからホームに向かいましょう。格班の班長さんおねがいしまーす」

それぞれの班の点呼が終わりホームに移動する。皆楽しそうに先生に付いていく中、一人雄飛だけが複雑な顔をしていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「木乃香の護衛を引き受けてくれんかね」

「孫が可愛いにしても限度があるぞ・・・」

時間は昨日の夜まで遡り、麻帆良学園の学園長室。そこで俺は職権乱用によるとばっちりを受けていた。たかが孫の修学旅行にボディーガードをつけるとは・・・

「モンスターペアレントならぬモンスターグランドファーザーだな」

外見も実際妖怪じみてるし。しかし学園長はそんな皮肉をシリアスな顔のまま受け流す。

「関西呪術協会。その存在から木乃香を守ってほしいんじゃ」

「関西、呪術協会？」

耳慣れない言葉を聞き返すも学園長は頷きを返すだけ。そのまま説明を続ける。

「実は儂、学園長職の他にも関東魔法協会の理事も兼職してるんじゃが、関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪くてのう・・・」

関東と関西、西洋の魔法と東洋の呪術。もうこの名称だけで険悪な関係しか思い浮かばない。

「今年は一人魔法先生がいると言ったら修学旅行での京都入りに難色を示してきたのじゃ」

「相手方に従う必要はあるのか？」

その魔法先生というのはネギ先生のことだろう。聞く所によるとネギ先生も西洋魔術の魔法使いらしいが、ただ旅行に行くだけだ。そもそも呪術協会にそんな権限があるとも思えない。

「無論、無い。儂としても関西と事を構えるつもりは無い。が、あちらからの嫌がらせは予想されるのじゃ。あちらも魔法使いである以上、生徒や一般人に被害を出す様な事は無いじゃろうが・・・」

「『関東魔法協会理事の孫は一般人には含まれない』ってか?」

「それに親の方針で木乃香には魔法の存在は教えとらんから、なるべくバレずに護衛してほしいんじゃ」

それに「木乃香とも仲良くしておるようじゃし」と続けられてはこちらは言葉も出ない。
バレている。
『学園長の孫』という前情報もあり自己紹介の後、近衛とはよく話す様になった。この前も一緒に買物にも行く位仲が良くなった程だ。その時に近衛と親友の神楽坂明日菜とも友達になった。
つまり修学旅行で俺が近衛達と一緒に行動することを見越しての護衛の依頼だった。

「嫌がらせってどの程度の物が予想されるんだ?」

「直接怪我をさせる様な事はないと思うがのう?」

京都でどんな嫌がらせを受けるかは分からないが本人とは全く関係の無い理由で狙われるなら守ってやりたい。あくまで友人として。

「で、この事はネギ先生は知っているのか？」

知り合ってまだ一週間足らずだが、自分の生徒が危害を加えられる事を黙って見ている性格ではない。１０歳とはいえ先生なのだ。

「ネギ先生には西の本部へ新書を運ぶ特使として大事な役目を負ってもらっておる。その上、護衛も引き受けては負担が大きいじゃろう？」

「暗に、『ネギ先生もその大事な役目のせいで狙われるから守ってやれ』って聞こえるんだが？」

というか、その負担がさりげなく自分の肩にかかっているのを感じる。

前に買物に行ったのだって厳密には、ネギ先生の買物に行く近衛と神楽坂に誘われた形だった。それくらい仲のいい二人なら修学旅行でも一緒にいる時間は多いはずだ。

向こうからしてみれば関東魔法協会の手先たる『魔法使い』と、その協会理事の『孫』が一箇所にいるのだ。わざわざ個別に襲ってくる様な優しさは期待しない方が良いだろう。

（ネギ先生には関東の代表として親書を届けてもらい、俺は近衛を護衛しつつネギ先生のフォローを行う。か・・・）

荒事を１０歳の子供に任せるよりは良いか。

「わかりました。護衛の件、引き受けさせて頂きます」

本人の前で魔法が使えずともたったの5日間だ。何とかなるだろう。

この時はまだ、そう思っていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

班の順で新幹線に乗車していく。班編制の後に転入してきた俺は６班に振り分けられた。６班の班長たる桜咲刹那とザジ・レイニーデイの後についていく。

（桜咲か・・・そういえばあの後、話していないな・・・）

そんな事を考えながら６班の３人は新幹線に乗車していく。ん？待て、３人？

「ネギ先生」

桜咲のその声にネギ先生は振り返る。というか他の班は5～6名いるのに何でうちの班は３人しかいないんだ？という俺の疑問の答えを桜咲が口にする

「私が６班の班長だったのですが・・・・エヴァンジェリンさん他2名が欠席したので６班は三名になりました。どうすればいいんでしょうか？」

他の３人は休みか・・・流石に幽霊が修学旅行に来るとは思ってはいない。旅行中の写真に写ったりしたらそれだけで心霊写真になってしまう。集合写真なんてもっての外だ。しかし絡繰やエヴァンジェリン達が来ないのは何故だろう？

まあ近衛と同じ班にしてもらった方が動きやすいか。そんな事を考えている内にネギ先生の判断で、桜咲を5班の神楽坂に、ザジをいいんちょのいる3班に振り分けられていた。さらに先生は俺を見ながらどの班に行ってもらうか考えているが、それには及ばない。

「先生、親しいやつがまだ近衛と神楽坂くらいしかいないんで俺も5班に入っていいですかね？」

親しいやつが他にいないわけでもないが、転入してきてまだたったの一週間。分け隔てなくクラス全員と話せるわけではない。それを察してくれたネギ先生は

「分かりました。5班に入って下さい。明日菜さん、木乃香さん、お願いします」

予想通り。
先生の言質を取ったので、二人に声をかける

「近衛。地元人として京都のうまい料理屋案内、頼むわ」

「ええよー。五日間よろしゅうなー」

「別にアンタなら他の班でも大丈夫だと思うけど？」

満面の笑みを浮かべる近衛と、半ば呆れ顔の神楽坂。二人の反応は対象的だが歓迎はしてくれている様だ。

「せっちゃんも・・・・一緒の班やなぁ・・・・」

せっちゃん？言葉を向けられた桜咲は呆けた様な、気まずそうな表情を浮かべていた。が、それも一瞬。黙礼を返してそのまま座席車両の方に行ってしまった。後には何となく気まずい雰囲気が残る。

「俺らも席に着くか」

もしかしてこんな空気の中五日間も過ごすのかと辟易するが、気を取り直して3人を座席に促す。
こうして長い5日間は幕を開けた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

はっきり言ってこの状況は思わしくない。違う班なら団体行動の時でも適度な距離を保って御守りする事ができる。班単位の自由行動では班長としてはあるまじき行為だが適当な理由を付けて一人で動くつもりだった。その為にどこか個人主義的なザジさんやエヴァンジェリンさん達と一緒の班になったのだから。

だが、先程の様に話しかけられるのは正直・・・・つらい

そもそも私の様な『半端者』がお嬢様と話をするなど失礼にあたる。

昔、周りからつまはじきにされていた自分と一緒に遊んでくれた。あの日々だけが私の心を救ってくれた。それだけで十分なのだ。

その大恩に報いる為、お嬢様を御守りする。その為にも要注意人物から目を離す訳にはいかない。

『姫菱雄飛』

学園長や高畑先生に彼の事を聞いても詳しく教えてくれなかった。

独自に調べてみても素性、経歴の一切が不明という結果に終わった。

個人的には彼を疑いたくは、無い。

あの日の夜の事は不審者だったとはいえ無理矢理連れて行こうとした私に非が在った事だ。それに次の日に傷の治療までしてくれた彼が西と繋がっているとは思いたくない。

しかし学園長から『あんな事』を聞かされた以上、注意しなければならない。実際今の様にお嬢様達と親しく話しているのを見ると学園長の懸念が当たっている様にも思える。

（一度本人に問い質すか・・・・）

座席上の棚から夕凪を下ろす。竹刀袋に包まれたそれを右肩に引っ掛けて席を立つ。相手もこっちに警戒を払っていたのか「ちょっとトイレ」と言って話を切り上げて、私と同じタイミングで通路に出てくる。

私と一瞬目を合わせた後、ドアの方に歩いていく。「ついてこい」という意味だろう。

お嬢様に近づく理由を問い質すチャンスだ。

あくまで偶然を装って私は後をついていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

3－Aの生徒が乗っている車両より3両ほど離れた降り口。そこで相手から質問が来る前にこちらの問いに答えてもらう。

「姫菱。お前は一体何者だ?」

「何者って・・・先週の自己紹介で話した通りだが?」

互いがある程度『裏』に通じている事を仄めかして聞いてもはぐらかした答えが返ってくる。質問を変えた方が良さそうだ。

「お前がこのかお嬢様に近づいた目的は何だ?」

「このかお嬢様?」

しまった。つい、いつも通りに呼んでしまった。その上相手に余計な情報を与えてしまっている。内心取り乱していると、

「お前、近衛の関係者か？」

今までの会話が嘘だったかの様な冷徹な声色で指摘してくる。だがこちらの疑問も一部確信に変わる。『近衛』の名前が出てきた以上関東と関西の確執を知っている。そしてお嬢様の『政治的価値』も。

「知っている事を話してもらうぞ」

竹刀袋の口を解き夕凪の鯉口に指をかける。敵の可能性が大きくなった今、遠慮も容赦も無用だ。殺気を出している私に相手は両手を挙げてホールドアップする。

「あーっと・・・・とりあえず、それ下ろしてくれない？」

そう言っている内に通路のドアが開く。通行人が来たと思い目を向けるが誰もいない。いぶかしんで通路の向こうに目を凝らす。

飛んでくるそれはまさに鳥だった。

だが全く羽ばたかずに障害物を避け、人の間をすり抜けてくる。そして微かだが感じる呪の力。鳥にしてはありえない薄さのそれはクチバシに何かを銜えている。

姫菱に目を戻すと首を横に振っている。自分の仕業では無いと言いたいらしい。

怪しい以上迎撃する必要がある。体ごと向き直り居合いの構え。

横をすり抜けようとする鳥をすれ違いざまに一閃。夕凪の抜き打ちで頭から尾羽まで縦に両断し、納刀。

「よくもまぁこんな狭い場所で・・・・」という姫菱の声を聞きながら夕凪を竹刀袋にしまう。足元を見ると鳥の形に切り抜かれた和紙がある。思った通り

「式神、ってやつか」

私の思考を引き継いで姫菱が答えを口にする。その隣には手紙が落ちていた。麻帆良学園の蝋封が押されている。宛名を確認しようと拾い上げると

「待てーーっ!!」

その声と共にネギ先生が飛び込んでくる。

「・・・・・・ネギ先生・・・・・・・」

「さ・・・・桜咲さん・・・・・と、姫菱さん・・・・・?」

「あの・・・・コレ・・・・落し物です・・・・」

呆気に取られている先生に何事も無かったかの様に手紙を渡す。

「え・・あーーーっ!コレは僕の大切な親書!!
あ　ありがとうございます。助かりました!!」

「それは先生のモノですか?」

自分も油断していた。まさか京都入りする前にこんな事になるとは。敵は新幹線の中でも仕掛けてきた以上ネギ先生にも忠告しておいた方がいいだろう。

「気をつけた方がいいですね　先生――――特に・・・・『向こう』に着いてからはね・・・・」

「それでは」と言葉を残しその場を後にする。すぐ後ろには同じように姫菱も付いてきている。そういえば話の途中だった、というか前にもこんな事がなかったか？と考えていると

「ここは人が多い。続きは降りてから話す」

言外に『自分は敵じゃない』というニュアンスを混ぜて言ってくる姫菱に

「・・・わかった・・・」と振り返らずに告げる。まだ信用できないが先程から戦闘の意思は見せていない以上、敵味方の判断は彼の話を聞いてからにしたほうがいいだろう。

『まもなく京都――御降りの際は足元にご注意下さい――』

自分の席に戻る途中、アナウンスが京都駅が近いことを告げる。気を引き締めなければ。まだ修学旅行も、このかお嬢様の護衛も始まったばかりなのだから。

繰り返される放送の中、自分に活を入れる。

こうして長い5日間は幕を開けた。

## 第四話（後書き）

何か京都編書いてると本当に京都に行きたくなって来ました・・・

## 第五話（前書き）

警告：温泉の描写では作者の妄想が高濃度で入っています。刹那のキャラが違うかもしれません。注意願います。
しかし、まだ修学旅行一日目が終わらない・・・・（泣）

# 第五話

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「学園長からの依頼　！？」「声がでかい」

オウム返しに言ってくる桜咲を諫める。
ここは清水寺の本堂。新幹線を降りた後そのまま観光となった為、周りのクラスメイトや観光客達に聞こえない様に注意を払いながらの会話になっていた。

「『近衛が関西呪術協会からの嫌がらせ受けない様に密かに守ってくれ』とよ。
　ついでに『ネギ先生が親書を無事届けられる様にフォローしてやってくれ』ってさ」

神楽坂と近衛の話では先の新幹線の中でいきなり大量のカエルが出てきたらしい。ネギ先生の親書が鳥型の式神に奪われたタイミングを考えると、二つとも西の妨害だろう。早くも、近衛もネギ先生の親書も守れていない現状に少しへコむ。
しかも新幹線の中で仕掛けてきたという事は、敵にこちらのスケジュールは全て把握されていると見ていい。つまり常に敵に先回りされる状況という事だ。
宿泊先でも安心できない。麻帆良に戻るまで気が休まることはなさそうだ。
桜咲が味方かどうかは別として、これ以上疑われない様に予防線を張っておくか。

「つまり近衛の関係者のお前とは敵じゃないって事だ」

本堂の見学が終わり参道を下る中、桜咲にはそう告げる。が、まだ疑惑の視線を投げかける。
桜咲の気持ちも分からなくは無い。自分の目的は明かしたものの、新幹線の中で発せられた『お前は一体何者だ?』という問いには一切答えていない。そこをはぐらかされる様なヤツではないだろう。
まぁ、実際俺の素性など聞かれても答えようが無いのだけれど。
ネギ先生に先導された３－Ａ一行は続いて『恋占い』と『縁結び』で有名な地主神社に行く。

（気まずい・・・・）

班が一緒になった時点で覚悟はしていたが、こうもずっと疑いの眼差しを向けられると少々キツイ物がある。新しい趣味に目覚めてしまいそうだ。
何とかしてこの空気を変えねば！

「桜咲は地主神社とか音羽の滝の見学はしないのか?」

「私のここの出身だ。いまさら見るべき場所は無い」

会話終了。確かに空気は変わった。負の方向に。
だが桜咲にしてみればせっかくの修学旅行に地元に戻ってきただけなのだ。近衛のように友達と一緒になってはしゃいだりしていなければ、清水の舞台もあって当然、物珍しくもないのだろう。
有名な観光地で生まれ育つのはそんなに良い事ではないのかな。なんて考えていると

「そういう姫菱はどうなんだ?」

今度は桜咲から話を振られる。どうやら向こうも大なり小なり気まずさを感じていた様だ。しかも呼称が『お前』から『姫菱』へ昇格していた。他人から見たら小さな事だが若干感動を覚える。

「あ、あぁ。俺は去年来てるから別に観光はいいな」

事実だ。去年も中学三年生だった俺は修学旅行で京都に来ている。一年ぶりとはいえ二回目の観光なので正直、目新たしい物は無い。

「だから生八つ橋を大量に買えれば・・・・」そう続けようとすると「きゃあ」という悲鳴。聞こえた方向を見ると、いいんちょと佐々木が縦穴に落ちたのかネギ先生や神楽坂の手を借りて這い出ようとしていた。

どうやら縁結びで有名な地主神社の中にある目をつむって石から石へたどり着ければ恋が成就するという伝説で有名な『恋占いの守護石』の間に大きな落とし穴があったらしい。

まさかこれも西からの嫌がらせか?と呆れ半分に思っていると、次の目的地でも似た様な事が起こった。

筧から落ちる三筋の水を飲むとそれぞれ健康・学業・縁結びのご利益があるとされる『音羽の滝』で３－Ａの生徒約１０名近くがダウンするという事態が起きていた。

慌てて駆け寄ると皆頬が赤く、吐く息は

「酒臭・・・・」

後で桜咲に話を聞いたところ音羽の滝の筧の上に鏡開きのときに使うような酒樽が仕掛けてあったそうだ。

クラスメイトを介抱していると、そこに生活指導の新田先生一行が通りかかる。

風紀を乱す生徒には厳しく叱る事で有名な先生だが、色々ぶっ飛ん

でいる麻帆良では必要な先生だ。何より『必要なときにのみ叱る』人なので個人的には好きな先生だ。
だがこのタイミングは最悪だ。
何とか甘酒だと言い張ってネギ先生と神楽坂に誤魔化してもらったが、中学生の飲酒なんてバレたらとんでもない事になる。不可抗力とはいえ修学旅行の中止と停学の可能性がある。
先生をやり過ごした後、神楽坂と綾瀬　夕映の三人で何とか酔っ払い達を起こそうと頬を叩く。

「寝るな、いいんちょ！寝たら、夜眠れなくなるぞ！」

「イヤ、その起こし方はどうなのです？」

綾瀬から冷静にツッコミを入れられるも、他のクラスメイトにも手伝ってもらいながら全員をバスに積み込み、清水寺を後にする。
こうして一日目の観光は終わった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

嵐山旅館。
嵯峨地区に湧き出た温泉を利用して最近宿泊施設だ。中学生の修学旅行の旅館には過ぎた場所かもしれないが、真新しい設備と広い露天風呂を見てしまえば泊まる側としては言うことはない。
その一階ロビーで二人と一匹が話をしていた。

「ええっ！僕を手伝ってくれるんですか！？」

「姫のアニキが手伝ってくれるんなら心強いぜ！」

「あくまでフォローだ。ネギ先生が頑張らなければならない事に変わりは無いぞ？」

あからさまに安心する一人と一匹に雄飛は釘を刺す。

一人とは言わずもがなネギ。一匹とはその先生の肩に乗っている『オコジョ妖精』ことアルベール・カモミールだ。

猫の妖精『ケット・シー』に並ぶ由緒正しい使い魔らしいが飲酒、喫煙、そして女に目が無いその行動を見るにただのおっさんがオコジョになったとしか思えない。

過去に、ネギに助けられた恩を返すために付従っているらしい。

魔法使いがいるなら使い魔もいるかと納得していた雄飛だったが、しかしなぜオコジョ？魔法使いで有名なあの映画よろしくフクロウでは駄目なのだろうか？カッコ良かったんだが・・・。

そんなことを考えながら、言葉を詰まらせている魔法使いコンビに雄飛は言葉を続ける。

「それに他の依頼の事もあるから、つきっきりってわけにもいかないぞ？」

「他の依頼？」そう聞こうとしたカモミールだったが、「ちょっとネギ！ネギ！」という大きな声と共に明日菜が歩いてくる。

「とりあえず、酔ってる皆は部屋で休んでるって言ってごまかせたけど・・・一体、何があったって言うのよ？」

「じ、実はそのー・・」

「言っちまえよ兄貴！」

この状況を話すべきか迷っているネギに、説明を促すカモミール。
結局ネギが折れた形で明日菜に事の顛末を話す。

―――――――――――――――――――――――――

「えーーーっ！私たち３－Ａが変な関西の魔法団体に狙われてる！？」

驚きの声を上げる明日菜。
無理も無い。自分達の修学旅行を邪魔される事など普通は想像できない。だがその驚きは全く別の形で伝播する。

「ちょっと待てネギ先生！神楽坂も『こっち側』の人間なのか！？」

「えっ！姫菱もネギと同じ魔法使いなの！？」

ただのバイト学生が実は魔法関係者と知って驚く雄飛に対して、再び大きな声を出す明日菜。あっちはあっちで知らなかったらしい。

「はい。アスナさんは二年の三学期に、というか僕が赴任してきたその日にばれてしまって・・・・」

情けなさそうに話すネギ。明日菜も当時を思い出しているのか少し顔が赤い。カモミールはその時の事を知っているのかニヤニヤ笑っているだけだった。一人取り残された形の雄飛は二人に助け舟を出す意味も含めて話を進める。

「まぁ、神楽坂の言った通り俺も魔法使いだ。で、学園長から今回の件でネギ先生を手伝ってやれと言われている」

「ふーん」とどこか納得した表情で頷く明日菜。「どうりであんなカエルだの変だと思ったのよ」と続く話に雄飛は沈黙を守る。厳密にはネギとは『同じ』魔法使いではないが、西洋魔術を知らない雄飛は説明が面倒なので黙っておく。

「また魔法の厄介事か――」

「すいませんアスナさん・・・・」

どこか呆れた表情で溜息を吐く明日菜。ネギはいつも迷惑をかけているのか申し訳なさそうに謝る。が、明日菜は笑みを浮かべ

「ふふっ・・・どーせまた助けて欲しいって言うんでしょ？いいよ。ちょっとなら力貸したげるから」

「ア・・・アスナさん」

優しい言葉をかけてくれる明日菜に感動するネギ。雄飛には二人が困っている弟になんだかんだ言いつつも手を貸す姉に見えた。

「良かったな」と言葉と共に雄飛はネギの頭を撫でる。くすぐったそうにしているがネギの表情はどこか嬉しそうだ。

「さてと。話も一段落したようだし、俺一度部屋に戻るわ」

「続きは後でな」という言葉を残して雄飛はその場を後にする。雄飛を見送った後、カモミールは重要な事を切り出した。

「そうだ姐さん。クラスの桜咲刹那って奴が敵のスパイらしいんだよ！」

「え～～っ！！スパイって・・桜咲さんが？」

いきなりクラスメイトに裏切り者がいる可能性を告げられ驚く明日菜。だが否定する前に、カモミールに「何か知らねーか？」と聞かれ知っている情報を出していく

「そ、そうね・・このかの昔の幼なじみだって聞いたことあるけど・・・・。
ん～～そういえばあの二人が喋ってるところ見たことないな・・」

「む、待てよ姐さん！このか姉さんと幼なじみってことは・・・・！？」

明日菜からの情報を元に推理していくカモミール。『西のスパイ』と『木乃香の幼なじみ』の二つの単語からオコジョの脳に何かが閃く。

「・・・・あ！そういえば・・・・・・・待って！」

ネギの頭にも同じ物が閃いたのか、慌てて自分のザックを開ける。取り出したのは『３－Ａ　クラス名簿』。急いで開き『１５．桜咲　刹那』の写真の下を指差し

「あ～～～っ。み、見て見て！！
名簿に京都って書いてあったよ～～～っ」

そこには所属部の剣道部の表記の下に手書きで『京都　神鳴流』と書いてあった。

「やっぱり。奴は京都の出身だったんだな！！」

決定的な証拠を見つけた。と、カモミールはそう言わんばかりにネギを見る。

「えええ、じゃあやっぱり！」

カモミールの言葉を信じきっているネギは驚愕の事実に震えた声を出す。

「ああ。奴は間違いなく関西呪術協会の刺客さ！」

謎は全て解けたと言わんばかりに力説するオコジョ。だが明日菜は「うーーん、そうかなーー・・？」と否定的な声を出すもカモミールには届いていない。そんな風に話に集中していた二人と一匹に、「ネギ先生――教員は早めにお風呂済ませてくださいな」と、３－Ａの副担任の源しずな先生が通りかかり声を掛けられる。驚いたネギは「ひゃっ」と変な声を出してしまう。自分達が一般の人が通る場所で魔法の話をしていた事に今更ながらに背筋を寒くする。

明日菜だけが「あ、は、はい！しずな先生」と、驚きを隠して対応していた。

「私たちももうすぐおフロだし、続きは夜の自由時間に聞くよ。ＯＫ？」

「は、はい」「ＯＫッス姐さん」

話の腰が折られてしまったのでこの話は風呂上りに。そう結論付けてネギと明日菜は別れた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

早めに風呂に入って夜に備えよう。脱衣所へ入りながらそう結論付けた。生徒や先生方が起きている時間帯には敵もそうそうと手は出してこないだろう。

相手が親書の強奪とお嬢様への嫌がらせのどちらに重点を置いているかは分からないが、私はお嬢様を守れればそれで良い。親書など最悪奪われてもかまわない。

そんな事を思いながら、カゴに脱いだ服を入れてバスタオルを身に着ける。

夕凪を置いていく事を考えたが、やっぱり手に取る。脱衣所内のカゴは全て空になっているし、こんな中途半端な時間帯では誰も来そうに無い。

引き戸を開けて洗い場に出ると露天風呂特有の開放感のある景色が広がっていた。こんな場所を独り占めできる事に少し優越感を感じる。

バスタオルを取り、手桶にお湯を汲む。軽く体を流しながら今日の事を考える。

姫菱雄飛

彼自身の素性は完全な灰色である限り信頼を置くわけにはいかないが、学園長の名前を出した上で依頼と言い切っていた以上お嬢様の

護衛を任されたのは本当の様だ。そしてネギ先生へのフォローに関しても。
どうしよう。
敵が昼間の様に３－Ａ全体に嫌がらせを行ってくるのなら彼はネギ先生のフォローに回ってもらい、自分がお嬢様の護衛に専念した方が良いのかもしれない。
『私がお嬢様を守る』という独占欲にも似た物は無い。とは言い切れないが、それ以上に東と西の諍いの所為でクラスの皆が修学旅行を楽しめなくなる方が申し訳なく感じる。

「ふぅ・・困ったな・・魔法使いであるネギ先生なら・・何とかしてくれると思ったんだが・・・・」

という愚痴が口に出てしまう。だが彼は魔法使いとはいえ１０歳。まだまだ守られる側の存在だろう。そんな事を考えていると

（殺気？）

頭で考えるより先に体が反応する。反射的に気による肉体強化を施し石鹸を手に取る。近くの照明に投げつけ、破壊。

「誰だっ！？」

暗くして自分の位置を悟られない様にした状態で敵を探す。近くにいるはずだ。何処にいる？
見つけた。背の高い岩の陰に潜んでいる。

（それで隠れているつもりか？）

『神鳴流奥義・斬岩剣』

抜き打ちで放たれた刃は一瞬の抵抗も許す事無く岩を真横に両断。しかし敵を切った手ごたえは無かった。が、隠れていた敵が姿を現す。

「ｒａｓ　ｔｅｌ　ｍａ　ｓｃｉｒ　ｍａｇｉｓｔｅｒ」

だが敵は怯む事無く呪文の詠唱を行い杖をこちらに向ける。

「『ＦＬＡＮＳ　ＥＸＡＲＭＡＴＩＯ』」

花びらを伴う突風と共に夕凪が弾き飛ばされる。

敵の武器を奪う。剣士を相手にする場合正しい判断だろう。だが神鳴流の使い手への対応としては間違っている。そもそも神鳴流にとって武器とは刀や槍ではなく、

（私だ！）

飛んでいく愛刀に固執する事無く一気に距離を詰める。首を掴みのど仏を親指で抑え、呪文詠唱を封じる。残った左手で男最大の急所を掴み、告げる。

「何者だ。答えねば」

「ひねり潰すぞ」と軽く力を込めて脅す。しかし敵の顔をよくよく拝んでみれば・・・・

「ネ・・・・ネギ先生？」

暗くて良く見えなかったがこの距離なら間違えない。うちのクラスの担任だ。

「あ、す、すいませんネギ先生・・・・あ」

慌てて離れるも子供先生は目の幅涙で泣いており、恐怖で震えている。使い魔なのかいつも連れて歩いているオコジョに「オ、オイ？どうしたんだよ兄貴？しっかりしろよ」と言葉をかけられても、呂律が回っていない声を返すだけだ。
私は左手を見て一体ナニを『握って』いたか思い出す。

「いえっ、これは、その・・・・仕事上、急所を狙うのはセオリーで・・・・えと・・・・ごっごめんなさい先生！」

握っていた自分も恥ずかしいが、握られていた相手は羞恥よりも恐怖を感じたろう。とにかく一息に謝ると

「や、やいてめえ桜咲刹那！やっぱりてめえ、関西呪術協会のスパイだったんだな！？」

先生の頭に乗ったオコジョが怒り心頭といった口調で言ってくる。
スパイ？と頭で考える前に反論が口から出る

「なっ、違う。誤解だ！違うんです、先生！！」

「何が違うもんか！ネタは上がってんだ。とっとと白状しろいっ！」

そんな風に傍から見たら不毛な言い合いをしている私たちに

「何やってんだ？お前ら？」

彼は、冷静な声でこの状況にツッコミを入れてきた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

自分の部屋で荷物整理をしてから浴衣を手に取り風呂場へ向かう。日本人らしく風呂好きの俺は意気揚々と男湯の暖簾をくぐり、脱衣所に入る。中には誰もいなかったが、カゴの中に服、その隣に布に包まれた身の丈ほどの杖がおいてあった。

（ネギ先生か・・・・）

畳んである子供サイズのスーツを見るまでもなかった。というか部屋に置いて来いと言いたい。だが、自分も帯刀用のホルダーと鬼丸国綱のストラップを持ってきているので人の事は言えなかった。

服を脱いで風呂場へ行く。だがその前に脱衣所前の立て看板に書いてあった『混浴』の二文字を思い出し、立ち止まる。備え付けの湯衣を腰に巻く。タオルも当然巻いていたが、混浴のルールは守って入らねば。

露天風呂である以上静かに浸かって楽しみたいが、１５歳男子としてはクラスの女子が入っている事に期待しているのも事実だ。実際はしずな先生に女子が入っていない事を確認してもらっているのだが。

男子のクラスメイトがいない以上、周りから『女の敵』と判断される事だけは避けなければ・・・・。

満を持して洗い場に出る。すると「誰だっ」という声がして、一瞬遅れて目の前に岩が落ちてくる。洗い場の床にヒビを入れながら転がっていくそれが飛んできた方向を見ると、誰かいる。しかし暗く

てよく見えない。
只ならぬ気配を感じながらそこに近づいていき、

「何やってんだ？お前ら？」

担任とクラスメイトにツッコミを入れた。

―――――――――――――――――――――

二人とも固まっている。いや、カモをカウントすると二人と一匹か。
この状況を冷静に観察する。まずはネギ先生。どういう訳か目の幅涙で泣いていて茫然自失の状態だ。口から呻き声を出しているが言葉になっていない。
そして、そんな先生の隣にいて顔を赤くしてこっちを見ている桜咲。
以上の事から俺は一つの答えを導き出した。

「桜咲・・・お前が年上なんだから、優しくリードしてやれよ・・・」

「どんな計算でそんな答えにたどり着いたっ！」

「いや、お前がネギ先生に迫っているとしか見えないんだが・・・？」

「そんな格好ではな・・・」という言葉と共に視線を顔から下に下げていく。
風呂に入る場合タオルを湯船に入れてはいけない。桜咲もそのルールに則って外している。だがそんな状態で彼女は立っているのだ。

その為、太腿から上を隠しているものは何も無い。
細い首、小さいとはいえ確かな胸の膨らみ、抱きしめたら折れてしまいそうな柳腰、その下にある薄い蔭り。その全てが見えていた。
その上、お湯の所為で白い肌が淡い桜色に染まっているのでとても扇情的だ。
ここまでくると自分が平常心を保っているのが奇跡に思えてくる。
というかネギ先生がこの場に居なかったらどうなっていたか。

「きゃあっ」

自分が何も身に着けていない事を思い出したのか、桜咲は可愛い悲鳴を上げて勢い良く湯船に沈む。
何とか視線を外した俺は、桜咲が着けていたであろうバスタオルを手に取る。ついでに近くに転がっていた夕凪を鞘に収めて回収する。
とういかここまで剣持ってきたのか・・・・。
顔はおろか首まで真っ赤にして、しかし、立ち上がるに立ち上がれない桜咲にバスタオルを投げる。恨みがましくこっちを睨んでいるが、湯衣を身に着けて入らなかったお前の自業自得だと言いたい。
イイモノは見せてもらったが。

「カモ、一体何があった？」

「っと、そうだ、姫の兄貴！コイツ、西のスパイなんだ！」

この中で一番会話できそうなカモに声を掛けるも、どこか見当違いな答えが返ってくる。

「西のスパイ？コイツはどっちかって言うと俺たち側だぞ？」

「そ、そうです。私は敵じゃない。一応先生の味方です」

バスタオルを体に巻いて立ち上がり、夕凪を受け取った桜咲はそう弁明する。
「へ・・・・」予想外の答えに呆気に取られるカモと、ようやく復帰するネギ先生。

「あ、あの、それってどういう・・」

ネギ先生の疑問に桜咲が答えようとしたそのとき

「ひゃあああ～～～っ」

どこか間の抜けた悲鳴。女性用の脱衣所の方からだ。というか今の声は・・・・。

「このかさん!?」「近衛か?」「このかお嬢様!?」

三者三様の言い方だったが、皆同じ答えに行き着く。すぐさま脱衣所に向かって走っていく二人に追いつこうとするが、思いとどまる。さらに続けて上がる近衛の悲鳴。中で何が起きているのかすごい気になるが、我慢我慢。
しばらくして脱衣所から出てきたのは、

「近衛?」

風呂に入る前だったらしく全裸の彼女は、どういう訳か大量のサル達に担がれて運ばれて行く。というかコレも西の仕業か!?
頭を戦闘モードに切り替える。同時に近衛を助けるために有効な方法を脳内検索。
あの数だと格闘で攻撃しても、その間に他のサルに連れ去られる。

かといって通常の？術や威圧・神聖術では捕まっている近衛も巻き添えになる。

（まずは、近衛とサルを引き離すのが先か・・・それなら）

本来の用途とは逆だが丁度良い術がある。近衛に魔法がバレる可能性があるが誘拐阻止を優先と判断。

「開け始祖の扉！マグネティックゲート」

俺を中心に赤・青・黄色の三色で描かれた魔法陣が風呂場全体に広がる。同時に円の縁から中心に向かって放たれる幾つもの球体が近衛に触れた瞬間、彼女の体はサル達の手を離れ弾かれた様にこっちに飛んでくる。

『法陣術　マグネティックゲート』

本来この術は自分を中心に敷いた弧法陣の中の敵に攻撃を加えつつ中心に引き寄せる陣術の一つだ。今回は効果対象を近衛にする事で彼女とサルとを引き離す事にした。

だが、近衛の引っぱるスピードが一気に下がる。

彼女に攻撃を加えない様にギリギリまで威力を落としていた為に、引き寄せる力も弱くなってしまったらしい。

失速したままでは再びサル達に捕まってしまう。

だが問題ない。俺の目的は近衛とサルたちを引き離す事それだけ。

それだけで良いのだ。今回俺が魔法でサポートする後衛役を演じたのは、

前衛足りうる剣士がいるのだから――

岩伝いにこっちに走ってくる桜咲は飛んでくる近衛を空中でキャッチして着地。間髪入れずに襲い掛かってくるサル達に野太刀を振る

う。

『神鳴流奥義・百烈桜花斬』

放たれた無数の斬撃と、技の余波で生まれた気の刃は桜の花弁となり敵を切り裂き、散らしていく。

サル達は一匹残らず切り裂かれ紙型に戻っていく。式神を形作っていた寄代が紙吹雪の様に舞う光景が残った。

それと同時に近くの林から鳥が飛び立つ。不審に思い、気による感覚強化を行う。一瞬だけだが人が去っていく感覚があった。

（術者は逃げたか・・・・）

どちらにしろ追跡なんて不可能だ。今は放っておくか。

「せ、せっちゃん。なんか、よーわからんけど助けてくれたん？・・・・あ・・ありがとう」

近衛の方も怪我らしい怪我も無い。事態に付いていけなくとも、助けてくれたのが誰かは分かっているらしく桜咲に礼を言っていた。しかし礼を言われた側は急に顔を赤らめて何も言わずその場を後にする。だが何も身に着けないで走り去るのは女子としてどうなのだろう・・・・。

そして置いていかれた近衛は一人残った俺を見て、自分を見て、どういう状態か知って悲鳴を上げる。

「このかさーん無事ですかー！？」「このかー！大丈夫！？一体何が・・・・」

桜咲と入れ違いで入ってきたネギ先生と神楽坂が表れる。全てが終

わって残されていたのは、
自分がタオル一つ着けていない状態だと知って顔を真っ赤にしながら岩場に隠れてしまった近衛と、そんな彼女や桜咲の裸体を見て湯船から出れなくなった俺だった。

## 第五話（後書き）

次の話でやっと戦闘シーンが書ける・・・・。
日常パートがこんなにも書きにくいなんて思いもしませんでした・・・。

## 第六話（前書き）

次回戦闘パートと言っておきながらいざ書いてみると・・・・・
あれ?通常の二倍の長さに・・・・
というわけで二話に分けました。

# 第六話

「ウチ、引っ越してアスナと一緒の部屋に住むまでは・・京都に住んでたやろ?」

半泣き状態だった木乃香を明日菜が何とか宥め賺し四人はロビーに移動していた。皆、風呂上りに思い思いのジュースを飲みながら木乃香の昔話に耳を傾けていた。

「ウチは小さい頃えらく広くて静かなお屋敷で育ったんやけど・・・・山奥やから友達一人もいーひんかったんや」

一人で毬つきして遊んどったわ、と自嘲気味に言う木乃香。だが昔の事とはいえそこには寂しさが滲んでいた。

「そんなある日・・・お屋敷によく通っとった何とか流の師範の人がウチと同じくらいの女の子連れて来たんや」

「それが・・・・」

「うん・・・・。それが、せっちゃんとの出会いやった」

雄飛に促されるまま木乃香は答えた。当時を思い出しながらどこか遠い目をして話す。

「せっちゃんがウチの初めての友達やってん。・・・・せっちゃんは剣道やってて、恐い犬を追っ払ってくれたり・・・・危ない時は守ってくれた」

はにかみながら話す木乃香。強くてかっこいい自分の友達が自慢なのだろう、川で二人とも溺れかけるエピソードを話している時も嬉しそうに語っていた。

「でもその後、せっちゃんは剣の稽古で忙しくなってあんま会わんようになって・・ウチも麻帆良に引っ越して・・中一の時せっちゃんもこっちに来て再会できたんやけど・・・・でも・・・・」

どこか余所余所しくなっていた。と雄飛は言葉を繋げようとして、やめた。桜咲と疎遠になっていく件の時点で涙ぐんでいた。

「何かウチ悪いコトしたんかな・・・・せっちゃん昔みたく話してくれへんよーになってて・・」

ジュースを一息に飲み干して昔話を終えた木乃香。昔同様桜咲が大切な友達であることは変わりないが、だからこそ避けられている事が辛いのだろう。目尻に溜まった涙を拭い気丈に振舞ってはいるが、空元気であることは雄飛達の目にも明らかだった。

「大丈夫だ」

雄飛は木乃香の頭に手を置く。

「俺だったら嫌いなヤツは助けない。お前にそういう態度をとっていても、昔みたいに助けてくれたんだ。桜咲だって・・・・きっとそれが本音だ」

もう少し待っててやれ。そう言って雄飛は優しく頭を撫でる。木乃香は気持ちが少し楽になったのか、幾分表情は和らいで嬉しそうな表情をしていた。

「で？いつまで頭撫でてんのよ？」

明日菜が少し苛立った声で言ってくる。雄飛は改めて周りを見ると二人とも気まずそうに顔を赤らめている。唯一、カモミールだけがおっさん顔でニヤついた顔をこちらに向けている。どうやら二人だけの世界に入っていたらしい。

木乃香も気づいたのか顔を赤くするが、撫でている本人は指摘を受けても手を休めないのでそのまま撫でられ続けている。

「ん～～。じゃ、あと五分」

朝寝坊する人間の常套句を口にしながら撫でるのを止めない雄飛を、明日菜は睨みを利かせて黙らせる。雄飛が木乃香から離れオチが付いたところで明日菜は木乃香を連れて部屋に向かう。

ネギはそれを心配そうに見送っている。

「今は神楽坂に任せようぜ、先生」

「・・そうですね・・・・」

わざと明日菜と楽しそうに話している木乃香を見送りながら男集は少し無力感を感じていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「このかさん・・・・寂しそうでしたね」

近衛を部屋に送った後、神楽坂は再びロビーに戻ってきて会話に参加している。

未遂とはいえ誘拐のショックで寝付けないかと思いきや、修学旅行初日の疲れが勝ったらしくすぐ眠りについたらしい。

「うん・・・・普段のこのかなら絶対あんな顔しないもん」

ネギ先生の言葉に同意する神楽坂。本人もあまり見ない親友の表情に戸惑っている様子だ。

「あ・・・・でもそう言えば中1の一学期の頃、ちょっと落ち込んでたコトあったかな・・？

水くさいなあ・・何も話してくれなかったなんて――・・」

「親友だから話さなかったんだろう」

少し疎外感を感じている神楽坂と、話していなかった近衛に俺は答える。

「本人にしてみれば麻帆良でできた友達に、麻帆良に来る前の友達の事で相談する事はできなかったんだろ」

突き放した言い方になるが、神楽坂とは直接関係の無い事だ。近衛も相談する相手が『いなかった』過去の話はしたくなかったのかもしれない。

「『余計な心配をかけたくない。』って事？別にそんなの私は・・」

「お前が『魔法』の事を近衛に話していないのと同じだ」

食い下がる神楽坂に、俺は本人も『親友』に話していない部分を指摘する。

「それは、ネギの正体をバラすわけにはいかないし、それに、余計な・・・・」

そこで神楽坂は詰まる。続けようとした言葉が、先ほど自分が言った事と全く同じになるからだ。親友なのに互いが互いに心配をかけたくないと思うあまり、いつの間にか話せない部分を持っていた。

「二人の線引きにもよるが、『親友に話せない事』は意外に多いだろ」

心配をかけたくない。させたくない。それは決して自分に関係の無い人間だからではない。自分より大切だから。『何でも話せる関係』と『親友』はイコールではない。

「そう、ね・・・・」

神楽坂もある程度納得できたらしい。近衛も自分を心配してくれている事を感じたのだろう、少し嬉しそうだ。

「それはそうと、ネギ先生。さっきは聞きそびれたが、脱衣所で何があったんだ?」

「あ、はい。実は・・・・」

「サルの大群が服を脱がして、近衛をねぇ・・・・」

「やっぱり西の嫌がらせなんでしょうか？」

「だろうな。人さらいとは随分と過激だが・・・・」

それが正直な感想だ。相手が親書にどの程度重要視しているのか分からないが、人間一人誘拐してまで手に入れる価値があるのだろうか？

そもそもネギ先生が風呂に入っている時点で盗み出せたはずだ。なら、学園長の孫の誘拐そのものが目的？

それもおかしな話だ。誘拐か発覚した場合、関東魔法協会に救出の大儀名分を与えることになる。魔法先生一人入ってくるだけで難色を示す組織が敵が攻め入ってくる口実をわざわざ作るだろうか？

東西に分かれての戦争が目的というのも考えられない。そこまで組織間の関係が険悪なら学園長は孫を京都に旅行になど出すはずがない。

だとすると・・・・

「というか、姫菱。何でアンタ風呂場で助けに来なかったのよ？」

俺の思考を神楽坂が遮る。「大変だったんだから」と続けるが、俺は冷静に返しておく。

「何だ？助けに行った方が良かったのか？」

『15歳男子が、女性用脱衣所に、突撃して良かったのか?』と聞く。

神楽坂も自分が何を言っているのか理解したのか、

「そうね・・・悪かったわ・・・・」

「気にすんな。俺も警察のご厄介にはなりたくない」

話が何度も逸れている。ここらで本来の話をしよう。

「それより桜咲に話を聞こう」

「そうよ。桜咲さんは結局どうなってるのよ!?」

桜咲の名前を出すと先ほどの件に食いついてくる神楽坂。「敵なの?味方なの?」という疑問を聞いてくる。

「姫の兄貴の話だと、どうやら敵じゃねえみてえだが・・」

「それより先は本人に聞いた方が良いだろ」

どうなんだ?という皆の視線を受けた俺は桜咲に答えさせることにした。まずは桜咲を探そう。

---

桜咲を探す過程で出会った3ーAの生徒達にはネギ先生が部屋に戻るように促す。もうそろそろ就寝時刻を回る。

その途中で、

「お疲れでござるネギ先生」

長瀬楓に声をかけられる。俺達と同じ様に浴衣の上に半纏を羽織っている。長身で日本人離れしたスタイルの割に浴衣の着こなしが妙に似合っている。

「修学旅行初日の夜にしては静かでござるな」

「騒がせ所がみんな寝ちゃいましたからね」

ネギ先生は皆がダウンした理由を知っているので苦笑いで返すだけだった。長瀬も大方気づいているのか追求はしてこない。

「明日起きたら悔しがるわよーみんな」

「明日の夜が思いやられるでござるな」

そういう二人の顔が少し引きつっている。その脳裏には転入して一週間の俺の想像よりも、より酷い惨状が映っているのだろう。

その後、長瀬はネギ先生に何か耳打ちしていた。前に桜咲と一緒に行動していた所を見るとやはり魔法関係者なのか？

そしてすれ違いざまに俺に「刹那を頼むでござる」という声と共に肩を叩かれる。俺に一体何を期待している？というか自分は動く気無いのか？

そう言いたかったが、既に通り過ぎてしまっていた。

おのれ糸目め。いつかその身長越してやる！

決意を新たにして、桜咲の捜索を再開すると一階の裏口にいた。出入り口の鴨居に手を伸ばしているが、身長が足りないのか脚立に上

っているのに背伸びをしてようやく届いていた。何かを貼っている。あれは札か？

「桜咲。何をやってるんだ？」

「これは式神返しの結界です」

ネギ先生にも話しているのか敬語で話す桜咲。一通り貼り終えたのか脚立を脇に置いてこっちに歩いてくる。

「あ・・というか神楽坂さんには話しても？」

「うん。もう思いっきり巻き込まれてるわよ」

そこで神楽坂の存在に目がいったのか、言外に「いいんですか？」と聞いてくる。神楽坂は神楽坂で皮肉を交えて返す。立ち話もなんなので、一行は談話室に移動して話を始める。

「えと・・刹那さんも、その・・日本の魔法を使えるんですか？」

「ええ。剣術の補助程度ですが」

「なるほど。つまり、ちょっとした魔法剣士ってわけだな！」

桜咲がネギ先生の質問に答えると、カモがさらに返してくる。しかし『魔法剣士』か。カッコいい響きだな。

「そう呼べるほど陰陽術が使えるわけでは・・・。というか、魔法剣士というなら彼でしょう」

桜咲の謙遜とも取れる発言を他人事に聞いていると皆の視線が俺に集まる。何気ない話題が俺に飛び火していた。桜咲は風呂場で俺が魔法を使っていた事を言っているらしい。確かに剣も魔法も使えるが・・・・。

「俺はどっちかっていうと魔法がメインだな。こっちも、使えないわけじゃないが・・・・・」

話の途中で「来たれ」と唱えて、鬼丸国綱を掲げる。

「おおっ」と声を上げるネギ先生とカモに「魔法で出し入れ自由自在だ」と答えながら、再びストラップに戻す。

どちらかといえば攻撃術関連が得意なのは事実だ。『賽の河原』での訓練でも?術主体で戦う事が多かった。一対多の戦闘だったので前衛、後衛を一人でこなさなければならなかった為に自然と剣術の腕も上がったにすぎない。

抜刀術に憧れて学んだはいいがそちら方面の才能は無かった、という悲しいオチがそこにはあった。

俺の説明にネギ先生達は納得していたが、桜咲だけが不満げに俺を見ている。

気持ちは分からないでもない。初めて会った夜、刀を奪われたとはいえその得意でない剣術に負かされたのだから。

「桜咲、何だか敵の嫌がらせが段々エスカレートしてる気がするんだが・・・・」

「え、ええ。このままではこのかお嬢様にも被害が及びかねません。それなりの対策を講じなくては・・・・」

無言の追求を避ける為、こっちから質問をする。俺を睨むのをやめた桜咲はこれからの事を話し始めた。

「ネギ先生は優秀な西洋魔術師と聞いていましたので、上手く対処してくれると思ったのですが・・・・意外と対応が不甲斐なかったので、敵も調子に乗ったようです」

そう言って昼間の件でネギ先生を糾弾する桜咲。その目は使えない人間を見る目だった。というか、お前性格黒くないか？

ネギ先生も痛い所をつかれたのか平謝りしていた。

「じゃあ、やっぱりあんたは味方・・・・！」

「ええ」

カモの質問に、当然の事。と言わんばかりに答えを返す桜咲。本人も、まさか敵と疑われていたとは思っていなかったのだろう。

「いやすまねェ、剣士の姐さん。俺としたことが目一杯疑っちまった！！」

「ごめんなさい刹那さん・・・。ぼ、僕も協力しますから襲ってくる敵について教えてくださいませんか！？」

ネギ先生達の素直さに少し気を良くしたのか桜咲は敵の情報を話していった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

「私たちの敵はおそらく関西呪術協会の一部勢力の、陰陽道の『呪符使い』。そしてそれらが使う式神です」

姫菱はある程度知っているかもしれないが、西洋魔術師のネギ先生や一般人の神楽坂さんは馴染みが無いだろう。うまく説明できるだろうか。

「呪符使いは古くから京都に伝わる日本独自の魔法、『陰陽道』を基本としていますが・・・呪文を唱える間は無防備となる弱点はネギ先生西洋魔術師達と同じ・・・・」

本来は陰陽の考え方は中国から伝来したのだが、ここでその説明はしなくてもいいだろう。話が脱線してしまう。

「それゆえ西洋魔術師が従者を従えているように、上級の術者は善鬼（前鬼）や護鬼（後鬼）といった強力な式神をガードにつけているのが普通です。それを破らぬ限りこちらの呪文も剣も通用しないと考えた方が良いでしょう」

説明していると姫菱の手元にあるフリップに西洋魔術師の後衛は子供先生、前衛はとび蹴り女子中学生、といったように陰陽術師のほうも呪符使いと式神の前衛、後衛の関係が分かりやすく挿絵付で描かれていた。ネギ先生達もそちらを見ながら説明を聞いている。

でも、フリップとマジックどこから出したんだろう・・・・？絵も即興で書いたにしては中々上手いし、説明の助けにはなっているけど・・・・。

「ぜ、ぜんきにごき君ですか・・・・・・・」

「強そう・・・・」ともらすネギ先生。しかし誰も姫菱のフリップについてツッコミを入れないのは何故だろう・・・・。まるで疑問に思っている私が間違っている様な気になってくる。
神楽坂さんは神楽坂さんで「ゴキ・・・？」とつぶやいている。神楽坂さん、恐らく貴方が想像している物は違います。確かに敵ですが。
気を取り直して説明を続けよう。

「さらに関西呪術協会は、我が『京都神鳴流』と深い関係にあります」

ここから先は正直言いたくない。でも言わなければ。

「神鳴流とは元々京を守り、魔を討つために組織された掛け値無しの力を持つ戦闘集団。呪符使いの護衛として神鳴流剣士が護衛に付くこともあり、そうなってしまえば非常に手強いと言わざるを得ません」

言い終わると、姫菱も丁度出来上がったのか二枚目のフリップを裏返す。そこには多数の式神を従えた陰陽術師の隣に、袴を穿いた剣士が大太刀を構えているワンシーンがあった。フルカラーのそれは背景の燃え盛る炎が作り出す陰影によって登場人物が無駄にカッコ良く描かれている一作。ご丁寧に『※画面はイメージ映像です』という注釈まで付いていた。
あまりの出来栄えに皆拍手していた。本人も何かやり遂げた顔をしている。
お前は話を聞けと言いたい。いや、聞いているからちゃんと描けているんだろうけど。

「うわわ・・・・ちょっと何かヤバそうじゃん！？」

絵の評価から戻ってきた神楽坂さんが驚いた声を出す。「まあ、今の時代そんなことは滅多にありませんが・・・・」と返しておく。実際、大捕り物の護衛の依頼でもない限り神鳴流が動くとは考えられない。

「じゃ、じゃあ神鳴流ってゆーのはやっぱり敵じゃないですか！」

やはりそこを話さなければならないか・・・・。

「はい・・・・。彼らにとってみれば、西を抜け東についた私は言わば『裏切り者』・・・・。でも、私の望みはこのかお嬢様をお守りする事です。仕方ありません」

そんなレッテルを貼られようが何を今更、と思う。里にも居場所が無かった私には、神鳴流にも居場所が無かったのだから。

「私は・・・・お嬢様を守れればそれで満足なんです」

その場所に自分の居場所が無くてもかまわない。お嬢様をお守りできる場所。そこが私の居場所だ。

「・・・・・・・・よーしわかったわよ桜咲さん！！」

いきなり神楽坂さんが立ち上がり背中を叩いてきた。

「あんたがこのかのこと嫌ってなくて良かった。それが分かれば充分！！」

そう言ってくる神楽坂さんの表情はうれしそうだった。だが、いきなりの事に正直ついていけない。

「友達の友達は、友達。ってか？」

姫菱が茶化す様に神楽坂さんに声をかける。しかし彼も少し笑っていた。

「そーゆーこと！！私も姫菱も協力するわよ」

姫菱が勝手に数に入っていたが、本人は軽く頷くだけだ。彼もこのかお嬢様の友達だという事か。

私は二人から向けられた好意に戸惑っていると

「よし、じゃあ決まりですね！３－Ａ防衛隊！結成ですよ！！関西呪術協会からクラスのみんなを守りましょう！！」

そう言って、ネギ先生に半ば無理矢理円陣を組まされ、手を真ん中に合わせる。神楽坂さんも「えーー！？何その名前・・」と付いて行けてない様子。唯一、姫菱だけが一人ノリノリで「気合入れるわよアンタ達ッ！！」と激を飛ばしている。

何故オネエ言葉・・・・！？

「じゃあ、敵はまた今夜も来るかも知れませんね！早速、僕、外に見回りに行ってきます！！」

という言葉を言い切る前にネギ先生は一人裏口に向かう。神楽坂さんの制止も聞かずそのまま外に出て行ってしまった。

「張り切っちゃってまぁ・・・・」と笑っている姫菱。男の子同士、

共感できるものがあるのだろうか。

「いえ、いいですよ私達は班部屋の守りにつきましょう」

張り切るのは良いが、あのはしゃぎ様はやはり十歳。当てにしない方がいいかもしれない。

――――――――――――――――――――

ネギ先生と別れた後、私達三人は五班の部屋に来ていた。さすがに女子の部屋に入る気は無いのか姫菱は入口で待機している。

「ただいまーって・・・あら、みんな寝てるわ」

神楽坂さんの言う事も分かる。普通、修学旅行の夜といえば消灯時間など有って無い様なものなのに、誰一人起きていなかった。よほど日中遊んでいたかが伺える。無論、酒でダウンしたのもあるのだろうが。

「――では私達は廊下で各部屋を見まわりますので」

「分かったわ。じゃあ、何時間かごとに交代ね。大丈夫。このかの事はつきっきりで守るから」

どうやらよほど心配そうな顔をしていたらしい。お嬢様の寝ている所を見ていたら、神楽坂さんにも励まされてしまった。

「・・・すみません神楽坂さん。でも、何かあったらすぐ私か姫

菱を呼んでください」

彼の了解も得ずに話を進めているが姫菱も聞いてるはずだ。何も言ってこない以上構わないのだろう。

一礼して部屋を後にする。入口には姫菱は所在無さげに立っていた。

「姫菱。相談があるんだが」

「神楽坂を見回りのローテーションから外すこと、だろ？」

どうやら考えることは一緒だった様だ。魔法関係者とはいえ素人の神楽坂さんを夜の警護に参加させる事はしたくない。結界を張ったからと楽観視するわけではないが二人で見回りした方が良いだろう。

「なら俺の部屋が個室だから、そこで交代で仮眠取れはいいか・・・・」

「そうだな。なら、3時間ごとに・・・・」

そこまで口にして、自分が一体何に同意してしまったのか気付く。交代で一つの部屋を使う。という事は、男子と同じ布団で寝起きするという事だ。

自分の寝姿を彼に見られる。それだけでも十分恥ずかしいのに。それに個室には布団は一つしか無い。つまり私が使った後の布団で彼が眠り、彼が使った後の布団で私が眠るという事だ。色々とマズイ。なら、布団を二組敷いてしまえば良い。と一瞬名案と思える策が閃くが、その光景を想像してその案を棄却する。

個室に布団が二組敷いてある様を思い浮かべると、何かもう、『そういう関係にある二人』にしか見えなくなってくる。さらに色々と

マズイ。別に一組でも変わらないと思うが。
かといって五班の部屋に戻って仮眠を取ると他の班員を起こしてしまうだろうし、姫菱が私を起こしにくくなるだろう。何よりもし神楽坂さんを起こしてしまうと、ローテーションから外した事がバレてしまう。それを見越して姫菱は提案したのだから。
どうすればいいんだ。というか姫菱はそういうのを全く気にしない人種なのか?と、必死に解決策を考えていると。
自分の感覚に変な引っ掛かりを感じた。それに、

「この気配は・・・・!?」

姫菱も気付いたのか目配せしてくる。私は頷きを返して急いで五班の部屋へ向かう。
途中誰かにぶつかりそうになったが謝っている余裕など無い。

(しかしどういう事だ?式神返しの結界に引っかからずに入ってきたのか?だとすると式神だけでなく、術者本人も・・・・?)

答えが出る前に部屋に着く。まだ寝ていなかったのか、感づいたのかは知らないが神楽坂さんは起きていた。ついでに綾瀬さんも。

「神楽坂さん。このかお嬢様は!?」

「え・・そこのトイレに入ってるけど?」

「もう、10分くらい・・・入ってます・・・・ううう」

そう答えた綾瀬さんはトイレを我慢しているのか内股気味になっている。

「こ、このかーいるよねー？」

そう言ってドアをノックすると「入っとりますえ～」と帰ってくる。

「ほらね」と言う神楽坂さん。念の為、もう一度。トイレを使いたい綾瀬さんと少し強めのノックだった。しかし

「入っとりますえ～」

帰ってくる言葉は同じだった。だが何かおかしい。そう思っていると、先ほどと同じように部屋の入口で待機していた姫菱が入ってくる。彼は驚いている私達を押し退け、ドアをノックする。

「近衛。俺だ、姫菱だ。・・・・開けるぞ？」

その言葉に中のこのかお嬢様は

「入っとりますえ～」

と答えるだけだった。

「「！！」」

私と神楽坂さんの顔に驚愕が走る。

トイレ中に男子に「ドアを開ける」と言われて動じない女子などそういない。という事は・・・・

「開けろ！」

姫菱が声を荒げて私に命令する。自分で開けないのは本人が中にいた場合の事を考えての事だろう。

「このかさぁ～～～ん！！」「お嬢様失礼を」

我慢の限界だったのか、期せずして綾瀬さんと一緒にドアを蹴破った。中にいたのはお嬢様ではなく「入っとりますえ～」と声を出す、呪符が便座の蓋に貼り付けてあった。

「しまった！騙されました」「ど、ど、どうしよう！？」「何でもいいから私におしっこさせて下さい～」

三者三様に動揺していると

「神楽坂、ネギに電話しろ！」

姫菱が強い口調で指示を出す。この状況で一人彼だけが冷静だった。彼はそのまま部屋を出る。私達も慌てて後を追う。神楽坂さんもネギ先生に連絡が取れたのか「ネギごめん！！このかがゆーかいされちゃった！！どうしよう」という声がする。私達は廊下を走り階段を駆け下り、急いで外に出る。

気配を辿って渡月橋の近くまで来ると、そこにはネギ先生が風呂場にいたサル達にまとわりつかれていた。

「ネギ先生」「ネギーッ」

助けようと近づく神楽坂さんを姫菱が追い抜く。彼の手には既にロビーで見せていた刀が握られていた。

左手に持った刀の柄尻でサルを攻撃。続く蹴りの三連撃でネギ先生にまとわりついていたサルを残らず引き剥がす。

精密な連撃で空中のある一点に集められたサル達は、そのまま抜き打ちで放たれる一刀を回避できずに切り裂かれ、寄代に戻っていく。

「どっちに逃げた?」

倒した式神には目もくれず、姫菱は呆けているネギ先生に聞く。「え、あ、あっちです」と指差された方角を見て、「追うぞ」と皆を先導する。

しばらく走っていると見えてきたのは、人間大の巨大なサルだった。

「待てーーっ」
「お嬢様ーーーっ」
「このかーーーっ」
「近衛ーーっ」

皆口々に誘拐犯に叫ぶ。サルはこちらを一瞥しただけでそのまま逃げていく。四人で巨大なサルを追う一見シュールな追跡劇だった。

先頭を走るサルはトップスピードを維持したまま『嵯峨嵐山駅』に入っていく

「あ、マズい。駅へ逃げこむぞ」

カモさんの指摘通り、そのまま改札をすり抜けていく。「あいつＳｕｉｃａ持ってんのか?」と、どこかから見当違いな質問が聞こえる。

姫菱、今その疑問は正直どうでもいい。

「っていうか何よ、あのデカいサルは!?着ぐるみ!?」

「おそらく関西呪術協会の呪符使いです」

神楽坂さんの当然の疑問には一応答えを返しておく。

「あの着ぐるみも、ただの着ぐるみでは無なさそうです。気を付けて！」

人間一人抱いたまま私達に追いつかれること無く走った脚力を考えると、どうやら肉体強化の効果がある着ぐるみなのだろう。油断はできない。

「オイ、おかしいぞ。この時間帯とはいえ駅員すらいない」

改札を何の躊躇いも無く飛び越えながら姫菱は言う。辺りを見回すと・・・やはりあった。

「人払いの呪符です！普通の人は近づけません！」

周囲の柱に貼られている呪符の効力だった。敵はかなり周到に準備している。

サルを追って電車に乗り込む。最後尾のネギ先生も滑り込みで電車に乗れた。

「姫菱！ネギ先生！前の車両に追い詰めますよ」

そう言って一気にサルとの距離を詰める。すると着ぐるみはこちらを向き、呪符を投げる。

「お札さん。お札さん。ウチを逃がしておくれやす」

キレイな女性の声が聞こえた瞬間、呪符から出現したのは大量の水。距離を詰めていた四人をそのまま押し返す。

驚くネギ先生や神楽坂さん達を押し流す水流は、瞬く間に一車両分

の容積を満たしてく。
水に流されながら敵を見ると、既に連絡通路のドアの向こうにいた。
こちらを見て嘲りながら手を振っている。ネギ先生達も突然の状況になす術が無いらしい。
私も息が苦しくなってきた。打開しようにも流されるままのこの状況では剣も振れない。
このまま何もできずに、このかお嬢様を奪われるのか・・・・

（・・・私はやはり、まだ未熟者だ・・・・）

薄れそうな意識の中、自分の無力さに腹が立った

## 第六話（後書き）

何か書いていたら刹那だけじゃなくて木乃香も好きになってきた様な・・・・

気のせいなのか？それとも俺の気が触れたせいなのか・・・・

# 第七話（前書き）

やっと戦闘パート・・・・。
ここまで長かった・・・・。
でもクオリティは期待しないで下さい。

# 第七話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

突然水攻めにあったが俺は極めて冷静だった。サルから投げられた札から水が吹き出た瞬間、脊髄反射で大きく息を吸い込んでいた。どうやら最初にこの世界に着た時、水に叩き込まれた経験から無意識に体が反応していたらしい。
近くのポールに掴まりながら他の三人を確認する。後ろを見るとネギも神楽坂も軽いパニック状態になっていた。少し前の俺もこんな風になっていたのかと思いながら見てしまう。
近くに浮かんでいる桜咲はさすがに混乱はしていなかったが。苦しそうだ。さっさとこの状況を切り抜けよう。
腰から国綱を引き抜き、刃を返す。右足を床に付けてそこに向かって逆刃を振るう。

（凍てつけ！）

抜刀術『砕氷刃』

X字状に放たれた斬撃は冷気を纏い、そのまま右足を床ごと凍りつかせる。
右足が動かないのを確認すると今度は国綱を後ろに回し床に突き立てる。刀の側面に左足を引っ掛けて自分を完全固定。
続いて桜咲の手を取り引き寄せる。両腕で腰を抱いて彼女を敵のいる連絡通路の方向に向ける。

彼女は突然の事に暴れそうになったがそれも一瞬。すぐ俺の考えに気付き、気による肉体強化を行い技を放つ。
剣術は通常、踏み込みが必要なため足場の無い空中や水中では技は放てない。
だが体が固定されていれば――――

神鳴流『斬空閃』

刀身から放たれた気の斬撃が形そのままに飛んでいく。一直線に飛んでいく気の刃は術者のサルを通路の扉ごと吹き飛ばす。
ちょうどそこで乗車口が一斉に開く。神楽坂達も抜けていく水と一緒に京都駅のホームに投げ出される。
抱きしめていた桜咲を放す。国綱を床から引き抜き鞘に収め、右足は思い切り力を入れて氷を破壊しながら拘束を解く。
凍傷の可能性があるが今は無視。走れないほどじゃない。
ついでに桜咲や神楽坂の浴衣が、先ほどの水で濡れ透けの状態になっているのも無視。というか・・・あえて指摘しない。
一人遅れてホームに出ると、桜咲が敵に啖呵を切っていた。

「み、見たか。そこのデカザル女。嫌がらせはあきらめておとなしく、お嬢様を返すがいい」

「なかなかやりますな。しかし、このかお嬢様はかえしまへんえ」

「え・・・・」「このかお嬢様？」

ネギと神楽坂が敵の言った言葉をそのまま口にする。当然の疑問だろう。敵が近衛をお嬢様と呼ぶという事は、元は近衛家に仕える存在という事。俺もようやく敵の狙いが見えてきた。

「せ、刹那さん。一体どういう事ですか!?」「そうよただの嫌がらせじゃなかったの!?何であのおサル（？）、このか一人を誘拐しようとするのよ!!」

尚も逃げるサルを追いながら疑問をぶつける二人に桜咲は答える

「じ、実は・・・以前より関西呪術協会の中に、このかお嬢様を東の麻帆良学園へやってしまった事を心良く思わぬ輩がいて・・」

桜咲は考えられる敵の狙いを口にする

「おそらく、奴らはこのかお嬢様の力を利用して関西呪術協会を牛耳ろうとしているのでは・・・」

「え・・・」

神楽坂は絶句している。ネギも「な・・何ですかそれ～～――――！？」と驚いている。あまりの話の展開についていけないのだろう。

「カエルの孫はカエルって事か？」

俺の喩えに頷きを返す桜咲。『学園長の孫』という政治的価値だけじゃなく、近衛本人に呪術的価値があったとは。

「学園長・・・聞いてねぇぞ・・・・。想定外だったのか!?」

「私も甘かったと言わざるを得ません。まさか修学旅行中に誘拐などという暴挙に及ぶとは・・・・」

桜咲は歯噛みしながら自分の不甲斐無さを口にする。

「しかし元々関西呪術協会は、裏の仕事も請け負う組織。このような強硬手段に出るものがいてもおかしくはなかったのです」

方法は分からないが近衛を誘拐し、その力を使ってクーデターを引き起こす、か。近衛の力がどの程度かは知らないが、少なくとも近衛を奪還しようとする関東魔法協会を黙らせるだけの力はあるという事だろう。

サルを追って走っていると京都駅の柱にも札が貼ってあった。周りに誰もいない事を考えると人払いの呪符だろう。ここにまで貼ってあるということは、最初から計画的犯行か。

「くっ・・・私が付いていながら」

焦燥に駆られた桜咲は改札を飛び越える。ネギの制止の声も届かずそのまま外に行ってしまう。

追っていくと京都駅の大階段の中ほどに女性が立っていた。「おサルが脱げた!?」と言う神楽坂の発言と、足元にサルの着ぐるみがだらりと打ち捨てられているところを見ると奴がサルの中身らしい。というかその服装・・・・

「旅館の従業員かよ・・・・」

どうやら近衛の誘拐にはかなり執拗に準備しているようだ。

昼間は生徒全体に嫌がらせを行い俺達に愉快犯と思わせておき注意を分散させて、その隙に旅館に忍び込み目標を拉致。

追撃を振り切る為に、嵐山から京都駅までの区間全てを人払いの呪符で乗っ取る大胆な作戦。

一体どれほどの価値が近衛にはあるというのか?俺の想像の域を超

えている。

「フフ・・よーここまで追ってこれましたな」

京都弁特有のイントネーションで語りかけてくる呪符使い。その手指には既に札が挟まれている。
追っ手を振り切れずここまで追い込まれたのにも係わらず、その顔には不敵な笑みを浮かべている。

「そやけど、それもここまでですえ。三枚目のお札ちゃん、いかせてもらいますえ」

「おのれ、させるかっ！」

掲げた札には尋常でない気が込められていた。あれはマズイ。
桜咲もそれが分かったらしく呪符の発動を止めようと一気に距離を詰める。

「お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす」

しかし、先に敵から投げられた呪符が発動。電車内でも聞いた言葉と共に目の前を赤と緋色が埋め尽くす。

「食らいなはれ！三枚符術　京都大文字焼き！！」

何の前触れも無く、巨大な『大の字』の炎の壁が出現。一拍遅れて発生した灼熱の熱風が頬を叩く。
桜咲は全身に急制動をかけて何とか回避。神楽坂に引っ張られる形でそのまま後退する。
大火の向こうの術者は何かを言っているが、燃え盛る炎と熱気に阻

まれてよく分からない。
だが越えられない炎の壁を前に、俺達魔法使いチームは既に行動を起こしていた。

「合わせろネギ！！」

その言葉を言う前からネギ先生は詠唱を開始。始動キーと呼ばれる西洋魔術独特の言葉がその口から発せられる。
それに合わせて俺も攻撃術の発動を行う。まずは邪魔なこの炎壁を破壊する。

「吹け、一陣の風」
（乱れ飛べ翠影）

「『風花・風塵乱舞！！』」
「『ウィンドニードル！』」

ネギ先生の魔法の杖から巻き起こる強力な風が、俺の突き出した掌から一直線に走る風刃が、目の前の壁を切り裂き炎を根こそぎ吹き散らす。

「逃がしませんよ！！」
「俺らの友達返してもらうぞ」

炎の壁をなぎ払った俺達は反撃の狼煙を上げた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

「契約執行！１８０秒間！！
ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

ネギの掲げた仮契約のカードが光り輝く。それと同時に明日菜の足元から湧き上がった光が全身を包み込み、魔力による肉体強化が始まる。

「ネギ先生・・・神楽坂さん・・・・」

一般人のはずの明日菜といまいち頼りがいの無かったネギの変わりように、刹那は驚きを隠せない。
呆気に取られている刹那を立たせる雄飛。彼は無言で浴衣の帯紐を掴みそのまま上に引き上げる。

「桜咲さん、姫菱、いくよっ！」

「応！」「え・・・あ、はいっ！」

掛けられる声に刹那はうろたえながら、雄飛は顔に不敵な笑みを浮かべながら答える。

「もー！さっきの火、下手したら火傷しちゃうじゃない。冗談じゃ済まないわよ！
そこの馬鹿猿女ーーッ！このかを返しなさーーい！！」

明日菜の怒声と共に戦端が開かれる。
敵めがけ大階段の中央を一直線に走る明日菜。その右側を階段の手

摺を足場に上空から攻める刹那。左翼を低空姿勢で疾走する雄飛。
魔法による援護射撃を行う為、一人遅れる形で前衛の後を追うネギ。
三方向から一気に呪符使いへ距離を詰める。

「アスナさん！パートナーだけが使える専用アイテムを出します！！
アスナさんのは『ハマノツルギ』！！
武器だと思います。受け取ってください！！」

「武器！？そんなのがあるの？よ、よーし頂戴ネギ！！」

ネギは自分の従者に援護の為、声をかける。それに答えた明日菜に
主人たるネギは従者を強化するための魔法を発動する。

「『能力発動・神楽坂明日菜！！』
『ハマノツルギ』！」

明日菜の両手に濃密な魔力の光が集中し形を成していく。

「キャ・・き、来たよ、何かスゴそう！」

期待十分の明日菜の手にソレは現れる。
身の丈ほどの大きさの刀身は幾重にも蛇腹状に折られ、切っ先は扇
状に開いた・・・・

ハリセンだった

「な、何コレー。ただのハリセンじゃないのー！」

「あ、あれー・・・・オカシイなー・・」

どう考えてもツッコミ用の道具を手にして明日菜はネギに問い質す。
ネギはネギで思い描いていたのとは違うのが出てきたらしく、首を傾げていた。

「神楽坂さん！」「お前ら戦闘に集中しろー！」「ええーい、行っちまえ姐さん！」

掛け合いをしている西洋魔術師ペアに剣士二人とオコジョから激が飛ぶ。

「もーーしょーがないわねっ！！」

口々に言われ半ば自棄になった明日菜は飛び上がり、敵に向かって大上段からハリセンを振り下ろす。同時に左右から刹那の上段からの打ち込み、雄飛の抜刀術による斬撃が呪符使いに放たれる。
しかし、

ハリセンを巨大なサルのぬいぐるみが眉間で、
野太刀を大きなクマの人形がその鋭利な爪で、
打刀を着ぐるみだったはずのサルが両の手甲で、
それぞれ術者に到達する前に全て防いでいた。

「うわった・・！？何これ？動いた！？」

「さっき言った呪符使いの善鬼・護鬼です！！」

いきなり出現した式神二体と脱ぎ捨てられていたサルの着ぐるみが、中に人など入っていないのにも係わらず立ちはだかる。
初撃を防がれた形の三人は距離を取り体勢を立て直す。

「こっちは・・・着ぐるみだけでも動くのか！？」

「間抜けなのは外見だけです。気を付けて姫菱、神楽坂さん」

「ホホホホ。ウチの猿鬼と熊鬼、そしておサルスーツはなかなか強力ですえ。一生そいつらの相手でもしていなはれ」

猿鬼と熊鬼と呼ばれた式神とおサルスーツと言っていた着ぐるみは見た目こそＵＦＯキャッチャーのプライズのような感じを受けるが、２ｍを超える巨体、瞬間的に目の前に現れた速度、神鳴流の一撃を受け止める膂力、高速の抜刀術を見切る戦闘技術。

その全てが三人に警戒を促す。

雄飛達がゲームセンターの景品三体に手をこまねいている隙に呪符使いは木乃香を肩口に担いで逃げようとする。

「このか・・！このぉーーーっ」

それを見た明日菜が行かせまい、と猿鬼に飛び掛る。

掛け声と共に、明日菜が纏う魔力による肉体強化の光が更に濃くなる。繰り出されたフルスイングは式神の額に命中。

その瞬間、ハリセンで叩かれた部分を中心に猿鬼の頭部が熱で溶けた飴のように歪みそのまま消失。

残った胴体も煙を上げながら消えていく光景に、敵の呪符使いも含め全員が驚く。

「す、すごい神楽坂さん・・」

「俺もボヤボヤしてらんねえな」

式神を一撃の元に寄代に送り返す桁外れの力だった。

行った本人だけが「あ、あれー？」と、不思議そうな顔をしている。
アーティファクト『ＥＮＳＩＳ　ＥＸＯＲＣＩＺＡＮＳ』。その名の通り『魔を祓う太刀』の一撃は式神を有無を言わさず祓い清めた。

「な、何かよくわかんないけど行けそーよ！そのクマ（？）は任せてこのかを！！」

「すみません。お願いします！」

『ギクッ』としているクマを見ながら、明日菜は刹那と入れ替わる。
雄飛の方も援護に行きたい明日菜だったが、着ぐるみとして使っていたおサルスーツなる物は自分や刹那が相手にしていたものとは一味違うらしく、両手の手甲を主体とした格闘攻撃を高速で繰り出していた。
明らかに自分では裁ききれない手数とその速さに、雄飛は渡り合っている。放たれる手甲、蹴り、時折振るわれる尻尾の攻撃。その全てを、避け、弾き、受け流す。そして格闘と刀による攻撃で確実におサルスーツの動きを鈍らせていた。
あの戦いに入れない以上、援護は逆に足を引っ張ると判断した明日菜は木乃香救出を刹那に任せクマの相手に専念する。

「このかお嬢様を返せーーっ！！」

神楽坂のおかげで自由になった刹那は王手を掛けようと敵に一気に迫る。しかし、ビルのショーウィンドウのガラスを割って出てきた人影に阻まれる。
空中で交差する刀と刀。
体勢を崩すも何とか受身を取って追撃に備える刹那、しかし襲撃者は着地失敗。そのままゴロゴロと転がっていく。

（しまった！この剣筋・・・・まさか神鳴流剣士が護衛についていたのか！？）

マズイ！と思いつつ敵を警戒する。敵は膝やお尻の辺りを叩き、埃を落としながら立ち上がる。

「どうも～～、神鳴流です～～～」

「おはつに～～」そう言って京都弁とはまた別の間延びした口調で話す少女だった。

年恰好は自分と同じくらい。しかし本来袴が戦装束の神鳴流にしては、ロリータ・ファッションに身を包む彼女の格好は少々奇抜に映る。

巨大な妖魔を相手に戦うことを念頭に置いている神鳴流には珍しく、得物は大太刀ではなく打刀と短刀の二刀流。

たれ目に眼鏡をしていることもあって、護衛対象者に遅刻を謝っているその姿はどこかふんわりした印象を受ける。

「え・・お・・お前が神鳴流剣士・・？」

「はい～～？月詠いいますー」

自分で聞いておいて何だが、信じられない刹那だった。

「見たとこ、あなたは神鳴流の先輩さんみたいですけど・・・・護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいますわ――――」

しかし、そう自分の意気込みを語る姿に一切の気負いが感じられない。

「こんなのが神鳴流とは・・」

「フ・・甘く見るとケガしますえ。ほなよろしゅう月詠はん」

「時代も変わったな」という呟きを聞き取ったのか呪符使いが釘を刺してくる。

「で、ではいきます。ひとつお手柔らかに――・・」

その言葉の後に高速で距離を詰める月詠。鋭く速い一刀に思わず防御する刹那。緊張感の無い様な声と共に繰り出される連撃を辛くも捌く。

下から掬い上げるような右の一撃を手首を取って防御。続くけざまの左の短刀を相手の手首を引いて体勢を崩させて何とか夕凪で受ける。

（い・・意外にできる!!マ・・・・マズイぞ・・!）

「ホホホ。伝統か知らんが、神鳴流剣士は化け物相手用のバカでかい野太刀を後生大事に使てるさかいな。
小回りの利く二刀の相手をイキナリするのは骨やろ?」

刹那の焦燥を見事に言い当てる呪符使い。
一撃一撃の威力を重視する対妖魔戦とは違い、対人戦では速度と手数が重要になる。
体力と再生能力に恵まれる妖魔と違い、人間は一刀でも体に入ればそれだけで動きが鈍るからだ。
足を傷つければ行動半径は一気に狭まるし、手首を深さ１ｃｍでも切られればそれだけで武器は持てなくなる。
化け物相手では敵を殺すまでが戦いだが、人間相手なら言葉が通じ

る分戦闘不能にするだけで事足りるのだ。
捌ききれない速度の連撃で相手を戦闘不能に追い込み、降伏勧告。
従わなければそのまま殺せばいい。勝利条件が違う分、選ぶ武器も違ってくる。
同門同士での戦いは模擬戦も含めると数え切れないほどあるが、その中でも神鳴流剣士がその理念とは違う得物を使って戦う初の戦闘に刹那は翻弄され続ける。

「ざーんがーんけーん」

間延びした声で放たれる奥義。しかしその間抜けさとは裏腹に攻撃が早く回避に専念する刹那。

「チッ、桜咲！」

野太刀で二刀流の相手は分が悪いと思う雄飛としては、援護に行きたいがおサルスーツの連撃に道を塞がれる。
相手は中に人が入っていない為、斬っても、蹴っても、殴っても、動きは鈍るが一向に怯まない。
この手合いは一撃の威力に秀でる桜咲が相手にするべきだと雄飛は思う。逆に抜刀術なら二刀流の攻撃速度を上回れるので自分が月詠の相手をすればいい。
そうは思うが選手交代をさせてくれるほど敵は優しくなく、時間だけが過ぎていく。明日菜は明日菜で熊鬼を相手にしていたが小型のサルが何匹も出てきて一緒に相手をしている為、他に気を使う余裕は無さそうだった。

「ホホホ。これで足止めＯＫや。しょせん素人中学生に見習い剣士の集まりや」

前衛三人が膠着状態に陥る中、呪符使いは再び木乃香を連れて逃走しようとする。しかし彼女は西洋魔術師の存在を失念していた。

「『ラス・テル　マ・スキル　マギステル　風の精霊十一人！！縛鎖となりて敵を捕まえろ！！』」

従者と剣士二人が時間を稼ぐ中、詠唱が完了する。

「ああっ！しまった！？ガキを忘れてたー」

「もう遅いです！『魔法の射手　戒めの風矢！！』」

ネギの周囲から発生した十一条の風は、瞬く間に敵に殺到。相手を捕縛せんと一気に襲い掛かる。

「あひいっ、お助け――」

しかし相手は捕縛魔法とは知らず、捕獲対象であるはずの木乃香を思わず盾にしてしまう。

「あっ・・曲がれ！！」

敵の予想外の行動に驚くネギ。反射的に逸らした魔法の射手は一矢も木乃香に当たる事なく軌道を変える。

「ん・・・？あら・・・・？」

必中のタイミングで放たれた攻撃がいつまで経っても来ない。呪符使いは恐る恐る目を開けるが自分の身には何も無い。

「こ・・・このかさんをはなしてくださいっ。卑怯ですよっ！」

子供が癇癪を起したように声を上げる様を見て女は理解する。

「は・・はは～ん。なるほど・・・・読めましたえ・・・・。甘ちゃんやな・・・・人質が多少怪我するくらい気にせず打ち抜けばえーのに」

自分が人質を盾にした事実を棚に上げて嘲笑する。

「ホーホホホホ！まったくこの娘は役に立ちますなぁ！この調子でこの後も利用させてもらうわ」

「こ・・このかをどうするつもりなのよ・・・・」

不穏な物言いに疑問を投げる明日菜。熊鬼にその体を掴まれ身動きが取れない状態の為、苦しそうだ。

「せやなー。まずは呪薬と呪符でも使て、口を利けんよにして・・・・上手いことウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな。くっくっくっ・・・・？」

「へぇ・・・・」「な・・・・」「何ですって・・・・？」

自分の勝利を確信した笑みで答える呪符使い。しかしその為、自分の発言が四人のボルテージを急激に上げている事に気付かない。

刹那にいたっては月詠と鍔競り合いをしながらこめかみに青筋が浮かんでいる。

「ウチの勝ちやな。フフフ・・・・このかお嬢様か・・・・なまっ

ちろいおケツしよってからに、かわえーもんやなぁ」

弄ぶ様に木乃香の尻を撫でる呪符使い。しかしその発言が、その行動が、周囲の空気の温度を下げている事に最後まで気付く事はできなかった。

「ほななー、ケツの青いガキども。おシーリペンペーン」

ブチッ

誰かの、いや四人全員の血管が切れる音がその場に響く。

「このかお嬢様に何をするかーっ!!」「このかに何てことすんのよっ!!」「近衛に何してやがるっ!!」

刹那は力押しで月詠を吹き飛ばし、
雄飛は着ぐるみを胴体で一刀両断にし、
明日菜は纏わり付くサルごと熊鬼を送り返し、
それぞれ怒りの儘に突進していく。

「『風花・武装解除!!』」

詠唱を行いながら距離を詰めていたネギの魔法が発動。突風が二人の衣服を花弁に変えながら呪符使いから木乃香を引き剥がす。
武装解除の風で舞い上がった敵を一瞬の停滞なく明日菜のハリセンが襲う。女は頭を打ち据えられた勢いそのままに地面に叩きつけられる。
受身を取りつつ何とか着地した呪符使いは反撃に映ろうと札を取り出す、ことはできなかった。
大地に叩きつけられる衝撃を殺しきった瞬間、落下地点にいた雄飛

に足払いを掛けられ体勢が再び崩れる。
がら空きの顎に流れるような動作で叩きこまれる蹴り上げによって、
呪符使いはまたしても上空に連れて行かれる。
最後に怒りに燃える神鳴流剣士が止めの一撃を叩き込んだ。

神鳴流秘剣『百花繚乱』

刀身から直線状に飛んでいく気の烈風が花弁を伴って吹き荒れ、敵を吹き飛ばす。
奇声を発しながら吹っ飛んだ呪符使いは二回、三回とバウンドしながら壁に激突。一切の反撃を許さない完璧な連携だった。
何とか立ち上がるも、四人と一匹の怒気を孕んだ眼光によって気圧される。

「な・・・なんでガキがこんな強いんや・・・・」

呻く様に言いながら呪符を取り出す。ネギの武装解除の魔法で裸にひん剥かれたというのに、何処に隠し持っていたのか。
呼び出した式神は先ほど操っていた猿鬼と同じ様な格好の猿だった。
しかし一回り小さく、額に『2』のナンバリングがされていた。
虎の子の二体の式神と自立行動タイプの着ぐるみを失い、眼鏡を探して行動不能になっている神鳴流剣士。
これ以上の戦闘は無理と判断したのか、式神の肩に乗って月詠と一緒に京都の夜空に舞い上がる。

「おぼえてなはれ――」

「あっ、まてー！」

お決まりの捨て台詞を残して逃げていく式神。追うか否かの判断を

している内にそのまま小さくなって消えてしまった。
「あいつめー」と悔しがる明日菜に雄飛は「深追いは禁物だ」と諭す。
敵を追い払い木乃香を取り戻した四人にカモミールが疑問を口にする。

「そう言えばあいつ、薬や呪符を使うとか言ってたよな。このか姉さんは大丈夫か!?」

「・・・・・・まさか!?」

既に薬物投与や呪術による洗脳を受けている可能性を示唆されて顔を青くする刹那。急いで駆け寄り体を揺すり起そうとする。
遅れて駆け寄った雄飛は、ネギの魔法で生まれたままの姿になった木乃香に自分の半纏をかける。
続いて状態異常の確認と解除の為、回復術を発動する。

「浄化せよ!アンチドート」

二重の青緑のリングが回転しながら木乃香に吸い込まれる。猛毒・麻痺・弱体・火傷を治療する回復術を発動させて木乃香の身体を精査していく。しばらくして、

「問題無い、魔法で眠っているだけだ」

その言葉に全員が安堵する。そして刹那がそのまま抱き抱えていると木乃香が目を覚ました。

「ん・・・・あれ・・・・・せっちゃん・・・・・?」

完全に魔法が解けていないのか、未だ蕩けた様な表情の木乃香。声にも力は無く、言葉は途切れ途切れだった。

「あーせっちゃん・・・・ウチ、夢みたえ・・・・。変なおサルにさらわれて・・・・でも、せっちゃんや姫菱、ネギ君やアスナが助けてくれるんや・・・・」

「・・よかった。もう大丈夫です。このかお嬢様・・・・」

刹那が安堵の笑みをこぼす。その言葉と表情に木乃香の意識は急速に覚醒し、霞がかっていた瞳に意識が戻る。

「よかった――・・せっちゃん・・・・ウチのコト嫌ってる訳やなかったんやなー・・・・」

「姫菱の言ってた通りやわ」と満面の笑みを浮かべる。

「えっ・・・・そ、そりゃ私かてこのちゃんと話し・・・・」

その顔に顔を赤らめる刹那。思わず本音を口にしてしまうも、ハッ、と失態に気付く。

「し、失礼しました!」

後ずさりしながら片膝を着き頭を下げる。いきなり態度が変わった刹那にみんなついていけなかった。

「わ・・私はこのちゃ・・・・お嬢様をお守りできればそれだけで幸せ・・・・いや、それもひっそりと陰からお支えできればそれで・・あの・・・・」

一息にまくし立てる刹那。しかし途中から何を言っているのか自分でも分からなくなったのか、

「御免！！」

その言葉を残し木乃香の制止も聞かず、走り去っていってしまう。

「どんだけ不器用なんだよ・・・・」

「うーーん。イキナリ仲良くしろって言っても難しいかな・・・・」

事の成り行きを見ていた雄飛と明日菜の口から独白が漏れる。

「桜咲さーん！明日の班行動、一緒に奈良回ろうね――。約束だよ――っ」

明日菜の大声の呼びかけに一旦止まって頷きを変えすも、刹那は再び走り去ってしまう。

「大丈夫だってこのか。安心しなよ」「でも・・」

そう言って肩を叩く明日菜にまだ不安げな顔をする木乃香。しかし自分の状態を見て今日の風呂場でもあった疑問を口にする。

「って、あれー？ウチ何でこんなカッコしとるんやろ？」

「いえっ、それはあのっ・・・・」

木乃香から当然の疑問とそれに答えられずあたふたするネギ。

「色々あったわねー今日・・まだ初日の夜だなんて・・・・どうなっちゃうのよこの修学旅行は――」

「単純計算であとコレが四日続くとか・・・・ぶっちゃけありえねぇ・・・・・」

初日ですさまじいほどの巻き込まれ具合に苦笑いしか出てこない明日菜と、あと四日間の苦労を想像して気が重くなる雄飛。

「はううっ。そうだ！僕、色々壊した物とかの後始末しとかないと――」

最後にネギの悲鳴にも似た叫びを聞きながら、四人は京都駅を後にした。

――――――――――――――――――――――――――――――

最後に旅館に帰ってから、二人に顔を合わせ辛いのか

「・・済まない・・・・。見回りでこの部屋を使わせてくれ・・・・」

「台無しだよ」

結局、刹那は雄飛の部屋で交代で仮眠を取りながら一夜を明かした。

## 第七話（後書き）

小説情報に「木乃香もスキー」を追加しました・・・・。
近い内に恐らく、多分、高確率で木乃香と刹那のハーレムになりそうな予感。
今更路線変更してしまい申し訳ありません。

## 第八話（前書き）

だいぶお待たせしました。
友は言った
「戦闘パートと日常パートの完成度に差がありすぎる」
・・・その通りになってしまいました・・・。
できればあとがきのアンケートにもご協力お願いします。

**第八話**

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　side◇

4月23日　AM　06：50　修学旅行二日目

俺は欠伸をしながら自室へ向かう。
京都駅から帰ってきた後、刹那と交代で見回りをしながら二日目の朝を迎えた。
眠い。今思うと二人で同じ布団を使ったのがまずかった。たった三時間だけとはいえさっきまで女の子が寝ていた布団にそのまま潜り込んだので、シーツや枕カバーに人肌のぬくもりや女の子独特の匂りが残っていて、妙に意識してしまい全く寝付けなかった。
皆が起き出す様な時間になってようやく眠気が襲ってきたので風呂に入ったが、上がってしまうと再び瞼が重くなってくる。
自室に戻ると桜咲はいなかった。あいつも自分の部屋に戻ったらしい。俺としてもこんな時間に部屋に居る所を目撃されたら言い逃れできない。
制服に着替えて5班女子の部屋へ向かう。先に行くにしても一言残してから行かないとな。

「あ、姫菱さん。もう班の皆は大体朝ごはん食べに行ってますよ？」
後ろから声を掛けられる。振り向くと廊下の三叉路から俺に声を掛けた女子がいた。

（・・・・誰・・・・・？）

口振りから考えると彼女も同じ班らしいが、全く見たことが無い。クラスに来て一週間の雄飛としては全員の顔と名前が一致しているとは言いがたいが、それでもクラス全員の顔は覚えている。いや一人顔を覚えているとは言えない人物がいた。鼻から上が髪で隠れていて顔全体が見えず、素顔は拝めないままだった。その上男が苦手なのか俺といつも距離を取っていて、友人の二人から『気にしないでね』と言われていた・・・・。

「お前、宮崎、か・・・・？」

「？はい。そうですけど・・・・？」

この声とおっとりとした雰囲気、距離の取り方、間違いなく宮崎のどか。どういうわけか今は髪をポニーテールにしていて顔全体が見えている。どんな心境の変化だ？

向こうは俺に凝視されているのが恥ずかしくなったのか「さ、先に行ってます」と小走りで階段方向に行ってしまった。

後に残されたのは呆然と立ち竦む俺だけだった・・・・

「で、突然可愛くなったのどかを見た感想は？」

とはいかなかった。またしても背後から声を掛けられる。

「あいつ、何でいつも髪を上げてないんだ？」

振り向く前から声の主は分かっている。引っ込み思案な宮崎といつも一緒に行動している人物は限られてくる。後ろに向き直るとそこには悪戯が成功したような顔をこっちに向けている早乙女と、憮然

とした表情で俺を見る綾瀬夕映がいた。

「可愛くてびっくりした？」

最初の質問で自分の欲しかった答えが返ってこなかったのか、尚も聞いてくる早乙女。普通の男だったら恥ずかしくて答えられない所だが、

「ああ、びっくりした。何だあの可愛さ？女子は髪形変えただけであそこまで変わるものか？」

「でしょでしょ」と俺の言葉に満足そうに頷く早乙女。綾瀬はその答えに軽く俺を睨みながら

「のどかに手を出したら駄目デスよ」

そう言って俺に釘を刺してくる。警戒されたものだがそれは杞憂だ。

「あいつが誰を見ているかはさすがに俺でも分かる・・・・」

教室以外での接点は全くと言っていいほど無いが、宮崎の視線が誰を追っているかを知るのに一週間という時間は十分だった。男の俺から見ても全く隠せていない。というか隠していないのだろうか？

「というか、あっさり褒めるのデスね」

「そうそう。もっと慌てる様が見たかったなー」

「ときめいたのは確かだからな。ちゃんと褒める。本人を前にして

言わないだけで」

「ときめきって・・・・」と早乙女が苦笑いしながら言ってくるので、「俺は女の子が髪型を変えただけでときめく様な男だ」と返しておいた。

中身の無い会話に飽きたのか、綾瀬が溜息一つ吐き、

「大広間に行きましょう」

そう言ってさっさと先に行ってしまう。それに続く俺と早乙女も朝食の為階段を下りていった。

---

一階の大広間にて食事をする麻帆良中学生一同。既に席に座って食べている者もいれば、親しい友人を探して膳を持って広間を彷徨う生徒も多い。そんな中、俺はネギ先生と一緒のテーブルで食事を取っていた。

この大広間には３－Ａだけではなく他のクラスの生徒もいる。俺のいるクラスは概ね俺の存在に慣れてくれたが、他のクラスでは女子中学校に男子が入っている事に戸惑い、不満に思っている者が多い。俺の転入が生徒の意見を聞かずに学園長のトップダウンで強行したので尚更だ。

下手に席を移動してそんな奴らの神経を逆撫でする気は無い。ここはイロモノにカテゴライズされる子供先生と一箇所に集まっておとなしくしていよう。平和が一番だ。

そう思いながら膳を平らげる。漬物まで綺麗に食べきったそれを、未だご飯をよそっている旅館の人に持って行く。

「すいません。お代わり下さい」

貰える事を前提で聞く。こんな量では全然足りない。

「あらあら。男の子はよう食べるわぁ」

「育ち盛りなもんで」

中年の女中さんはころころ笑いながら膳そのものを交換してくれる。
わざわざ大盛にしてくれた膳を貰って再び席に戻る。
しかしその途中で

「せっちゃん、何で逃げるん――」

「刹那さ――ん」

叫び声を聞いて振り返ると桜咲が近衛とネギ先生に追いかけられていた。しかし逃げる方も追いかける方も膳を持ったままなので小走り程度の速度しか出ていない。テーブルの間を逃げる桜咲と追う近衛達は周囲の笑いをＢＧＭに駆け回っている。
俺はお代わりをテーブルに置いて三人にチョップを入れていく。

「いたっ」「てっ」「あうっ」

三者三様の声を出して走るのを止めた。以外に痛かったのか涙目の近衛の頭を撫でながら少し強めに言う。

「食事中に走んなよお前ら。埃が立つだろ」

そう言って近衛をそのまま俺とネギ先生の間に座らせる。その反対側に桜咲を。また桜咲が逃げ出さない様に間に俺が座る格好だ。
大岡裁きには程遠いが食事を再開。二人もそれに習って食べ始めた。
しかしそれでも桜咲がそわそわ動いている。近衛と一緒に食べるのも居心地が悪いのだろうか。
お前本当は近衛の事キライなんじゃないのか？
近衛は近衛で桜咲を見て嬉しそうに満面の笑みを浮かべているし・・・。
お前はお前で桜咲の事好きすぎるだろう！
何か桜咲が近衛を避ける理由ってお前に原因があるんじゃなかろうか・・・・。
俺は微妙な、本当に微妙な空気の中食事を続けた。膳ごとお代わりしたはずの朝食の味はもはや感じられなかった。

---

食事も終わってロビーに移動する３－Ａ一同。今日は一日自由行動の為、皆どこか浮き足立っている。
その証拠に今日の自由行動をネギ先生と一緒に回る為に自分の班に誘っている生徒の多い事、多い事。
しかし俺は昨日の『ある人物』の発言が気になっていたのでここで問質しておこうと思う。

「これはでーとのお誘いでござるか？」

「お前が二班を抜けて一緒に奈良公園を回ってくれるんなら吝かでもないが・・・・」

その場合は迎撃要因として使わせてもらう。お前の実力は知らないがせいぜい役に立ってもらうとしよう。
ここはロビーより少し離れて人通りの無い通路。俺は呼び出した長瀬　楓と向き合い話を続ける。

「あの時、桜咲を頼むと言ったな？お前はこんな事態になる事を予想していたのか？」

昨日の段階で誘拐が起きるなんて俺たちは誰一人考えもしなかった。せいぜいが近衛一人に対する度を越えた嫌がらせをするだろうと思っていた程度だ。
しかし誘拐も予想していたとなれば話は別だ。もしかするとこいつは俺達よりも情報を持ってる可能性がある。

「買いかぶりでござるよ。拙者とてこのか殿の誘拐が起きるとは考えていなかったでござるよ」

「つまり昨日起こった事は知ってるワケだ」

語るに落ちた。俺の言った『こんな事態』の内容を知っている。やはりアタリだった。
長瀬も自分の失言を突かれて少し表情を強張らせる。

「夕方から変な気配がしていたから、姫菱殿に釘を刺しておこうかと思っただけでござる。持ってる情報はそちらの方が多いはずでござるよ？」

そうは言うものの自分の手札を切ってこない長瀬。これは情報ソースを聞いても明かさないだろう。
しかし、変な気配か・・・・。時間的にいって風呂場での一悶着が

あった時から気配に気付いていたとは。

「昨日の時点で話を聞いておくべきだったな・・・・・」

そうであれば近衛の誘拐騒ぎはおろか水攻めも、京都駅まで出張る事も無かっただろう。
次からは夜の見回りの前にお前と話をしてから行動しよう。

「で、お前は桜咲が近衛を避けている理由を知っているのか?」

『刹那を頼む』。長瀬はそう言ったのだ。『近衛』ではなく『桜咲』と。つまり桜咲と近衛に関わる事で何かを知っているはず。
そこを指摘する。

「拙者が知っているのは刹那がこのか殿に対して何か負い目を持っている。という事だけでござる」

詳しいことは真名に聞くと良い。そう言って締めくくる。

「真名って、龍宮か・・・・・つか、負い目ねぇ・・・・」

龍宮真名。
褐色の肌とストレートロングの黒髪、そしてこの長瀬以上の長身が特徴のクラスメイト。大人びた雰囲気といいスタイルといい中学生離れしている印象があった。
しかし時折こちらを見るその眼差しはどこか鷹や隼といった猛禽類を思わせるものがあり、気にはなっていた。
桜咲の事を知っているなら、あいつも魔法関係者という事か・・・・。
『この世界』の事は良く知らないが、何か魔法に属する人間が多く

ないか？

「で最後に、何で俺にこんな事を話した？」

昨日の嫌がらせの時に何もしなかった以上今回の件には関わる気は無い、と考えるべきだろう。少なくともこちらから頭を下げない限り力を貸す気はないだろう。
それにも関わらず俺にあんな言葉を掛けた。そこだけが腑に落ちない。一体何のつもりだ？

「このか殿を護衛する依頼を受けているなら一緒に行動したほうがいいでござろう？」

朗らかな笑顔を浮かべて言ってくる長瀬に対して俺は苦い顔を浮かべる。
情報を持っている事をほのめかしておきながら、自分の手札は明かさない。
自分の持っている情報と持っていない情報の境目を見せず、龍宮の名前を出す事でそれ以上の追求を避ける。
一番聞きたかったことまではぐらかされた形になった。
舌戦の駆け引きはあちらに分があったか。
この糸目、最後の最後まで自分の本心を話さない。

「というか意外でござった。狙われているなら手を貸せとか言われると思っていたでござる」

俺の疑惑の視線でさえ話と共に逸らされる。

「手を貸す、貸さないは個人の自由だろう？」

クラスメイトだからって誰彼構わず助ける必要は無い。
正義の味方じゃあるまいし。
そう言って長瀬に背を向ける。桜咲の『負い目』については龍宮に聞くにしても、その他はあまり有益な情報は入らなかった。これは本格的に情報収集に乗り出した方が良さそうだ。
携帯を取り出しアドレス帳を開く。目的の番号を呼び出し、掛ける。
4コール目で相手が出た。

「もしもし学園長ですか？」

――――――――――――――――――――

「わー。ホントに鹿が道にいる――ッ」

『奈良県立都市公園　奈良公園』。我ら5班の修学旅行二日目の自由行動は奈良の大仏や鹿の徘遊で国際的にも有名な都市公園に来ていた。
ネギ先生も沢山の鹿が公園の石畳を闊歩している光景に大興奮の様子だ。今も、さっき渡してやった鹿せんべいを群れの一頭に与えている。
鹿に餌を与えているのを見せようと神楽坂を呼んでいたら案の定手を噛まれている。よそ見してるからだよ先生。
そうこうしている内に俺、ネギ先生、桜咲、神楽坂と昨日の面子になっていた。背後を見ると宮崎、綾瀬、早乙女の三人が集まって話し込んでいる。近衛は近くの出店で団子を買っていた。
今日は京都から離れた事もあってか襲撃の気配も今の所無い。昨日護衛の神鳴流剣士共々退けたのですぐに体勢は整わない。
観光客がいるこの状況で奴らも直接は近衛を狙いはしないだろう。

魔法がばれて困るのは相手も同じはずだ。

「ネギ先生。今日は俺らの班と一緒に行動するのか？」

当然の如く付いて来ているが今日は班別行動。教員は旅館待機か自由行動だ。それなのに俺らと一緒にいるという事は・・・・。

「はい。宮崎さんに誘われまして」

ネギ先生はそう言って苦笑いしている。しかし本音は違うだろうな。どうせ近衛を守るには一緒にいたほうがいいし俺や神楽坂、桜咲がいる5班にいたほうが色々と都合が良いのだろう。

・・・わざわざ指摘するのも可哀想だな。

そんな事を考えながら歩いていると神楽坂が詰め寄ってくる。

「そういえば姫菱、何で私を見回りのローテーションから外したのよ！桜咲さんも酷くない！？」

そう言って俺達を交互に睨む神楽坂。桜咲は言い訳を思い浮かばないのか気まずそうに目を逸らす。

昨夜の戦いの後、ぐっすり眠ってしまっていたらしい。二人で回っていたのは確かだが、朝になってそのことを糾弾されても・・・・。

しかし俺はその追及に関する回答は既に用意している。

「あの後、桜咲と話してな、昼夜を問わず護衛できるお前をせめて夜の見回りからは外そうって話になったんだ。

男の俺じゃどうしても目の届かない部分がある。恥ずかしがって近衛に近づけない桜咲も、な。いつでも近くにいる事ができるお前を深夜まで引っ張りだすのは酷だと思ってな」

事後承諾になったのは謝るが。そう付け加えて頭を下げる。実は全くの嘘だが。

『恥ずかしがって』の部分で桜咲が何か言いたそうだったが、そこは無視する。

「べつなに私はそんな事・・・・」

先ほどまで詰め寄っていた態度が嘘のみたいに、ばつが悪そうな神楽坂。自分を慮っての行動に困惑気味だ。

畳み掛けるなら今だな。

「俺らにできない部分を補って貰ってるんだ。夜くらい休んで貰わないと俺や桜咲の立つ瀬が無い」

「安心しろ。何かあったら叩き起す。大事な戦力だからな」そう付け加えて神楽坂の肩を叩く。

しぶしぶ引き下がる神楽坂。ここまで言われれば自分の意見がわがままに聞こえてしまうのだろう。実際のところ敵の気配を察知できない素人をローテーションに入れてもメリットが無いだけなのだが。

しかし神楽坂を言いくるめた俺に背後の桜咲からキツイ一言。

「随分と口が回るな」

「ここは俺を褒める所だろう・・・・」

少なくともフォローしてくれなかったお前に言われたくない。

「今のとことおサルのお姉さんは来ませんね――」

ネギ先生は昨日襲撃された事を思い出しているのか、周りを見なが

ら言ってくる。

「おそらく今日は大丈夫だと思いますが・・念のため各班に式神を放っておきました。何かあればわかります」

桜咲も昨日の今日でそれなりの対抗策を打っているのか、そんな事を言ってくる。しかしそれでも本人は安心していないのかそれとなく周囲を見回している。

「このかお嬢様のことも私が影からしっかりお守りしますので・・・・三人とも修学旅行を楽しんでください」

「何で影からなの?隣にいておしゃべりでもしながら守ればいーのに」

「いっ、いえ私などがお嬢様と気易くおしゃべりなどする訳には・・・」

「またもー、何照れてんのよ桜咲さん」

「なっ、別に私は照れてなど!」

そういって顔を赤くする桜咲。しかしそれはある意味図星だからだろう。

というか、またこの話かよ・・・・。

どうにかして近衛と桜咲の仲を戻したい神楽坂とそれに反発する桜咲。そして桜咲本人も本心は仲良くしたいのか煮え切らない態度が更に神楽坂の行動を助長する。

今日の朝から何回も繰り返されている光景。もういい加減ほっといてやれよ神楽坂・・・・。

溜息を付いて口を挟もうとしたその時だった。

「アスナアスナー！一緒に大仏見よーよ！」

「せっちゃん。お団子買ってきたえ、一緒に食べへんー？」

その言葉と共に走ってきた綾瀬と早乙女が神楽坂に飛び蹴りとタックルを入れてくる。桜咲の方にも近衛が出店で売っていた団子を持って突撃していた。

桜咲は近衛に追いかけられるままその場から逃げ出し、神楽坂は二人に押し切られるまま何処かに行ってしまう。

しかし神楽坂を連行するその瞬間、綾瀬と早乙女と目が合った。

『分かってるわね？』

『ああ。分かっているとも』

視線に込められる意思を正確に受け取った俺は目線で頷きを返しておく。このタイミングで神楽坂達を引き離す理由など一つしかない。後ろから微かに視線を感じる。恐らく宮崎のものだろう。ここで同行なんてしようものなら馬でなくあの二人に蹴られる。

俺はあくまで自然を装って桜咲に団子を勧める近衛を引き止める為、その後を追っていった。

――――――――――――――――――――――――――――――

「逃げられたか？」

ネギ先生と宮崎をあの場に置いて自分は近衛を追う事数分、やっと

追いついた。
あっという間にいなくなった桜咲を見失いしょんぼりしている近衛に近づく。見た目にも落ち込んでいる近衛に声を掛けても力なく頷くだけだった。
そのまま立っているのもなんなので二人で近くの休憩所に入った。
隣の自動販売機でお茶を買い一本を近衛に渡す。代わりというように、手に持っていたトレイの中の団子を貰い隣に座る。

「もう少し待ってやれと言ったろ」

長椅子に座りながら桜咲に食べさせるはずだった団子を食べ、昨日言った言葉を思い出させる。

「でも・・・・」

「あっちにしてみれば今まで避けてた負い目がある分、いきなり仲良くはできねぇって」

むしろ麻帆良で再開した当初の関係を考えるとかなり進歩しているはずだ。既に一本食べ終わっていた俺は話をしながら二本目の団子を食べる。

「でもウチそんなん気にせんのに・・・・」

でもを繰り返す近衛。しかしその『でも』は自分の気持ちだ。食べ終わった竹串を左手に持ちつつ俺の右手は三本目に伸びる。

「『そんな事』を気にしている桜咲の気持ちも考えろ。ってこと」

近衛の持っていた団子を全て食べた俺は、竹串とトレイを近くのゴ

ミ箱に捨て再び近衛の隣に座る。
そのまま上体を倒し長椅子に横になる。近衛が隣に座っているので長さが足りないので椅子の端で膝を折って足をつける格好だ。
「ちと休憩」そう言って欠伸をするが近衛との会話は続ける。

「自分の意見を相手に言うのは大事だけど、相手の意見とか気持ちも察してやるのは同じ位大事じゃね？」

近衛を斜め下から見上げながら諭すように言う。あの手の奴には『押してだめなら引いてみろ』の戦術が有効かもしれない。

「・・せやな・・・・」

俺の言葉をしばらく吟味するように頷いた後そう口にした。
そしておもむろに俺の頭を持つ。そのまま少し浮かせてできた隙間に自分の体をずらして太股を入れる。
俗に言う『膝枕』をされる形になった。

「・・・・何故、俺は膝枕されているんだ？」

ここは屋根と長椅子だけの休憩所だから壁が無く、そのせいで外から丸見えだ。脇の自動販売機を利用する人にも見られている。結構恥ずかしい。

「ええやないの。減るもんやないし」

そう言う近衛の顔が少し赤くなっている。お前も恥ずかしいんじゃないか？

「何だ、知らないのか？男は一生の内に膝枕される回数が決まって

るんだ」

と言うか『減るもんじゃないし』はどちらかと言うと男が言うセリフじゃなかろうか？

「そーなんか？じゃやめたほーがええか？」

「いや、栄えある第一回をお前と迎えられて大変光栄です」

羞恥心よりもオスとしての幸福感が勝った瞬間だった。
男って悲しいね・・・・。

「近衛、最初の質問に答えて貰ってねーぞ」

何で膝枕されているんだ？幸せだけど。

「ん、ああ。姫菱が言うてた通り、せっちゃんもウチのこと嫌ってるわけや無かったんや。やからコレはそのお礼や」

「たまたま言い当てただけだろうに・・・それにまだ仲直りできたわけじゃないだろう」

今日の天気を言い当てて褒められる様なものだ。たかが嫌っているか、嫌っていないかの二択だったろうに。

「仲直りゆーか・・・ウチは仲よう話したいだけなんやけど・・・」

そこから言葉が続かない。桜咲の気持ちを考えているのだろうか？

「というか姫菱は膝枕初なんやなぁ。まぁウチもそうなんやけど」

と思ったら全く違う言葉が出てきた。しかも何か俺に飛び火してる。

「何でそんな意外そうに言う？」

努めて冷静に聞く。からかわれているときは弱みを見せてはならない。どうにかして話題を変えるタイミングを見計らう。

「だって姫菱カッコエエやんか。一回や二回あってもおかしないで？」

１５年間生きていて初めての評価だった。まさか二度目の人生で言われるとは。しかし悪い気はしない。

「彼女・・・はいた時期もあったけど、膝枕するような間柄にはならなかったな・・・」

「何や、やっぱり付きおうとった経験あるんや」

「しかしあれを彼女と呼んでいいのかね・・・？」

「何や？そんな微妙な関係やったん？」

そう聞かれて自分の口が軽くなっていた事に今さらながらに気づく。しまった、と思うも後の祭りだった。

聞き手の近衛の顔に『興味津々です』と顔に書いてある。

これは話さないと放してくれそうに無い。

「簡単に言うと・・告白して、ＯＫもらって、デートに行って、そ

の帰りに別れ話を切り出された」

二人の間に沈黙が降りる。俺のあんまりな過去に近衛は掛ける言葉が思いつかないのか、目を合わせようとすらしない。

「ちなみにその期間はたったの四日間だ」

これを付き合ってたとはさすがに言えない。彼女であるはずが無い。

「俺は別にモテるような男じゃねぇよ・・・・女の子を追っかける側の人間だ」

そう言って区切りを付けたら、大きな欠伸が出てきた。自分のイタい話をしたら眠くなってきた。

「大きな欠伸。何か眠そうやなあ」

何故か嬉しそうに言う近衛。頭を撫でるな。男は頭を撫でられるのが嫌いなんだ。

「眠そう、じゃなくて実際に眠いんだよ」

「あの後眠れなかったん？」

申し訳なさそうに言う近衛。実際は見回りと女子使用済みの布団のせいで眠れなかっただけだが、正直に言ったら更に恐縮するか軽蔑の眼差しで見てくるだろう。

「ちょっと枕投げやっててな」

「・・・・姫菱の部屋個室やったやろ・・・・ネギ君とやっとたん？」

「おいおい・・・・十歳をそんな時間まで起してちゃまずいだろ・・・・新田先生とだ」

八畳程の個室、至近距離で枕を投げ会う少年と、生活指導員・・・・

ぷっ、吹き出す近衛。肩を震わせながらそれ以上笑うのを堪えている。でも俺の額をバシバシ叩くのはやめてほしい。

「・・・・やっと笑う様になったな」

「え、ウチそんな塞ぎ込んどった？」

「しょんぼりしてたのは事実だろう？」

桜咲も罪作りな奴だ。こんなに良い奴を困らせるとは。

体を起して一息に席を立つ。そのまま手を繋いで近衛と一緒に休憩所を出る。もうこのまま護衛の名のデートにしてしまおう。それくらいは許されても良いだろう。

少し強引手を繋いだが近衛はそのまま握り返してくれた。

まずは食事にしよう。

「何か腹減ったな。甘い物食いに行くか」

「今、お団子食べたばっかりやないのー」

そんな事を言われながら雄飛は甘味処を目指していった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

「もー、何でこのかから逃げるのよ」

奈良公園内を走り回ること数分。後先考えずに逃げ回った所為で姫菱やネギ先生達からは離れてしまったが、同様に綾瀬さんや早乙女さんに追い立てられた神楽坂さんに合流した。しかし大仏を見に行こうといっていた本人達がいないのはどういう事だろう？

「し、式神に任せてあるのでお嬢様の安全は大丈夫です。それに近くに姫菱が居るようですし」

「そーじゃなくて、何でしゃべってあげないの？」

公園の道を神楽坂さんと歩きながら話す。やはり内容は先ほどの話題だ。神楽坂さんは今日の朝からその事ばかり聞いてくる。

「それは・・その・・・・・私が親しくして魔法の事をバラしてしまう訳にはいかないし・・・・・やはり身分が・・」

「何をぶつくさ言ってんのよ」

その一言で切って捨てられる。しかしこちらとしては自分がお嬢様とお話できる立場では無い事は言えない。

自分が『半端者』である事など自分から言い出せる訳が無い。

正直に話して、『その事』が理由で嫌われる位なら最初から距離を取っていた方か良い。仲良くできないのはまだ我慢できるが、嫌われるのだけはイヤだった。
きっと本当の事を知ったら姫菱や神楽坂さんも離れていくだろう。
少なくとも今までの様に接してはくれないだろう。
姫菱は私が『負い目』を持っている事を何となく気付いているのか、こちらの内面には踏み込んで来る事は無い。
その為なのかは分からないが、私とお嬢様の間に入って緩衝材の様な役割を担ってもらっている。
有難いと思う反面、申し訳無く思う。お嬢様の護衛が仕事でも、本来なら私の事まで気に掛ける必要は無いだろうに・・・・。
気に掛けてもらっている、そう考えると顔に熱が上がってくる。学園長からの依頼の延長とはいえ姫菱は自分の事を考えてくれている。
自惚れかもしれないが、やはり嬉しく感じる。
一瞬気持ちが浮き上がるが、馬鹿馬鹿しいと思い直す。
自分は人にもなれない『半端者』。そしてその事を口にする勇気も無い臆病者だ。気に掛けてもらえる様な存在ではないのに・・・・。
茂みが揺れる音に思考を停止。神楽坂さんと一緒に振り返るとそこには同じ班の宮崎さんが立っていた。
今までどこにいたのだろうか？という疑問もあったが、その顔を見た瞬間そんなものはどうでもよくなった。
木に寄りかかるように立っている彼女は息を切らし、その目尻には・・・涙が浮かんでいた。

---

狼狽する私を尻目に神楽坂さんは何も聞かずに宮崎さんを連れて店をめざす。

私達は話を聞くためにもすぐ近くにあった甘味処「吉所庵」に行く。
そこで、

「姫菱、と・・・・お嬢様・・・・・」

「せっちゃん・・・・・」「よう」

外の椅子で餡蜜を食べていた二人に遭遇してしまった。
一瞬気まずい空気が流れる。反射的に私に近づこうとするお嬢様を姫菱が止めてくれた。
しかし距離が近くないだろうか？止める為とはいえ手を繋いでいるし・・・・。

「店員のおねえさーん。ぜんざい四つ追加ー」

目の赤い宮崎さんを見た姫菱がやはり何も言わず私達の分の甘味を注文する。
姫菱の声に外に出てきた若い店員さんが私達を見て笑う。

「あらあらお友達？みんな女の子なんやね？でもなんで四つなん？」

確かに。後から現れたのは私、神楽坂さん、宮崎さんの三人だ。だが頼んだぜんざいの数は四つ。
しかし、そんな疑問に注文者は当然のように答える。

「プラス1は俺の」

「君、食いしん坊万歳なキャラなんやねぇ・・・・」

その言葉通り既にその手にある器は空になっていた。このかお嬢様

も心当たりがあるのか苦笑いしている。
コロコロと笑いながら店員さんは厨房に戻っていった。
端からお嬢様、姫菱、私、神楽坂さん、少し離れて宮崎さんと並ぶ。
やはり姫菱は私とこのかお嬢様の間に入ってくれる。ありがたいと思う反面、もしかすると学園長の『予感』も当たっている様に思える。彼が気に掛けているのは私なのか？それともお嬢様なのか？

（姫菱、何でお嬢様と一緒いる？）

（何処かの誰かが敵前逃亡したから近くで護衛してんだよ）

注文を待っている間に小声で姫菱に質問をする。しかしそんな事を言われてしまっては何も返せない。
出てきたぜんざいを食べる四人とそのまま餡蜜を食べるこのかお嬢様。しばし無言の時間が流れる。

「姫菱ー。ぜんざいもおいしそうやな。一口もらわれへんやろか？」

食べかけだった分、餡蜜を先に食べてしまったお嬢様が姫菱にぜんざいを貰おうとする。

「桜咲から貰え」

しかし、姫菱は自分の分を渡したくないのか、さらっととんでもない事を口にする。
そしてお嬢様は言質を取ったかの様に姫菱の体越しに私に声を掛ける。

「せっちゃん、ぜんざい一口ちょうだいな～」

「ど、どうぞ・・・・」

先程の様に突撃してくるのではなく落ち着いた雰囲気でねだってくるので、思わずスプーンで掬ったぜんざいを差し出してしまう。そこにパクつくこのかお嬢様。しかし自分が何をしているのか気付づく。

（これ、『あ～ん』なんじゃ・・・・）

相当恥ずかしい事をしている自覚が今更ながらに湧いてくるが、時既に遅し。

両脇から視線を感じて周りを見ると姫菱と神楽坂さんがニヤニヤと笑いながらこっちを見ていた。

一口貰って満足したのか姫菱の隣に戻っていくお嬢様。自分の顔が赤くなっているのを隠すようにぜんざいを口に運ぶ。しかしそこでまた、

（こ、これって、間接キス・・・・）

その事実に、更にぜんざいを食べるスピードが上がったのは言うまでもない。

「で、宮崎は何で、泣いてたんだ？」

「や、やっぱり分かりますか・・・・？」

甘いものを食べて宮崎さんの気分が落ち着いたところで疑問を切り出す。姫菱もさすがに心配らしい。

「神楽坂と桜咲に何かされたか？今なら腕の良い弁護士を紹介して

やれるぞ」

と、思ったら心配の方向性が少し違った。

「アンタはあたし達を何だと思ってんのよ・・・・」

呻く様に言いながら姫菱を睨む神楽坂さん。どうやら彼はどんな時も冗談を口にする性格らしかった。

――――――――――――――――――――――――

「え――――っ。

マジでっ!?ネッ、ネギに告ったの――――――ッ!?」

神楽坂さんが思わず大声を出してしまう。人目を憚らないその行動に姫菱が睨んでいる。店員のお姉さんも暖簾の裏からこっそり覗いている。このかお嬢様も興味津々の顔で宮崎さんの顔を見ていた。努めて無表情を貫いているが、正直私も興味ある。居心地が悪そうにしているのは姫菱くらいだ。

結局皆、恋バナ大好きな女の子だった。

「は、はい――。いえ、しようとしたんですけど私、トロいので失敗してしまって・・・・」

話している内に自己嫌悪に陥ったのか再び涙目になってくる宮崎さん。そんな彼女にそっとハンカチを差し出している姫菱。しかしこのテンションに付いてこれないのか苦虫を噛み潰した表情をしている。

「ほ、本気だったんだー」とこぼす神楽坂さんは本気で驚いている。

「あ・・すいません――――姫菱さんも、桜咲さんもあまり話したことないのに、こんな話をしちゃって・・・・・」

そんな風に恐縮して言われると「いえ・・・・・」としか返せない。

「でも、ネギ先生はどう見ても子供では・・・・どうして・・・・・？」

そこが分からない。どうして１０歳の子供を好きになったのだろう・・・・？

宮崎さんは「それは――――・・」という前置きをしながら、少し考え、心の内を口にしていく。

「ネ、ネギ先生は――――・・普段はみんなが言うように子供っぽくてカワイイんですけど・・時々私達より年上なんじゃないかなー、って思うくらい頼りがいのある大人びた顔をするんです――――」

自分の思い人の話をする宮崎さんはとても嬉しそうで――――本当に、『恋する乙女』の顔だった。

神楽坂さんも思い当たる節があるのか何とも微妙な表情で顔を赤くしている。

「確かに・・まあ、最初は足手まといと思ったけど・・」

小声で付け足して私も同意する。お嬢様もしきりに頷いて同意を示す中、姫菱だけが話について行けていない。それは彼が３－Ａに来てまだ日が浅いからであるのと、何より彼が『男の子』だからだろう。

「それは多分ネギ先生が私達にはない目標を持ってて・・、それを目指していつも前を見てるからだと思います」

空を見ながら宮崎さんは独白を続ける。でもその顔にはどこか諦めが見え隠れしていた。

「本当は遠くから眺めてるだけで満足なんです。それだけで私、勇気をもらえるから・・・でも今日は自分の自分の気持ちを伝えてみようって思ったんですけど・・・」

「やっぱり、ダメだったみたいです」と紡ぐ声は震えていた。今の顔を見られないようにハンカチで覆っている。

「のどか・・・」

お嬢様もその先の言葉を言えずにいる。

皆、声を掛けようとするものの口を閉ざしてしまう。今の宮崎さんに「大丈夫」「勇気を出して」なんて誰も言えない。慰めの言葉が薄っぺらく聞こえてしまう。

女の子が皆口を噤む中、言葉を発したのは意外にも話題に取り残されていた姫菱だった。

「宮崎。こんな言葉がある。

『こんなことをしたら嫌われるのではないかと、何もしないやつが一番嫌われる』

って言葉だ。原文とは少し違うが・・・」

「確か中谷彰宏さんの言葉だったかな」と続ける。この場にいる全員の視線を集めている事に気付いていないのか、お茶を一口飲み、

「何もしないまま嫌われて終わるのは、辛いだろう？」

そう言って残っていたぜんざいを一気に欠き込み、まるで何事も無かったように甘味を咀嚼する。

確かにそうだ。傍観して失敗していく経過を見ていくよりは、やるだけやって負ける方がまだ諦めがつくだろう。

告白で関係が決定的に壊れたとしても、何もしないまま嫌われる。

そんな事実しか残らない現実は到底受け入れられない。

宮崎さんは意外そうに驚いた顔で姫菱を見ていたが・・・・不意に笑顔になった。

「えへへ――。姫菱さんありがとうございます。皆さんも相談に乗ってくれてありがとうございました。姫菱さんも桜咲さんも正直、恐い人だと思ってましたけど・・・・そんなことないんですね――？」

「え・・・・」

今まで関わりが殆ど無かったとはいえあんまりな評価に呆気に取られている私を尻目に、姫菱はどこか吹っ切れた表情の宮崎さんに不敵な笑みを浮かべ、

「前祝いはしてやったんだ。せめてその分だけでもがんばってこい」

そう言ってぜんざいの入っていた陶器を指で弾く。その皮肉に素直に返事をする宮崎さんの顔にもう涙は無かった。

「何だかスッキリしました。私行ってきます――――」

その言葉だけ残して走っていく宮崎さん。というか『行ってくる』ってまさか・・・・

心配で後を追おうとする神楽坂さん。思わずその後を追おうとした私の手が不意に掴まれる。後ろを向くと姫菱の左手が私を掴んでいた。

そして反対の手は宮崎さんの告白が気になるのか、私と同じ様に神楽坂さんに付いていこうとしていたこのかお嬢様の手を捕まえている。

「ダメに決まってんだろ・・・・」

私達二人の視線を浴びながらも複雑な表情で返してくる。確かにこのまま私達を行かせると、どういう行動を取るかは火を見るよりも明らかだ。

「えー。気になるやんかー」

「出歯亀は趣味が悪すぎるぞ?」

下世話な興味を素直に口にするお嬢様に正論を口にする姫菱。そのまま手を引いて強引に自分の両側に座らせる。肩がくっつく様な距離だが手を離さないのでそのままに任せてしまう。

「え～～、なら何でアスナはええんや～?」

「相手は１０歳だから保護者同伴」

親友がそのまま行ってしまった事が不満なのか、尚も食い下がるこのかお嬢様に変な理論を口にする姫菱。

「ホントは告白シーンくらい二人きりでさせてやりたい・・・・」

と零すその様は、弟を心配する兄の顔をしていた。しかし

「お姉さん、桜餅追加ー」

「姫菱は花より団子なんやな・・・・」

それがその場にいた女性陣による姫菱の最終的な評価になった。
信用していなかったのか結局桜餅が来るまで手は離してもらえず、
食べづらいとは思ったものの、私もお嬢様も座ったときの距離を変
える事は無かった。
理由は無い。ただ何となく、だった。店員さんにからかわれはした
が・・・・。

―――――――――――――――――――――

その後、ネギ先生が知恵熱で倒れたと神楽坂さんに聞いた。
成功か失敗かはまだ分からないけど、宮崎さん、あんな大人しそう
な子なのに・・・・勇気・・・・あるんだな。
少し尊敬してしまった。

「人一人倒す告白か・・・・。宮崎・・・・恐ろしい子・・・・」

一人劇画タッチの顔で驚く姫菱を、皆は無視していた。

## 第八話（後書き）

色々と忙しくなってきましたが、執筆はがんばります。
遅くはなりますが・・・・。
さてここでアンケートを行いたいと思います。
お題は「ハーレムに大河内アキラを入れるか否か」そして「入れる場合、次の話で参加させるか」という事です。
因みに参加させる場合作者の文才の無さのせいで、かなり強引に修学旅行編に関わる事になります。
それらも含め回答お願いいたします。

## 第九話（前書き）

だいぶ遅くなりましたが第九話投稿します。
早く戦闘シーンが書きたい・・・・が、ヒロイン三人目漸く登場です！！

# 第九話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

４月２３日　ＰＭ　２１：２７　嵐山旅館

着信音で俺は目を覚ます。布団から出ること無く枕元のそれを掴み開く。

ｆｒｏｍ　高畑先生

件名　　お待たせ

本文　　情報は揃ったよ。今送った。

どうやら頼んでおいた情報が集まったらしい。
テーブルの上にあるノートＰＣを開く。レンタル品だったたから旧式かと思ったが旅館そのものが新しいので問題無かった。
ディスプレイにはメールを受信したメッセージが出ており、開いて内容を確認する。
欲しい情報は全てではなくとも、一通り揃った。
その結果に満足しつつ携帯を手に取り返信の文章を打つ。

ｔｏ　　姫菱

件名　　感謝します

本文　海外からわざわざ有難う御座いました。
ＰＳ　あの洋梨には文明社会に早く慣れろと言っておいて下さい。
送信ボタンを押して携帯を浴衣の袖の中に入れる。再びＰＣ画面を覗き込み情報を頭の中に叩き込む。
目を閉じて脳内で何度も反復しチェックを行う。この情報を旅館のプリンターで印刷するわけにはいかない。
全て記憶して席を立つ。忘れない内に全部終わらせなければ・・・・。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

「ええ～～っ！？ま、魔法がバレた～～～！？
しかも、あああの朝倉に～～っ！？」
誰に聞かれるかも分からない旅館のロビーで大声を出す神楽坂さん。
しかし今回は驚くのも無理は無い。かく言う私も驚いている。
「は、はい・・・・」と頷くネギ先生は最早泣きが入っている。

「何で！？ど～～してよりによってあのパパラッチ娘に～～～～！？」
バレたらどうなるか知っているらしい神楽坂さんは、彼女にバレてしまった事を糾弾して更にヒートアップしていく。
スクープのためなら手段を問わない、自他共に認める「麻帆良のパ

パラッチ」こと朝倉和美さん。
その噂を聞いた時点で私でさえ関わり合いにならないように気をつけていたのに・・・ネギ先生・・・・迂闊すぎる・・・・。

「し、仕方なかったんです・・・人助けとか、ネコ助けとか・・・・」

「う～～ん朝倉にバレるってことは、世界にばれるってことだよ～～・・・・」

「まったく・・」

弁明するネギ先生に神楽坂さんはこの事実がもたらす結果を口にする。
思わず同意してしまいましたが・・・神楽坂さんそこまで言いますか・・・？

「もーダメだ。アンタ世界中に正体バレて、オコジョにされて、強制送還だわ」

「そんな～～っ。一緒に弁護してくださいよアスナさん、刹那さん～～っ」

最早処置無しと匙を投げる神楽坂さんと、涙目ではなく目の幅涙で泣いているネギ先生。正直他人事とはいえ乾いた笑いしか出てこない。
そんな風にネギ先生の暗い未来を想像していると、『噂をすれば影』とでも言うように私達の前に

「お――いネギ先生――」「ここにいたか兄貴――♪」

先生の相棒カモさんを肩に載せた朝倉さんが現れた。
私達が話していた内容などどこ吹く風というように意気揚々と手を振りながらこっちに向かってくる。

「ちょっと朝倉、あんまり子供イジメんじゃ無いわよ――」

「うわっ！あ、朝倉さん!?」と驚くネギ先生を自分の後ろにかばいながら窘める神楽坂さん。
しかし朝倉さんは神楽坂さんの発言に心外そうに眉根を寄せながら反論する。

「イジメ?何言ってんのよ。てゆーかあんたの方がガキ嫌いじゃなかったっけ?」

「そうそう。このブンヤの姉さんは俺らの味方なんだぜ」

「え・・・?味方?」

オウム返しに呟く先生の言葉は私達三人の気持ちを代弁していた。

「報道部突撃班、朝倉和美。カモっちの熱意にほだされて・・・・ネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していくことにしたよ」

「よろしくね?」と屈託の無い笑顔でそう言ってくる。しかし私は意味が分からない。二年以上一緒のクラスで過ごしたがこんな事は初めてだった。特ダネと見れば食らいつくものとばかり思っていた私や神楽坂さんからすれば当てが外れた形だった。

「あの、それはどういう・・・・」

声を掛けてから自分の失策に気付く。この状況で朝倉さんに質問していればどう考えても自分もネギ先生の仲間だと言っている様なものだ。

せめて無言を貫いていればまだ言い逃れができるかもしれなかったのに・・・・。

しかし朝倉さんは私が魔法関係者だとこの場に来た時点で狙いをつけていたのか意に介した様子もなく答える。

「ふふん♪実はカモっちとの交渉の結果、色々情報を貰う代わりに『こっち側』に付く事にしたんだ～」

「ああ。姉さんの独占取材を受ける事を条件に、映画化の件はチャラになったぜ兄貴！」

このクラスメイトはとんでもない事を画策していたらしい。私も下手をすれば銀幕デビューさせられていたのか。この二年間バレなくてよかったと心から思う。

「え・・・・え～～！？本当ですか！？」

漸く復帰したネギ先生が驚きの声を上げる。朝倉さんは「その証拠に・・・・」と、スカートのポケットから手帳ほどのファイルを取り出しネギ先生の目の前にかざす。

「今まで集めた証拠写真も返してあげる？」

「わ、わぁーい、やったー♪ありがとうございます朝倉さん」

何の疑問も抱かずに写真を受け取るネギ先生。安心しきっている彼を神楽坂さんは一安心と頭を撫でている。
しかしどう考えてもおかしい。独占取材がどの程度のものになるかは知らないが、ネギ先生側についた以上記事にはできない。一体何故・・・・？

「おふぁよ～ぅ」

私の思考を階段を下りてきた姫菱の欠伸交じりの挨拶が遮る。「仮眠を取りたい」と言っていた彼は夕食の後そのまま部屋に篭ってしまった。今の今まで寝ていたのか中々盛大に寝癖が付いている。四方八方に爆発している頭を掻きながらこちらに向かってくる姿は気の抜けた様子ではあるが浴衣には刀を通すホルダーがついているので全くの無警戒ではないらしい。

「で・・・・何かあったのか？」

そう言ってその場にいる全員を見回す。この状況をどう説明しようか迷っていると神楽坂さんが「それが」と前置きして言葉を続けようとする。神楽坂さん言ってはダメです・・・・！

「ネギが魔法使いだって朝倉にバレちゃったのよ」

「お前のその発言でたった今俺も魔法使いだとバレちまったよ・・・・」

「あ」と神楽坂さんが声と共に自分の失態に気付くも時既に遅し。
そのまま朝倉さんに目をやると肩を震わせて笑っていた。ここまで芋蔓式に釣れるとは思っていなかったのだろう。

「まぁ、朝倉に知られてもかまわないけどな」

言葉だけ聞くと負け惜しみにしか聞こえないが、その口調は心底どうでも良いという感じだった。朝倉さんはそれを挑発と取ったのか眉根を寄せて返す。

「私に知られても怖くない。って?ずいぶん大きく出たね」

軽く睨みつけながらかデジカメを構える朝倉さん。情報の力を甘く見られていると思ったのだろう。言外に『バラしてやってもいいんだぞ?』と視線が語っていた。

しかし自分の正体を握られているはずなのに姫菱はその視線を受け流している。

「別に俺は正体がバレてもオコジョになるわけじゃねぇし・・・・。但し、そんな事をしてタダで済むとは思わない方がいいな」

「ジャーナリストが脅迫に屈するとでも?」

姫菱の視線を鼻で笑う様に言葉を返す麻帆良のパパラッチ。自分に圧力をかけてくるのはその情報をリークされたら困ると言っている様なものだ。そして彼女は言論の弾圧に屈する様な人間では無いだろう。

余裕の笑みを浮かべる朝倉さんに姫菱は「分かりやすく言わないとダメか?」と前置きして冷徹な声色で話す。

「脅しでも何でもない。

力を使うのに周囲の目を気にする必要が無くなる以上、俺を縛るものは無くなる。居場所の無くなった麻帆良で人1人死のうが知った事じゃない。何の躊躇いも無く報復できる。

そう言っているんだ」

「・・・・クラスメイトを殺すの？」

「クラスメイトの秘密をバラすのか？」

強い口調と剣呑な眼差しで怯えを隠す朝倉さんに対して姫菱は全くの無表情。その視線には何の感情も宿っていなかった。

ハッタリではない。秘密を暴露されたら間違いなく姫菱は首を刎ねる。敵意も何も持たずに、自分に不都合をもたらした人間として処理するだろう。

互いの質問を最後に沈黙が続く。ネギ先生達は重い空気に慌てふためいて、交互に姫菱と朝倉さんを見ているだけ。

その緊張が最高点になる前にオコジョが助け舟を出す。

「ま、まあ心配ねえよ姫の兄貴！姉さんは協力するって言ってんだし！姉さんだって仲間を売ったりはしねえって！なあ？」

「あ、ああ。そうだよ。決まってるじゃん！」

わざとらしく大声で話すカモに何とか同意する朝倉。固唾を呑んで見守っていた私達もホッと息を吐き、場の張り詰めていた空気が溶けていく。

「ま、それならいいけど」

何事も無かったかの様にそう言い残して私達に背を向けて歩き出す。

「ちょっと、どこ行くのよ？」

「パトロール」振り返る事無くそう言い残し大広間の方へ行ってしまう。私達は一様に彼を見送る事しかできなかった。

「・・・・っはぁ！ホンットに、殺され、るかと、思った・・・・」

息も絶え絶えに朝倉さんが何とか声を紡ぐ。額に冷や汗を掻いているが私も同じだった。

先週図書館島周辺での戦いと、昨日の呪符使いとの戦いから彼の強さを考えるとはっきり言って私より強い。

出逢った当初は剣の技量では自分が一歩上だと思っていたが、抜刀術の一点においては彼に軍配が上がる。

合わせて納刀の動作が組み合わさったあの独特の格闘術は刀の間合いの内側でも戦うことが可能で、何より納刀による戦闘の『仕切り直し』がほぼ無い。

あの居合いと体術の高速戦闘に一度引き込まれたら抜け出せない。

手数、速度、正確さの攻撃にほとんどの敵は沈む。

加えて彼は剣より魔法が得意と言っていた。何故使わないか聞いたところ『強力すぎて被害が出る』との事だった。

その言葉を鑑みるに抜刀術の間合いの外に活路を見出しても大規模、広範囲魔法攻撃を仕掛けてくるだろう。

正に距離を選ばないオールラウンダー。私一人では止めることはおろか、恐らくここにいる三人でも歯が立たない。

あのまま戦闘になったら少なくとも朝倉さんは死体になっていただろう。

（・・・私にも剣を向けるだろうか・・・・？）

「しかしどうするカモっち？あの調子だと『アレ』には巻き込まないほうが・・・・」

「そうだな。後の事を考えるとリスクがデカすぎるぜ・・・・」

彼が敵になる事にほのかな寂しさを感じていると二人の会話に思考から現実に引き戻される。

「アンタ達立ち直るの早いわね・・・・」

そう思わないでもないが変な事を考えていたせいで同意できなかった。最近彼の事を考えていると妙な方向に思考が逸れる。

「神楽坂さん。私たちもパトロールにでも行きましょう！」

顔が赤いのが自分でもわかる。どうにか隠そうとして声が大きくなるが気持ちを切り替えなければ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

一通り確認した後、自室に戻りノートＰＣを再び開く。確認した事柄が間違っていないか最後にチェック。問題なし。

後は桜咲と交代での護衛か。移動中のバスの中と夕食後にたっぷりと寝かせてもらったのでこのまま徹夜しても大丈夫だ。

備え付けの冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し一口。時計に目を向け十一時を回っているのを確認すると引き戸より控えめなノックの音がした。

「失礼します」

俺の返答に合わせて桜咲が入ってくる。野太刀を持っているのはいつも通りだがトートバックを反対の手に持っている。そのままスリッパを脱いで部屋に上がる。

「近衛は？」

「お嬢様は神楽坂さんと一緒に部屋で寝ています。このまま交代で見回りをしようと思ったのですが・・・・」

「何かあったのか？」

『ですが』の後に続く言葉を促す。どう考えても悪い知らせだろうが聞いておかねば。そのまま窓際にあるテーブルの向かいの椅子に腰掛けた桜咲は複雑な表情で言ってくる。

「どうやらクラス全体で旅館全域を使った枕投げ大会でもやっているらしく・・・・それを収めるため新田先生も見回りしているみたいで・・・・」

「どうりで騒がしいわけだ・・・・」

枕投げ参加者が出歩いていて、それを注意するために新田先生が走り回っている。そんな状態で見回りしても枕投げに巻き込まれるか、新田先生に見つかるかの二択になるだろう。

「なら今日の見回りは無しだな」

「なっ！し、しかし・・・・」

「この状況で何かあったら、真っ先に出歩いているヤツらに異常が起こる。それから動いても十分間に合う」

缶コーヒーを飲み干しそう告げる。
再び巡回するにしても皆が寝静まってからでないと意味が無い。出歩けないならば、出歩いているヤツを利用させてもらう。
クラスメイトを利用する俺の考えが読めたのか責める様な視線を向けるが、取れる選択肢がそれしか無いことは分かっているらしい。

「それはそうとコレ、目を通しとけ」

ノートPCの画面を桜咲に向けてテーブルを滑らせる。ディスプレイを見た桜咲がその内容に息を呑む。
そこにあったのは

「旅館の見取り図と従業員名簿・・・・」

従業員一人一人の顔写真と日ごろ出入りしている業者の作業員についてまで載っている。見取り図にいたっては各階の従業員専用の部屋までも記されていた。

「何でこんなものを・・・・」

「そりゃお前夜這いとか女湯覗きにストップ！嘘、冗談！刀出すな！！」

野太刀の鯉口を切っていた桜咲を何とか宥めて野太刀を納めさせる。
どうやらこの剣士にこの手のギャグは通用しないらしい。

「あの後従業員全員の顔を確認して、旅館内で隠れられそうな所も全てチェックした。結界を張り直した以上、外から敵が来たら分かるだろう？」

真面目な話に切り替え、桜咲に情報を見るように促す。一番重要な情報は最後にあるのだから。

桜咲はそこまで辿り着いたのか記されている情報を読み上げていく

「天ヶ崎（あまがさき）　千草（ちぐさ）　年齢　２７歳

関西呪術協会所属の陰陽術師

大戦で両親を失った為、関西呪術協会の養護施設にて育つ。

幼少より呪札を用いて、火術、水術、式神等の多彩な技を使うことができその為、長年関東魔法協会との小競り合いに参加していた。

一月前に協会の口座より多額の金を引き出して行方をくらませる。

関西呪術協会側は『彼女を捜索中』との報告を出している・・・・」

『大戦』というのは分からないが大体まとめるとそんな感じだった。

彼女と行動を共にしていた月詠とかいう神鳴流剣士の情報も欲しかったが集まらなかったとの事。

だが誘拐未遂犯の情報が手に入ったのはかなり良かった。正体不明の敵ではなく名前のある人間である事が知れただけでも心理的に違う。

「どうやってこんな情報を・・・・」

「朝、学園長に電話して高畑先生経由で送ってもらった」

ついでに近衛が誘拐されかけた事を報告しそちらの想定が甘かった事をネチネチと突いて敵の情報開示を求めた。しかしあの洋梨は機械操作についてはビデオデッキで止まっているらしく、結局海外出

張中の高畑先生に送信してもらった。

「あと悪いニュースを一つ。近衛の護衛については今の戦力でどうにかしてくれってよ」

その言葉に桜咲は微妙に眉をひそめる。警戒を強めているとはいえ一度攫われかけたのは事実だ。もう二度と近衛を敵の手に渡すつもりは無いが、いざという時の援軍が望めないのはやはり精神的に辛い。

そして協会の口座から多額の金を引き出して行方をくらませたのなら、その金で更に戦力を増強しようとするだろう。

あと三日とはいえかなりの綱渡りになりそうだった。

「コラ――――！何をやっとるか――――！！」

現状の厳しさに二人して考えを巡らしていると突如大声が聞こえた。

声はそのままドップラー効果を残しつつ小さくなっていく。

不意に二人して笑い合う。３－Ａの誰かを追っかけている新田先生がありありと想像出来てしまった。

どうせ外が静かになるまで見回りはできない。それならこのまま桜咲ととりとめの無い会話でもしていようかと考えていたら、

突然部屋の戸が開いた。

そこにいたのは先端にややウェーブがかかっている長い黒髪をポニーテールにした、俺と同程度の身長の・・・・

「っと・・・・！大・・河内・・・・・！？」

「姫菱・・・・くんと、桜咲・・・・・さん・・・・・？」

なぜか両手に枕を持った大河内アキラが息を切らせて立っていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

逃げ込んだ先は彼の部屋だった。新田先生に捕まったゆーなの補充要員として参加したはいいが正直気が向かない。じゃあ誰に向いているんだ？と自問するが答えは出ない。
『強いて上げるなら』という前置きがあれば出てくる名前はあるが・・・こんな微妙な感情、とてもじゃないが親友のゆーなやまき絵達にも言えない。
彼の事は自己紹介で聞いたこと意外は知らないし、教室でも殆ど話した事は無い。まともに話したと言えるのは『あの時』くらいのものだ。
その会話にしたって他の人にしてみれば取るに足らない会話だろう。
その程度で気持ちは動いたりしない。・・・・と思う。
しかし・・・・実際に親しげに話しているのを見てしまうと、少し悲しくなるのは何なのだろうか・・・・？

「え、あ、えっと・・・・おじゃ」「コラ―――――！待ちなさ――――い！！」
『お邪魔しました』と言おうとしたが近づいてくる大声に塗りつぶされる。考えるまでも無い。この声の主から逃げてここに迷い込んだんだから。

「大河内、閉めろ」

姫菱くんは短くそう言うやいなや足早にこっちに向かってくる。言われた通り戸を閉めると、私を引っ張って押入れの前まで連れてくる。手を引かれた瞬間心臓が跳ねる。「入ってろ」と彼はそのまま私を押入れの奥に押し込む。続いて顎で促された桜咲さんが慌しく中にやって来る。
二人とも中に収納されると姫菱くんが私に携帯電話を放り投げる。キャッチする前に襖が閉められる。

「は――い。ちょっと待ってください」

襖が閉まると同時にノックの音が聞こえた。声を聞いていると部屋に抜き打ち検査に来た新田先生と話しているらしい。
携帯電話のディスプレイを開くと光と共に暗闇の中に私と桜咲さんの顔が浮かぶ。
近くで見るのは初めてだがやはり綺麗だった。大和撫子を思わせる容姿もそうだがその白い肌がうらやましい。今は部活で室内プールを使っているからそうでもないが、これから夏になり外のプールを使うようになるとどれだけＵＶ対策を施しても日焼けしてしまう。

（桜咲さんみたいな感じの娘がタイプなのかな・・・・）

そう言えばよく近衛さんとも話している。大和撫子の言葉が似合う女の子が好きなのだろうか？

「行ったぞ」

その言葉と共に襖が開く。私は自分の思考に没頭していた為いきなり明るくなった事に驚いて立ち上がろうとするが、そこは押入れの中。

結果、屈んでいても頭が付きそうだった中天井に強かにぶつける。
ゴッ、という鈍い音がその場にいた全員に聞こえ声にならない悲鳴が出る。目の前に星が出たような感じだった。

「だ、大丈夫ですか、大河内さん!?」

その音を聞いた桜咲さんからの声に何とか頷きながら押入れから出る。未だに立てない私の頭を姫菱くんは撫でながら言う。

「あー、大丈夫。瘤にもなってない。すぐに良くなる」

その言葉通り急速に痛みが引いていく。顔を上げると視界が埋まるほどの至近距離に彼の顔があった。またしても驚いて立ち上がり一歩下がる。どういう訳か桜咲さんがジト目で彼を睨んでいた。

「あ、ありがとう・・・・」

「気にすんな。いきなり開けた俺も悪いし」

匿ってくれた事等、諸々のお礼を言いうと姫菱は軽く返し、言葉を続ける。

「でも外にはしばらく出れそうにねえな・・・・」

部屋の外は未だに騒がしいこの状況で出て行くわけには行かない。
自分の部屋に帰るのはもう少し先になりそうだ。
姫菱くんは冷蔵庫からお茶のペットボトルを出すと私と桜咲さんに渡してくる。自分用のボトルを開けて一口。そのまま息を吐く。

「えっと・・・姫菱くんと桜咲さんは付き合ってる・・の・・・・

？」

大きく咽た桜咲さんの口から少なくない量のお茶が吹かれる。
もしそうだった場合危険を冒してでも帰ろう。そう思って出た疑問だった。

「・・・お前と同じで、ここを避難所だと思って逃げ込んできたらしい」

しかし姫菱くんは一人冷静に返す。口元を押さえる桜咲さんにＢＯＸティッシュを渡している。しかし私にはもう一つの疑問がある。

「でも・・・布団・・ふ、二組も敷いてあるし・・・・」

足元を見るとそこには隣り合うように敷かれた二組の布団。男女のいる部屋でそんな光景を見たら『そういう事』をした後に寝るために敷いてあるようにしか見えない。
その考えが伝わったのか桜咲さんは一気に首まで赤くなり「な、な、な・・・・」と声にならない言葉を発している。質問した私の顔も同じことになっているだろう。
しかし姫菱くんは何でも無い事のように告げる。

「ああ、それネギ先生用。今日一緒に寝る予定だったんだが・・・・」

「この騒ぎに巻き込まれてんのかね・・・・」と続ける。その言葉を聞いて自分が恥ずかしい想像をしていた事に更に顔が赤くなる。
顔どころか全身が一気に熱を持っているのが分かる。まともに彼の顔を見れない。
しかし彼は「まぁ、座れよ」と促してくる。さっきとは別の理由で

ここから出て行きたい心情に駆られたが大人しく腰を下ろす。
私がどんな想像をしていたか絶対分かっているはずなのに、気付かないフリをしてくれている。その思いやりに少し嬉しさを感じる。

「大河内さん、外で何が起きているんですか？」

想像力のオーバーヒートから私より一足先に復帰した桜咲さんが質問してくる。もしかして朝倉の説明聞いてないのかな？

「う、うん。実はこれ朝倉の企画したイベントで・・・・」

説明を聞かせるうちに二人の顔が次々表情を変えていく様を見れたのは正直面白かった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦？』って・・・・」

「どこの深夜番組だよ・・・・」桜咲さんの口から出たタイトルの後にそうツッコミを入れる姫菱くん。見ている分には楽しんでいた私も参加する身となった今では苦笑いしか出てこない。

「なんだよ、それじゃコレ作ってきたのムダになったな・・・・」

残念そうに言って立ち上がり自分のキャリーケースから取り出してきたのは一抱えもの大きさのあるサイコロだった。
八つの角は全て取れていて、カラフルに塗られた面には「怖い話」

「アレッ？勘違い！？」「どうでもいい話」「今日の当たり目」など書かれている。
どこからどう見ても平日の１３時より放送している某トーク番組のサイコロだった。

「何が出るかな♪何が出るかな♪たららららん♪たららららん♪」

口調とは裏腹に平坦な声で手作り感全開なそれを転がす。内部に細工してあるのか本物と同じように中々止まらない。
やっと止まって出た目は

「怖い、話・・・・」

桜咲さんが読んだ瞬間部屋の電灯が消される。それと同時に隠し持っていたのか懐中電灯の光に照らされた姫菱くんの顔が現れる。自分を顎下から照らす彼はそのまま布団に入り顔だけ出す状態になった。
桜咲さんもこの状況に苦笑いをしているがもう一つの布団に入り姫菱くんと同じ格好になる。事態に付いていけなかった私も少し遅れて二人に習う。
三人とも二組の布団の中央から顔だけを出す格好になり姫菱くんが話を始める。なんだかワクワクしてきた。

「これは俺の友達Ｙ君が体験した話なんだが・・・・」

セオリー通りの出だしを芝居がかった口調で話してく。

「休日、昼前に起きたＹはリビングに行くと誰もいなかった・・・・。母親は仕事に、弟はどこかに遊びに行っているらしく家にはひとりきりだった・・・・」

話を聞く限りではまだ怖い要素は出てこない。大抵夜に肝試しや廃墟になった場所に行った場所の話だが、そういう類ではないらしい。

「腹の減っていたYはキッチンでフライパンに入った焼きそばを見つけた。具材に実家の田舎から送られた甘いキャベツを使ったそれを、大皿に取ろうと菜箸で持ち上げたその時・・・・」

まだ怖くなりそうな感じは無い。それどころか怖さを連想させる単語一つ出てこない。隣の桜咲さんも不思議そうな顔をして聴いている。焼きそばの話が一体どう繋がるのだろうか・・・・？

「彼は、見てしまった・・・・。フライパンの底にある・・・・決して小さくないカタツムリの殻を・・・・！そしてその中身が無くなっている、その事実を・・・・！Yは急いでトイレに駆け込み喉の奥に指を突っ込んだ・・・・。
なぜなら・・・・」

姫菱くんはそこで一旦区切り、十分に溜めてから衝撃の事実を話す。

「その焼きそばは・・・・前日の残り物だったからだ！！」

一瞬遅れて、女子二人の悲鳴が上がった。

それを聞いた姫菱くんは立ち上がり部屋の電灯を点ける。その顔はとても満足そうに見える。
しかし私はそうもいかない。告げられた事実に鳥肌が立っている。
「もう既に食べていたなんて・・・・」
桜咲さんは両手で頭を抱えて「中身、溶けてる・・・・」と呟いている。

「でも『怖い話』ってこういう内容でいいの・・・・？」

当然の疑問が口から出る。イヤ、確かに怖かったけど！身の毛もよだつ話だったけど！

「っていうかＹ君って姫菱くんだよね？」

この指摘に目を逸らす姫菱雄飛くん。その眼差しは窓を飛び越えどこか遠くを見つめていた。
深く詮索するのはよそう・・・・。

「さて次は・・・・」

そう言ってまたサイコロを転がす。また自分が振るんだ・・・・。
という疑問が頭をよぎるが気にしない。彼以上に面白い事を話せそうにないし、何よりもっと話を聞きたい。
その後も
『どうしようもない話』で、動けない状態で蚊が次々と血を吸っては去っていく一部始終を見守った仏様のような体験をした話や、
『ついている話』ではランニング中、強風で飛ばされた上にトラックにはねられた看板に、さらにはねられた体験談を聞いた。
他にも色々な話をする度に悲鳴や笑い声が部屋に明け方まで響いた。

因みに全て友人のY君の話だった。

## 第九話（後書き）

ちなみにこのサイコロで出た話の件は実話です。

# 第十話（前書き）

書いてみたら未だに戦闘シーンに入らない・・・・。
文才の有無ってこういう所に出ますね・・・・。

# 第十話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

衣擦れの音で目が覚める。朝方は桜咲が起きて待機しているはずなので朝食の時間まで寝ていて良かったはずなのに何か損した気分だ。昨日の騒ぎ自体は深夜を回った辺りで収まったようだが、様子を見に行った桜咲の話しではロビーで十人近いクラスメイトが新田先生によって正座させられていたらしい。その為、結局見回りは行わず部屋で待機となった。

因みにお仕置きを受けるメンバーの中に朝倉がいたのは自業自得としても、ネギ先生まで正座させられていたのは不幸としか言いようが無い。

しかし帰ってきたとき桜咲が沈痛な面持ちだったのは何なのだろう。持っていた式神の寄代と関係あるのだろうか？

取留めの無い思考を止め再び眠ろうとするが、昨日仮眠を取ったためそれほど眠気は無い。二度寝は諦めて朝風呂にでも行くか。

上体を起こし壁掛けの時計を見る。しかし目を奪われたのは現在時刻ではなく、

サラシを巻こうとしていた桜咲の乳房だった。

浴衣が足元に落ちているのを見るに着替えの最中らしい。ショーツ以外何も身に着けていないことからもそれは分かる。

上体を起こした時点でこっちを向いていた桜咲はあまりの事態に固まっていて、しばしの静寂が流れる。何か言わなければ・・・・。

『見るつもりは無かった』とか、『不可抗力だ』とか、『実は俺貧乳に興味無いんだ』とか・・・。三つ目はダメだ・・・・俺はまだ自分の首を胴体に繋げていたい。
脳内でどうにか最適な言葉を探し出てきた言葉は、

「ありがとう・・・ございます？」

気で強化された枕がえらい勢いで顔に叩きつけられた。

―――――――――――――――――――――

悲鳴を上げないでくれたのは有難かった。クラスメイトにばれた場合間違いなく女の敵として裁判なしの実刑判決になる。部屋に連れ込んだことも含め磔刑に処されるだろう。
桜咲は備え付けのトイレの中に逃げ込んで着替えを続けている。最初からそうして欲しかった。
まだ痛みの引かない鼻を擦りながら横に目を向ける。隣の布団には大河内の幸せそうな寝顔があった。
昨日の騒ぎの後、部屋に帰るかと思ったがサイコロトークに参加してそのまま寝入ってしまった。
起すのも忍びなかった俺と、自分が部屋に待機しているから変な事はしないだろうと判断した桜咲の意見が一致し布団に寝かせる事になった。
しかし桜咲が仮眠を取ってしまうと判断を誤った事を自覚する。
凛とした美人の桜咲と、大人びた顔立ちの大河内。
天使の寝顔が並んでいる状況を眺めるだけで手は出せない。というのは一体何の拷問だろうと思った事は男の子の秘密だ。
そろそろ皆起きる時間だ。その前に部屋に戻ってもらわないと。

部屋からの出入りを目撃されるとその場で現行犯逮捕だ。両手に布が掛けられた俺の写真を朝倉がデジカメに納め、その日の３－Ａのクラス報の一面を飾るだろう。

「大河内起きろ、起きてくれ！主に俺の為に！」

変な想像をしてしまい肩を揺する手にも力が篭る。しかし「う、う～ん・・・・」と嫌そうな声を出し、身をよじりながら布団の中に潜ってしまう。

このまま寝かせる訳にはいかない。布団に手を掛け一気に剥ぎ取る。

「起きろ――！大河う・・・・」

言葉は最後まで続かなかった。大河内は窓から差し込む朝日が眩しいのか手の甲で目を隠している。しかし女子として肝心なトコロを隠していない。

寝相が良いなと思っていたが布団の中ではそれなりに動いていたらしく、浴衣が完全にはだけていた。

メリハリのついた肢体。水着のおかげか全く日焼けしていない場所の肌は桜咲や近衛に負けないくらい白かった。

浴衣の帯はかろうじて巻かれているがその袷は腰脇まで逃げてその意味を成していない。最早袖を通しただけの状態だった。

長身の大河内にふさわしい大きな乳房。適度に引き締まった腹と小さな臍。下腹部を覆うショーツから生える健康的な太腿。

先ほど見た桜咲や一昨日見た近衛の裸体とはまた違う大人の女性の肌を完全な不意打ちで見てしまい思考がフリーズする。

「・・・・あれ・・・・姫、菱・・くん・・・・？」

大河内が体を起こし俺の存在を確認する。そこで男に寝起き姿を見

られていた事と自分のあられもない姿に気付き

「――――――っ！！」

光速の反射で体を隠す。首まで真っ赤にしながらも浴衣の袷を戻そうとしている。思考停止状態から何とか復帰した俺はどうにかして悲鳴を上げないように宥めようと言葉を探す。
しかし俺が弁明の言葉を言う前に再び何かが顔面に激突！
視界の端に見えたのは半泣き状態の大河内と、鬼の形相で何かを投擲した格好の桜咲だった。
鼻先に着弾したのがまたしても枕だと気付いたときには俺の上半身は後方に倒れていた。

痛いが得した気分だ。

こうして修学旅行三日目の長い、長い一日が幕を開けた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇free side◇

朝食も終わり完全自由行動日の準備の為に慌しくなる3－A一同。
しかしネギ達一行はそこから離れ、最早定位置となった自動販売機脇の休憩スペースにいる。憤慨する明日菜と恐縮するネギ、傍観に近い形で事の成り行きを見守る刹那と雄飛。

修学旅行中何度も見慣れた光景だが今回は集まったメンバーと会話の深刻さが違った。

「ちょっとどーすんのよネギ！こーんなにいっぱいカード作っちゃって一体どう責任取るつもりなのよ！？」

明日菜はカモミールから取り上げたカードを扇状に広げながらネギを問い詰める。

昨日行われていた『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦？』は、実はネギと３－Ａ生徒をキスさせる事で魔法使いとの主従契約を結ばせ、その証として現れる仮契約カードの入手が本来の目的だったとカモミールは雄飛達三人によって白状させられた。

そして朝倉もそれに便乗してクラス対抗のトトカルチョを行っていた事を潔く認めた。

最終的に主犯二人が見回りをしていた新田先生に捕まった為、賭けそのものは無効になったが仮契約カードは残ってしまった。

実は刹那が貸した自分のそっくりな人形が命令によって自立行動をする『身代わりの紙型』が幾つか起動してしまいその分身とキスしてしまった為、何枚ものカードが生まれてしまっていた。

偽ネギとのキスが大半だったので契約の成立していない不完全なカードが殆どだったが、先日告白した宮崎のどかだけがネギ本人に辿り着き本来の仮契約が成立してしまったのだ。

結果、契約未成立のスカカード５枚、のどかとの仮契約成立カードの計６枚が発生してしまった。

「えうっ！？僕ですか！？」

「まあまあ姐さん」

「そーだよアスナ。もーかったってことでいいじゃん」

魔法使いである秘密がバレる事。クラスメイトを魔法の世界に少なからず巻き込んでいる事。その二つを指摘され狼狽するネギを尻目に黒幕たるカモミールと朝倉は呑気な口調で弁護している。少しは反省しているのか、明日菜に「朝倉とエロガモは黙ってて！」と一喝されると素直に大人しくなる。

「イベントの景品らしいからカードの複製渡したのは仕方ないけどマスターカードは使っちゃダメよ」

「それに宮崎は一般人だろ？一昨日みたいな厄介事には巻き込まない方がいいだろうな」

「魔法使いという事もバラさない方がいいでしょうね」

怒りが収まりのどか本人を心配する明日菜を始めとする三人。魔法という日常を壊す力の世界に巻き込んでも良い事は無いという判断は一致していた。
しかし一般人という言葉にネギは反応する

「一般人って・・・・アスナさんも一般人じゃ・・」

「今さら私にそーゆーこと言うわけネギ？」

そう言ってネギの額をつつく明日菜。近衛の誘拐騒ぎにあそこまで巻き込んでおいてそれはないだろう。結局ネギの結論も『のどかには魔法の存在は秘密にしておく』ということになった。

「惜しいなー。あのカード強力そうなんだけどなー・・・・。まあ

いいや。姐さんにもカードの複製渡しとくぜ」

新たな仮契約者を惜しむカモミールだったが、気を取り直して話を明日菜へ移していく。カモミールが取り出したのは仮契約カード。大剣を構える明日菜の姿が描かれたそれを本人に掲げる。

「えーそんなのいらないわよ――。どーせ通信できるだけなんでしょ？」

興味深そうに覗き込む刹那と雄飛を尻目に、嫌そうにする明日菜。しかしその本来の機能を知るカモミールは食い下がる。

「ちがうって！兄貴がいなくても道具だけ出せるんだよ。ぜってー役に立つって！」

機能の説明を聞いても尚乗り気ではない明日菜だったが、促されるままにカードを持たされ

「ａｄｅａｔ」

唱えられた呪文に呼応してカードは形を変える。

長伸した光は柄尻とそこから伸びる札飾りを形成する。対の方向には金属の質感を伴う蛇腹状に折られた刀身が伸びていき切っ先は扇状に開かれた大剣が現れる。

全ては一瞬。

修学旅行初日の夜に起きた誘拐事件のときに現れた巨大なハリセンが明日菜の手に握られていた。

驚きの声を上げる明日菜は

「すごい！！手品に使える！」

あさっての方向の使い方を想像し、感動していた。「ち、ちゃんと使ってくれよぉ」というカモミールの声も耳に入っていない様子だ。「うわ――っ、すごいすごい！私も魔法使いみたい！！」とはしゃいでいる。

「それで今日はどうするんだ？」

興奮する明日菜を何とか宥め雄飛はネギに予定を聞く。完全自由行動日の三日目は先生方もフリーなはずだ。昨日の様に近衛の護衛に専念するか未だ渡せない関西呪術協会への親書を届けるか・・・・。

「はい。今日こそ親書を渡しに行きます」

昨日襲撃が無かった事もあり、このまま本来の役目を果たしに行くらしい。明日菜も頷いたところを見ると一緒に行くらしい。

「なら俺は近衛と一緒に遊んでるわ」

昨日の情報で敵の経歴は分かったものの近衛を欲する理由までは載っていなかった。操り人形にすると言っていた以上すぐに殺すことは無いと思うが、口調から道具として扱うように聞こえた。道具。近衛を一体どのように使うのかは知らないが、一月も行方をくらませていたのなら相当準備をしている。誘拐すらあそこまで周到に計画していたのなら誘拐した後も同様のはず。

襲撃がたった一回で終わるとは思えない。今日か明日必ずアクションを起こす。ネギのサポートを依頼された雄飛としてはそちらも応援に行きたいが、本来の依頼を疎かにはできない。

雄飛は刹那に視線を送る。大体同じ考えなのかネギと明日菜に対して首を縦に振る。

朝倉は3班と行動を共にするらしいが、スクープ次第で単独行動をとるかもという話だった。
全員の行動が決まったところで準備のため各々の部屋に戻る。しかし雄飛だけはは自室ではなく違う場所を目指していた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

「あ、大河内」

部屋に帰って私服に着替えようとしていた矢先、姫菱くんに声を掛けられた。彼も朝食後部屋に戻っていないのか制服姿だった。
しかし面と向かって顔を見た瞬間、寝起きのシーンを思いだしてまた顔が赤くなってきた。

「スマン・・・・。さっきの事は忘れてくれ・・・・」

姫菱くんも思い出したのか微妙な表情を浮かべている。そもそも自分があのまま寝てしまった事が原因だったので、あの後すぐに平謝りする彼を許しはしたがやはり簡単に忘れることはできない。

「で、龍宮見なかったか？」

この話題は終わり、と言わんばかりに話を変えてくる姫菱くん。彼の口から出て来たのは意外な名前だった。

「私がどうかしたか？」

そう言って四班の部屋から出てくるのは、褐色の肌を編み上げた服の上下に包んだ長身の女性。龍宮真名だ。

「長瀬から聞いてるかもしれんが、ちょっと話いいか？」

その言葉に思い出したかの様な仕草を取った後、思わせぶりな態度で聞いてくる。さりげなく胸元を押し上げるように両腕を組むその姿は同姓の私でも扇情的に映る。

「デートのお誘いかい？」

「そのネタは長瀬のときにやった・・・・」

『デート』。その言葉に自分の頭が一瞬停止してしまった。しかし姫菱くんは「二度ネタだ」と切って捨てて通路の奥へ行ってしまう。気にはなったがそのまま後を付いていくのも気が引けて部屋に戻って私服に着替える。無意識に制服を脱いでいくが頭では全く別の事を考えていた。

龍宮真名。

クロスカントリーやマラソンとライフル射撃を組み合わせた競技、バイアスロン部に所属しているのは知っているが彼女とはあまり接点が無い。

大会前の必勝祈願でよくお世話になる学園内にある龍宮神社が家なのも知っているが彼女の情報はそれしか知らない。

黒の七部丈シャツを着て、脱いだワイシャツをたたみながら考えを続ける。

私以上に接点が無いはずの姫菱くんは龍宮さんと何を話しているのだろう？どうでもいいと割り切ってしまえば良いが気になって仕方

が無い。

（・・・・デートに誘ってるのかな・・・・。でも違うって言ってたし・・・・でも・・・・）

あの時無表情に否定していたが、もうそれ以外考え付かない。ジーンズに足を通しながらも思考はループ状態になっていた。
何故こんなにも気になっているのか分からないが、確かめないと耐えられない。本人に聞きに行くにしても、もう自由行動の時間だ。仕方ない。
その言葉で今日の行動を決めたのは一瞬だった。
「ゆーな、まき絵、亜子。ちょっといいかな？」
まき絵と亜子がゆーなの胸の大きさを羨ましがる一幕を中断させ、告げる。
「私、今日五班の人と一緒に行動していいかな？」
「姫菱くん狙いなんだ～」とからかってくる三人に弁明している時間はさすがに無かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇雄飛　side◇

俺たちは嵐山・嵯峨野にあるゲームセンターに来ている。

「プリクラを撮ろう！」という早乙女の発言で付いてきたが三日目の自由行動も近衛に付いて行こうとしていた俺としては行き先に不満は無い。というか行った事の無い場所のゲーセンや旅館の古びたクレーンゲーム等に目が無い俺としては願っても無いチョイスだ。しかし、

「何でお前らまでいる・・・・・」

「パルって以外に抜け目ないのよね・・・・」

大事な用があるはずなのに宮崎達と一緒に遊んでいる現状の説明を神楽坂に求めると、呻くような答えが返ってきた。隣の桜咲も苦笑している。

旅館近くで待ち合わせしていた神楽坂は早乙女に見つかり、最悪のタイミングでネギ先生が到着してしまった。その場で別行動を取るうまい言い訳を用意できず、なし崩しに嵐山・嵯峨野の散策に相成った。

途中で抜け出すと言っていたが、楽しそうにカードゲームに興じているネギ先生を見ているともう少し時間がかかりそうだ。

「遊ぶなとは言わないが本来の目的、忘れんなよ？」

「イヤ、紙袋いっぱいにＵＦＯキャッチャーの景品持ってるアンタに言われても・・・・」

そう言ってジト目を左手に持っている紙袋に向ける神楽坂。確かに見たことの無いプライズに我を忘れていたが、別に本業は忘れていないぞ？

というかお前にも「アレ取って」とねだられた気が・・・・。

まあ一人一人の希望を叶えてやった形になったからいいんだが。

「それはそうと何で大河内さんが一緒にいるのよ?」

それは班員全員の疑問だろう。ロビーでいきなり「今日付いていっていいかな?」と聞かれたので二つ返事で「いいよ」と答えておいた。俺としては近衛に危険が及んだら連れて逃げるだけだ。その場に置いていく人数が三人から四人に増えようがあまり変わらない。大河内はいきなり返事が貰えるとは思わなかったのか「じ、じゃ今日はよろしく・・・・」と顔を赤くしていた。しかし背後の明石、和泉、佐々木の三人がガッツポーズを取っていたのは何だったのだろう?

「さあ?道頓堀で泳がされるのが嫌だったんじゃねえの?」

経緯を説明すると昨日の事まで言わねばならない事態になるので、神楽坂には適当に返しておく。

いつからか飛び込むことすら禁止されたらしいが。

しかし三班は大阪か・・・・。むしろ俺が付いていきたかったかも・・・・。

「アスナさーん」

神楽坂とやり取りしているとネギ先生の呼ぶ声。早乙女達がプレイしているカードゲームを一緒にやろうというお誘いだった。

「呼んでるぞお姉さん?」

神楽坂は俺を軽く睨むものの、「やれやれ」と言いながら騒ぎの中心へ向かって行った。

神楽坂が小走りで去っていくと不意に桜咲と目が合う。皆が私服の

中、何故か彼女だけが制服姿だった。
皆思い思いの可愛い服装だったので内心桜咲の私服姿に期待していたのだが、当てが外れた格好になった。
しかし今の俺の頭の中は違うことを考えている。

「桜咲」

本人以外に聞こえない様に小さく呼ぶ。近衛を見ていた桜咲は「何だ?」とこっちに視線をを向けてくる。その顔は今からする話の内容など想像もしていないだろう。

「・・・龍宮からある程度聞いた・・・・」

その一言で悲痛に歪む桜咲の顔。何でコイツが近衛を避けるのか少し分かった。

「・・・・龍宮は・・・・・何て・・・・・?」

震える声で聞いてくる。泣きそうな表情になっているが、それでも続けなければ・・・・

「生まれの所為で疎まれていた事、住んでいた場所から出て行こうとした時に近衛の親に拾われた事、とか・・・・」

「そ、う・・・・」と言う言葉を最後に互いに無言が続く。二人の間にゲームセンター特有の騒がしい音楽が響く。肩に引っ掛けている夕凪の紐を持つ手が白くなるほど強く握られている。

「・・・・わ、わた「すまなかった」

桜咲の言葉を遮る形で謝罪する。

「勝手にお前の過去を調べてしまって・・・・本当にすまなかった」

勝手に踏み込んで良い領域を知らず知らずに超えてしまっていた。
軽い気持ちで調べて桜咲の心の中を踏み荒らしてしまったかもしれない。
それでもこれだけは言わなければ・・・・。

「桜咲。
お前がどんな負い目を持って生まれてきたか俺は知らない。
どんな理由で出て行こうとしたのかも知らない。
お前より幸せな『普通の家庭』に生まれた俺には、お前の気持ちを本当の意味で理解できるとは言えないだろう」

俺はそこまで他人に共感できる人間じゃない。
自分にあって当然だった幸せが無かった感覚なんて言われても想像しかできない。
『君の気持ちがわかる』なんて言葉、同じ境遇の人間の口からじゃないと薄っぺらい同情に感じるだろう。

それでも

「それでも、俺はお前から離れる事は無い。
もう、ただのクラスメイトじゃない。一緒に戦った仲だ。
いまさら余所余所しくなんてできはしない。お前が何に負い目を持

っていても、何を隠していても、別にかまわない」

どんな秘密を聞かされたところでここまで仲良くなってしまった以上、他人のふりをするなんてできない。
情が移ったと言われればそれまでだが
それの何が悪い？

「言いたくないなら、隠したままで構わない。俺が信じられないならそれで結構。
近衛を守る気持ちに嘘が無ければ、それで十分だ」

俺にだって言えない秘密はある。
この世界に来た経緯に始まり、常日頃考えている男子特有の妄想まで。事細かに数えればきりが無い。
しかしそれは全て打ち明けるべき責任があるだろうか？
自分の本質や負の部分を、出会う人全てに話す必要があるだろうか？
桜咲は本当に近衛を守ろうと頑張っている。その気持ちに非の打ち所は一切無い。
ならそれで良い。
どんな秘密を持っていても、その一点だけで俺は桜咲を信じられる。

「姫菱・・・・」

桜咲が驚きの表情で俺を見る。「話さなくても良い」と言われるとは思わなかったのだろう。

「ありがとう」

そう言った桜咲は本当に嬉しそうだった。

―――――――――――――――――――――――――――

それなりにシリアスな会話を終えて一息。
いつの間にか神楽坂とネギ先生達は居なくなっていた。早乙女達がヒートアップしている間に抜け出したらしい。宮崎も二人を追って行ったらしく姿が無かった。
今日はこのまま何事も無く過ぎて欲しかったがゲームをしていた綾瀬達二人と、それを見ていた近衛、大河内達がちょっとしたトラブルに巻き込まれていた。
四人を囲む男達。年恰好は高校生程で服装、髪型、態度、その全てが軽薄に見える。
ゲーセンによくある光景の一つ、性質の悪いナンパにかかっていた。

「ねーねー君達みんなカワイーなぁ？学校どこや？」

ナンパの常套句を口走る茶髪。周りの男達もニヤニヤ笑っている。
少し怯えている三人に対して大河内だけが気丈に振舞って男達を追い払おうとしている。
しかしその行動もナンパの一団は笑って見ている。周囲の人間は関わり合いになりたくないのか既にその場から離れてしまっている。
その光景に夕凪を抜いて飛び込んで行きそうな桜咲を制止する。

「騒ぎになったら皆を外へ連れてけ」

そういって桜咲をその場に待機させ、騒ぎの中心へ向かって行く。
茶髪と大河内のやり取りは言い争いに発展していた。
怒った茶髪が大河内の肩を掴もうと手を伸ばしたその瞬間、囲んでいた男達の間をすり抜けた俺の手が男の手首を掴み小手返しを放つ。

回転してリノリウムの床に叩きつけられた男の腕を更に捻り肩を外しにかかる。
右肩からギヤチェンジの様な音を出した男は、激痛に声も出せずそのまま気絶した。

「俺のモンに手を出すとは、お仕置きという名の死刑が必要だな」

お決まりの「何だてめぇ！」という台詞を言われる前に全員に死刑宣告を告げる。

「俺のモンって、ずいぶん良いご身分やなぁ？」

京言葉を話しながら睨んでくる男、こいつがリーダーらしい。他の男が気絶した茶髪に駆け寄る中、俺から目を離さない。

「だろう？全員俺の（クラスメイト）だから。お前らはお触り禁止」

その挑発に乗ったチンピラの団体は一斉にかかってくる。
ゲームセンターが一気に慌しくなる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆刹那　ｓｉｄｅ◇

「皆さん大丈夫ですか？」

私のその言葉に皆何とか頷きを返す。

チンピラの怒号と悲鳴が響きわたる店内。
お嬢様や綾瀬さんの手を引いて出口近くまで四人全員を無事避難させた。
姫菱は私の視線に目を合わせる事無くそのまま喧嘩を続けている。
私達が逃げる事を気づかせない為に派手に喧嘩をしているのは分かるが、少しとはいえ怒っているらしい。
茶髪男が大河内さんに触れようとしたのが本気で気に食わないのだろうか？
姫菱には加勢しなくても問題無い。七～八人程いるとはいえ相手は一般人。
むしろ肩関節を外して気絶させる容赦の無さを見るにどちらかと言えば彼を止める人間が必要な気がする。
そのまま店外へ出る。まずは皆さんを安全な場所に避難させないと・・・。

ゾクッ

辺りを漂う濃密な気と魔力に背筋が凍る。ゲームセンターに視線を向けると感覚阻害の結界と・・・・

「無間方処の咒法結界・・・・」

限定空間内にいる敵をループ状の閉じた世界に閉じ込める結界だ。

（敵の狙いはこれか・・・・）

まんまと罠にかかってしまった。
建物の内と外で私達を分断し、お嬢様を連れ出した方を撃破する。
中にいる人間は感覚阻害の術の効果で、外で起きている事は分からなくさせて時間を稼ぐ。出ようにも結界内部からは脱出不可能。

おそらくあの不良集団はサクラだ。完全に敵の策にはまった形になった。
関心している場合ではない。
姫菱に頼れなくなった以上、私一人で何とかするしかないのだから。

「お嬢様、こちらへ！」

このかお嬢様の手を引き走り出す。
ここから一刻も早く離れなければ。人通りの多い場所に出さえすれば奴等も手を出しにくいはず。

「ちょ、ちょっと、姫菱くん置いてどこ行くの！？」

大河内さん達も追いかけて来るが構っていられない。

（お嬢様を守らなければ・・・・）

そして何より

（近衛を守る気持ちに嘘が無ければ、それで十分だ）

私の負い目を、秘密を隠し持っている事を許してくれた姫菱の期待を裏切るわけにはいかない。

## 第十話（後書き）

だんだんと刹那のキャラが崩壊していく・・・・。
誰か、誰か助けて下さい！

## 第十一話（前書き）

ほんの少し早く書けたので投稿します。
最後に戦闘シーンが少しだけ・・・。
第十一話、ご覧下さい。

## 第十一話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那　side◇

お嬢様の手を取って大通りを走る。お嬢様が付いてこれる速度で走っている為、敵との距離が一向に開かない。

「せ、せっちゃん、どこ行くん？足速いよぉ――――」

「ああっ！す、すいません、このかお嬢様」

目を向けるとお嬢様の息が少し速くなっている。後ろを走っている早乙女さんや綾瀬さんは完全に顎が上がっている。
図書館探検部とはいえインテリの二人には少々キツイかもしれない。
運動部の大河内さんは涼しい顔で付いてきているがそれでも困惑の表情を私に向けている。

「ちょ、ちょっと桜咲さん・・・・何かあったのー？」

肩で息をしている早乙女さんにそう言われてもここで止まるわけにはいかない。

殺気

気配のままに手を動かして投げられたものを次々と掴んでいく。投げられた得物は千本だった。

（白昼堂々街中で・・）

お嬢様ではなく自分を狙った事といい、掴める速度で投擲された事といい完全に遊ばれている。

しかし、どうにかして人通りの多い場所まで行かないと。

姫菱を置いてまで逃げてきたのに、ここで敵に捕捉されては彼に合わせる顔が無い。

大通り出て周囲を探る。そこに見えたのは

「あれ！？ここってシネマ村じゃん！何よ桜咲さん・・・・シネマ村に来たかったんだ～！？」

「それならそうと言ってくれれば・・・・」という早乙女さんの言葉を無視して考える。

太奉シネマ村。ここなら・・・・。そこまで考えて後ろの三人を見る。

このまま連れて行くべきでは無い。班員の二人も大河内さんも一般人だ。

判断は一瞬。

「すいません！」

大声で荒い息を付いて休んでいた三人の視線を集める。アドリブは苦手だがどうにかするしかない。

「わ、私このか・・さんと、ふ、二人きりになりたいんです！！」

何だこの言い訳・・・・。と、我ながら思う。口の回る彼だったらもっと上手い理由で切り抜けただろう。

しかし今は敵から逃げ切ることが最優先。「ここで別れましょう！！」と強引に押し切る。

「お嬢様失礼！」

同意も待たずにお嬢様を抱え上げる。足に気を巡らせ脚力を強化し、一気に跳躍。大河内さん達に見られているが、そんな事言ってられない。

シネマ村の周りに高くそびえる外壁の上に着地。そのまま屋根を走ってシネマ村内部に下りる。

「せっちゃん、私らお金払ろうてへん・・・・」

このかお嬢様の冷静なツッコミに一瞬固まってしまう。

確かに・・・・。

お嬢様まで犯罪に巻き込んでしまった事実に着地してから気づく。

(姫菱・・・・上手い言い訳を教えてくれ・・・・)

味方が居ないこの状況で一番必要だと感じたのは彼の口の上手さだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　side◇

「はめられたか・・・・」

自動ドアの前に立ち尽くしながら思わず呟いてしまう。
周囲にはチンピラ八人が床に沈んでいる、だけ。
そう。それ以外の人間がいないのだ。本来喧嘩が起きたらそこから逃げる人や警察に通報する店員まで居ない。カウンターの奥や、客がいたはずの場所には紙型が落ちていた。

「全員式神かよ・・・・」

周囲のおびただしい数の紙切れを見ながら苦虫を噛み潰す。
直接絡んでくる不良は本物の人間だが、それ以外は全て式神によるエキストラ。近くで見ていたのに全く気が付かなかった。
急いで外に出ようにも出入り口から出ると、その『出入り口から入ってくる』というトンデモ状況に陥っていた。

（ループ状の結界か・・・・）

かなり物騒な解決法になるが突破は後回しだ。まずは尋問を行おう。
脱臼や骨折をしているチンピラの中、比較的軽症の一人を引っ張り上げ筐体の上に座らせる。

「おい起きろ！」

肩を大きく揺すったせいで後頭部をディスプレイにぶつけているが今はどうでもいい。ようやく起きた。

「な、何や、お前・・・・もう勘弁してくれや・・・・」

壁にぶん投げられた恐怖が蘇ったのか、金髪の不良は俺を見てそんな言葉を漏らす。

「簡潔に言え。誰に雇われた？」

痛みに歪んでいた顔が今度は驚愕に変わる。どうにか言葉を紡ごうとするが俺はそれすら遮る。

「何の事だ？っていう台詞も時間が無いから言わなくて良い。逃げていく女を誰一人追っていかずに俺の相手をするなんて明らかにおかしいからな？」

そう。あの騒ぎの中、囲んでいた八人全員が俺にかかってきたのだ。逃げる大河内達を捕まえるなり、人質にするなり選択があったはずなのに。まあ、桜咲がいた以上できはしないだろうが。

自分達の計画とも言えないような計画を完全に見透かされ、金髪は苦渋の表情を浮かべる。

「言うと思うか？」

これからされるであろう拷問の恐怖に歯を食いしばりながらも強がる金髪。それでもコイツに有利な情報を渡す位ならば、という意地がその目に宿っていた。

しかし俺の唇は弧を描き、悪魔の笑みを浮かべる。

この手のプライドなどいくらでも折れる。男とは女と比べたとき体は強くとも心は脆く、覚悟していない事態にはいとも簡単に敗北する生き物。

別の方向から脅しを掛ければいい。

「そうか。同性愛者の俺にそんな強がりを言ったのはお前が始めて

だよ」

「へ？」という金髪の声を聞きながら、俺は相手の両手首を左手一本で頭の上に拘束。左脚で金髪の両膝を固定する。右手には先ほど他のチンピラから奪っておいたバタフライナイフ。襟周りに引っ掛けて縦に一閃。

それだけでTシャツが二つに裂け不良の肋骨から腹部までが露わになった。

この時になってようやく男の顔が極大の恐慌に引きつり、急に抵抗し始める。拷問や殺される事以上の恐怖が金髪を襲っているのだ。

しかし、気による肉体強化よって発生した剛力に身動き一つできず首を振るだけ。

「ここからはアタシのお楽しみタイム♪」

判りやすいようにオネエ言葉に切り替えた俺は、空いた右手をゆ～っくりとベルトに伸ばしていく。そこで不良の意地が限界値に達した。

「言う！言います！！言わせて下さい！！！だから！だから・・・・！」

京言葉すら忘れ、先程までの態度を一転。男の口から情報が溢れ出す。

一応言っておくと、俺は同性愛者では無い。

異性愛者だ。

全て演技である！↑ここ重要

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

戻ってきてしまった・・・・。いや、別に間違った事ではないはず。
桜咲さんが近衛さんを抱えてシネマ村に無断侵入した後、早乙女さんがわくわく顔で二人の後を追い、綾瀬さんも溜息を付きながらシネマ村に入って行った。
二人曰く『龍宮さんや楓さんの話ではそこそこできるらしいから大丈夫です』。『放っておいても死にゃしないって』。との事で姫菱くんはそのまま放置となった。
そのまま追って行きたい気持ちもあったが、一人残された私はどうしても姫菱くんが心配で道を戻ってゲームセンターの前に来ていた。
正直怖い。
さっき高校生らしき人達に囲まれた時、足の震えが止まらなかった。
皆、私の体を見ていやらしい顔を浮かべていた事に今でも嫌悪感を感じる。
近衛さんやいつも騒いでいる早乙女さんまで怯えていたから、私が何とかしなきゃと思っただけだ。あの不良達がいる場所に戻ってきているなんて考えたくもない。
でもここに姫菱くんもいる。
何で彼があんな大騒ぎになるような喧嘩をしたかは薄々分かってい

る。私達を安全に逃がす為だ。
相手の仲間を問答無用で攻撃し、挑発して注意を自分一人に向ける。
その間に私達四人を桜咲さんが外に連れて行く。
その後どうして桜咲さんが姫菱くんを置いてシネマ村に行ってしまったのかは知らないが、八対一の喧嘩をしている彼を放っておけない。
普通に考えて姫菱くんが勝てるなんて思えない。最初に一人倒した時に合気道みたいな技を使っていたけど、それでも七対一。勝率は絶望的だ。
そのまま袋叩きにされているかもしれない。助けに行かないと。
携帯電話を取り出し、「1」「1」「0」を押した後、「発信」のボタンに親指を掛ける。ゲームセンターの看板を見上げ、頭の中で店の名前を何度も反復。
怖い。もし自分の考え通りなら八人全員が私一人に向かって来る。
怖い。でも不良に触られそうになった時、姫菱くんが助けてくれた。
怖い。すぐに警察を呼んだって駆けつけるまでに時間がかかる。
怖い。でも私達を逃がす為に一人で戦っている。
怖い。あの不良達が私の体を見てどんな事を想像していたか、もし捕まったら何をされるか。考えるだけで泣きそうになる。
怖い。でも覚悟は決まった。
意を決し観音開きの扉に手を掛け、強化ガラスのドアを押した。

轟音。

地面を一瞬揺らし、大気を震わせたそれに驚いた私は反射的に後ずさる。周囲を見回すと横手から煙。

「・・・・察署です。何かありましたか？」

聞こえる声に右手を見ると携帯のティスプレイに浮かぶ「通話中」

の文字。驚きのあまり「発信」ボタンを押してしまっていたようだ。
姫菱くんが無事かどうか確認するまで通報するつもりは無かったが、この際構うものか。

「ゲームセンターで大きな音が起こって、喧嘩が響いて・・・・」

パニックの所為か言いたい事が順番に言えない。そのまま店の名前を電話の向こうの警察官に告げる。

「とにかくすぐ来て下さい！」

そう叫んだのと

「う～わ失敗、失敗・・・・」

私のさっきの葛藤と覚悟なんて知る由も無い声が聞こえたのは同時。聞こえた方向を見ると姫菱くんが立っていた。

「姫菱くん！」

思わず叫んだ私は駆け寄っていった。勢いそのままに抱きつきそうになったがどうにか急ブレーキ。
彼は体中に付いた白い粉塵を両手で叩き落としていた。頭までうっすらと白く化粧をしていて初老の頭髪か、罰ゲームを受けたお笑い芸人の様になっていた。
出てきた方向を見ると瓦礫の小山。ゲームセンターの壁にまるでトレーラーでも突っ込んだかのような大穴が穿たれていた。

「大丈夫？怪我とか無い？」

「大丈夫、大丈夫」と答える彼の体中を見回す。その体は怪我どころか傷の一つも無いようだった。顔も殴られた様な後は一切無く、ただ全身が白い。

「大河内。溶き卵とパン粉、１８０℃に熱した油を用意してくれ」

どうやら本当に何処にも怪我は無く、頭だけが大丈夫じゃないようだ。つまりいつも通り。

「それより近衛と桜咲は？」

「え、み、皆シネマ村に」

そう言い切る前に独特のサイレン音が聞こえた。警察を呼んだんだったと今頃になって思い出し、反射的に右手を見る。

携帯ディスプレイには「通話時間　１３秒」の表示。どうやら姫菱くんの声を聞いたと同時に電話を切ってしまっていたらしい。

「逃げるぞ大河内」

音が近づいてくる。パトカーが来るのも時間の問題だ。ここにいたら面倒事に巻き込まれる。逃げる理由は明確だ。

でも、

「待ってよ」

「何が起きてるの？」そう聞きながら自分を引っ張る姫菱くんに抵抗。手は離れなかったが彼は足を止めた。

急に近衛さんを連れて走って行った桜咲さん。人一人抱えて外壁を飛び越えた脚力。

八対一の喧嘩でも無傷の姫菱くん。出入り口からではなく壁を壊して出てきた事。
何一つ分からないが、絶対どこかで一つに繋がる確信があった。そして次に向かう先がシネマ村である事も。
そして急に怖くなった。繋がった先は間違いなく危険だ。そんな場所に彼は自分から行こうとしている。掴まれた手を握り返し再び聞く。

「一体何が起きてるの？」

答えは無い。沈黙だけが流れ、その状況に耐え切れなくなったのか自分の顔がくしゃくしゃに歪む。ダメだ、泣くな私。

「ねえ、なに「話すつもりは無い」」

冷たい宣告に遂に涙腺が決壊。どうして自分が泣いているのか分からない。完全に自分の勘違いかもしれないし、困らせる事なのもわかっている。けどそんな理由では嗚咽も涙も止まらなかった。
どんどん大きくなるサイレン。あと十秒もしない内に警察が来るだろう。そんな中、自分は姫菱くんを引き止めている。
姫菱くんは小さく溜息を吐き、手を離す。その瞬間私の体は宙に浮き、固定される。
すぐ近くに姫菱くんの横顔がある。いきなりの展開に訳が分からなくなり暴れるも、姫菱くんがそれを許してくれない。
自分がいわゆる『お姫様だっこ』されている状態だと知ったのは彼が走り出した後だった。

「大河内」

視界の端の風景が飛ぶような速度で流れていく中、彼は目を右に動

かして私を見ている。

「俺は話すつもりは無い」

再度の宣告。けど今回は「だから・・・・」と続く。

「自分で見て考えろ。答え合わせなら付き合ってやる」

大通りへ続く角を曲がりながら彼は答える。それ以降は何も言わず、目も合わせない。けど優しさを感じる横顔だった。
私も何も言わずに彼の首に腕を回した。
大通りに出た後、彼は本格的に加速したのか歩行者を置き去りにし、自転車を飛び越え、車を追い抜きながら疾走。
シネマ村を目指す。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

太奉シネマ村。時代劇で使うセットをそのまま詰め込んだような世界観が味わえる娯楽施設。
周りには観光する人、貸し衣装に身を包む人。
人、人、人。これだけ人がいれば襲っては来れまい。ここで時間を稼いでネギ先生達の帰りを待とう。姫菱を助けに行くのはそれからだ。

（ネギ先生、ネギ先生・・・・！）

同行させていた式神に念を送るも応答なし。やはりダメか。感覚阻害の結界の余波で式神との連絡が切れてしまった。
しかし今のネギ先生に頼るのはまずいかもしれない。あちらはあちらで犬神使いとの戦闘でかなり消耗していた。
最終的にはネギ先生のカウンターと突然現れた宮崎さんの機転によって勝ちを収めたものの、こちらの援護に来れる状態ではなかった。
どうしたものか、と考えていると

「せっちゃん、せっちゃん～～？」

その言葉に振り向くと、そこにはお姫様がいた。
赤を下地にした毬と花の柄をあしらった振袖と長い帯。長い黒髪を結う簪にも同じような装飾。
舞妓や芸妓さんが使うようなぽっくり下駄を履き、牡丹があしらわれた番傘を差すその姿は大名や将軍家のお姫様がふさわしかった。
「じゃーん？」と私に見せびらかすようにくるくる回っている。思わず私は聞いてしまう。

「お、お嬢様その格好は！？」

「知らんの？そこの更衣所で着物貸してくれるんえ」

そう言って指を差すそのさきには確かに『更衣所』の看板。受付なのか脇にいるお姉さんが満足気にお嬢様を見ている。

「えへへ、どうどう？せっちゃん？」

「ハッ・・いや、そのっ、もう、お・・おキレイです・・」

しどろもどろになりながらも何とかその言葉を口にする。「キャー――やった――？」と無邪気に喜ぶその姿に思わず苦笑してしまう。いわゆる京美人のこのかお嬢様は和服がよく似合う。同じ京都出身だが自分ではこうはいかない。

しかしお嬢様はそうは思っていないらしかった。

「ホレホレ、せっちゃんも着替えよ？ウチが選んだげる――」

「えっ？いえ、お嬢様っ・・・・・」

「私、こーゆーのはあまり・・」という抗議は聞き入れてもらえず、そのまま更衣所に押し込まれる。係のお姉さんが笑顔で、まるで得物を見つけた肉食獣の笑みを浮かべていた。

――――――――――――――――――――

抵抗空しく更衣所に押し込まれた私はお嬢様と係のお姉さんに着せ替え人形にさせられた。そして最終的に着替えた衣装は

「・・・・なぜ私は男物の扮装なのですか？」

浅葱色の袴。腹には作り物とはいえ小振りの胴鎧。腰に竹光を差し、額に鉢金を巻いて、背に「誠」の一文字が入っただんだら模様の羽織を纏う姿はどこからどう見ても、幕末の京都で治安維持活動に従事していた新撰組の衣装だった。

「似合うとるでせっちゃん」という褒め言葉をこのかお嬢様から頂いたが・・・・。

（夕凪が死ぬほどそぐわない・・・・）

そう思って自分の得物を腰に差した姿を見る。
それもそのはず。本来この夕凪は自分の体格から考えると長すぎるのだ。剣道でも足から胸辺りまでの長さの竹刀を扱うのが基本だが、身の丈ほどの長さをほこる野太刀を帯刀すると羽織の裾を越えてほぼ真横に差す格好になってしまう。
身長１５１ｃｍと小さい私では正直不恰好に映る。

（姫菱なら似合うかも・・・・）

自分より長身の彼なら少なくとも自分よりは格好良く見えるだろう。
正直、一緒に来たかった。
姫菱には随分迷惑をかけている。仕事とはいえお嬢様の護衛でも何度も助けてもらっているし、自分の『負い目』とその事を隠していた事を知っても許してくれた。
世話になりっぱなしの彼にどうにか恩返しできないだろうか？

「せっちゃん見て見て」

その言葉で思考から意識を戻しその方向に顔を向けると、

「ふぉれ甘食？」

大きな甘食を口に咥え、頬の肉を下から持ち上げた饅頭の様な顔をしたお嬢様の顔があった。
あまりの出来事に堪えきれずに吹き出してしまう。肩を震わせて耐えるもやはり笑ってしまう。

「やっと笑ってくれた、せっちゃん？」

そう言って満面の笑みを浮かべるお嬢様。その言葉と笑顔に心臓が跳ねる。

「姫菱なら大丈夫や。アスナも姫菱の事強い言うとったし。それに姫菱は危のうなったら、ちゃんと逃げるんちゃうかな？」

確かに。彼の強さは一緒に戦った上に、実際に手合わせもした。だからこそ分かる。

あの強さを支えているのは彼の頭脳だ。

あの変幻自在の戦闘スタイルは相手の苦手な距離で戦う為、敵の思考の裏を欠く必要がある。

相手の攻撃を読み、攻撃範囲を見切り、防御と回避と攻撃を的確に使い分け、戦う。想像以上の頭脳労働だろう。

そんな彼が護衛対象がいない状況で長々と戦うだろうか？たとえ結界を脱出した後に伏兵がいたとしても、戦う必要が無い状況で彼が戦うとは思えない。何の躊躇いも無く逃げの一手を選択するだろう。

その結論に達した時、お嬢様に心配をかけていた事に今更ながらに気付いてしまう。

今までは影ながらとはいえ自分一人で護衛してきたのに、二、三日一緒に行動しただけの彼が居ないだけでこんなにも心細く、余裕が無くなる。

一体自分はどうしてしまったのだろう？

理由は大方分かっている。しかし認めたくないのが本音だった。自分がこんなに惚れっぽい性格だったなんて信じられない。というより信じたくない。

でも学園長の『あの話』が本当だとすると・・・・・。お嬢様も姫菱に少なからず好意を寄せているようだし・・・・。

「だから姫菱にお土産買うとかんとな」

その言葉を聞いて頭を振って思考というか妄想を排除。今はお嬢様の護衛に専念しよう。気持ちの整理はその後だ。

（思えば私はずっとずっとこんな風にお嬢様と過ごしたかったのかもしれない・・・・）

お嬢様が向かった先は土産物を扱う店だった。そこでお嬢様は姫菱へ甘食の箱詰めを買っていた。二箱も。
やはりコレが姫菱への共通見解らしかった。
因みに私は焼き菓子の箱詰めを購入した。
二箱。

――――――――――――――――――――――――

シネマ村に入ったときに見た大きな橋の前に来ていた。どうやら色々見て歩いている内に一周してしまった様だ。
向こう岸から何か聞こえる。その方向を向いたときには「それ」は近くに来ていた。
回転する車輪と、荒々しい馬の蹄。暴力的なまでの轟音を伴って走る馬車が目の前で急停止した。
驚くお嬢様を後ろにかばいながら抗議の声を上げようとするが、

「お・・・お前は！？」

「どうも――神鳴流です」

馬車から降りてくる人物を確認して思わず声を上げてしまう。この

間延びした声色、間違いない。京都駅で出会った・・・・。

「じゃなかった・・そこの東の洋館のお金持ちの貴婦人にございます～～。
そこな剣士はん。今日こそ借金のカタにお姫様をもらい受けにきましたえ～～」

豪奢なドレスに身を包んだその姿は確かに貴婦人が相応しい。しかし、洋館の貴婦人?借金のカタ?意味が分からない。

「な・・・・何?何のつもりだこんな場所で」

「せっちゃん、これ劇や劇。お芝居や」

お嬢様の言葉に昔の記憶を引っ張り出す。聞いたことがある。シネマ村ではアトラクションとしてお客を巻き込んで突然お芝居が始まったりするらしい。と・・・・
なる程。劇に見せかけて衆人監視の中堂々とお嬢様を連れ去ろうという訳か・・・・。良く出来ている。

「そうはさせんぞ!このかお嬢様は私が守る」

敵の狙いを打ち破るつもりで啖呵を切ったのだが、

「キャ――!せっちゃん格好えー?」

お嬢様は勘違いしたようだった。橋の両脇に広がった野次馬も歓声を上げている。

「そーおすかーほな仕方ありまへんなー」

声に抑揚は無いが、顔を赤らめながら手袋を外し、こちらに投げてくる。西洋の知識にはあまり詳しくないがこの行為は確か・・・・。

「このか様をかけて決闘を申し込ませて頂きます――・・ご迷惑と思いますけど、ウチ・・・・手合わせさせて頂きたいんですー」

「刹那センパイ？」。その言葉を最後に殺気と共に笑みを向ける。喜悦に歪んだ笑みだった。嫌な汗が流れる。

しかしすぐ後ろにいたこのかお嬢様はそうはいかない。あれほどの殺気に当てられた彼女の顔は青ざめ、膝を付いていた。

抱き起こそうとするも足に力が入らないのか立てないでいる。

振り向くと月詠がこちらに向かって疾走。大小の刀を逆手に握り肉薄してくる。

お嬢様が後ろにいる為、回避不可。夕凪を抜き右の白刃を鍔元で防ぐ。しかし左の短刀が首筋に飛び込んでくる。防御が間に合わない。

（マズイっ・・・・）

撥ねるのは自分の首ではなく鋭い音だった。

横目で右を見ると茶革に金糸が巻かれた鞘、そこから伸びる美しい湾れ乱刃。

鞘と同じ装飾が施された柄を握る五指の手前には自分と同じように額に鉢金を巻いた横顔。

「変態の相手は大変だな、桜咲・・・・」

その言葉だけで誰だか分かる。こんな状況で冗談を口にする人物は一人しかいない。

連撃を防がれた月詠は距離を取ろうと蹴りを放つ。しかし彼はその

左足刀を鞘を握ったままの左拳で迎撃。
攻撃を攻撃で防がれ、体格に劣る月詠は後ろに飛ばされる。しかし空中では崩れた体勢を立て直せない。剣士はその好機を逃さない。左正拳を出した反動で右腕を引き抜刀、今度は右手で突きを放つ。貴婦人は双刀を交差させ辛くも防ぐ。
弾丸のような速度で弾かれた月読は予想以上に距離が離れた為か追撃に移れないでいた。

「ずいぶん遅かったな？」

「主人公は遅れて現れると言うが、脇役は大変だな」

私の軽口に更に軽口を返す。段々と感化されてきた気がするがそれすら嬉しく感じてしまう。
足袋と草鞋に包まれた足と浅葱色の袴。私とは違い胴鎧を着けていない上半身は、同色の着物に包まれている。だんだらの羽織と鉢金を身に着けた格好は自分と同じ衣装だが、帯刀用だと言っていた腰のホルダーだけが浮いている。
新撰組に扮した姫菱が横に立っていた。
しかし、刀を納刀し腰に戻す姫菱の姿を見た私は疑問が沸き立つ。

「着替える時間があったのか？」

「シネマ村に来たんだから少しは楽しまねぇとな」

私服ではこの劇に参加できなかったとはいえ何だか腑に落ちない。
姫菱は私の抗議の視線を軽く受け流し後ろのこのかお嬢様を抱きかかえる。いきなりの事に慌てているが「失礼、お姫様」と耳元で囁かれ顔を真っ赤にして黙り込んでしまう。くっつきすぎだ姫菱！

「ひゃっきやこぉ～」

向こう岸近くから間延びした声が響く。それと同時に短冊のように連なる呪符が掲げられる。
そこからこぼれる色とりどりの光の煌めき。次の瞬間、次々と河童や天狗、ぶんぶく茶釜といった可愛らしくデフォルメされた妖怪が虚空より現れる。先頭の妖怪が掲げる旗には宣言の通り『百鬼夜行!!つくよみ組』と書かれていた。
橋の上に整列し、召喚者の号令を待つ妖怪集団に思わず身構える。数が多い。周りには見物人も多く、広い空間が無い。これでは刀が振れない・・・・。

「観客の皆様。これより洋館の貴婦人率いる百鬼夜行の一団とお姫様を守る新撰組二人による決闘が始まります!!
巻き込まれない様に十分に離れてご観覧下さい!」

橋の上に姫菱の大声が響く。その言葉通り劇と勘違いして近くで見ていた客も遠ざかっていく。
上手い。やはり姫菱も同じ事を考えていたらしい。これなら周りの被害を気にせずに戦える。
しばらくして橋の上に広い空間が出来上がると、それを待っていたかのように妖怪が突進してくる。

「あの変態は任せた。お前は向こう岸で戦え」

姫菱は私の近くに来てそう耳打ちする。耳に息がかかる感触に赤くなってしまうのを隠しながら頷く。・・・・待った、向こう岸?橋の上じゃ・・・・?
そう思って振り向く。左腕一本でお嬢様を抱え上げた姫菱は橋のちょうど真ん中にいる。その右手から感じる強力な気の高まり。

陽炎が見えるほどの気の一極集中、あの立ち位置、彼の顔に浮かぶ不敵な笑み。
嫌な予感しかしない。
敵に向かって走り出す。いや、逃げ出す。一刻も早く橋から降りなければ！

「魔神拳！！」

全力疾走しながら後ろを見る。
姫菱は拳を真下に打ち付け、本人はその反動で空に舞い上がり後退する。一瞬遅れて発生した衝撃波は一気に広がり横幅７ｍはあろう橋を飲み込んでいく。頑丈なはずの橋脚ごと粉微塵に破砕し、轟音と共に橋の真ん中に大穴が出現。それに伴って中央より両岸に向かって連鎖的に橋が川底に引っ張られるかのように落ちていく。
巻き込まれる前に跳躍していた私はそのまま百鬼夜行の一団の頭上を飛び越える形になる。主人を守ろうと攻撃を仕掛けようとした妖怪たちは方向転換しようと橋の上で止まってしまう。そのせいで大半の妖怪は衝撃波に吹き飛ばされ、残りは建材と共に川に沈んでいった。
岸に着地。振り返ると先ほどまで足を置いていたはずの橋がただの木片になって川底に突き刺さっていた。技の衝撃波と橋の大破壊に巻き込まれた妖怪達は寄代に戻り川下に流されていく。

「無茶苦茶だ・・・」

この光景の前ではそんな言葉しか出ない。
しかし橋を使った罠とはいえ、たった一撃で百鬼夜行の軍勢を片付けてしまった。
向こう岸に目を向けると姫菱が朗らかな笑顔で手を振っている。抱き上げていたお嬢様は至近距離で衝撃を受けた所為か目を回してい

た。
敵であるはずの月詠も全くの予想外だったのか大口を空けてその光景を見ている。
しかし呆けていたのは一瞬。私の姿を見つけると二刀を構え突進してくる。足早に間合いを詰める私に一直線に向かってくる。
神鳴流同士の殺傷圏が接触した瞬間、重々しい金属音と共に決闘の火蓋が切って落とされた。

## 第十一話（後書き）

魔神拳のシーンをどうしても書きたかったんです！
決して百鬼夜行の一団を書くのが面倒だったわけでは・・・・。
でも、このかの脱げシーンとか書きたかったかも・・・・。

## 第十二話（前書き）

フハハハハ！
完全徹夜のテンションと幻覚が私に力を与えてくれる！
見える！私にも見えるぞ！
第十二話ご覧下さい。

注：今回の木乃香　ｓｉｄｅには大甘な評価をお願いします。

## 第十二話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇木乃香　ｓｉｄｅ◇

姫菱の息使いがすぐ近くにある。心臓の鼓動も体越しに感じる。両腕で抱きかかえられる「お姫様だっこ」されとる状態やから仕方ないんやけど、はずかしいモンははずかしい。でも角を曲がったり、人垣を飛び越えたり、屋根に上がって走ったり。その度に強く抱きしめられるんは嬉しいなあ。役得とばかりに首に両腕を回すと姫菱もウチを抱え直す。不意に目が合う。

「何か嬉しそうやな」

「そりゃそうだ。ここだけの話・・・・・柔らかいモノが当たってってな・・・・・」

その言葉に思わず腕を解いて体を離そうとしてしまう。が、姫菱は落としそうになったんか、また抱え直す。これやから男は・・・・。という思いもあるが、姫菱なら・・・・まあええか・・・・。

再び首に腕を回す。胸の大きさに自信ないからあまりしたくないんやけど・・・・。

でも、さっき目回してたんから復帰して、ずっと走っとるけどウチ重くないやろか？姫菱と話すようになって今までより身だしなみに気い付ける様になったけど、まだ春やからダイエットまでは・・・・

。

イヤ、別に油断しとったわけや無いから大丈夫・・・・なはず。・・・・適正体重、適正体重・・・・。

一際強う抱きしめられまた跳ぶ。独特の浮遊感が身を包む。下に見える人と目があってしまい思わず抱きついてしまう。

着地。跳ぶ瞬間とは違って全く衝撃を感じない。なるべく丁重に運ぶ姫菱の優しさがそこにはあった。

何度目か分からんけど顔が赤くなる。それと共に自分の気持ちを再確認してしまう。

一緒の班になる聞いた時にはもう自覚しとったから・・・・。多分、最初は一緒に買い物行ったときやな・・・・。

でも姫菱狙いの女子多いらしいなあ・・・・。ウチのクラスはネギ君がいるからそんなんでもないけど・・・・でもせっちゃんとアキラは確実やな。

そんな考えを振り払うような急減速による衝撃。姫菱を見ると苦渋の表情があり、その視線を追うと肩を出した着物を着た女の人と白い髪の男の子がおった。

「お嬢様渡して貰おか」

眼鏡の奥の瞳が明確な敵意を持ってウチを射抜き思わず身が竦んでしまう。自分の顔が青ざめるのが分かる。知らず知らずに姫菱の羽織を握り締めてしまう。

「近衛・・・・。しっかり掴まってろ」

更に抱き寄せられ、お姫様だっこから片手一本で抱えられる。左肘に腰掛け姫菱の頬に胸を押し付ける格好になってしまいかなり恥ずかしい。

しかし姫菱の表情はそれでも表れた二人を注視していた。その場の

圧力と恐怖に段々と飲まれかけた時、「安心しろ」と声が掛けられる。

「何があってもお前は守る。振り落とされんなよ」

その言葉と共に三人が動き、逃走劇が始まった。

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

屋根瓦を踏み割る音、重々しい金属音に合わさり舞い散る衝撃と火花、人々の間に上がる歓声。

その全てを置き去りにするような高速移動の中、月詠に攻撃を仕掛ける。

上段からの打ち込みを打刀一本に防がれ短刀を持つ左ががら空きとなる。しかしそこから半歩踏み込み更に押し込んでいく。

夕凪の刃が肩口に触れるその瞬間、首筋を狙っていた左手が翻り右の白刃に添えられ押し返される。三刀が交差するその一点で金属の悲鳴が上がる。

二刀が妖しく動き夕凪が左に逸らされる。慣性のまま振り下ろしつつ刀を始点に半歩左へ。野太刀を防壁として掲げ二連撃を防御。

貴婦人はそのまま後方に下がる。三角跳びの要領で商店の壁、柳の木の幹を駆け上がり、上空より再び強襲する。

「にとーれんげきざんてつせーん！」

腰の刀を逆手で抜刀。竹光の刀身が自壊しないギリギリまで気を流し込み夕凪との連撃を繰り出す。
本来、刀の攻撃範囲の外にいる敵を切り裂く螺旋の連撃が一足一刀の間合いで放たれる。鉄をも両断する斬撃を夕凪で弾き、竹光で防ぎ、首を振ってかわしていく。左の模造刀を振るう度に枯れ木が折れる様な音が響く。刀身が短くなっていく感覚を防御用だと割り切って更に前進。
視界を夥しいほどの火花と轟音が埋め尽くす中、互いの三刀がぶつかり合い再び鍔迫り合いが始まる。

「最近の神鳴流は妖怪を飼っているのか？」

最早刀とすら呼べなくなった柄と鍔を投げ捨て、刀の向こうにいる後輩に話しかける。

「あの子達は無害でしたえ。ご安心を――。しかし・・・・一撃で全滅させられるとは思わんかったです～」

そこは私も同意する。橋一つ沈めたことも含めて。月詠とお嬢様を分断する為とはいえ・・・・。

「ウチの望みは――ただ刹那センパイと剣を交えたいだけ・・・・！」

顔を赤らめ、眼鏡の奥の瞳が怪しく光る。背筋に恐怖以外の何かが走る感触に耐えながら鍔迫り合いの微妙な力加減を維持。
姫菱が何故彼女を『変態』と呼んでいたか今更ながらに理解した。

「戦闘狂か。付き合わんぞ！」

「まあまあ、そう言わんと～～！」

刀の押し合いを飛び越えて左の短刀が三度目の強襲。鍔競り合いの角度を変えて防御するも、自由にさせてしまった右腕から大薙ぎの一閃。

後方跳躍で回避しつつ戦術を再確認。（一撃一撃の攻撃力に劣る月詠の連撃を夕凪による力押しで塗りつぶし、両手で防御させることで常にこちらの攻撃を押し付ける）

相手の速さと連撃を主体とする展開に巻き込まれたら野太刀を使う自分に勝ち目は無い。剛力と体捌きで攻撃と回避を行い致命傷を叩き込むしかない。

遠くで破砕音が響く。横目で確認すると天守閣の近くで戦塵が上がっている。姫菱側も戦闘状態になっている様だ。

「あのお兄さんもずいぶん美味しそうやったなあ？」

期せずして同じ方向を見ていた月詠から聞き逃せない発言が飛び出す。戦塵の上がる方向に熱い視線を送るその顔だけを見れば恋する乙女だった。どう考えても戦闘狂としての発言だろうが、頬を染める感情がそれだけとはどうしても思えない。

華奢な肢体を包むドレス。スカートの裾は破れているがそこから覗く細い脚。風に揺れる髪は長く美しい。京言葉と間延びしたしゃべり方を姫菱がどう捉えるかは分からないが、ふんわりした印象も含め男好きする顔ではなかろうか？

ヤバイ・・・。同性として完全に負けている・・・。

その事実に膝を付きそうになるが、慌てて思考を戻す。

逃げたはずの姫菱が戦闘中という事はお嬢様も巻き込まれている可能性がある。彼が追いつかれた以上、相手は複数か実力者。

援護にいかなければ。という思いとは裏腹に、月詠と姫菱を会わせたくない。という浅ましい思いが心の中から湧き出る。

自分の感情がどっちつかずのまま剣戟が再開する。
どちらの意思かは分からないが神鳴流同士が撒き散らす破壊の嵐は少しずつ天守閣に向かっていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

三階建ての高さはあろう岩壁をほぼ垂直に駆け上がり石垣の上に着地。俺が駆け上がった証拠であるかのように詰まれた岩に一瞬遅れて『何か』が突き刺さる。
射線を逆に追っていくと天ヶ崎　千草が獲物を見る目を向けながら笑みを浮かべていた。背後に従えるは身長３ｍはくだらない異形の怪物。
全身を鋼のような筋肉と金属色の剛毛が覆う。広げたら全長５ｍを超えるであろう翼はさながら蝙蝠の様であるが、分厚い皮膜とそれを支える骨格からは力強さを感じる。根元から折れ消失した左角と眉間に張られた呪符が間抜けさを誘うものの口に収まりきらない鋭い犬歯と油断無くこちらを見据える眼光からは悪意と知性、そして凶暴性を感じさせる。
『ルビカンテ』
ダンテの『神曲』に登場する悪魔の名で呼ばれていた。
ナイフの様な爪を生やした右の五指が握るのは怪物の身の丈ほどもある和弓。横倒しに設置して使うような弩砲サイズの弓を直接構えるその光景はまさしく悪夢の一言に尽きる。
石垣に突き刺さった物の正体は常識外れの筋力から繰り出される、俺の身長など軽く超える長い矢だった。

第二射をつがえる動作を見ている暇など無く、更に横に飛ぶ。白髪の少年が振り下ろす拳が石垣に決して小さくないクレーターを作る。着地して近衛をまた抱え直す。

近衛は俺が逃げ回るこの光景に恐怖し、血の気が引いた顔は青ざめている。さっきから演技だ、ＣＧだ。と言い聞かせているがさすがに信じていないだろう。

少年から繰り出される掌底や蹴撃の舞踊を近衛を右に左に抱え直しながら腕で防ぎ、柄尻で弾き、鞘で逸らし、また後ろに下がる。問題は近衛を守りながら戦わなければならない事でも、弩砲でもなく、この少年の存在だった。

弩が俺や近衛を狙おうと遮蔽物が多いこのシネマ村ではあまり意味が無い。建物を貫くほどの破壊力があろうと観客にまぎれて逃げ回れば良い。一般人を傷付けた汚名をあちらが被るだけ。魔法使いの矜持が一般人を傷付けさせないだろうが俺の知った事ではない。

しかしこの少年の格闘能力が戦術の全てを覆す。

一見踊りを踊っているようにも見える動作、円周上を歩く様な独特の歩法。良くは知らないが十中八九中国拳法の一派。

掌底を多用することから考えて必要以上の接近戦は危険と判断。人一人抱えた状態で組み伏せられるか、投げられでもしたらその時点で詰みだ。

弩が連射ではなく狙撃の形をとっているのは単に誘拐対象である近衛を俺が抱えているからだ。その為少年による白兵戦で直接撃破を狙ってきたのだろう。

こちらも近衛がいる以上魔法を使うわけにはいかず、体一つでどうにかするしか無い。

少年と距離を取った俺の足元に第二射が着弾。その矢を足場に近くの木に飛び移る。人が二人乗っても折れ曲がらない程の頑強な矢が打ち込まれている事実に背筋が凍る。最早、矢というより細い砲弾だ。

木の幹を蹴りつけ空中で側宙。そのまま二階の屋根の縁に着地。少

年との距離を確認すると既に目の前にいた。
左から迫り来る右回し蹴りの超衝撃を国綱の鞘を掲げて何とか防御。
しかしネギ先生と変わらない背丈の少年が、近衛を抱えているため合計体重が１００ｋｇ近い俺を足一本で薙ぎ払い吹き飛ばすっ！
屋根瓦を削り飛ばす二本の轍を描きながら減速、停止。しかし白髪の少年は一気に距離を詰める。こちらに体勢を立て直させる時間をくれる優しさはその無表情の顔の何処にも存在していなかった。

「封翼衝！」

左に大きく回りこみながら鞘に入ったままの国綱を叩き付ける。その攻撃で屋根の縁まで弾き飛ばすものの、完全に防御されていた。
追撃を即座に諦め、方向転換し三階の屋根に着地。俺より先に上昇していた少年は上空から降下し踵落としを放ってくる。
破城槌の如き脚の打ち下ろしを再び鞘で防御。少年の全体重が乗った奇襲に膝が沈みそうになるのを歯を食いしばって耐える。
しかし、俺自身の体が衝撃を受けきっても足場の屋根はそうはいかない。瞬間的に発生した巨大な衝撃に瓦は耐え切れず破砕、足首まで埋まる。
近衛を横に放り投げ、空いた右手で抜き打ちの一撃を放つ。しかし鞘を蹴りつけた少年は上空に逃れる。どんな反応速度だ！
そのまま膝をたわめ追撃を仕掛けようと、見せかけそのまま右方向に大きく跳躍。
視界の端では自分がさっきまでいた場所に身の丈を超える長槍の群れが連続で突き刺さり屋根が陥没していくのが確認できた。舌打ちが聞こえる方向を見ると狙撃手の肩に乗った天ヶ崎がいた。
危ない危ない。ルビカンテが少年を巻き込まない様に上空から見え見えの射線で撃ってこなかったらアウトだった。やはり近衛を手放した瞬間を敵は見逃してはくれない。
刀を上に放り投げる。超高速の攻防の後、ようやく屋根に落ちそう

になっている近衛を寸前でキャッチ。戦闘中で無ければこのまま何処かに連れて行きたい気分に駆られる。
一拍遅れて落ちてくる国綱は鯉口を上に掲げた鞘にそのまま納刀。
少年が二階の屋根に落ちたのを見ている暇など無く、そのまま四階の屋根へ。
そこが最上階だった。
上ってきた方向を見ると反対方向に更に高い天守閣が見えたが、そこに行くには今まで逃げてきた攻撃を掻い潜っていく事になる。・・・無理だな。

「ちょっとここで休憩してろ」

震える近衛を屋根の頂上で降ろし振り向く。既に放たれた弩の砲撃が眼前まで迫っていた。
抜刀。飛燕の速度で向かってくる長槍をそれ以上の速さの居合いで迎撃。必殺の矢を縦に切り裂き二つに分けるっ！
二つになった弩砲の矢が左右後方に突き刺さる。真上に振り上げた国綱を納刀し、再び抜刀術の構え。
天ヶ崎は唖然とした表情をしていた。式神の悪魔ですら次の矢をつがえずにこちらを見ている。
飛んでくる矢そのものを切り飛ばす曲芸に驚いているらしいが、抜刀術で『石川五ェ門』を目指す俺には一本なら何とか迎撃できた。
目指すはステルス爆撃機の両断だ！
遅れて着地した白髪の少年だけが無表情を貫いていた。

「二対一でクリーンヒットが一撃も無いとはね・・・・」

「その栄光を讃えて、帰ってくんねえかな」

俺の軽口に誰一人言葉を返すことはなく三人は間合いを計る。

天ヶ崎はルビカンテの制御で精一杯なのか報告書にあった符術を使ってこない。効果範囲の広い炎や水流を使わずに弩による直線攻撃だけならまだ対応可能だ。
そのルビカンテも遠距離支援限定だからまだ救いが在る方だろう。
前衛が二体になったら一気に押し切られる可能性がある。
その中でもやはりこの白髪の少年が敵戦力のキーマンだろう。
恐らくは中国拳法であろう、それによる桁違いの近接戦闘能力。それ一つだけでここまで追い詰められた。
桜咲の援護を期待するのは酷だろう。二刀流と野太刀の戦闘では相性が悪すぎる。その上、同門同士とくれば互いの技を知り尽くしている。最悪、千日手の様な戦いになるだろう。

「あんさん、どうやってあの結界から抜け出て来たんや?」

会話の中で俺の隙を見つけようとする天ヶ崎。結界というのは恐らくゲームセンターのループ状の結界の事だろう。

「出入り口と大きな窓にしか術が掛かってなかったぞ?」

近くに建物が隣接してる状態でドーム状の結界を張れるはずが無い。近くの建物にも異常があれば入る前に感知されるからだ。その為、出入口や窓にしか結界の効力を持たせられなかった。だから壁を破壊して出てきた。
その事を指摘すると開いた口が塞がらないのか天ヶ崎は呆けた表情をしていた。さすがに壁の破壊までは想定していなかったらしい。
また無言。そのまま相手の隙を探す膠着状態に陥る。
風。前髪が揺れ一瞬俺の左目を隠す。それと同時に少年が動く。それに反応する形で俺も前に出る。
下から螺旋を描き繰り出される左掌底をかわしながら鞘を斜めに振り上げる。

「旋狼牙！」

スマッシュに近い軌道で放った俺の一撃を少年は右腕で防御。そのまま追撃を仕掛けようとした右半身が動こうとして、停止。
少年が右目で確認すると自らの肩から指先までの全てを緑色の帯が作り出す球状の檻に閉じ込められていた。

帯刀技　『旋狼牙』

真空の帯が作り出す檻に敵を閉じ込め、拘束する技だ。
俺は一瞬の隙を突き技に連動した蹴りを放つ。左爪先は少年の右頬に叩き込まれる、その寸前に左掌に阻まれそのまま受け流された。
まだだ！
右足を軸にそのまま一回転。少年に向き直るその瞬間に国綱を引き抜き一閃。
首を両断するはずの一撃の軌道はまたしても阻まれる。喉元で止まる切っ先は黒く光る硝子の様な刀身と食い合うように軋りを上げ、弾かれる。
逆手に握った黒曜石の短刀が翻り今度はこっちの頸動脈を狙ってくる。一体何処に隠し持っていた！？
黒に彩られた死の円弧を俺は上体を反らして回避。右腕を閉じ込められた状態では踏み込めず不十分な太刀筋だ。
この好機を逃さず右上に弾かれた国綱を今度は左へ振り抜くっ！

「薙ぎ払え！」

大薙ぎの一閃も短刀に軌道を逸らされる。しかし真横から現れる衝撃が足場の瓦を粉砕しながら少年に殺到する。

抜刀術　『衝皇震』

振るわれる刀に連動した衝撃波が足元から襲い掛かる技が少年に叩き込まれる。
その短刀では足元までは届くまい！
しかし後衛の悪魔から援護射撃が放たれ、鏃の先端に呪符を括り付けられた矢が風の檻に突き刺さり緑の帯を吹き散らす。拘束から逃れた少年はそのまま後方跳躍しギリギリの所で衝撃波をかわす。そのまま俺の顔面に向かって投擲された黒曜石の短刀を弾き返す。

しかし牽制と思っていた一撃は最悪の罠だった。

視界を塞いだ短刀を弾くと既に発射された弩の鏃が顔面に向かってくる。短刀を弾き、外側に流れた刀では最早迎撃は間に合わない。
敵の狙いはコレか！矢を連続発射できる事を失念していた。
首を強引に右に傾け回避しようとして一瞬の思考、更に無理矢理左肩を上げる。
着弾。
鏃は鎖骨と僧帽筋を両断、肩甲骨を貫き俺の背後の近衛を狙って尚も直進しようとする。
左肩が吹き飛んだ様な衝撃と視界が赤く染まる激痛の中、反転。この身を軸に矢の進行方向を反らす。
あのヤロウ。俺が絶対に近衛の前に立つと分かった上で撃ってきやがった！
今度の長槍は右脇腹に突き刺さる。羽織と着物、広背筋と小腸、前面の服直筋を貫き腹の前面から鏃が突き出る。その寸前に国綱の刀

身を腹に添え、盾に見立てて阻み、強制停止させる。胴鎧付けて来れば良かった・・・・。だが近衛には弩の一矢も向かわせるわけにはいかない。

「癒しの光、今ここに・・・・」

脳内で激痛が大合唱する中、俺の唇は無意識に再生術の詠唱を開始。いや、その前にやる事がある。

「「雄飛　！！」」

聞きなれない呼び名に視線を向ける。そこには涙で青白い顔を汚した近衛と、その後方に同じくらい悲痛な顔をした桜咲が見えた。ナイスタイミングだ桜咲。これで近衛は何とかなる。

三本目が太腿に突き刺さる。左大腿骨を削り取り、大腿筋を貫いていく矢を左手で握り潰し、三度の近衛への進行を妨害。ここまで来ると最早どこが痛いのかどうでも良くなる。

そのまま倒れ込む様に近衛の胸にショルダータックルを決め、桜咲の方向に突き飛ばす。どうにか送ったアイコンタクトは桜咲には届いていないらしい。

不意に引っ張られる感覚。見ると近衛が突き飛ばされて尚も、両手で俺の羽織の袖を掴んでいた。涙でクシャクシャになった顔でまた俺の名を呼ぶ。

ヤバイ。このままだと桜咲がキャッチしても三人分の重さで堀に落ちる。いや、もう落ち始めている。

どういう訳か桜咲が俺の背中に覆い被さり二人に挟まれた格好となる。そのまま堀に向かって自由落下。この高さでは俺はともかく、二人は頭から着水する衝撃でえらい事になる。

（乱れ飛べ翠影）

国綱の切っ先を水面に向け風系攻撃術発動の準備。着水ギリギリで減速させないと近衛は死ぬ・・・・。

瞬間、眩い光と共に自由落下が減速。三人を包む光の膜が球を形作り水面近くで停止。

堀に溜められた水を周囲に蹴散らし、その中心に近衛が降り立つ。

いつの間にか抱きかかえられた俺の左肩、右脇腹、左太腿に光が殺到。

軽い火傷の様な感覚が三つの傷を中心に全身に広がる。目を向けようにも光が視界を覆い何も見えない。

一瞬の静寂。その頃には全て終わって、いつの間にか堀の向こう側にいた。

呆けていたのは一瞬。すぐさま身を起しても全身を駆け巡っていた激痛がない。三箇所全ての傷が完全に塞がっていた。

傷を負ったのは幻覚かと思ったが、着物には無残な孔が開いていて、現実だったと示していた。

刺さったままだった矢は全て抜かれていて水面に浮かんでいる。全く訳が分からない。

そのまま立ち上がり、近衛と目が合う。俺の無事を確かめてホッとした表情を見せる。

しかしそれも一瞬、

近衛の右手が大きく振られ、渾身の平手打ちが俺の頬に叩き込まれた。

## 第十二話（後書き）

戦闘シーンを書くのはとても楽しいのですが、クオリティは低いんですよね・・・・。
どうしたものか・・・・。

## 第十三話（前書き）

大分遅れました。現実の方がそれなりに忙しく・・・・。
その甲斐あって、今日は人生最高の一日になりました！

テンションも上がり、そのままの勢いで投稿します。
第十三話御覧下さい。

# 第十三話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

森の中を走る。水の音を頼りに木々の間を抜け出ると川が見えてきた。川原特有の瑞々しい空気に触れ少し気分が和らぐ。
大きく跳躍し、川の中腹で流れを二つに分ける巨岩に着地する。流れはそれほどでもないが乱立する岩と石で流れが複雑な川だった。
上流、下流と交互に振り返りながら魔術の残滓を探り、発見。岩伝いに上流に向かって行く。何度目かの跳躍で人影が視界に入る。
あっちも俺を見つけたのか大きく手を振っている。携帯電話で俺を呼び出した神楽坂、宮崎、ネギ先生の三人は一際大きな岩の上に陣取っていた。横になっていたネギ先生は俺の姿を見つけて起き上がる。しかし顔を引きつらせて中断、二人の手でまた横になる。聞いていた以上に重傷らしい。

「良い場所だな。弁当も持って来た方が良かったか？」

「冗談はいいからネギの・・・・」

最後に大きくジャンプして岩の端に着地。軽口を諌める神楽坂の言葉は俺の顔を見て停止。他の二人の視線も同じようになっていた。
とりあえずネギ先生の治療を優先。腰に手を回し、優しく上体を起す。立てた右膝にもたれさせ傷を確認。
顔には殴打による出血の痕。頭部にはいくつも瘤がある。上着の汚れ具合からして服の下もかなり青痣が浮かんでいるだろう。応急処

置が上手く隠しているがちょっとした怪我のデパート状態だ。

（快方の光よ宿れ）

「ファーストエイド」

発動する再生術が新緑の光を作り出す。瞬く間に両頬の痣の青や紫色が散っていき、気切り傷や打撲の痕にも綺麗な肌色が戻ってくる。光が収まり頭部の瘤が消えたことも確認し、ネギ先生に手を貸しながら立ち上がる。

「大方治したが無理はするなよ？」

「は、はい。ありがとうございます。あの・・・・姫菱さん・・・・・それ・・・・」

躊躇いながらでも聞いてくるネギ先生。神楽坂や宮崎の目にも同じような疑問が宿っている。やはりスルーしてくれないか・・・・。

「ああ、ちょっと蚊が止まってたんだ」

そう言って誤魔化す俺の左頬には湿布が貼られていた。

―――――――――――――――――――――――――――――

石畳の上を十人の団体が歩く。

先頭はネギ先生と神楽坂。その横を宮崎がまだ歩き方がぎこちないネギ先生をサポートしている。そのすぐ後ろには朝倉と俺、大河内

が付いていく。少し離れた最後尾の一団は綾瀬、早乙女に両脇を固められた近衛、殿を桜咲が勤めている。
綾瀬達は近衛の沈んだ感情と俺との間の微妙な空気を感じ取っているのか、しきりに話しかけて場を盛り上げている。
あの後、敵はどういう訳か追撃してこなかった。桜咲の「神楽坂さん達と合流しましょう」という案に従ってここまで来た。
大河内はシネマ村の入口近くに隠れさせていたのでそのまま合流して神楽坂達の元に向おうとしたが、私服に着替えている内に違う班のはずの朝倉に捕まり、早乙女ペアに捕まり・・・・。振り切るのを諦めて今に至る。
桜咲の荷物にＧＰＳ携帯を潜り込ませておいたのでどうあっても付いて来た。というのは朝倉の言。大した女だよ、お前は・・・・。
今はそのことで神楽坂と言い合いになっているが、その声も俺の耳を通り過ぎていっている。
完全に気が抜けているのは自覚しているがどうしようもない。
大河内も心配そうにこっちを見ているが、正直後ろの近衛の存在が気になってそれどころじゃない。

「レッツゴー！」

早乙女達に追い抜かれる。その方向に目を向けると両脇を木々に囲われた荘厳な雰囲気に包まれた門があった。どうやらここが関西呪術協会の総本山にして、

「近衛の生家・・・・か・・・・・」

ここまで来た以上護衛はもういらないだろう。桜咲もここの結界と警備体制は万全と言っていた。後はネギ先生が親書を渡し、ここの長が受諾すれば全て完了。敵方にしても自分の組織の長に逆らってまで近衛を誘拐しようとはしないだろう。

門を抜けると単物を来た女中さんに案内される。
（これで・・・近衛が俺に関って苦しむことはないな・・・）
何処か諦めにも似た感情の中、屋敷の中に招かれそのまま入っていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

「じゃあ私は先に上がるね、刹那さん」
「はい。おやすみなさい。明日菜さん」
脱衣所へ行く明日菜さんを見送り再び湯船に身を沈める。今まであまり話さなかったがどうやら友達になれた。この修学旅行も悪いものじゃなかったな・・・。と終わっても無いのに思ってしまう。全身で伸びをしてから肩までお湯に浸かる。高い天井を見上げ、考えてしまうのはシネマ村での一件だった。
お嬢様の力の覚醒、そして

「姫菱との不和・・・」

あれだけの負傷をしながらもお嬢様を逃がそうとする姫菱には驚いたが、お嬢様のその後の行動のほうが正直インパクトがあった。
でも・・・お嬢様の気持ちも分かる。
多分お嬢様は自分の置かれている状況が分かっている。私や姫菱に

守られている事を。
自分を守ってくれる人にあんなに矢が刺さっていく光景を見せられれば誰だって恐怖を覚えるだろう。
私だって姫菱が死んでしまうと思った。
お嬢様は姫菱が傷つく事で自分を責めているだろう。そして守ってくれた彼を叩いてしまった事も。
姫菱もあの一件がかなりこたえたのか未だに気持ちが沈んだままだ。
あの後敵が追撃してきたら負けていただろう。
そしてお嬢様も沈鬱な表情を隠せないでいた。父君の詠春様との再会も、豪勢な会食もどこか上の空だった様に思う。
溜息を吐き思考を中断する。と、丁度そこで開かれる引き戸の音。
そちらに目を向けると

「あ、桜咲さん」

「お、大河内さん・・・・」

長身の大人びた体形をタオルで隠した大河内さんが入ってきた。

――――――――――――――――――――

彼女が体を洗っている間、無言が続いているが湯船に入っていると一つ疑問が出てくる。何故シネマ村での一件の後、姫菱は彼女と合流したのだろう?
綾瀬さん、早乙女さん達は置いていくのが暗黙の了解だった訳だが姫菱は着替えの前に彼女を呼んでいた。私達の戦いも見ていたようだし・・・どういう事だろうか?

「桜咲さん」

「えっ、は、はいっ！」

自分を呼ぶ声に思わず居住まいを正してしまう。目を向けると大河内さんが湯船に入ってきていた。思わず彼女の豊かな乳房に目が行ってしまう。大きい胸は浮く、という伝説は本当らしい。

（・・・・いいなぁ・・・・私も、もう少し・・・・・）

自分の視線に気付いたのか両手で胸を隠す大河内さん。私も気まずさに目を逸らす。

「・・・・ねぇ、桜咲さんも・・・・・その・・・・・不思議な力？・・・を持ってるのかな・・・・？」

「へ・・・・？」

自分の顔から血が下がっていくのが分かる。今の私はきっと青ざめているだろう。

不思議な力？ばれた！？ても桜咲さん『も』って事は・・・・

「あ、答えたくないなら、無理に答えなくていいよ！」

今の私は口を金魚の様に動かすだけで、何の誤魔化しも口に出来なかった。

ここで黙ってしまった以上語るに、いや語らずに落ちているのだが何の言い訳も思いつかない。

そんな私に構わず大河内さんは話を続ける

「その・・・・姫菱くんに言われたんだ・・・・・」

ゲームセンターでの喧嘩の後、戻って彼を助けに行くと彼が壁を破壊して出てきたという。
さすがに姫菱もばらすことはしなかったが

「『自分で見て考えろ』。か・・・・・」

話を聞いて思わず独白が漏れる
魔法を殊更に隠すのではなく、ネギ先生の様になし崩しに巻き込むのでもなく、彼女に裏の世界の一端を見せて関るかどうかを決めさせるらしい。
姫菱らしくもない。と思う。
上手い言い訳を用意できなかったにしても、こんな放置に近い状態なんて・・・・。口と頭の回る彼らしくない・・・・。
戸の開かれる音。その方向に目を向けると脱衣所の方から声がする。
この声は・・・・長と・・・・

「姫菱・・・・・？」

私の言葉に大河内さんが「え？」と言う間の抜けた声を出したのはほぼ同時。目が合ったのは一瞬。二人とも慌てて周囲を見回し大きな岩場に向かい、隠れる。何か似た様な事が昨日あった気がする。
大きく引き戸が開く音。

「・・度はこのかの護衛を引き受けていただき、有り難う御座いました。麻帆良学園学園長に代わってお礼を言わせていただきます」

「いえ・・・・。半分は友人として依頼を受けたので・・・・」

私の背筋に戦慄が走り抜ける。隣の大河内さんの驚愕の顔を見るに恐らく同じ気持ちなのだろう。

（姫菱が畏まっている・・・・！）

冷静に考えればそれが普通なのだがこの何日か一緒に行動するうちに、彼は「冗談しか言わない」という人物評価が私の中で出来てしまっている。いつも彼の冗談や変な話を聞いている立場としては敬語を使っているだけで違和感を感じる。

その後、水の撥ねる音がする間も会話は続く。湯船に入ったのか声が近くで響いている。しばらく出られそうにない。

「詠春さん。敵は何で近・・木乃香を狙ってくるんですか？」

「恐らく、切り札として近衛の力が欲しいのでしょう」

姫菱の敬語口調に二人で笑いを堪えていると、話はお嬢様の話題に移ったようだ。正直、大河内さんがいる状態ではしてほしくないがここで出て行く勇気は無い。

「近衛って・・・まさか・・・あの『近衛家』なんですか？五摂家の一つの・・・・」

「はい。藤原の流れを汲む血筋の為、あの子にはすさまじいまでの魔力と、それを操る才能を秘めています」

「その一端は貴方も目にしたと聞きます」と言葉を切る。恐らくシネマ村の話だろう。重傷の姫菱の傷を一瞬で治すほどの膨大な魔力。無意識下でそれほどの魔力の制御を完璧に行う才能。どちらも破格の力だ。

「その力を上手く利用して西を乗っ取り、東への復讐を行うつもりでしょう」

詠春様の言葉は続く。大河内さんの方を見ると明らかに話しに付いて来れていない顔だ。しかし姫菱に言われた通り『考える』材料として言葉の端々に出る単語を覚えている様だ。今も思考の海に沈んでいるのかこちらの視線に気付いていない。

「ですからこのかを守るために安全な麻帆良学園に住まわせ、このか自身にもそれを秘密にして来たんです」

そう。全てはこのかお嬢様を政治の道具に利用させない為、その力を利用させない為、平穏な日常を守る為。
このかお嬢様の為なのだ。
しかし姫菱の口から発せられる言葉は、そんな思いを鼻で笑う様な嘲りの色を含んでいた。

「それで木乃香を守っているつもりですか？」

「・・・何が言いたいんですか・・・？」

詠春様もその嘲りを感じ取ったのか声色に怒りが滲んでいる。しかし姫菱はそれすら鼻で笑い言葉を続ける。

「魔法にしたっていつまでも隠せるものでは無いでしょう？」

「それは・・・・」

その一言が私の胸に突き刺さる。その思いはずっと昔からあった。

魔法を秘密にしている事だけではなく自分の生い立ちも含めて。

「・・・・しかし・・・・裏の世界を知らせるにはこのかはまだ幼すぎる・・・・・」

腹の底から絞り出す様な詠春様の声が聞こえる。それは父親が娘を案じる慈愛の言葉だ。

「それは父親補正が掛かりすぎでしょう詠春さん。あいつはもう中学三年。自分の才能と現実を知って自分で道を選ぶべき年齢でしょう？」

姫菱の断罪は続く。その言葉は今までお嬢様を守ってきた私の心まで切り裂いていく。

「それに、大人になれば木乃香自身にもいつか守りたい人間ができる。そのときに魔法の有無は関係無しに『守られる側』の人間だったらあいつは一生その人を守る事を他人に委ねなきゃならない。そんな屈辱を娘に味わわせたいんですか？」

『自分の才能、政治的価値、利用しようとする人間の存在、全てを話した上で選ばせるべきでしょう』と言う姫菱。しかしそれは酷な話だ。お嬢様は・・・・

「あの子は優しすぎる・・・・魔法世界と裏の世界の地獄のような現実には耐えられない・・・・それに耐えたとしてもこのかは魔法で人を助ける道を選ぶ。彼女の優しさがある以上、教えたら最後どうあっても裏の世界に関わる事になる。それを君は選択というのか？」

詠春様の口調が荒くなっていく。その言葉は一部私の心の言葉を代弁していた。
お嬢様は優しすぎる。裏の世界と魔法の存在を知ってしまったら、人を助ける道を選ぶだろう。そして彼女の優しさは、その力で目に映る全ての人を助ける。それこそ自分をすり減らしてでも。
そんな人生を歩かせたくないから今まで必死になって守ってきたのだ。なのに・・・・

「選んで欲しくないからその存在を教えない、自分に不利な情報は出さない。それは詐欺ですよ。彼女にだって魔法の存在を知る権利はあるでしょう？
あなたは『木乃香のため』という大儀名文で自分の歩かせたい道にあいつを置いているに過ぎません」

姫菱の声が風呂場に響く。隣にいる大河内さんがやけに遠くにいるように感じる。その断罪の言葉に私は完全に打ちのめされていた。
お嬢様の為の行為のはずが、その人の可能性を奪っている。大事な人と言いながら・・・・

「詠春さん。今の俺には貴方も敵の天ヶ崎も同じに見えます・・・・。優しい世界で生きる木乃香、魔法使いとして生きる木乃香、魔力供給装置としての木乃香・・・・。それぞれが望む人間性だけをあいつに求めて、誰ひとりとして本人の言葉を聞いてもいない・・・・」

水音。その音と共に言葉が遠ざかっていく。引き戸が開かれる音。
そこから姫菱が出て行こうとしているのは推測できるが、心に突き刺さる言葉の槍が一切の思考を拒否している。

「このまま何も知らないで生きる事になれば、数多くの犠牲の上に

立ちながら、毎日誰かに守られ、自分の友人、家族を他人に守らせる事しかできない人間が出来上がる・・・そして、その事実を知ったら彼女は・・・自分の弱さに耐えられないと思います・・・」

その言葉を最後に引き戸が閉じられる音が響く。どのくらい時間が経ったのか分からないが同じ音がもう一度響く。それと共に大河内さんが動く。しかし、「桜咲さん、大丈夫？」という声も耳には入ってきても頭には入ってこない。
今までその事実から目を背けてきたとはいえ姫菱の言葉に完全に打ちのめされ動けない。
今までも、そしてこれからも。
魔法の存在を話さない限りずっとお嬢様に善意の押し付けをする事になる。しかし話すことはお嬢様を危険に晒す事になる。
一体どうすればいいのだろうか。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　side◇

庭に面する廊下に座り込んでいる。そこから見える夜桜はとても綺麗で・・・。時折吹く風で涼を取ってみるのも良いかもしれない。
しかし俺は自分のしでかした事に頭を抱えていた。風呂場での醜態を思い出すと自決用の拳銃が欲しくなる。
あんなものは正論でもなんでもない。単に近衛に拒絶され鬱屈した感情をぶちまけただけだ。
そしてその奥底にあるのは嫉妬。今まで近衛を守ってきた存在への

言いようの無い劣等感だった。今桜咲に会うのはマズイ。また感情をぶつけてしまうだろう。
詠春さんには言いたい事を言ったがあの言葉はそのまま自分に帰ってくる。

「きいたなぁ」

まだ赤みを残す頬を撫でていると独り言が出てくる。やはり再生術で治療しなくて正解だった。苦笑と悔恨が半々づつ顔に出る。
右手を振り抜いたまま大粒の涙を流す近衛の顔が今でも頭の中に強烈に残っていた。

「『怪我してまでウチのことなんか守らんでエエ』・・・・か・・・・」

あの後、駄々をこねるように胸を叩かれた。力など全く入っていなくても、まさしくそれは胸を打ち抜く強さだった。

「・・・・姫、菱・・・・・」

振り返ると桜咲がすぐ近くにいた。ここまで近づかれても気付かないとは・・・・。今の自分は相当腑抜けているらしい。
風呂上りなのか肌はほんのり赤く染まって入るが、何故か制服姿。湯上りの色っぽさに見とれそうになるが正直今はそんな気分では無い。それより沈鬱な面持ちを下に向けこちらを見ない桜咲が心配になる。

「どうした？お前も夕涼みか？」

俺の言葉に桜咲は何も返さない。隣に座るわけでもなく、ただ両手

でスカートの裾を握り締めている。

「私が・・お嬢様を守ることは・・・・お嬢様の為になっていなかったんだな・・・・」

その一言でもう理解してしまった。俺は救いようの無い愚か者だ・・・。

今日一日で大河内を泣かし、近衛を泣かし、今度は・・・・

「・・・・風呂場での話・・・・聞いてたか・・・・」

静かに涙を流す桜咲を隣に座らせ、しばらく無言で庭を見ていた。
嗚咽も漏らさず、時折鼻をすする音が廊下に小さく響く。
しばらくして泣き止むのを見届けると、どうにか言葉を探す。

「・・・・近衛に叩かれた理由がようやく分かった・・・・」

近衛木乃香を守るに当たってどこか荷物を守るような感覚があったのかもしれない。
しかし近衛木乃香は自分の目の前で傷付く人を見て『心』を痛める『人間』だった。
俺だって持っている気持ちを、一体何で見落としていたんだろう。
近衛本人にも周りの人間を大事思う気持ちがあって当然なのに・・・・。

「守ることだけ考えて、自分のために誰かが傷つく事で近衛の心が傷つく事まで考えて無かった・・・・」

自分の負傷は勘定に入れていなかったが、真近で見た本人は耐えられないだろう。

「桜咲・・・お前はこんな思いをさせないように、ずっと近衛を守ってきたんだな・・・・」

呼ばれた桜咲は肩を震わせたもののこちらを見ない。しかし絞り出すような、身を切るような悲痛な声を絞り出す。

「私は・・この先も・・・・お嬢様を守るべきなんだろうか・・・・」

「そうだよなぁ・・・・この先どうするかねぇ・・・・」

その言葉と共に床に寝転がる。答えの出ない問題なんて投げ出したい気分になる。

近衛に謝るにしても魔法関係の事を俺から話すわけにも行かない。そこをぼかして話すにしても修学旅行中の護衛が終わった後になるだろう。

・・・イヤそもそも同盟が成立し敵が手出しできなくなった以上、この先護衛が必要なのだろうか・・・・？

そもそも近衛に拒絶された俺が護衛について考える権利があるとは思えない。知られないようにという前提も崩れた以上どうするべきか分からない・・・・。

起き上がり庭に目を向ける。静寂に包まれた桜の林を見ても答えが見つかる訳も無く・・・・。

そこでやっと異常に気付く。

おかしい。春に出る夜行性の動物や虫なんて全く知らないが、何だこの静けさは・・・・！

そう・・・まるで木々までも『何か』に恐れ、隠れているように・・・・。

その考えに至ったときには既に立ち上がり、桜咲の手を取り近衛の

部屋に走る。

「桜咲！詠春さんに連絡を取れ！」

本当に敵が来たかどうかは分からない。しかしこの警備を突破するような『敵』なら呑気に夕涼みしてる場合でも、青春ごっこなんてしている余裕も無い。

未だ呆けている桜咲に思わず歯噛みする。この状態では俺が詠春さんの所に行った方が良いかも知れない。

廊下の角を曲がり再び加速しようとして人が立っていたので急停止する。しかし『それ』を人と呼べはしないだろう。桜咲も思わず短い悲鳴を上げる。

全身を硬質感漂う灰色に覆われた『それ』は袴や単物の細部、長く伸びる髪の毛一本一本の先まで再現されていた。

大きく開かれた眼、恐怖に歪む口元、引き戸の取っ手に引っかかっている手。その全てが匠の技に造られた作品のようだった。

生きているかのよう。という表現が相応しい精巧な石像が立っていた。そう、まるで『本当に生きている』かの様な・・・・

半分ほど戸が開いている部屋の中の光景を見て俺は思わず苦鳴を押し殺す。

四つん這いになって逃げる者、それを助けるように手を差し伸べる姿で凍りついた者、誰かをかばう様に俺達に背を向けている者。その石像全てが、時が止まり今この瞬間にも動き出しそうな者ばかりだった。

これが美術館に飾ってあったら感心して見惚れるものの、全員が近衛の家の女中さんと同じ格好で、その中に見覚えのある顔があるとそんな感情は出てこなかった。

「石に・・された、のか・・・・？」

バジリスクやメドゥーサに代表されるように対象を石化させる『邪眼』の類があることは知っているが、効果の程をこの目で見る事になるとは思わなかった。
関心している場合ではない。『敵』に先手を取られている事、そしてこの屋敷の使用人まで攻撃を受けた以上、この敵の本当の狙いは・・・・！

「桜咲！この屋敷の全戦力をかき集めろ！」

漸く俺達の置かれている状況を理解したらしく瞳に力が戻る。しかし、俺の言葉の真意が分からないようだった。

「え・・・・？・・・・しかしお嬢様を助けに・・・・」

「まだ分かってねぇのか！？いいか！敵の狙いは近衛の誘拐じゃない！」

もしそうなら警備を突破した時点で近衛をさらって終わり。しかし、屋敷に侵入して俺達を各個撃破していくという事は・・・・

「敵は俺達を全滅させる気だ！！」

敵はその後で、ゆっくり近衛を迎えに行けば良い。

「え、な・・・・」

絶句する桜咲。その考えは思いつかなかったようだ。しかし近衛をさらった後の事を考えると筋が通る。
詠春さんの話では明日の昼には地方に散っている援軍が来るらしいが、結界と警備に油断していた俺達を片付けるには十分すぎる時間

だ。関東の援軍も望めないし、来たとしても間に合わない。少なくとも敵は、関西呪術協会本部に直接喧嘩を売っても勝てるだけの戦力を投入してきているはず。
桜咲を連れて部屋を出る。石にされた人の事など後回しだ。生存者をかき集め、残った戦力でどうにか近衛を守るなり逃がすなりしないと・・・・。

「刹・・那君、姫菱君・・・・」

苦しげな声に振り返るとそこには詠春さんが立っていた。「長・・・・！」と桜咲も安堵の表情を見せるも、それも一瞬。駆け寄ろうとした足が止まる。詠春さんは廊下に立ったまま動かない。いや動けない。既に袴の膝上まで石化の侵食を受けていた。
まだ治療すれば助かる。俺は国綱を抜き、切っ先を詠春さんの肩に触れさせ神聖術を発動。

「この名において戒めを失え！リメディ！」

詠春さんの体が青緑の光に包まれ、足元から三角形の輪が立ち上る。凍結・石化等を治療する術が石像になっていく身体を覆っていく。
しかし、灰色の進行は遅くはなったものの止まらない。
俺は驚愕するしかない。全力発動中の治療用神聖術の効果が石化の解除どころか進行を止められもしない。刀身で術の効果を増幅している状態でも敵の魔法を食い止められない。一体どれほど強力な魔法なんだ。
既に腰近くまで石化は進んでいた。

「も・・申し訳ない二人とも・・・・本山の守護結界をいささか過信していたようですね・・・・」

自身が石になっていくのを苦笑しながら、詠春さんは話しかけてくる。

「平和な時代が長く続いたせいでしょうか・・不意を食らってこの様です。レジストはしたのですが・・・」

「か・・・かつてのサウザンドマスターの盟友が・・・・情けない」と続ける言葉も途切れ途切れになってきている。どうにか助けたいがこれ以上術の出力は上げようがない。状態治療の上級神聖術『リカバー』なら解除可能かもしれないが俺はまだ習得できていない。

薄氷を割るような音を出しながら進む灰色の染みは、既に腹部にまで上がっていた。

「・・白い髪の少年に気をつけなさい・・・・格の違う相手だ・・・・」

・・・・よりによってあいつか・・・・。

確かに並程度の術者ならここの結界も、西の長も負けはしないだろう。

あれだけの格闘能力を持っていて石化の魔法も使えるやつが敵なんて最悪の状況だ・・・・。

「姫、菱君・・・・」

石化の進行が止められない事に歯噛みしている俺に途切れ途切れの言葉がかかる。もう胸近くまで石になっているからか呼吸も苦しげだ。

「私は・・・・今までこのかを守ってきて・・・・いなかった、の

かもしれません・・・・。本来な、ら私が守らなければ・・・・いけない事も、筋違い・・・・なのも分かって、います。それでも、私にはあな、た方しか頼れ、る・・・・者がいません・・・・。お願いします。このかを・・助けて下さい・・・・」

そう言い残して詠春さんは俺の刀の切っ先を振り払った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇木乃香　ｓｉｄｅ◇

『あんなに、怪我してまで、ウチのことなんか、守らんでエエ！！』

平手打ちを叩き込んだ後、嗚咽交じりに何とかそう言った。
フルスイングした右手を拳に変え、駄々っ子のように姫菱の胸を叩いた。自分の顔が涙と鼻水で酷い状態になっとったはずや。
自分を守ってくれた人に対する仕打ちではない事は分かっていても涙も、この悔しさも止まらん。

『何でウチじゃなく姫菱が傷つくんや！？』

ここに帰ってくるまでせっちゃんが間に入ってくれへんかったら、そのまま逃げとったかもしれへん。

「・・・・か？このか！」

その声で意識を戻す。シネマ村でのこと思い出しとったからアスナ

の声、聞き逃しとった。
風呂上りのアスナに付き合って夕涼みがてら、少し遠回りして部屋に戻る。アスナにはそう言ったが実際は違う。
姫菱が泊まる部屋の近くを通りたくないだけ。余所余所しい態度をとられて嫌われた事を思い知りたくないだけ。
あん時だって、普通はきっと「助けてくれてありがとう」と言うトコロなんやろが・・・とてもじゃないが言えへん。「ウチの代わりにケガしてくれてありがとう」なんて・・・・

「もう！このかってば！」

アスナの大声に再び意識を外に向ける。良くも悪くも姫菱の事が頭から離れへん・・・・。もう嫌われてしもうたのに・・・・。

「やっぱり姫菱の事、心配？」

その名前に思わず顔を上げると、そこには苦笑するアスナの顔があった。
現金な自分が恥ずかしくなってまた顔を下げてしまう。しかしアスナはまた声をかけてくる

「刹那さんに聞いたわよ？姫菱に平手打ち食らわせたんだって？」

言外に「どうしてそんな事したの？」と聞いてきた。アスナも分からないんやろうな・・・・。姫菱もきっと分かっていない。

「アスナ・・・・。ウチだって何でこんな事が起こっとるのか大体分かるで？」

「え？」と、完全に惚けた表情をしとるが、そこは親友。バレバレ

の態度だった。しかし、そこを追求しても意味は無い。
どうせアスナも話してはくれないんやろうし・・・・。

「理由は知らんけど、ウチが狙われてんのは、何となく分かるわ・・・・でも・・・・・」

その人たちがウチの変な『チカラ』をが欲しいっていうのも大体分かる。
でもそれやったら・・・・・

「でも・・・・それやったら・・・・傷つくのはウチだけでいいはずやろ?」

ウチの問題なのに何で関係の無い姫菱があんなに傷付くんやろう?
ウチの問題なのに何で周りの人が傷付くんやろう?
ウチの問題なのに何でウチに話してくれへんのやろう?
ウチの問題なのに何でウチだけ蚊帳の外なんやろう?
理由は大方知っている。いや、思い知った。

(きっとウチには、『力』が無いから・・・・・)

変な人たちに利用される『チカラ』はあっても、なんの『力』も無いから・・・・
姫菱も助ける事はおろか、自分の身も守れない。
そのくせ他人を傷つけてでも『守られなければならない』。そんな存在・・・・。

「このか・・・・・」

また涙が出て来る。自分の無力さに、守られなければならない惨め

さに。
そして守ってくれた姫菱にそんな感情をぶつけてしまった事に・・・・。

「姫菱の事、好きなんだ・・・・ね・・・・」

アスナの言葉に泣きながらも首を縦に振る。もう気づいてしまった。
ウチは姫菱が好きなんやろう。傷ついて欲しくない、という感情はきっとそこから生まれ出てるんやろう。
でも、きっとこの思いは叶わない。成就しない。
あれだけ傷付いてまで守ってくれた姫菱にあんな態度を取ったんやから・・・・。
でもこれでエエ。姫菱も自分を叩いた人間を守ろうとはしないだろう。
涙を拭く。もう寝てしまおう。これ以上アスナに心配を掛けられない。

「部屋に戻ろか？」

アスナの言葉を待たずに早足で廊下の角を曲がる。
そこで額に何かぶつかった。何か硬いものに頭から突っ込んだ形になったのでかなり痛い。
さっきとは違う涙を浮かべながら前を見るとそこには子供の頃から知っとる女中さんがおった。
でも明らかにおかしい。まずこんなに硬くない。色も灰色じゃなかった。そもそも何で動かないんや・・・・。

「な、何や・・これ・・・・」

そこには年配の女中さんだけでなく、他の人も灰色に染まり固まっ

ている光景があった。

「ネ、ネギ！？う、うん！分かった！」

後ろにいたアスナがそう言うと、ウチの手を取って元来た道を引き返す。

「このか！悪い人達が来たから逃げるわよ！」

悪い人達言うんは、恐らくシネマ村で襲ってきた人達だろう。アスナはウチの了解も聞かず、そのまま手を引いていく。

「来たれ」

アスナの手の中から光が湧き出てくる。その光は一瞬で収束し、大きなハリセンになった。

「大丈夫！このかは絶対に守るから！」

そう言って周りを見回しながらお風呂場への道を行くアスナ。

守る。

その言葉を言われて嬉しくない訳がない。でも今はその言葉からは苦痛しか感じない。

自分を守る言う明日菜。しかしウチはそんなアスナに何もできない。

せっちゃんにも、姫菱にも。

（何で、何でウチは守られる事しかできひんのやろ・・・？）

## 第十三話（後書き）

今回はギャグがほとんどありません・・・・。
というより入れられなかった・・・・。

## 第十四話（前書き）

七月七日のテンションがいまだに残っています。
いやぁ、執筆が進む進む！
と、いうわけで第十四話投稿します。

# 第十四話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

「・・・・ここでその竜の妻を召喚。と同時に魔法カード『探偵調査による浮気発覚』を発動。
慰謝料として場の魔法使い三人を妻の供物に捧げるか、破算宣告を出して竜の夫を自殺させるか選ぶです、のどか」

「じゃ、じゃあこっちは罠カード『税務監査』を使うね。
これで税務署の署員になった竜の夫がゆえの所に脱税調査に行くよ」

「ねえ、これ本当に魔法使いの戦い・・・・？」

二人とも私の疑問に答える事は無く。
借金で自殺寸前の竜の夫に道連れにされるのを恐れた綾瀬さんは悔しげに自分の『探偵調査』のカードを下げた。
このカードゲームの事をよく知らない私はついて行けないが、それでも何か違う気がする。
昼間のゲームセンターでも同じものをプレイしていたはずだけど、こんな昼ドラのような攻防じゃなかった。
竜の夫婦はまだしも慰謝料請求とか、税務調査とか、魔法じゃないよね・・・・。
風呂上りの後、あてがわれた部屋でカードゲームをしている綾瀬さんと宮崎さんの勝負を早乙女さんと見ている。
朝倉は今日撮った写真を吟味しているのかデジカメをずっと操作し

ている。
風呂場での出来事の後茫然自失としている桜咲さんと一緒に部屋に戻ろうとしたが、遠慮されてしまい結局一人で戻って来た。姫菱くんに会って『答え合わせ』をしたいが・・・・まだ情報が少ないし、今は近衛さんとの関係がややこしい事になっているみたいだから後にしておこう。
もう遅い時間だ。思えば色々な事があった一日だった。・・・・裸を見られる事態から始まり、ゲームセンターでの喧嘩や、お姫様抱っこに、シネマ村での戦い。
そこで姫菱くんだけでなく、桜咲さんや近衛さんも不思議な力を持っているらしい。という結論に行き着いた。
正直信じられないし、漫画やアニメの見すぎと思われるかもしれないが、『魔法』や『超能力』等の単語しか頭に思い浮かばない。
だから、色々情報を集めて推理している。・・・・なんだか探偵やスパイみたいだ。
そろそろ一日が終わろうとしている。『魔法』なんて言葉、受け入れるにしても、否定するにしても、明日にしよう。

「今度は魔法カード『間男の影』を使うね。竜の妻に不倫疑惑発覚。これで今度は夫側から慰謝料の請求をさせてもらうね」

「甘いですのどか。竜夫婦の子供達を連続で召喚。協議の結果、親権は妻側にある。と言う裁判所の判断で養育費の請求をするデス」

この戦いは法廷で繰り広げられているらしい・・・・。どうやら召喚というのは裁判所に呼び出す事みたいだ。
早乙女さんは互いの戦術に関心しているのかしきりに頷いている。
我関せずの朝倉を除くと私だけ取り残されていた・・・・。
その時だった。

トントン

障子戸を叩く音。どうやら来客のようだ。

「あ、はーい」

入口に一番近かった早乙女さんが戸を開ける。
今思うと開けるべきではなかったのかもしれない。イヤ、空けなくても結果は変わらなかっただろう。
どちらにせよ、先ほど今日は終わった。と思っていたのは間違いだったようだ。

まだ、今日は、長い一日は、続く。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

俺は自分の父親の顔などもう覚えていない。
体の弱い母さんと、幼い俺と、生まれたばかりの弟に、何の慰めにもならない莫大な保険金を残して死んだ男の顔など。
「キャッチボールをしよう」と言って二度と公園に現れなかったヤツの顔など

思い出したくもない。

しかし、
残して死んだ側は、大切な『誰か』を守れないまま生を終えなければならなかったあの男は、こんな風に無念を残して逝ったのだろうか。
奥歯を噛締め、眉根を寄せ、それでも誰かに何かを託そうとする顔を、俺は一生忘れないだろう。

「助けます」

切っ先が逸らされると術によって堰き止められていたのか、石化の進行が一気に加速する。
首元まで迫った灰色の染みが頭に回りきるのは一瞬だった。
最早意識も無く、俺の声など聞こえていないだろう。
それでも言わねばならない事がある。
自分に言い聞かせる為に。
恨まれても、
怒りを買っても、
また泣かれても。

「必ず」

腹は決まった。

「長・・・・！」

「触んな桜咲」

駆け寄ろうとする桜咲を左手で制する。石化の魔術が移る可能性がある以上、触らせる訳にはいかない。
国綱を鞘に納め、それまで詠春さんだった石像に一礼する。顔を上

げると不思議と今までの迷いは消えていた。

「行くぞ」

そう言って踵を返す。しかし詠春さんをその場に置いて行くのが忍びないのか、その場に留まろうとする。

「桜咲。詠春さんが何で俺の神聖術を振り払ったか・・・・分かってるはずだろ?」

聞かれた桜咲は悔しげな顔を下に落とす。彼女も分かっているのだ。詠春さん。あなたは凄い人だ。自分が石になっていく恐怖の中、あんな口を利いた俺の魔力残量の心配をするなんて・・・・。俺にはできそうもないよ・・・・。

「桜咲。お前は近衛を探しに行け」

「俺は無事な人を探しに行く」と言い残して、顔を上げた桜咲と別れる。

周囲を探り、一人進みながら思う。

（まずは大河内達の無事を確かめないと・・・・）

まだ無事なら巻き込んだ責任として逃がす必要がある。

周囲を警戒しながら廊下を小走りに進んでいく。

―――――――――――――――――――――

どうにか敵の攻撃を受けずに部屋の前に着いた。時間にして警戒しながらの行動だったとはいえ、1分もかかっていない。しかし思ったよりこの状況は心理的にキツイ。
まだ部屋に入っていないが大よその見当は付いている。大河内はともかく図書館部トリオと朝倉を同じ部屋に入れてこんなに静かなわけが無い。今のように障子戸が半分ほど開いていればここまで騒がしい声が聞こえるはずだった。

（時、既に遅しか・・・・）

戸の正面に立つとその隙間から早乙女が口元に手を当てた格好で立っているのが見えた。・・・自分の姿全てを灰色に変えた格好で。その早乙女の像の背後を覗くと同じように石にされた宮崎と朝倉の姿があった。しかし、

（綾瀬と大河内の姿が・・・・）

無い。何処に行ったのだろう。逃げようにも入口は一箇所。庭に逃げようにもガラス戸は施錠されている。この場に居なかっただけ？
だとすると何処に・・・・？
そう思いながらふと石像になった朝倉を見る。手を広げ、横を見ているその姿に違和感を覚える。背後を気にするその視線、まるで何かを守っているような・・・・。
その後ろには『雨四光』と書いてある掛軸があった。俺の部屋の掛軸が『猪鹿蝶』だったことから考えると詠春さんは花札好きらしい。掛軸の内容は自由だと思うが、少なくとも客間に飾るものではないと思う。
まさかね・・・・。と思いながら掛軸に手を掛けてずらす。するとそこに人一人やっと通れるような通路が出現し、奥には部屋も見えた。

（何でこんなところに隠し通部屋がある・・・・）

多分俺も作るけど。

どうやらここは屋敷は屋敷でも忍者屋敷に通じるものがあるらしい。

探したら回転扉とかありそうだ。

奥の部屋に人の気配。どうやら掛軸は感覚阻害の呪術効果があるらしかった。

そのまま顔を突っ込むと四畳半の小さな部屋の隅に二人はいた。

「大河内！綾瀬！無事だったか！！」

俺の顔と言葉で極限まで緊張していた二人の表情から安堵が生まれた。

――――――――――――――――――――

二人を隠し部屋から出す。残った二人に石になった宮崎達を見せるのも忍びなかったのでそのまま廊下に連れて行く。

俺に見つけてもらって心に余裕が出てきたのか、大河内と綾瀬は事の顛末を話していく。

「朝倉が助けてくれた。か・・・・」

守るように立ってたのはその為だったか。未だ震えが残る二人はそれでも気丈に振舞っていた。

その二人の視線はさっきまでいた部屋に注がれていた。ここからは見えなくてもやはり先ほど見た石になった三人が強烈に頭に残って

いるらしい。

「い・・・・一体これはどういう「静かにしてろ」」

事情を聞こうとする綾瀬の言葉に無理矢理被せる形で黙らせる。正直、話しを聞きながら周囲の警戒はやりずらい。

それでも納得がいかない二人は俺の腰にある鬼丸国綱を見ていた。

本物とは思ってないものの、シネマ村のレプリカとは違うその存在感に半ば呑まれているらしい。

全員とはいかないものの、二人は確保できた。急いで近衛の方に向かわなければ。

ジーンズから財布と携帯を取り出して大河内に投げる。胸で受け止めた大河内は何の事か分からない。という顔をしていた。

「二人とも、麓まで降りてタクシーで宿まで逃げ切れ」

「念の為、電話帳機能には京都周辺のタクシー会社の番号は入れてある」と言って二人の後ろに回り背中を押す。

そこまで行けば大丈夫だ。敵は各個撃破をしてくる以上、逃げるヤツまで相手にしないだろう。

そのままサンダルを履かせて庭に出す。何か言いたそうな綾瀬の顔。再び疑問をぶつけられる前に予防線を張っておく。

「綾瀬、事情を聞くより先に、ここから逃げなきゃいけない。ってのは本能で理解してるだろう?」

俺の言葉で歯噛みする綾瀬。今は事態の説明よりも、動かなくなった友人よりも、身の安全の確保が最優先だと肌で感じているはずだ。

「ひ、姫菱くんはどうするの?」

「俺は近衛達を探してから逃げる」

合流した後、逃げ切れるかどうかはまた別の話だが、今は二人を逃がすのが先。

「じゃ、じゃあ私も、」と食い下がろうとする大河内。俺としては時間が惜しいので、知らず知らずに鋭い言葉になる

「足手まといだ」

そんな言葉で切って捨てると、大河内は黙ってしまうも半泣きになってしまう。綾瀬は何故か怒りの目を向けてくる。

近衛を助けた後は恐らく逃げる必要がある。そんな時に三人も抱えて走れない。二人はここで逃がすのが正解だ。

どうあってもここで別れる以上意味が無い。

泣き顔の大河内を慰めるため頭を撫でようとして・・・・止めた。

そのまま綾瀬とアキラを屋敷の敷地外まで送り、踵を返して屋敷に戻る。背中に突き刺さる視線に振り返るわけにはいかない。

まだ何も解決していない。ここで二人について行く訳にはいかない。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇木乃香　ｓｉｄｅ◇

アスナに先導されるまま風呂場に来た。

せわしなく周囲を警戒しながらここまで来たせいでアスナは随分と消耗しとる。でも緊張で息を切らしているのはウチも同じだった。

「ネ、ネギの奴はまだ来てないみたいね」

アスナの声には少なからず落胆があった。どうやらネギ君と待ち合わせしとったらしい。ネギ君もウチを守るために傷付くんやろか・・・。

アスナの背中に触れるくらいの距離で付いていく。離れると、その度に注意されるのでちゃんとついていかんと。

瞬間。何の前触れも無くアスナが回転。その勢いのままにハリセンが旋回しウチの頭上を掠めながら快音を上げる。

やっと反応できたのは少年の驚いた声が聞こえた後だった。

「すごい。訓練された戦士のような反応だ」

振り返るとシネマ村でウチと姫菱を屋根の上まで追い詰めた男の子がウチらを見下ろしていた。昼間見たときはネギ君と同じくらいの身長やったはずやのに・・・。下を見るとその足は床板を踏んでおらず宙にと浮いとった。

「でも」と前置きをした男の子は右手を掲げ二、三言英語ともフランス語ともつかん言葉を小さく口走る。

「お姫様を守るには役者不足かな。君も眠ってもらうよ」

灰色の濃厚な煙が噴出すのと、アスナがウチを突き飛ばすのは同時やった。ウチは尻餅をつきながら何とか煙から逃れるもアスナはその煙を一身に浴びる。

「アスナー！」

アスナの浴衣が氷が割れる音を伴いながら、瞬く間に灰色に染まっ

ていく。一際大きな大きなヒビと破砕音を伴って、アスナの着とった浴衣といわず下着まで灰色の薄氷となって割れ砕ける。

「キャアアッ!?やあん、何よコレ――――」

いきなり全裸にされたアスナは思わず胸を隠そうと身体を折り曲げる。男の子の方も服を脱がすつもりは無かったんか申し訳無いような顔になとった。

しかしそれも一瞬。再び右手を掲げる。アスナは何でか知らんがさっきの煙で裸にされた。でも次は無い。直感でそう感じた。

気付いた時にはアスナと男の子の間に立っとった。

しかし、男の子の掲げた手の指先も、その三白眼からの視線も一瞬も後ろのアスナから逸れる事は無かった。

「やめて下さい」

思ったより静かに言えた。きっとウチの中で覚悟が決まったからやろう。

「言う通りにしますんで、皆に手を出さんといて下さい」

そう言うたのは勢いかもしれん。でも、

アスナや、ネギ君、せっちゃんにこれ以上迷惑を掛けたくなかった。

そして

姫菱・・・雄飛・・・・。

ウチみたいな人間でも『守りたい人』はおる。

たとえ『力』が無くても、守られるだけの存在でも、好きな人に嫌われても。

「そう」

何の抑揚も無くそう言い、掲げた手を下ろしやっとウチを見た。
男の子は札を取り出すと「ヴァーリ・ヴァンダナ」とさっきとは違う言葉を唱えるといくつもの手が現れる。
湯船から出てきたソレは風呂場の照明の光を乱反射させる透明な、水でできた手だった。
再びアスナに視線を向け腕を掲げると、ウチを避けて後ろのアスナに何本もの手が一気に襲い掛かる。反射的に下がったウチをすり抜けアスナに巻きつき、持ち上げる。
やっぱりウチの願いは聞き入れてくれんかったか・・・・。そう思うも水流の手はアスナの腕を、足を拘束し、口を塞ぎ・・・・そこで止まった。
男の子がこっちに向き直ると同時に、いきなり目の前に大きな怪物が降り立った。シネマ村で姫菱に傷を負わせた化け物やった。
昼間の事を思い出し、睨みつけてしまう。しかし怪物は翼をはためかせ片膝を付き恭しく手を差し出した。
自分の意思で付いて来いゆう事やろう。ウチにはこの手を取る以外の選択肢は、無い。
手が恐怖で震える。自分の身の安全を『何をされるか分からない』人達に差し出すのは想像を超える怖さやった。

（それでも・・・・それでも、ウチは・・・・）

金属の光沢を持つ毛に覆われた手をとる。それと同時に化け物に抱え上げられる。好きな男以外に抱き上げられる事に思わず嫌悪感が湧き上がる。
それと同時に昼間の逃走劇を思い出す。不謹慎だと思うが・・・・楽しく、そして幸せな時間だったと今更ながら思う。

「・・・・じゃあ、お姫様はもらっていくね」

男の子は手も、足も動かず、口も聞けないアスナに言葉をかける。その後、三白眼と自分の目が合う。『最後の言葉』を、という事やろう。
アスナを見ると目に涙を浮かべとった。視界が歪んどるウチも同じような顔やろう。

「アスナ、ごめんな・・・・。でも、雄飛にだけは・・伝えんといてな・・・・」

そう言って顔を背ける。これ以上見とったら涙を堪えきれん。化け物は風呂場の庭に出るとそのまま飛び上がり、一気に舞い上がる。目尻の涙はそのまま春の夜空に流され消えていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇アキラ　side◇

夜の森をひたすらに走り、下っていく。
まだ一分も走っていないが緊張の所為かかなり息が上がっている。
すぐ後ろを走る綾瀬さんも肩で息をしている。
姫菱くんから借りた携帯のライトを頼りに獣道を走る。
彼のいる世界がこんなに怖いものだとは思わなかった。冗談抜きで命が掛かっていた。
だがそれ以上に、そんな怖い場所に友達を置いて逃げるのがこんなに惨めだとは思わなかった。
それでも、

足でまといになりたくない。
そのプライドだけが今の自分を支えていた。
それでも涙は滲んでくる。誰かを守りたくても自分にはそんな都合の良い力なんて無い。

（自分には・・・・？）

斜面に足を突き立てて急停止。背中に激突した綾瀬さんから短い悲鳴が上がるが頭に入らない。
今、私の頭の中は逃げる事では無く、プライドを守る事でも無く、別の事を考えていた。

（じゃあ、他の人なら・・・・）

「ちょっ、と大河内さ、ん・・・・」

息も絶え絶えに、痛みに呻く綾瀬さんの両肩を掴み告げる。

「助け、を、呼ぼう」

自分じゃなくても、無力な自分でも、他の人なら・・・・

「た、助け、って・・言った、って」

「朝倉だ、って、言ってたじゃな、い・・・・」

私も息が上がった状態の中、朝倉に最後に言われた言葉を思い出す。

（助けを呼ぶんだ）

あのお気楽なジャーナリストはそう言って私達を隠し部屋に押し込んだ。
あの状況で自分ではなく私達を心配し、身を挺して助けてくれた人の言葉を無下にはしたくない。

「しかしそうは言っても大河内さん!!
警察はおろかこんな非現実的な事態に対処してくれる所など日本のどこにも・・」

「いるよ」

息が整ってきたのか一息に話す綾瀬さんに告げる。私も心に余裕が戻ってきた。
余裕が生まれれば色んな考えが浮かんでくる。姫菱くんがいつも冗談を言っている理由が少し分かった気がした。
今日の朝の事を思い出す。

(・・・見なかったか?)

(・・・から聞いてるかもしれんが・・・・)

彼がこの修学旅行中にわざわざ話を聞いていた二人だ。
絶対に何かある。
確信と共に携帯のアドレスを調べると・・・・あった。
それほど親しい関係では無い方の番号だったが、意に介さず『発信』のボタンを押す。
たった数コールだけだったが永遠にも思える時間が過ぎて、相手が出た。

「もしもし、長瀬さん?」

まだ今日は、長い一日は、

終わらせない。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

『分かった。助っ人はこっちで何とかするわい。じゃから』

「はい。それまでこっちはこっちで何とかします」

その言葉を最後にネギ先生は乱暴に携帯電話を切る。会話を聞いていた限りでは学園長はどうにか助っ人を送りこむと言っていたが、今からではどうあっても間に合わないだろう。

ネギ先生と合流した後、お嬢様達とは風呂場で合流する話になったらしく周囲を警戒しながら廊下を走る。

お嬢様は明日菜さんが守っているらしいが、不意を付いたとはいえ詠春様が敗北した相手だ。私や姫菱でも相手になるかどうか・・・・。

不思議と先ほどの迷いは吹き飛んでいた。現状の危機に流されたのかもしれないが、心の中にあるのは姫菱の言葉だった。

（助けます。必ず）

きっと姫菱も迷っていた。風呂場で詠春様に啖呵を切っていたが、

あれは余裕の無さの裏返しに思える。お嬢様に叩かれた事が心に重くのしかかっていたのだろう。
しかし、彼は詠春様に『何か』を託された。『男』として、お嬢様を守る事だけではない『何か』を。
だから詠春様は切っ先を逸らし、姫菱は離れる時に頭を下げたのだろう。
私も姫菱の顔を見て決めた。
彼を守ろう。お嬢様を守る為に戦う彼を。

もう認めてしまおう。自分の感情を・・・・。守りたいという思いはそこから湧き出るのだろう。
伝える事はきっと無いけど・・・・。彼を守れるだけで十分だ。
ネギ先生の急減速に慌てて思考を戻す。前を見ると既に風呂場に到着していた。
今はお嬢様を助ける事だけ考えよう。
浴場の引き戸を前に両側の柱にそれぞれ背中を合わせて中の気配を探る。確かに人がいる。
ネギ先生に目配せすると互いに頷く。柱を支点に半回転。二人で同時に戸を蹴破り突入する。

「お嬢様!!」「このかさん!!」

瞬間的に敵の姿を探すが、中にいたのは

「明、日菜さん・・・・？」

何かのプレイのように、全裸で宙吊りにされた明日菜さんの姿だった。

―――――――――――――――――――――

「大丈夫ですか明日菜さん!!何があったんです!?」

水の触手による拘束を夕凪で切り裂くと簡単に助けることができた。
しかし水が口を塞いでいたので未だに咳き込んでいる。

「う・・うう、刹那さん・・・・わ・・私、も・・・・ダメ・・」

その言葉を聞いて脳内で全てが繋がり、頭の血が引いていくのが分かる。やはり最初に感じた予感は当たってしまっていた・・・・！

「ま・・まさか明日菜さん」

「どうしたんです?アスナさん何されたんです?」

ネギ先生も気になるのか聞いてくる。しかしこの内容を１０歳の少年に聞かせてしまっていいのだろうか?
考えに考え、出てきた言葉は

「え・・・・えっちなコト・・とか?」

顔を赤らめながら何とか答える。正直、脳内にはＲ１８指定の妄想が浮かび上がっているが、とても言葉にする勇気はなかった。
「ええっ!?」っと驚愕の声を上げるネギ先生を尻目に明日菜さんが「されてな――い!」とツッコミを入れられる。

「ご・・ごめん、刹那さん。このか・・・・」

その言葉を最後まで聞く前に私は動いていた。明日菜さんの「後ろ

！！」という叫びと同時、背後に現れた気配に向かって下から掬い上げるように裏拳を放つ。しかし斜めの軌道を描いた右拳は敵を捉える事無く、更に外に弾かれる。
左の手刀を繰り出そうとする前に、敵の右正拳が一直線に顔めがけ飛んでくる。何とか顎を守るも軌道変化。砲弾のような打ち下ろしの一撃が脇腹に叩き込まれ吹き飛ばされる。

（白い髪の少年に気をつけなさい・・・格の違う相手だ）

詠春様の言葉を思い出したのは、板張りの床、浴場の壁、と連続で叩き付けられた後だった。更にバウンドしてもう一度壁に激突してから、やっと下に落ちた。

「あ〝・・・・かはっ・・う〝・・・・・」

しかし腹に受けた一撃と、背中に連続で受けた衝撃に挟まれ上手く呼吸できない。口から出るのは言葉にならない呻き声だけだった。
「刹那さん！」というネギ先生の言葉にも何も返せない。

「ま、まさか君が・・・・！こ・・・・このかさんを、どこにやったんですか・・？」

呼吸も楽になり敵を見る。しかし白髪の少年はネギ先生の言葉にも無言を貫き通す。

「・・みんなを石にして、刹那さんを殴って、このかさんをさらって、アスナさんにえっちなコトまでして・・！
先生として・・・・友達として・・・・僕は・・・・・僕は・・・・・」

「許さないぞ！！！」

宣言と共に立ち上がり杖を構えるネギ先生。しかし対する白髪の少年は一切の無表情。

そこには嘲りも、憤怒も、悲哀も、楽観も。油断ですら浮かんでなかった。

「・・・・それで、どうするんだい？ネギ・スプリングフィールド」

その口から発せられる声色ですら感情が篭っていない。まるで機械が挑発してくるような印象を受ける。

しかしその内容からは確かな余裕を感じる。

「僕を倒すのかい？」

「俺がな」

浴場に轟音が響く。

しかしそれより速く白刃が少年の背に叩き込まれた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

（咬み尽せ！）

抜刀術　『風牙絶咬』

風を纏った突きを神速の踏み込みと共に繰り出す突進技で、風呂場

の壁を破壊しながら斜め後ろから強襲。
轟音が大浴場に響き渡るよりも先に俺の繰り出した風牙の突きが少年に着弾。
心臓近くに切っ先を突き立て、その体勢のままネギの近くを通り過ぎ入口近くの柱に叩き付けるっ！
その瞬間交通事故が起きたかの様な衝撃が発生し、洗い場を揺らす。
しかし柱の大部分を破壊し、壁にめり込ませるほどの刺突を叩き込んでも、手応えは無かった。
国綱の切っ先は少年の背中に触れる数ミリ手前で微細に揺れている。
さすがに今回は驚愕せざるを得ない。
上着と刀の間には複雑怪奇に描かれた魔法陣が存在していた。そしてその魔法陣の奥にも、その奥にも、その奥にも。
夥しいほどの数の魔法障壁が少年の背中と切っ先との間に存在しており、繰り出した蛇の牙が完全に防がれていた。

「完全奇襲でも傷一つ付かないとは・・・・ずいぶん頑丈に生んでもらったんだな・・・・」

「いや、結構危なかったよ」

両手でめり込んだ壁から身体を押し出す。会話の間も一切力を緩めていないのに刀と俺ごと押し返してくる。膂力は俺以上ってか！？
壁から出てきた瞬間、俺を押し返す勢いそのままに放たれる後ろ回し蹴り。
斜め下から繰り出され顎を狙うその一撃を、俺も押し返される力に逆らう事無くスウェーで回避。共に振り上げた国綱を今度は下に。

「雷斬衝！」

振り下ろす刀と共に落雷が発生。雷撃なら物理障壁を突破できるは

ず。
しかし打ち下ろしも、紫電の蛇も少年には届かない。
回し蹴りの途中から少年は下に沈んでいき、国綱の一刀と雷撃を回避。俺が追撃を放とうとする頃には水溜りしか残っていなかった。

「逃げ、られた・・か・・・・・？」

「・・・水を利用した『扉』・・・・！？かなりの高等魔術だ・・・・」

カモの言葉通りなら『瞬間移動』って事か・・・・。格闘、剛力、魔法障壁、石化魔術に加えて、水を使った転移・・・・。
ここまで来ると第二形態に変身したってもう俺は驚かねぇな・・・・。

「だ、大丈夫ですか？明日菜さん・・・・」

呻きながら立ち上がろうとする桜咲。脇腹を押さえて尻餅をつくのを見ると怪我しているらしい。
桜咲のシャツを捲り上げると腹部が拳大の大きさで青黒く変色していた。確かにコレは痛いだろう。
顔を真っ赤にしている桜咲の肩に国綱を触れさせて詠唱を開始する。

「癒しの光、今ここに集え！ヒール！」

この後も戦う可能性がある以上、全快させておく必要がある。今の俺が使える最高の個人用再生術で一気に治療。
眩い新緑の光が桜咲の患部を中心に集まる。しかし数秒もしない内に光は消え去り、後には綺麗な白い肌が戻っていた。

「あ、ありがとう・・・・姫菱・・・・・」

恥ずかしいのか瞬く間にシャツを戻す桜咲。もうちょっと上まで捲り上げればよかったか・・・・。

桜咲が立ち上がれるのを確認してから国綱を納刀。神楽坂に向き直ると肩にバスタオルを掛けて裸体を隠していた。

「さて、近衛助けに行くか」

「コンビニに行くか」というような軽さで言った俺の言葉を聞いて神楽坂が衝撃の事実を告げる。

「ちょ、ちょっとまって、このか・・・・このかは、自分からついて行っちゃったの・・・・・！」

―――――――――――――――――――――――――――――――

「『皆に手を出さんといて下さい』。か・・・・」

その言葉で理解した。俺だけじゃなくこの場の全員が理解しただろう。俺達は『近衛に守られた』のだ、と。

皆、自分の身を捧げても俺達を守ったという行動に打ちのめされていた。

自分の意思でついて行った以上、助けるべきなんだろうか。この後も敵と戦う事は近衛の行為を踏みにじる事に他ならないと感じている様だ。

俺を除いて。

「まあそれはそれとして。そろそろ近衛、助けに行かね？」

俺の言葉に全員がズッコケた。示し合わせた様に完全にシンクロしたコケ方だった。

「あんたねぇ！冗談言って良い時と、悪い「知るかよ」」

神楽坂の言葉を遮る形で話す。意外にも冷徹な声色が出た。どうやら俺は怒っているらしい。

「悩むのは近衛を助けてからにしろ。俺は自分の耳で聞かないと信じない性質だし、俺はあいつに今回の事まだ謝ってない」

俺の強引過ぎる論理に全員が呆気に取られている。

「何より修学旅行まだ一日残ってんだぞ？」

明日の自由行動で京料理の名店を案内してもらう約束を近衛としているのだ。それを反古にさせるわけにはいかない。絶対に。『強制的に助け出す』という俺の方針に皆の顔に笑いと、力が戻ってきていた。

「じゃ、作戦立てるか」

そう言ってネギの肩に乗ったカモを見る。作戦には年長者の老獪さがどうしても必要不可欠だ。まぁこのオコジョはどう考えても俺より年下だと思うが・・・・。

「しかし姫のアニキ。あのガキ、タダ者じゃね・・・・」

自分の台詞の途中で、「これはいける!!名案を思いついたぜ!!」と叫ぶカモ。
その瞬間、猫より狭いその額に電流のようなものが走ったのを俺は見逃さない。
・・・お前オコジョの革新だったのか・・・・!
広大な宇宙空間に適応したオコジョがいる事実に驚いている俺を無視して、桜咲達は「えっ、何!?」「何ですかカモさん!」と期待の眼差しを向ける。

「ふふ・・刹那の姉さん・・・・ネギの兄貴のこと・・好きかい?」
下世話な笑みを浮かべながらオコジョは、桜咲にこの状況に全く関係の無い質問をする。

「え〝っ、それ何の関係が!?」
いきなりな質問に顔を赤く染め、狼狽する桜咲。そんな彼女にカモは「・・つまりだな」ともったいぶって話しを続ける。

「刹那の姉さんと兄貴がチュウすんだよ」
その言葉にネギまで顔を真っ赤にする。後ろで話しを聞いていた神楽坂は再びズッコケている。俺はカモの狙いが分かってしまった・・・。

「この非常時に何言ってんのよ――ッ!」
エロ発言したオコジョに神楽坂が制裁を加える。そのまま床と手で身体を押しつぶされたカモは蛙の様な声を出した。

「ち、違うよ姐さん。仮契約だよ仮契約！！」

盛大に咳き込みながら何とか弁明するカモ。そこでやっと神楽坂の顔に理解の光が灯る。

桜咲の「気」の強化にネギの「魔力」による強化を上乗せする。というのがカモの主張だった。確かに可能なら戦力は大幅にアップするだろう。

しかし、

「で、でも・・いきなりキスなんて」「そ、そうだよカモ君」

ここでは倫理観が戦術論を上回った。ネギや、神楽坂から口々に反論が上がる。

張本人の桜咲に至っては誇張抜きで茹でダコ並みに顔が赤い。俺に助けを求める様にシャツの裾を時折引っ張ってくる。

そちらに顔を向けると半泣きの目で俺を見て・・・何かを言いたそうに口を開き、また閉じる。

・・・何と言うか・・・すごく、男心をそそられる表情だった・・・。

「いーじゃねえか、やっちまえよ！ぶちゅ――っと」

中年オコジョが余計な効果音を付けた瞬間、処刑人神楽坂による制裁が再び加えられる。

カモを引っ掴みそのまま壁に叩き付ける。洗い場のタイルにヒビを入れるほどの衝撃をその身に受けたカモは「あ、姐さん、時が・・時が見える・・・・」という言葉を残して床にずり落ちていった。

「神楽坂。殺すのは明日にしろ」

『俺とネギを仮契約させる』と言わなかっただけ良しとしよう。言っていたらコートの材料として生皮を剥いでいただろうが。
そろそろ近衛助けに行きたいんだが・・・・。

## 第十四話（後書き）

次回、次回こそ姫菱大活躍！のはず・・・・。
しかし・・・書いても書いても修学旅行編が終わらない・・・・・。

# 第十五話（前書き）

「話の進むスピードが遅すぎね？」と友人に言われました・・・・。
もっとテンポ良く進んだ方がいいのでしょうか・・・・？

## 第十五話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

気の跡を辿り森の中を走る。この方向には確か、川が・・・・。
一気に視界が開ける。屋敷近くを流れる川の中腹、岩に囲まれた中州に奴らはいた。

「待て！」

一瞬も躊躇わず川に飛び込み更に走る。脛まで浸かる水を掻き分け停止する。

「そこまでだ！お嬢様を放せ！！」

こちらに気付き振り返った敵に向かって夕凪を突きつける。後に続く三人もそれぞれの得物を油断無く構える。
見据える敵は一際大きな岩の上にいた。お嬢様を抱いているサルの式神。白髪の少年、そして・・・

「天ヶ崎千草！！明日の朝にはお前を捕らえに応援が来るぞ！無駄な抵抗はやめ投降するがいい！」

本当は応援の到着は昼までかかるらしいが、敵に有利な情報をくれてやるつもりは無い。
お嬢様を見ると両手を縛られ、口に呪符を巻かれもがく姿に怒りが

込上げてくる。自分からついて行ったはずだが、敵はお嬢様を人間扱いするつもりは無いようだった。
こちらを見ながらもがくお嬢様の目には涙が浮かんでいる。自分の身を挺してまで私達を守ったのに、たった今無意味になったのだ。
恐らく自分の無力感に苛まれているのだろう。

「・・・またあんたらか。ふふん・・・・応援が何ぼのもんや。あの場所まで行きさえすれば・・」

私達に追いつかれたのに、敵の余裕は崩れない。恐らく隠し玉があるのだろう。それもかなり強力な手札が。
慎重に行かなければ。しかし

「近衛を帰してからぶっ飛ばされんのと、ぶっ飛ばされてから近衛を返すのと・・・・どっちがいい?」

いつも冷静なはずの姫菱が一歩前に出る。
その言葉、その表情。傍目にも分かる位、怒りが滲んでいる。しかし構えに力が入りすぎている。これは、まさか・・・・

「月並みで悪いが・・・・どっちもお断りや」

明らかな挑発。普段なら絶対に乗らない彼だったが、

「じゃあ、俺が決めてやるよ!」

そう言って一気に走り出し間合いを詰める。しかし気による肉体強化を行っていない。怒りに我を忘れている!
常人にしては全力疾走でも、本来の戦闘速度ではない。あまりに遅すぎる。そしてそれを見逃す呪符使いではなかった。

嘲りの笑みを浮かべる天ヶ崎。放り投げた札から炎術が発動し炎の柱が立つ。

姫菱の背後で。

敵の炎術発動の瞬間、肉体強化を行い一気に加速。術の効果範囲を置き去りにしたのだ。

怒りの演技と二段階加速の詐術で一気に間合いを詰め、呆気に取られている女の首に抜き打ちの一刀を放つ。

水平の断頭台となった一閃は天ヶ崎の髪一房と右の耳飾を断ち切り、鈍い金属音を出して停止していた。

姫菱の眼前には電柱ほどの太さの灰色の柱が生え、呪符使いの打ち首の刑を阻んでいる。

姫菱の刃はその石柱の半ばまで食い込んでいるものの女の首の真横で停止し、それ以上切り裂く事は叶わなかった。

「聞きしに勝る性格の悪さだね・・・・」

姫菱に向かって右手を掲げる少年の声が響く。やはり言葉には抑揚は無いが口調から察するに少し呆れているようだった。

「何で皆俺を褒めない？」

その言葉と同時に姫菱は後方跳躍。さっきまでいた場所に、一瞬遅れて石の槍が生える。

間合いを取った彼は再び抜刀術の構えを取る。張り詰めた緊張感がその場に満ちる。二人の攻防には誰も入れないと思わせるほどの重圧だった。

全く反応できなかった天ヶ崎の顔には冷や汗。あと一瞬少年の防御が遅ければ自分の首が飛んでいたのだ。しかし、それでも引きつった笑みを浮かべ自分の余裕を崩さない。

「あんたらにもお嬢様の力の一端を見せたるわ」

言葉の端々に隠し切れない嘲笑を滲ませながら岩から降りる。水面に波紋を残すも、沈む事無く水面に立つその姿はさながら巫女の様だった。

「本山でガタガタ震えてればと良かったと後悔するで」

嘲笑を肉食獣の笑みに変え札を取り出す。後ろに従えていた式神が抱えるお嬢様の胸元に呪符が貼り付けられた瞬間、呻き声が上がる。

「オン」

その言葉一つだけで、光が湧き上がる。そしてその周囲にお嬢様から溢れ出た魔力が満ちる。

湧き上がる光は水面に方陣を描き広がっていく。続く真言の詠唱と共に中州に広がっていく光の円と魔の力。

「ん〝んっ・・」

女の口から呪文が紡がれる度にお嬢様の喚きが大きくなり、苦しそうに身をよじる。

「お嬢様!!」「このか・・っ・・・・・!?」

駆け出そうとする私達の前に掲げられる腕と鞘。

「周りをよく見ろ」

顔も視線も一切眼前の敵から逸らさずに姫菱は言う。その忠告通り

に周囲を見ると、光の方陣は既に私達を取り囲むように広がり濃密な魔力が中州全体に満ちていた。
光の中から生えてくる角。凶悪に釣り上がった眼と犬歯。太い手足。見上げるほどの巨体に鋼の筋肉を纏った異形の怪物が中州に次々と現れる。
棍。槍。剣。思い思いの得物を持ってはいるが、明確な敵意と悪意が全方位から浴びせられる。

「ちょっと、ちょっと！こんなのありなの――！？」

明日菜さんの愕然とした叫びが走る。
大鬼の棍棒使い、烏族の剣士、槍を構えた河童、その他にも多種多様な妖怪達が私達を取り囲んでいた。

「やろ――このか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな・・・」「ひゃ、百体くらい軽くいるよ・・」

カモさんとネギ先生の指摘通り呼び出された妖怪の一団は百を超える。数で勝っていたはずの私達だが完全に形勢逆転されていた。
恐らく敵は追ってくる私達を一網打尽にする為、この広い中州で待ち構えていたのだ。

「あんたらにはその鬼どもと遊んでてもらおか」

真言の詠唱を終えた天ヶ崎は勝ち誇った顔で言い放つ。「おとついのおかえし、出血大サービスや」と悪魔の笑みを浮かべる。

「ま、ガキやし、殺さんよーに『だけ』は言っとくわ。安心しときぃ。やけど・・・・
そこの黒髪のガキ！アンタは別や！鬼どもになぶり殺しにされるが

いいわ！！」

続く言葉には溢れんばかりの怒りが篭っていた。その言葉を最後に背を向け、夜空に飛んでいく。
追いたいが周囲の鬼達からのプレッシャーで迂闊に動けない。
いつ襲い掛かってくるか分からない状況に私達は四方向に円陣を組む。

「何や、何や久々に呼ばれた思ったら・・・・」「相手はおぼこい嬢ちゃん、坊ちゃんかいな」

「悪いな嬢ちゃん達。喚ばれたからには手加減できんのや」

「恨まんといてな」と、思い思いの笑い声を上げる異形の妖怪達。
しかし得物を構える姿に一切の油断が無い。緩やかに、しかし確実に包囲網は狭まっていく。

「せ、刹那さん、姫、菱・・・・こ、こんなの・・さすがに私・・・・」

場の圧力に震える明日菜さん。「フ、フツーの女子中学生ですのでっ・・・・」と強がってはいるが、歯の根が合わないほどの恐怖が彼女を襲っている。「明日菜さん、落ち着いて・・大丈夫です！」と叱咤する私の声も裏返っている。
絶対絶命の言葉の他にこの状況を表す言葉が思いつかない。

「こんなに囲まれるほど魅力的になった覚えはないんだがなぁ・・・・」

そんな状況でもいつもの口調で紡がれる軽口が耳に入ってくる。視

線を向けると姫菱が苦笑を浮かべ前を見据えている。

「いけるのか？姫菱」

「イヤ。後一体増えたら、あまりの敵の数の多さに負けるかもしれない」

ここまで徹底していると逆に尊敬しそうになる。そうこうしている内にネギ先生の呪文詠唱は完成していた。

「逆巻け春の嵐　我らに風の加護を！『風化旋風　風障壁！！』」

私達の円陣の一歩外を囲うように花弁を伴う風が発生。瞬く間に成長し、竜巻となる。妖怪の一団と私達の間に風の盾が生み出され防壁となった。

「風の障壁です。ただし2、3分しか持ちません！」

どうにか体勢を整える時間は作れた。四人は向き直り顔を合わせる。

「よし！手短に作戦立てようぜ！？どうする？こいつはかなりまずい状況だ！！」

確かに。ここで足止めを食らってはお嬢様を奪還する機会は二度と訪れないだろう。

『あの場所まで行きさえすれば』。

『嬢様の力の一端』。

そう言っていた以上、天ヶ崎はお嬢様の力で『何か』を喚び出すつもりだ。それまでに勝負をつけなければ・・・・。

「・・私が一人でここに残り鬼達を引き付けます。その間に皆さんでお嬢様を追ってください」

時間との勝負である以上、この方法しか無い。「ええっ」「そんな刹那さんっ」と、この捨て石の戦術に悲痛な声を上げる明日菜さんとネギ先生。

「任せて下さい。ああいう化け物を退治調伏するのが、元々の私の仕事ですから」

あの数の妖怪を相手になんて出来るわけはないが、誰かが足止めをしなければならない。
素人の明日菜さんは論外。空を飛べるネギ先生はお嬢様を助け出した後にどうしても必要だ。そしてあの白髪の少年をまともに戦えるのは姫菱しかいない。
ここに私が残るのは当然の選択だった。

「そうだな。ここでの足止めは確かに必要だ」

姫菱の戦術眼が冷静に同意する。残る二人が信じられない。といった目で姫菱を見る。
私の身を案じてほしい。というわがままな思いが無いわけでは無いが、それ以上に『お嬢様を助ける』彼の力になりたかった。

「だから俺、桜咲、神楽坂の三人でここの一団を全滅させる」

しかし、彼の口から出てきた作戦はさらにとんでもないものだった。
姫菱は呆気に取られている私達に自分の考えを説明していく。

「良く考えろ。近衛を助け出した後、守りながらこの数の敵を倒す

なんて不可能だ。敵の数が多いなら各個撃破が基本だろ？」

いつもの冗談ではなく理に適った戦術に皆聞き入っている。カモさんもその案に賛成なのかネギ先生に質問する。

「兄貴！！姐さんへの魔力供給を、防御とかの最低限に節約して最大何分まで伸ばせると思う？」

「う・・術式が難しいけど、５分・・いや１０分・・ううん、１５分はがんばれる！でもっ・・」

無理難題に近いのか苦しそうに答えるネギ先生。しかし京都駅での戦いでは3分程度だったからかなりの無茶になるのだろう。しかし明日菜さんを姫菱と二人でカバーしながら戦えばどうにかなりそうだ。

「俺達三人はここで鬼達を倒して、ネギは一撃離脱で近衛を救出。後はネギを追う残党を俺らで足止めしながら援軍を待つ。これが基本戦術だな」

そう言いながら前回同様、分かりやすくボードに絵を描いて作戦の説明をする姫菱。

だからそのマジックとフリップ、何処に隠し持っている！？そして何で誰もツッコミを入れない！

私の心からの疑問なんて知らずに、姫菱の言葉に強く頷く明日菜さん。震えは少し残っているが顔にはいつもの活力が漲っていた。恐怖に負けていた自分を戦力として数えてくれた姫菱の言葉に奮い立ったのだろう。

「かなりの綱渡りな作戦だ。後は各自、臨機応変に行こう」

最後に姫菱の軽口が締めくくる。しかしカモさんが「よし！」と声を上げる。

「そうとなったら、アレもやっとこうぜ！ズバッとブチュウとよお！」

そう言って前足を振り上げるカモさん。「アレって？」と素直な疑問を口にする明日菜さん。『アレ』。その言葉にお風呂場での一幕を思い出す。

「キッスだよキス！仮契約！！」

やっぱり・・・。その言葉を予想していなかったネギ先生だけが驚きの声を上げる。姫菱に至っては路傍の石を見る眼をカモさんに向けていた。

「緊急事態だ！！手札は多いほうがいいだろうがよぉ！！」

カモさんの一喝で思わずネギ先生共々返事をしてしまった。これでもう、後には引けなくなった。

「急げ！！障壁が解けるぞ」

一秒にも満たない時間で魔法陣を描き上げたカモさんに急かされるように陣の中に入る。

助けを求め、姫菱の方に何度か視線を送ってしまうが気付いてはくれない。彼は何故かネギ先生を睨んでいる。

無意識にスカートの裾を握り締める。自分の気持ちを自覚してしまった今、いくらネギ先生でも、キスは・・・・

完全にパニックになっていた私は一瞬で色んな事を考えてしまう。
そしてふと脳裏に閃いた事が、よく考えもせずに口から出た。

「で、でもネギ先生一人の残り魔力で私達二人への魔力供給を賄いきれるのですか？」

その言葉で確かに全員の時は止まるも、直ぐに答えが出る。
ネギ先生以外で他人に分けるほどの魔力を持った魔法使い・・・・。

「俺か？」

この場の全員の視線を浴びて姫菱が答える。
事態の意外な方向転がってしまった事に誰も付いていけていない。

「き、緊急、事態・・・・なんです、よ・・ね・・・・？」

きっと自分は冷静だったろう。彼の手を取り、強引に引き寄せた私は大胆ではあっても混乱はしていない。
期せずして姫菱も魔法陣の中に足を踏み入れる形になった。

「・・自分を安売りしてねえか・・・・？」

動揺する姫菱は始めて見る。彼の声色には、私への思いやりと・・・・ほんの少しの期待。
どういう訳か彼の心の内が手に取るように分かる。
勢いでも打算でもなんでも良い。彼が少しでも期待してくれているなら・・・・。

「さっきの言葉も言い訳です」

俯いていた顔を上げて、真っ直ぐに見る彼の顔。これほど近くで見た事は今まで無かった。
彼の言葉ももっともだ。出会ってまだ二週間も経っていない。それどころか自分の気持ちを認めたのはついさっきだ。
だけど

「仮契約するなら、キスするなら貴方としたいんです・・・・」

姫菱のシャツの襟を掴む。自分がこんなに大胆だったなんて、強引だったなんて・・・・。
それでも言葉は、自分の気持ちは彼に聞いて欲しい。

「好きです・・・。雄飛、さん・・・・。貴方が・・・・このちゃんを助けるのを・・手伝わせてください・・・・」

背伸びをして、彼に少し屈んでもらって、ようやく唇同士が触れる。
繋がっていた時間は一瞬だったが、もっと・・・・ずっと長い時間だったと思う。距離が離れると近くに雄飛の顔があった。
一瞬遅れて魔法陣から立ち上る光が収束し一つの形を作る。
私達の顔の間に光に包まれた二枚のカードが現れ、カモさんがキャッチする。
そこで気付いてしまう。
自分が一体どういう状況で告白していたかを・・・・！

「・・・・全員、戦闘準備しろ・・・・・」

狼狽する私から注意を逸らす為なのか、雄飛は慌しく話題を逸らそうとしていた。
カードを受け取る彼の顔はやはり赤かった。

竜巻の勢いが徐々に弱まり、切れ目の間から外の景色が見えてくる。
足元にも風の勢いで吹き飛んでいた水嵩が戻ってきて再び靴を濡らす。
風の障壁が完全に消えるその前に私達は再び円陣を組んでいた。
ただし、前方は詠唱の完了したネギ先生。

「『雷の暴風』」

妖怪の一陣を貫く轟音と一筋の雷。従え引き連れた暴風を置き去りにするような雷光が夜の森に描かれ、消える。
その一撃で出来た滑走路をネギ先生が飛んでいく。
鬼達を紙吹雪のように吹き散らした一撃が消え去った。今度は私達が動く番だ。

「あ〜〜ハズいっ！」

見ると雄飛はしゃがみ込んで川の水で顔を洗っていた。肩口の袖で顔を拭く彼の顔はまだ赤い。まあ未だに熱を持っている自分の顔も似たようなものだろう。

「豆でも持って来れば良かったな」

立ち上がり全方位を囲む鬼達を見渡しながら軽口を叩く。その言葉に緊張していた明日菜さんの顔にほんの少し笑いが出る。

「・・落ち着いて戦えば大丈夫です！見た目ほど恐ろしい敵じゃあ

りません。
私達の剣も明日菜さんのハリセンも、こいつらと互角以上に戦う力を持っています」
ゆっくり歩を進め、彼の考えた作戦通りに配置に付く。ネギ先生の抜けた前方が底辺となった三角形を描くように円陣を組む。
「ああ。せいぜい『なまはげ１００人』に囲まれたと思えば気が楽だろう」
秋田県を代表する鬼を引き合いに出す雄飛。「それって安心していーんだか、悪いんだか・・」とこぼす明日菜さんの顔には、もう恐怖は無かった。
「こいつはこいつは、勇ましい小僧と嬢ちゃん達やな」
嬉しそうに笑う前方の大鬼。私達も不敵な笑みを浮かべそれぞれの得物を構える。
「じゃあ、ま・・鬼退治といこーか！！」
「はい！！」「応！！」
明日菜さんの言葉と共に戦端が開かれる。
戦闘開始だ！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「魔神剣！」

後方の一団と睨み合っていた俺は戦闘開始と同時、国綱を振り地を這う真空波を放つ。
反転し、敵陣の前方と左右両翼の一団に向かって。
突撃しようとしていたそれぞれの陣の先頭集団は、眼前に出現した瀑布に視界を塞がれ一瞬停滞する。
後方の妖怪達は俺が背を向けているのを好機と見て向かってくる。
しかしそれより一刹那甘んじてハリセン使いと神鳴流剣士が反転し、後方集団に突撃。一瞬の防壁となる。
俺も後方に振り返り跳躍。前衛二人と激突している先頭集団を飛び越え、敵陣のど真ん中に躍り出る。

「朧と消えろ！」

抜刀術　『朧月夜』を放つ。月光を受けて光る白刃が旋回。
満月を描いて放たれる非情の円弧が敵の頭部、首、胸板、腹部、背中と、それぞれの高さで直線が刻まれる。
次の瞬間切り裂かれ両断された部位から血飛沫を上げ、妖怪達が地に伏していく。
敵の後方一団に大きな穴が開き、包囲網が崩れる。国綱の切っ先に灯る翠の燐光。

「交わるは恐怖の荒神！」

詠唱を開始しながら三人で一気に包囲網を突破。反転した一団と、停滞していた妖怪達が合流。百体超過の妖怪の一団が俺達に向かっ

てくる光景が目に映る。そのとき刀の先端に描かれていた魔法陣が完成した。

「フィアフルストーム！」

俺達を追ってくる妖怪達に攻撃術が発動したその瞬間、先ほどネギが作り出した作り出した竜巻が可愛く思えるような大竜巻が発生。鬼達を紙屑の様に飲み込み、吹き飛ばす災害が敵陣を切り崩す。その間に明日菜、刹那は前衛に、俺はその後ろに付く。俺を砲台にする布陣を敷き体勢を整える。

ここまでは作戦通り。問題はここからだ。

続けて掲げる鬼丸国綱の切っ先に、蒼い燐光が輝き魔法陣を描く。

「凍牙、其は結集せし無限の刃！」

これから始まるのは三対百の集団戦。この絶望の綱渡りを渡りきる必要がある。

大災害が収まり、再び前進してくる妖怪軍団。距離など詰めさせない。このまま一気に畳み掛けるっ！

「氷刃、アイススパイン！」

棍棒、大剣、長槍。それぞれの武器を掲げ突進してくる敵に氷の棘の群れが叩き込まれる。氷の投槍が妖怪達に突き刺さり、棘が楔となって敵の前衛がその場に縫い止められる。

動けなくなった先頭集団に後続部隊が激突し隊列が乱れる。そこに叩き込まれる二人の攻撃が前衛を切り崩す。

（この名を以ちて裁け！）

「リリジャス！」

一瞬の停滞無く、魔法の連続攻撃。無詠唱で発動した神聖術が一筋の雷を落とす。

遥か上空から飛来する烏族の集団に向かって。

「来たれ安息なき剣、連なるは悲痛！」

砲台役と化した俺を狙っての上空奇襲だったが、翼の羽ばたきの音を隠さないのでは隠密行動としては不十分だ。

雷撃に焼かれ、空中で身動きの取れなくなった戦士とその一団に追撃の威圧術が発動。

「レストレスソード！」

国綱を空に掲げたと同時。飛んでいた烏族の更に上空から漆黒の大剣の群れが降り注ぐ。飛来する刀剣の雨が夜空を切り裂き、飛翔していた妖怪を残らず打ち落とし水面に縫い付ける。

「雄飛！」

「渦巻くは紺青の誘い！」

刹那の叫びを聞くまでもなく、俺の眼は前衛二人の脇をすり抜けてくる敵の一団を捉えていた。上空の奇襲を食い止めていた分、本隊への対応が一瞬遅れる。狐を模した能面を被った妖怪が逆手に持った短刀を持って肉薄してくる。詠唱と共に光り輝く国綱の刀身の先に描かれる魔術構築陣。

「上に跳べ！」

禍々しく反り返った短刀が首筋に叩き込まれるよりも一瞬早く俺の攻撃術が何とか発動する。

「メイルシュトローム！」

刹那が明日菜を抱きかかえ、突き立った大剣の群れを蹴り上げ上空に舞い上がる。

次の瞬間、俺の周囲に水壁が出現し一気に膨張。妖弧を模した暗殺者達を飲み込みながら回る水流は周りの水を引き寄せながら旋回半径を瞬く間に広げ、速度を上げていく。

「おおおおおっ、らぁっ！」

裂帛の刺突を放つと同時、水流の円運動が直線に変化。中州全体に満ちていた河水を残らず集めた魔法攻撃は森の中に大洪水を引き起こす。

前衛二人の脇を抜けようとしていた者達、一気に押し込もうと突進してくる大鬼の一団とその後方で控えていた妖怪軍団。

その全てを飲み込む大津波が発生。水平の大瀑布となった一撃は上流の岩場と河川の両脇に生えていた木々を押し流し、攫っていった。

「『魔法が本領』と確かに言っていたけど・・・・」

上空に逃れていた刹那が呆れとも関心ともつかない声色で独白しながら着地する。明日菜に至っては大口を開け、大破壊の光景に見入っていた。

中州の水は完全に引き、水底を露出していた。あちこちに点在していた大型車ほどもある大岩はそのほとんどが押し流され残っていない。川を挟むように生えていた大木も根元から引き抜かれ薙ぎ倒さ

れていた。
まさしく景色を一変させる大災害の一撃だった。

「魔法が、使えると、楽でいいな」

荒い息を付きながらの独白。今まで使うに使えなかった分、爽快な気分だ。
いくら百体超過の鬼達が襲ってこようと、式神を一撃で送り返すハリセンを使う明日菜と妖怪退治を専門とする神鳴流剣士の刹那の二人が作る壁はそう簡単に破れない。前衛が作り出した時間を利用して放つ低級、中級の術で敵をまとめて葬るのが砲台たる俺の役目。
前衛と後衛の優れた連携が作る戦闘能力は集団戦において数倍に跳ね上がるのだ。

「あと、三割ってとこか・・・・」

中州だった場所から起き上がる影、影、影。
あれで全員が死んでくれるほど世の中は都合良く出来てはいない。
今までの攻撃で片付けたのは恐らく雑魚。
後方で俺達の戦力を推し量っていた奴が必ずいるはず。今までの妖怪とは別格の奴等が向かってくるだろう。

「け、結構・・・・いいコンビかもね私たち」

「イヤ、俺も仲間に入れろよ」

そこはトリオで良いだろ。俺のツッコミを刹那も笑っている。
俺も含め全員が肩で息をしていた。全身に切り傷や打ち身を負っている前衛は元より、俺も魔法攻撃の連発で脳が沸騰したような苦痛に苛まれる。魔術増幅体である国綱の刀身から蒸気と陽炎が上がっ

ている。これ以上負荷をかけるのはマズイが無視。
こんな状況でも冗談を口にする。しないとやってられない。

「修学旅行帰ったら剣道教えてよ♪刹那さん」

「えっ？い、いいですけど・・・・わ、私もまだ未熟なので・・」

「紡ぎしは寛容、その輝きに名を与うる・・・・ピクシーサークル！」

術の発動と共に地面に描かれる新緑の陣から湧き上がる光。二人を包み込んだ魔法陣が刹那の頬の切り傷や、明日菜の足の打ち身を治療していく。

「俺も男友達が欲しい・・・・」

回復系の法陣術を使い二人の会話をワザと遮る。女の子同士の独特な雰囲気に入れない俺は少し拗ねた様な声を出す。寂しくなんか無いやいっ！

「１５０体の兵が1、2分でここまで削られるとは・・・・ば、化け物かこいつら？」

「イヤ、鏡見ろ」

ゆっくりとこちらに向かってくる鬼の剣士から上がる驚愕の声に、脊髄反射でツッコミを入れてしまう。
前衛二人はおろか、他の妖怪達も俺に同意するように頷く。種族を超えて意見が一致した瞬間だった。

「しっかし・・・天敵の神鳴流や魔法使いの小僧はともかく、あの嬢ちゃんのハリセンは反則ですぜオヤビン」

確かに。何処に喰らっても即死なんて相手にしてみればルール違反レベルだろう。こちらとしては実戦である以上、反則技でも使い続けるが。

「ぐわはは!元気のいい奴らやなぁ」

オヤビンと呼ばれた一際デカイ大鬼は腕を組み呵々大笑といった様相だ。

「・・ところで・・・すかあとの下に肌着を着けへんのが最近の流行りなんかいな?」

男として目のやり場に困る。といったニュアンスで言ってくるオヤビン。

その言葉に反応したかのようにスカートを両手で抑える明日菜。風呂場で石化攻撃を受けたとき本人は効かなかったらしいが、服はその限りではなっかたとの事。変えの服はあっても、下着は無かったらしい。

しかし今更隠しても、もう遅いと思うが・・・・

手下は手下で「いや――いつの間にやら21世紀ですからねー。何があっても・・・・」と嬉しそうに頷いている。

くそう!クラスメイトの手前、必死に見ないようにしているのに・・・!敵は見ても良いというのか!?

エロ思考に切り替わりそうになるのを頭を振って抵抗、守るように明日菜の前に出る。

「違う。これは最近の流行じゃない」

静まれ、という意味で両手を軽く挙げ視線を集める。
俺達の所為で間違った文化を覚えてもらっても困る。ここは声を大にして否定しなければ！

「個人の性癖の問題だっ！」

「言うに事欠いて何てこと言ってんのよー！」

後頭部に快音と共に激痛が走る。振り返ると明日菜が羞恥に顔を赤らめていた。しかしその表情は悪鬼羅刹の類にしか見えなかった。
どうにか宥めようとする俺の感覚が遥か遠方で異常な気配を拾う。
今まで遠ざかっていたネギの魔力の気配が動いていない・・・・。
イヤ、それどころか大きくなっている？

「ネギの奴、足止め食らってる・・・・？」

この魔力の高揚具合は戦闘中なのだろう。あいつ今の状況分かってんのか？
遥か遠くを見ている俺を見ていた明日菜と刹那は互いに視線を交わし、俺に告げる。

「ゆ、雄・・飛。ネギ先生の援護に行ってくれ」

俺の名前を口にした所為か、顔の赤い刹那を見る。面と向かって呼ぶのも恥ずかしいなら苗字でもいいんだが・・・・。
俺は「大丈夫なのか？」と言おうとして、止めた。俺達は仲良しこよしの関係じゃない。目的の為に同じ方向を向いて戦う『仲間』なのだ。
仲間の安否よりも近衛奪還の成功を優先する。その意志の焔が二人

の眼に強く宿っていた。

「二人とも。俺専用の道を作れ」

その焔は俺にも宿っていると信じたい。俺の言葉に頷き敵陣に突撃を仕掛ける刹那達。

「わあああっ！！」

気合の声を上げながら連続で敵を送り返す明日菜。ハリセンが快音を上げる度に敵が煙のように消えていく。

「神鳴流奥義・・」

大鬼を叩き切る大太刀の一撃。明日菜が敵陣の真ん中に空けた穴を刹那が更に切り開く。

「『百烈桜華斬！！！』」

振るわれる夕凪の斬線が幾重にも軌道変化。挟撃しようと左右から距離を詰めていた鬼達も纏めて切り伏せ、遂に敵陣に道が出来る。国綱を鞘に収め、スタートダッシュを慣行。術者の命令を守ろうと、俺に向かって後方や横手から延びる剣や槍。その全てを無視して敵陣を突破、中州を駆け抜ける。

「奥義　雷鳴剣！！」

後ろから轟音と共に振り落ちる落雷が夜を一瞬だけ漂白する。恐らく今までとは違い乱戦になっていることだろう。しかし振り返っている暇も、心配する余裕も無い。

大岩や倒木を飛び越え、避けながら全速力で走る。
二人を心配するのは近衛を助けた後にしなければ・・・・！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

金属ぶつかるような重々しい音が響く森の中。木々が開け、広場となっていた高台でネギは戦っていた。
相手は今日の日中の戦いで、決して軽くない傷を負わされた狗神使いの少年、犬上小太郎だった。
繰り出される攻撃を右手で防ぎ、その隙に逃げようと、魔法を放とうとしたところを牽制される。その繰り返しだった。
再び交差する互いの拳。魔力と気の鍔競り合いが耳障りな音を奏でる。

「どうしたぁ！本気で来いやネギ！！」

草花を削りながら距離を取る両者。しかし小太郎の挑発には苛立ちが含まれている。

「ど、どいてよコタロー君！！僕、いま君と戦っている暇なんてないんだ！！」

肩で息をするネギの声にも滲む苛立ち。視線は眼前の少年ではなく、麓の湖に浮かぶ儀式場。そこから立ち上る二本の光を捉えていた。
湖中央の大岩から伸びる天を支えるかの様な光の柱。それは祭壇の

ような場所から湧き上がる細い光に含まれる魔力に呼応するように太くなっていく。
陰陽道に関しては門外漢のネギでも分かるほどの大規模召喚儀式。
その工程の一つだった。

「兄貴、これ以上自分への契約執行は使うんじゃねえ。ただでさえ姐さんに魔力を供給し続けてるんだ。すぐに底をついちまうぜ！！」

カモミールの冷静な声が耳に入り魔力強化を解除。しかし魔力を温存しようにも儀式場にたどり着かなければ意味が無い。
最終目標は木乃香の救出なのだ。

「コタロー君！！何で、あのお猿のお姉さんの味方をするの！？
あの人は僕の友達をさらってひどいことしようとしてるんだよ」

「ふん！千草の姉ちゃんが何やろうと知らへんわ！俺はただイケ好かん西洋魔術師達と戦いたくて、手を貸しただけや。
けど・・・その甲斐あったわ！！お前に会えたんやからな、ネギ！！」

友人の窮地を話しても鼻で笑う狗神使いの少年。自分と同じくらい息が上がっている少年の表情は心の底から嬉しそうだった。ネギにはそれが信じられない。

「嬉しいで！！同い年で俺と対等に渡り合えたんはお前が始めてや。さあ・・・戦おうや！！」

女に守ってもらっていた西洋魔術師。身体の動かし方も知らない喧嘩の素人。しかし負けた。
小太郎は昼間の自分を恥じていた。負けた事ではない。相手の意地

と覚悟を見誤っていた事を、だ。
自分の思いも拠らない戦術で力量差を埋め、周到に張った罠で不利を覆し、敵は勝利を掴み取った。止めの雷撃は身体だけではなく自分の心に強烈な衝撃を残していった。

「戦いなんて、そんな・・・・意味ないよっ。試合だったらこれが終わった後、いくらでも・・・・・」

「ざけんなぁ!!」

しかしネギの言葉は小太郎の感情に水を差す。

「俺にはわかるで。コトが終わったらお前は本気で戦うような奴やない」

本気のお前と戦いたい。
今、ここで!!
この場所で!!
敵も本気。自分も本気。そのぶつかり合いはきっと最高の時間になるだろう。この熱量を逃がすつもりは無い。

「ここを通るには俺を倒すしかない!」

「俺は譲らへんで!!」と挑発してくる小太郎にネギは気圧されるように半歩下がる。一対一である上にこの距離では魔法攻撃は出来ない。杖で逃げようにも、最初のときのように狗神召喚による遠距離攻撃で打ち落とされる。
強行突破以外の策が思いつかない。しかし勝てるかどうか分からないし、時間と魔力はこの瞬間も刻々と無くなっていく。
一体どうすれば・・・・?

「全力で俺を倒せば間に合うかもしれんで！？来いや、ネギ！！男やろ！！！」

その言葉に覚悟を決める。

「・・・・わかった」

「兄貴！？」

カモミールを後方に下がらせ距離を詰めるネギ。その横顔は焦燥に駆られていた。ネギの変わりように小太郎は一瞬面食らったが、すぐに笑みを浮かべ構える。

「ぅおい兄貴！！」

「大丈夫だよカモ君。1分で終わらせる」

カモミールの言葉もネギの心には届いていない。
相手の挑発に乗ったつもりはない。だがもっと早く決断すべきだった。
逃げるなら逃げる、戦うなら戦う、と。
ネギは思う。きっと姫菱さんなら一切の逡巡無く決めるだろう。逃げるなら敵の話も聞かず、戦うなら相手の息の根を止めてでも。
中途半端に迷っているから時間と魔力、どちらも悪戯に消費してしまった。
だがここからは違う。このかさんを助けるのを邪魔するなら・・・・君は敵だ！

「いくぞ！！」「来い！！」

互いに雄叫びを上げながら疾走する。攻撃と攻撃とがぶつかり合う、その瞬間。
二人の間に轟音が突き刺さった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

「大丈夫ですか明日菜さん！」

「うん！敵も、もう残り少ないよ！」

互いに声を掛け合いながら何とか気迫を維持する。今更ながら雄飛の不在が心に圧し掛かる。魔法の援護以上に彼の冗談と軽口が作っていた精神的余裕が無い事がここまでキツイとは・・・・。
背中合わせに技を放ち敵を薙ぎ払う。距離が離れた為、互いの攻撃が収まり一瞬の停滞。

「大丈夫いけるよ！あとは二人がこのか取り返して戻ってくれば・・・・」

言い終える前に明日菜さんの後方から戦塵を掻い潜って現れる異形の剣士。一撃一撃の隙が大きいはずの大剣を、体捌きと卓越した技量で連続で振るうその姿は・・・・

「む・・・・烏族！？」

「明日菜さん!!」という叫びも狐の能面を被った拳士の一撃で止められる。懐に入られると防戦一方になってしまう。

「なかなかやるなぁ嬢ちゃん!しかし某は今までの奴等とはちと出来が違うぞ!?」

その言葉通り、隙の無い連撃を放つ剣士の猛攻に防御で手一杯の明日菜さん。しかし大剣の柄尻がハリセンを跳ね上げるとその防御すら脆くも崩れ去る。

斜めに振り下ろされる斬撃。防護の魔力が大剣の刃と拮抗し掘削音のような悲鳴を上げる。

斬撃は防いだものの衝撃は殺しきれない。慣性のままに飛ばされ、残っていた岩に背中から激突。

「明日菜さん!!」

拳士から距離を取りながらどうにか視線を送る。しかし拳とトンファーの連撃に阻まれ援護に行けない。明日菜さんは「だ・・・・大丈夫・・」という苦鳴交じりの声を上げながら立ち上がる。

「ネギの魔力が守ってくれてるから・・で、でもこの人?強い・・・・」

その眼には未だ闘志が漲っている。心は折れていなかった。しかし力量差は確かに存在する。

(いけない!防御の力意外は明日菜さんはただの人間なんだ!!)

勘と反応速度で凌いではいるが、正統派剣術の前にはいつまでも持

たない。

「今、行きます明日菜さ」

上からの超衝撃に最後まで言い切る事は出来なかった。辛くも防御に成功し瀑布の如き棍の一撃を逸らしはしたが、両手どころか全身が痺れ一瞬動けなくなった。

「神鳴流の嬢ちゃんの相手はワシらや」

身の丈2．５mはあるだろう大鬼が大木の様な棍を構える。その肩には先ほどの狐の能面を被った拳士が着地する。

（こいつらも別格か・・・・）

妖怪という種族特有の恵まれた体躯に奢る事無く、剣術や体術を修めた敵は恐ろしく始末が悪い。

奴等は、気で肉体を強化して、先人達が培ってきた技と術で何とか妖怪と渡り合ってきた人間の上を行くのだ。

雄飛が先行したのが今更ながらに悔やまれる。

遠くで響き渡る地響きのような音。そちらに眼を向けると巨大な光の柱が天と地を結んでいた。

「あ、あの光の柱は！？」

「どうやら雇い主の千草はんの計画が上手くいってるみたいですな――

あの二人は間に合わへんかったんやろか――」

「まあ、ウチには関係ありまへんけどなー」心の底からどうでも良

いといった口調で「刹那センパイ」と語りかけてくる剣士。ロリータ・ファッションに身を包み左右に大小の刀を逆手に構えるその姿。

「つ・・・・月詠!!」

「あっ」

叫びを辿り視線を動かすと明日菜さんが捕まっていた。右手首を掴まれ持ち上げられた状態ではなす術が無い。
しかしそれは私も同じ。

「さて・・どうする神鳴流剣士・・手詰まりか?」

此方の出方を伺う妖怪と戦闘狂。しかし完全に自身の勝利を確信していた。

(マズイ・・・・最悪だ!!)

眼前には棍棒使いの大鬼と能面を被った拳士のコンビ。左には二刀流の神鳴流剣士。
明日菜さんが捕まった状態で三対一は不可能に近い。
いや、一つだけ手がある。
出来れば見せるつもりは無かった。たとえそれが酷い裏切りであろうと。せっかく出来た友達や好きな人が目の前から去っていくのは嫌だった。

(言いたくないなら、隠したままで構わない)

思い返すと私は彼のあの言葉に甘えていただけかもしれない。今思うとこの事実を隠して告白した私はとんでもない卑怯者だ。

いくら雄飛でも『人外』の私を隣に置いてはくれないだろう。一族の掟も有る。
きっとこれでお別れだ。
だが、それでも大切なものは守ってから去ろう。最後の意地として。
肩甲骨に力を溜める。
狙うは烏族の剣士。
明日菜さんを助けると共に、『飛べる』敵を先に叩いておく必要がある。
残りの敵は高さも交えた立体的な攻撃で一気に片付ける。
背中が一気に膨れ上がる、その瞬間、

パスッ

という少し間の抜けた音が響いた。
次の瞬間、烏族の剣士の後頭部で破裂音が響く。「ぬおおっ！しまった新手か！？」という言葉を残し煙となって消えていく。
地面に投げ出された形の明日菜さんは未だに事態の把握が出来ていない。
次の音は私の目の前から聞こえた。それと同時に一抱えもある太さの棍が折れ、仮面の拳士が弾かれたように吹き飛ぶ。

「これは・・・・」

「術を施された弾丸・・・・」

期せずして大鬼の言葉を継ぐように言ってしまう。

（まさか・・・・）

「・・・・らしくない。苦戦しているようじゃないか？」

私の口から正解が出る前に本人が姿を現す。
そのほうが好都合だ、とでも言うような口調。確かにそうだろう。
その方が『傭兵』たる彼女の存在価値が上がる。

「えええっ!?えええ～～～!?」

明日菜さんは立ち上がるのも忘れ驚いている。

「この助っ人の仕事料はツケにしてあげるよ。刹那」「うひゃ――。
あのデカイの本物アルかー?強そうアルねー」

余裕泰然としたルームメイトと、この状況にも喜びの声を上げる前
年度「ウルティマホラ」のチャンピオンが現れた。

長い、長い一日はまだ続く。

## 第十五話（後書き）

（注）

1．仮契約シーンについては寛大な評価をお願いします。どうか！どうか！！

2．カードが二枚ある理由は後の話で明かします。まあ、大体分かるとは思いますが・・・・。

# 第十六話（前書き）

かなり久しぶりにテレビをつけたら映らなかった・・・・。
そのうち新しいテレビ買いに行かないと・・・・。

## 第十六話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

「何！？」

小太郎が自分の眼前に突き刺さった『モノ』が常識外れの大きさの手裏剣と気付いたと同時、胸に手を当てられていた。
瞬間、身体を貫く衝撃。木の幹まで一直線に飛んで行き叩き付けられた。
息が肺から漏れるのと、視界が霞んでいくのを何とか堪える。
あの距離まで近づかれて全く気付かないなんてありえない。何の前触れも無く現れたあの残像は・・・・

（分身による攻撃・・・・！？）

「なっ・・何者や！？」

攻撃を加えたはずの人物がその場から掻き消える。気配を追っていくとネギの直ぐ脇の木に陣取っていた。
そこには浴衣を着た二人の少女とその二人の前に立つ女性。
それぞれ小柄と長身の女の子が木の幹の脇から顔を出してこちらを覗き込んでいる。

「熱くなって我を忘れ、大局を見誤るとは・・・・精進が足りぬでござるよネギ坊主」

悠然と歩を進めネギに微笑みかける長身の女。チャイナドレスに身を包んだその姿を見てネギが驚きの声を上げる。

「な・・・長瀬さん!!夕映さん!?大河内さんまで・・・・!?」

「逃がしたって、姫菱さんが・・・・」と呆然と紡がれるネギの言葉に「私達が呼んだの・・・・」と遠慮がちにアキラが言う。

「さあ、ここは拙者に任せ行くでござる。急ぐのでござろう?」

その言葉と急変する事態に付いていけず半ばパニック状態のネギ。しかし楓は優しく諭すように続ける。

「これこれネギ坊主混乱するでない。詳しい話は後でござるよ」

慌てふためくネギがようやく冷静さを取り戻す。そこに怒りが混ざった声が響く。

「何やってんだ!ネギ!!」

ネギはその言葉に振り返る。森を駆け抜ける影、月明かりに照らされた高台に少年は現れる。

雄飛がこちらに走ってくる。この状況を見ても彼は一切の停滞無く、魔法使いを脇に抱えてそのまま走り去る。ネギはなす術も無く攫われていった。

カモミールがネギの肩に乗るのが僅かでも遅かったら、そのまま置いていかれていただろう。

剣士と忍者がすれ違うその瞬間、交わされるアイコンタクト。それだけで互いはこの状況を理解した。

「大河内！良くぞ呼んでくれた！！」

その言葉を残し雄飛はネギのからの話で聞いていた敵、狗神使いの少年の脇を通り抜ける。

５秒にも満たない時間の中、全ては終わっていた。

あまりに鮮やかな人攫いっぷりに呆けていた小太郎だったが、走り去っていく少年を止めようと追いすがる。

「あっ、待てネギ！！」

しかし突き立つ投剣がそれを阻む。視線を戻した後には何も見えなくなっていた。

「おい・・・そこのデカい姉ちゃん。邪魔すんなや・・・俺は女を殴るのは趣味とちゃうんやで・・？」

今から追っても間に合わない事を悟り、思わず舌打ちが入る。せっかくの勝負に水を差された所為で怒り心頭の小太郎は苛立ちも隠さずに向き直る。

しかしその撒き散らすような怒りすら何処吹く風、といわんばかりに受け流す楓。

「ふ・・・コタローと言ったか少年・・・・」

その言葉は睨みつけている女から出た言葉ではなかった。その隣、何の前触れも無く現れた『全く同じ格好』の女からの声。

「ネギ坊主を好敵手と認めるとは・・・・」

「なかなかいい目をしているでござるな」と同じ声、同じ口調で言葉を話す女がまた隣に立つ。

「だが、今は」「主義を捨て」「本気を出すのがいいでござるよ」「『今はまだ』」「拙者の方が」「あのネギ坊主よりも」

「強い」

言葉を区切る度に別の楓が現れ、更に他の楓が、また他の楓が現れる。

いつしかその場には分身により生み出された楓の一団が小太郎に向かって静かな闘志を向けていた。

その数、実に十六人。

全ての楓が同じ動作で苦無を引き抜き、構える。十六の金属音が高台に同時に響く。

「甲賀中忍　長瀬　楓」

「「「参る」」」

全員の宣言と共に間合いを詰めてくる楓。その光景に呆気に取られていた小太郎だったが、それも一瞬。その技術、力量。ネギとの戦いとはまた違った高揚が口元に笑みを作る。

「上等ォ！！」

地面から吹き上がる黒い影。その奔流がいくつもの狗神を作り出す。

黒の狗は空を蹴り、宙を駆け抜ける。

忍術と猟犬が激突し、高台に轟音と衝撃が走る。

―――――――――――――――――――――――――

水の引いた中州跡に響く発射音。
銃口を光らせるマルズフラッシュを置き去りにして飛んでいく銃弾は敵に突き刺さり、敵の体内で破魔の力を撒き散らし、貫通していく。
遊底を引き空薬莢を排出すると同時に、薬室に新たな弾薬を叩き込む。その間も鋭い眼光はスコープ越しに敵の急所を狙う。
引き金を絞る。再びの銃声と共に敵が地に伏していく。
真名はこの一連の動作を高速で繰り返し、一体、また一体と連続で狙撃していく。
レミントンＭ７００の銃口は一瞬の停滞も無く動き、火を噴き、敵を倒していく。

「スゴイ！！それ本物アルか！？」

古菲の驚きの言葉に「ただのエアガンだよ」と事も無げに言う真名。しかし綺麗な金属音を奏でながら落ちる薬莢はどう見ても実弾のそれだった。
話しながらも空弾倉を交換。その間も両目は敵を狙い、手元を一切見ない。
突如、二人の周りを取り囲む羽ばたき音。
次の瞬間、足場の大岩にヒビを入れるほどの衝撃と共に烏の戦士達が降り立ち援軍の二人を包囲する。

「図に乗るなよ。小便クサい小娘どもが」

「接近戦ではテッポウは使えまい」という言葉に驚いているのは古

菲だけだった。この距離まで詰められても狙撃手の余裕は一切崩れない。
蹴り付けたギターケースから飛び上がる二つの黒い鉄塊。
それまで使用していた狙撃銃を手放し、自由になった両手はＩＭＩデザートイーグルを掴む。
安全装置を外すのが一瞬なら、続く連射はそれ以上の速さだった。
二つの銃口はさまざまな角度、さまざまな方向に高速で動きながら銃弾を放ち続ける。狙いもせずに撃っているようにも見える弾丸は一発も外れる事無く周りを囲む敵の額、喉元、胸部、腹部に吸い込まれていくように着弾していく。

「小娘ぇッ！！」

弾痕が穿たれた頭を抑えながら大剣を振るう烏族。自分の首を刎ねようと迫り来る一刀を銃尻が弾き軌道を逸らす。
翻る左手首。
次の瞬間には左の銃口が刀身に狙いを定め、発砲。慣性のまま振り下ろされる剣は中ほどから消失し、真名の褐色の肌すら傷つけられずに終わる。
烏族の剣士達に許された反撃はその一度だけだった。
武器を失った一体に止めの一発、防御に動こうとした一体の心臓めがけ叩き込まれる銃弾。
刺突を繰り出そうとした剣士に放った弾丸は鍔元に着弾、掌に柄だけ残し破壊される。
距離を取ろうとした一体と、自身の手元を覗き込む一体の額と顎下に銃口を押し当てトリガーを引く。
連続で響く銃声が勝敗を告げていた。
絶対的優位だったはずの剣士の一団は倒れ、地に伏し、煙を上げて消えていく。
それを見送るように鈴の音のような空薬莢の落下音が連続で響く。

十四連発を撃ちつくした二挺の拳銃は遊底が引き降ろされ、むき出しなった薬室と銃口から紫煙を上げていた。

「なっ・・ななな・・・・」

その光景に見入り、驚愕の声を上げる明日菜。

「何で龍宮さんが・・てゆーか、なんであんな強いの――!?」

「龍宮とはたまに仕事を一緒にする仲で・・」という刹那の言葉も明日菜の耳には入らない。それもその筈。自分を苦しめたカラス人間四体を瞬く間に倒してしまったのだから。

「アイヤー。さすが真名アルね――」

口笛を吹きながら賞賛を口にする古。
あの包囲網を内側から破ったのは真名だが、銃撃を避ける為、敵に気付かれる事無く『すり抜けた』古も異常と言えるだろう。

「しかし私、本物のオバケ見るの初めてアルよ」

こちらに向かってくる妖怪達を一望しながら喋る古。傍目には完全に観光気分で来ている様にしか見えなかった。

「古、お前は人間大の弱そうな奴だけ相手をしてくれればいい」

残りは私が片付ける、と言外に告げながら空弾倉を引き抜く真名。
内太腿に挟むように隠されていた弾倉を取り出す光景は妙に艶めかしい。

「あ、バカにしてるアルね～～中国四千年の技」

その言葉は途中で止まる。後方から妖怪の一団が襲い掛かって来たからだ。無防備な後頭部に向かって振り下ろされる鬼の一撃。しかし古は回転しつつ放った裏拳で迎撃。「よ」、という軽い掛け声と共に金棒が右に弾かれる。

小さな跳躍。

刹那と同程度の体格の少女が着地した瞬間、足元の岩場に亀裂を生むほどの衝撃が発生。震脚で得たエネルギーは余す事無く右拳に集約される。

『馬蹄崩拳』

気合と共に繰り出される崩拳は金棒を振るおうとしていた鬼を吹き飛ばす。しかし八極拳の一撃はその程度に止まらない。

鬼の後ろにいた狐の能面を被った格闘家、その後ろの一つ目妖怪の巨躯、更に後ろの鬼の巨体。

それらの妖怪の『束』をまとめて吹き飛ばし、背後の岩に叩き付ける。

「なめたらアカンアルよ～～♪」

「ハイハイ」

これが証拠、とでも言わんばかりに振り返りながら言葉を続ける古。しかし真名は生返事をしながら新たな弾倉を両の拳銃に叩き込む。

手強いと見た妖怪達が警戒しながら間合いを詰めてくる。水が無くなり窪地となった中州跡に新たな緊張が走る。

「さあ！もっと強い奴はいないアルか？」

「調子に乗ってるとケガするぞ」

一人は楽しそうに、もう一人はクールに、
戦場に乱入する。

―――――――――――――――――――

湖の中心にある岩場。その中に家一軒を勇に越す大きさの一枚岩が鎮座している。
囲うように注連縄を巻かれたそれは、ただそこにあるだけで荘厳な雰囲気を醸し出している。
湖の岸から中心の大岩に向かって伸びる橋の途中には簡素な装飾を施された祭壇があった。
その石の舞台には三人の影。
一人は朗々と祝詞を謳い上げ大岩から立ち上る光の柱を太く、大きくしていく天ヶ崎千草。
一人は祭壇に力無く座り込み、自身から生み出される光と目の前の光景を呆然と見上げている近衛木乃香。

「まだですか？」

最後の一人はそんな二人の事も目の前の光景に関しても、大して興味を示さずに自身の疑問を口にする白髪の少年。

「もう少しや！」

掛けられる言葉に振り返ることも無く答える千草。再び再開される

祝詞を聞き流しながら「そう・・・・」と少年も返す。
少年は視線を木乃香に向け、立ち上る光を見上げる。

「どうして『こっち』に来たの？」

木乃香は最初、その疑問が自分に向けられたものだとは気付かなかった。空を見上げていた視線が自分を見てからようやく気付いたくらいだった。

「僕達に何をされるか分からなかったはずだ。女の子が取る行動とは思えないけど？」

その言葉に噴き出してしまう。こんな状況で、しかも誘拐犯に自分の貞操観念を心配されるとは思わなかった。
笑われたのはずの少年は特に表情を変える事は無く、「とうとう僕まで・・・・」と、独り言を言っていた。

「ウチにも守りたいモンはあるで？」

きっと誰にだってあるだろう。この変な呪文を唱えとるお姉さんにもあったらしい。
ここに来る途中、色んな話を聞いた。
最初から他人を傷付ける側に立っとった訳では無い、と。
ウチの家族はウチらと全く関係の無い戦いに巻き込まれて、無残に奪われたんや、と。
なのに皆してその犠牲を忘れたがっとる。相手に何の責任も取らせんまま、人が死んだ事実をその人達と一緒に埋めて手を結ぼうとしとる、と。
怒りに染まっていた声は途中から涙声に変わっとった。
だからウチがやる。死んだ人の為の復讐ではなく、奪われ、残され

た『自分』の恨みを晴らす、と。
最後には誘拐したこと、皆を傷付けた事を謝ってくれて、口を塞いどった札を剥がしてくれた。
その瞬間、木乃香はこの人に抱いていた怒りが変化したまま、よく分からなくなってしまった。

「自分を切り売りするような選択だけどね」

告げられた言葉にやっぱり、と木乃香は思う。
この言い回し、例え方、姫菱に似とる。意外な共通点にまた笑ってしまう。

「確かに後先考えとらん行動やな」

と自嘲気味に話す。しかし少年は目を横に向け、後ろを気にしていた。少年は後ろに体ごと向き直り

「向こう見ずなのは・・・彼らも同じみたいだ」

湖の一角から大きな水飛沫が上がったのはその言葉と同時だった。
水面を叩くような爆音と高い水飛沫の太い線を描きながらこっちに高速で向かってくる影。

「まさか、あのガキか?」

祝詞を中断してまで叫んだ女の声は正鵠を射ていた。

―――――――――――――――――――――

雄飛はネギの操る杖に乗って森を抜け、湖に出る。
高速移動による衝撃波が湖面を抉り、二人の後方に水飛沫の紗幕が巻き上がる。

「加速！！」

ネギのその言葉を置き去りにするような速度と共に一直線に祭壇目掛け飛んでいく。
突如としてこちらに向かってくる影。ネギ達と同じように盛大に吹き上がる水飛沫を後方に置き去りにしながらこちらを目指す。
シネマ村で雄飛に深手を負わせた悪魔『ルビカンテ』が鉈のような大刀を構えこちらに向かってきた。

「ネギ！」

雄飛の言葉を受けネギは速度を維持したまま横回転。
前方にドリフトしながら９０。回転した瞬間、杖の頭部分を足場にした剣士が水平跳躍。
高速移動する杖から打ち出された雄飛は一直線に飛び、翼を広げた悪魔に肉薄する。
相対速度を見誤り、行動の遅れた悪魔を自身の殺傷圏内に捕らえた雄飛は抜き打ちの一刀を放つ。
昼間の恨みを込めて放たれた鬼丸国綱は防御に掲げられた鉈を腕ごと切り裂き、肺腑と心臓を走りぬけ一刀両断。
雄飛は二つに分かれた悪魔の後頭部を蹴りつけ、更に飛翔。

「飛ばしていきますか！」

宣言に合わせ、雄飛を包む肉体強化の気の光が一気に膨張。纏うよ

うに全身を覆っていた光が変化し、針のように鋭い光を周囲に放つ。
弾丸になった剣士は湖面の中心を目指し、迎え撃たんとする白髪の少年に特攻する。
二人の視線が交わった瞬間、第3ラウンドの鐘が鳴った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

（其は耐え無き息吹！）

「フォトンブレイズ！」

祭壇の縁に着地するその瞬間、白髪の少年の眼前で凝縮された高熱の火球が炸裂。夜の闇を焦がすような苛烈な火炎が撒き散らされる。
しかし音速を超えて広がる熱波の刃も少年の魔法障壁に阻まれ、前髪を揺らすだけだった。
だが注意を集める派手な魔法は囮。炎が相手の視界を、爆発音が耳を塞ぐ。
高速の踏み込みで間合いを詰め、火球の斜め下から抜刀。鬼丸国綱の刀身が橙色の光を跳ね返しながら疾走する。
少年は微動だにしない。風呂場での戦闘同様、魔法も、剣も、自身の障壁だけで完全に防げると思っている。しかし、

「どうかな？」

展開されている魔法陣に国綱の刃が触れたその瞬間、両断。すぐ下

の魔法陣も、その奥の、またその奥の障壁も。全て切断していった。
幾重にも張られていた防御を切り裂いた一刀は速度を落とす事無く心臓を目指す。
予想外の事態に、少年は刃から逃げるようにバックステップ。斜めに走る白刃は空を切るのみ。
しかし少年が着地するより先に間合いを詰めた俺の追撃。切りかえされた水平の閃光が首筋を強襲する。
反射的に屈む少年。動きに遅れた白い後ろ髪が切り取られていく。
俺の刃の軌道が流れ、近くにあった灯篭の上部を切断。石の屋根が慣性のままに横に飛ぶ。
少年が背を逸らし連動して跳ね上がる少年の右足。一瞬前まで国綱の柄尻を握っていた左手が鞘を引き抜き、防御。俺の顎を狙う少年の爪先が鈍い音とともに停止する。
茶と金の装飾がなされた鞘を蹴りつけ、少年は横に飛ぶ。それを追って俺は『封神雀華』の三連撃を繰り出す。
しかし大薙ぎの一閃も、振り上げる鞘の一撃も、納刀後の突きもギリギリ届かない。
回避の連続で、少年は岸と祭壇を結ぶ橋まで後退していた。
直後、少年の両手から数十条の黒の閃光。黒曜石の短刀が放たれ水平の雨となって俺に向かってくる。

（其は凍てつきし脅威！）

「クールスレット！」

冷気の帯が両側から襲い掛かる。
こちらに飛んでくる投剣に向かって。
湖水を巻き上げ吹き荒れる凍てつく猛威が、飛来する黒曜石の雨を巻き込んで瞬間凍結。俺と少年の間に青白色の壁が出現し、短刀の進行を阻む。

「意思を刈り取る！」

帯刀技　『砕陣霊臥』

疾走しつつ、突き出した鞘から放たれる八つの黒い球体。弧を描いて飛んでいく精神波動は氷壁を迂回し少年に向かう。

それと同時に壁に向かって鞘の一撃を叩き込む。背中から襲い掛かる砕陣霊臥の黒の球体から逃れる為、短刀の生えた壁を飛び越えようとしていた少年をその場に縫い止める一撃。硝子を割るような破砕音と共に青白色の壁が破断。

一瞬遅れて精神波動が着弾し氷と黒曜石の破片が撒き散らされる、はずだった。

鞘を壁の向こうにいる少年に叩き付けた瞬間、破砕音を塗り潰すような轟音。砕けた壁のすぐ後ろ、足場である橋の建材を突き破り灰色の塔が出現していた。そこに着弾する砕陣霊臥の精神波動。

前を見る。壁越しに繰り出した見えないはずの攻撃は、またしても黒曜石の短刀に防がれていた。

今までとは桁違いの肉体強化を施した俺の一撃は、短刀二本を交差させ剛力を集中させた少年の防御と拮抗。

互いの視線が交わりながらも力比べは続く。俺は不敵な笑みを浮かべ、少年は未だ無表情。

背後で鈍い音が響く。ここに来てようやく灯篭の屋根の一部が床に落ちたらしい。

連動するように、少年の背後の石塔の先端が湖の岸に向かって傾く。傾斜角度が加速度的に変わり、灰色の円錐が橋を押し潰すように横倒しになる。一際大きい轟音と共に水飛沫が上がる。

橋を中ほどから踏み潰した石塔は基礎を２ｍほど残し、倒壊。倒れ

た上部は橋桁の上に寝そべり新たな橋を作っていた。

（ネギまだか！？）

俺が時間を稼ぐ間にネギが近衛を連れて逃げる算段だったはずだが、未だ背後から気配が消えない。

双刀を支える剛力と、鞘を押し込む膂力の微妙な力の駆け引きが続く。俺の胸中は『オーバーリミッツ』の時間切れを心配していた。

この気と魔力による『肉体の完全同時強化』は恐ろしく使い勝手が悪い。

爆発的に術技の威力も、筋力、反応速度も上昇するが防御力はほとんど変わらない。

持続時間が不安定である上に燃費が悪く、強化が切れると一気に消耗する。

訓練中でも何回か使い戦闘を切り抜けた経験もあるが、使い所を間違え『あの世』に行きかけた回数のほうが多いくらいだ。

現実の効果はゲームのように都合良くは行かないらしい。

カモは刹那にこの効果を期待していたらしいが、ぶっつけ本番でできる芸当ではないと思う。

正直実戦で使えるレベルの戦闘法ではないが、この少年と渡り合うにはこれしか無かった。

時間切れと、力の拮抗で焦る俺の背中に水飛沫上げる轟音が突き刺さり、一瞬そちらに気を取られる。

その所為で国綱の鞘が横に流されるのに気付くのが一瞬遅れた。青白色の壁を突き破って繰り出される直蹴りが腹に突き刺さる。

後方に流れる俺の身体に追撃の右回し蹴り。何とか鞘で防ぐも、勢いそのままに祭壇まで一気に吹き飛ばされる。

転がるように石の舞台に着地。しかし立ち上がろうにも、膝が上がらない、足が動かない、身体に力が入らない。

『時間切れ』。その事実を自覚しつつ、鞘を杖代わりに立つ。動け

ないほどに消耗するのはさすがに始めてだった。
知らず知らずの内に肩で息をしていた。酸欠で意識が朦朧とするかと思いきや、腹に食らった蹴りの激痛が逆に眼を覚まさせる。
眩い光が背中に当たり、俺の前に影を作る。嫌な予感に後ろを振り返ると、

濃密な光で形作られた巨人が俺を見下ろしていた。

――――――――――――――――――――

光の柱の中に重心のように据えられていた、筋骨隆々のその体躯が外に出てくる。
濃密な光が湖全体を照らし、周囲を昼に変える。
両手を湖の底について、自らの大岩から生える上半身を引き上げる。
その動作だけで湖面は揺れに揺れ、大波が祭壇にかかる。
湖に突き刺さる太い両の腕が生える肩の後ろからは同等の大きさの『腕』が生え、頭上で手を組んでいる。
額には二本の角、どういう訳か後頭部にも似たような角が生えている。
超高層マンションを見上げるような感覚。人ひとり分ほどの大きさの目は静かに下界を見下ろしていた。

「何、だ・・この、特撮は・・・・」

背中合わせに鬼がくっついたような巨人を呆然と見上げながら俺は絶望感に包まれていた。

「そ、そんな・・・・こんな、こんなのっ・・」

俺と同じように荒い息をつくネギ。巨人の肩に浮かぶ千草と眠るように横たわる木乃香を見るに、間に合わなかったらしい。

「つか、デカッ！！オイオイオイちょっと待てよ！デケぇっ！！！デカすぎるぜ！」というカモの言葉も耳に入らない。
連戦による連戦。疲労に次ぐ疲労が二人の戦意を消しかけていた。

「二面四手の巨躯の大鬼『リョウメンスクナノカミ』。千六百年前に討ち倒された飛騨の大鬼神や」

勝ち誇るような女の声。どんな魔法か知らないが距離を無視して音声が耳に響く。
誰だよこんなの倒した奴・・・・。人間が相手にするべきサイズじゃないぞ。千六百年の間に成長したのだろうか？

「剣士とか、魔法使いとか、の管轄じゃねぇだろ・・・・」

コレはどう考えてもＭ７８星雲の住人か、日曜７：３０に出てくる巨大ロボが必要だろう・・・・

「こ、こここんなの相手にどうしろっつんだよ」

カモのその言葉に誰も答えられなかった。俺はその光景に背を向け抜刀術の構え。白髪の少年はこの状況を王手と見たのか悠然と歩いてくる。
ネギと横並びになりながら、この状況の打開策を探す。

「『完全に出ちゃう』前にやっつけるしかないよ！」

ヤケクソ気味の言葉と共にネギの詠唱が開始される。

「『ラス・テル　マ・スキル　マギステル！！来れ雷精！風の精！！！』」

杖を構え、左手に雷を収束させるネギ。肩を荒く上下させながらも周囲に暴風を纏わせる。

「お・・うぉいっ！待てよ兄貴。その呪文はっ！！確かに効きそーなのはそれしかねえが、兄貴の魔力はさすがにもう限界だろ！？」

続く詠唱と共に更に息が上がるネギ。しかし本人は構う事無く、雷と風を集める。

「『雷を纏いて吹きすさべ！南洋の嵐！』」

カモの静止も聞かずに続けた詠唱が完了。落雷が少年の左手から迸り、敵に向かって放たれる。

「『雷の暴風！！！』」

再び夜空に描かれる雷撃の光。鬼の大群を蹴散らした極太の雷光と螺旋を描く暴風が一直線に大鬼神に向かう。

鬼神の胸元に突き刺さったその瞬間、甲高い破裂音。雷光も暴風も、無害な光と突風になって四方八方に散っていった。

ネギはあまりの事態に愕然としていた。横目で見ていた俺も信じられなかった。

防御魔法や重装甲ではなく、ただの肉体強度のみでネギの必殺の一撃を無効化していたその事実に。

光と風が去った後、胸元は穴どころか傷の一つも付いていない。

巨人はこちらの攻撃など意に介していないかのように、変わらず遠方を見ていた。

「アハハハハそれが精一杯か！？サウザンドマスターの息子が！！まるできかへんなぁ！！」

遥か高みから女の哄笑が響く。

「このかお嬢様の力でこいつを完全に制御可能な今、もうコワいモンはありまへんえ！明日、到着するとか言う応援も蹴散らしたるわ！そしてこの力があれば、いよいよ東に巣食う西洋魔術師に一泡吹かせてやれますわ！」

大鬼神の力を知り、自分の勝利を確信した、言わんばかりの声が耳に入る。

上空から聞こえるバカ丸出しの笑い声に、返す言葉は無い。

「く・・・・くそぉっ・・・・・」

木が転がる乾いた音。苦悶と共に少年が遂に膝をつく。

昼間からの連戦、中州での防御陣の発動、箒での高速移動に大魔法の連発。疲労に関しては俺と同程度でも、魔力の枯渇による脱力感は精神を削る。１０歳の少年としては持った方だろう。

「兄貴、兄貴！！しっかりしろ！」

カモの叱咤に杖は拾うも、膝は上がらない。声を返せないほどの消耗。

俺はネギのパーカーのフードを掴んでそのまま持ち上げる。一瞬苦しそうにするが、無視して１８０。横回転。俺と同じ方向を向かせ

る。

「善戦だったけれど・・・・残念だったね二人とも・・・・」

歩いて祭壇に到着した白髪の少年に相対する。

二人では近衛の奪還は不可。明日菜や桜咲といった散らばっている戦力をかき集めてから仕切りなおす。そのくらいしか思いつかない。

その為には、この少年を蹴散らして向こう岸に行く必要がある。

しかし、片や魔力の枯渇した魔法使い。片や未だ攻撃にも移れないほど消耗した剣士。

「殺しはしない・・・・けれど、自ら向かってきたということは相応の傷を負う覚悟はあるということだよね」

歩みの速度で間合いを詰める少年。

諦める気は無いが、勝てる策が出てこない。挟み撃ちにされたこの状況では二人での突破は不可能に近い。

「姫の兄貴！カード出して復唱！！」

カモの最低限の情報を伝える言葉に反射的に従い、腰のポケットからカードを取り出す。俺と刹那が背中合わせに剣を構えた格好を描いたそれを目の前に掲げ、ネギの言葉を追う。

「召喚！！！ネギの従者　神楽坂　明日菜！！」「召喚！！！雄飛の従者　桜咲　刹那！！」

カードが光り輝いたのと魔法陣が前に描かれたのは同時だった。

次の瞬間、魔法陣を足場にして何の前触れも無く二人が現れた。

・・・・便利だな、魔法って・・・・

俺達を守るように前に立つ二人は全身を切り傷や打撲といった細かい傷に覆われていた。後ろ姿からでも消耗しているのがわかる。

「アスナさん、刹那さん、すいません・・・・このかさんを・・・・」

「わかってるネギ！」

息も絶え絶えに謝罪するネギの言葉を遮る明日菜。刹那も頷いて少年に野太刀を構える。二人ともいきなり転移したのにその事実に全く驚いていない。冷静に事態を受け止めているその姿に頼もしさを感じる。

しかしそれは明日菜が後ろを振り返るまでだった。

「ってぎゃあ～！？何よあれ～～～～！？」

建造物のように泰然と佇む大鬼神を見た瞬間、奇声を上げる明日菜。刹那も愕然としている。気持ちは分かるが・・・・。

「・・・それでどうするの？」

一気に人数が増えたこの状況にも表情を崩さない少年。関西呪術協会本部を落とした実力者には取るに足らない戦力差なのか。

「『ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト』」

その言葉と共に少年の右の指先が妖しい光を帯びる。

「呪文始動キー！？こいつ西洋魔術師！！」というカモの言葉が耳に入ってくる。続く少年の詠唱の言葉は聞き慣れない言葉だったが今は無視。

どんな攻撃が来る？と考えたその瞬間、
何故か、石になった早乙女の姿を思い出した。

「明日菜！ネギを！！」

その言葉を聞いた明日菜の反応は早かった。瞬く間に膝を付く少年の腹に手を回す。俺は両手でそれぞれ刹那と明日菜を抱えて右に飛ぶ。

あいつは口に手を当てた姿で固まっていた。つまり、敵の攻撃は・・・・

（ガス！）

少年の脇、湖に浮かぶ石の灯篭に横向きに着地。基礎を足場にして橋に向かって全力跳躍。

光を纏った指が俺を捉え、何かを叫ぶ。それと同時に、湖の祭壇を灰色の爆発が覆った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇刹那　side◇

後方に爆発音を聞きながら橋に着地。一瞬先についていていた明日菜さんが呻きながらこちらを見ている。ネギ先生も杖を支えにして立ち上がっていた。

一拍遅れて雄飛が転がりながらも橋に飛び込んでくる。その体からは白煙が上がっていた。

「雄飛!!大丈夫か!?」

「この、回避法はあまり、おすすめできないな・・・・」

私の言葉にやはり冗談を口にする雄飛の服の一部は焦げていた。
石化効果の灰色の煙を避け切れないと判断した彼は私たちを放り投げ、火炎魔法を発動。
爆裂で敵の石化の雲を吹き散らし、爆風で効果範囲から自分ごと吹き飛ばした。
それしか方法が無かったとはいえ、自身の負傷を顧みない強引な回避方法だった。
しかもそれだけではない。投げられる瞬間、私は見ていた。
灰色の煙を切り裂いて飛んでくる短刀が彼の脇腹に突き刺さるのを。

「傷を」「心配すんな」

そういって彼は脇腹を左手で隠す。刺さった短刀は抜いたようだが、指の隙間から見えた色は赤、ではなく灰色。
おそらく石化の呪いがかかった攻撃を受けている。
治療しようにも石化治療の魔法は姫菱しか使えず、その効果も進行を遅らせる程度の効果しか無い。
つまり、この時点で姫菱の石化は決定した。

「泣くなよ?」

そういって私の目尻に指を這わす。知らず知らずの内に泣きそうになっていた。
雄飛は立ち上がって空を見る。視線の先は、

「どうやって助けに行ったもんか・・・・」

自分に石化の呪いがかかって、刻一刻と石化の進行が進んでいるこの状況でも飄々としていた。
全員が満身創痍の中、彼だけがいつも通り。

「姫の兄貴、何か・・・・奥の手とかは・・・・・」

カモさんの縋る様な声。私も含めこの状況に活路を見い出せない。
しかし、彼なら・・・・。

「無いわけじゃ、無いが・・・・。
その隠された力の発動には仲間の死が必要でな・・・・。
念のために言っておくと、お前が風呂場で明日菜に殺されかけていても・・・・何も起きなかった」

雄飛は視線すら向けずにカモさんに言う。
その言葉に思わず笑ってしまう。どんな状況でも彼は、彼だった。

「な、何でこんな時に冗談言ってんだよ!」

「状況考えろよ!」というカモさんの怒りの言葉を聞きながら雄飛は前を見据えて、抜刀術の構え。少年の攻撃を警戒しながら答えを口にする。

「どうせ死ぬなら笑顔を残したくてな・・・・・」

そう言って笑う彼の横顔はほんの少し引き攣っていた。刀の柄に掛かる右手も震えている。
その瞬間私は自分を恥じた。

彼も恐怖に苛まれている。
死ぬ事が怖く無いはずが無い。徐々に石になっていく事が怖く無いはずが無い。
それでも自分を奮い立たせる為に冗談を口にして、場を和ませている。

「皆さんは今すぐ逃げてください。お嬢様は私が救い出します！」

歯を食いしばり、意を決してその言葉を口にする。
覚悟は決まった。
友達の為になるなら、彼の為になるなら・・・・。

「お嬢様は千草と共に、あの巨人の肩の所にいます」

「私ならあそこまで行けますから」そう言って一歩踏み出し、雄飛の前に出る。
怖い。今、彼の顔を見れない。私の顔を見られたくない。

「で、でもあんな高い所にどうやって」

「空でも飛ぶのか？」

明日菜さんの疑問と、雄飛の冗談めかした言葉に私は頷きを返す。

「ネギ先生、明日菜さん、雄飛・・・・。私、皆さんに・・・・・このかお嬢様にも秘密にしておいたコトがあります・・・・」

この修学旅行は色々な事があった。お嬢様ともたくさんお話できた。
明日菜さんという友達もできた。
そして・・・・

（・・姫菱　雄飛・・・・）

好きな人も、できた。

「この姿を見られたらもう・・・・お別れしなくてはなりません」

本当は明日、皆で一緒においしい料理屋を巡る計画を立てていた。
お屋敷の女中さんに場所も聞いて、準備は万全だった。
彼の健啖家ぶりを少し見てみたかった。

「でも・・今なら・・・・あなた達になら・・・・」

言葉と同時に肩甲骨に溜めた力を広げる。抑え込んでいた感覚が解き放たれ、一瞬解放感に包まれる。

今、楽しかった時間が、

終わる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

刹那の背中から白が噴き出てきた。
羽ばたき音と共に羽を散らすその光景は、夜に降る初雪のようだった。

Yシャツを肩まで押し上げて背中から出てきたその翼は純白という言葉すら愚かしく思えるほど、ただひたすらに

綺麗だった。

「・・これが私の正体」

「奴らと同じ・・化け物です」と、苦しそうに言って俺たちを見る。その目には先程と同じように涙を堪えていた。

「でもっ・・誤解しないでください。私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です！」

知ってる。というか今更、誰も疑っていない。

「・・・今まで秘密にしていたのは・・この醜い姿を皆さんに知られて嫌われるのが怖かっただけ・・！」

その言葉でやっと理解が追いついた。

（ああ・・秘密ってこれか・・・・）

別に話したくないなら、話さなくて良いと言ったろうに・・・・。

「雄飛っ・・・・ごめん、なさい・・・・こんな事を黙ったまま・・・・告」

言葉を快音で遮る。明日菜からハリセンを借り、そのまま後頭部にツッコミを入れる。

驚きに振り替える刹那。さすがにこの状況でツッコミを入れられる

とは思いもよらなかったらしい。

「・・・・今、結っ構シリアスなシーンだったと思うけど・・・・？」

「全員の気持ちを代弁しただけだ」

俺からハリセンを受け取りながら呆れた声で言葉を返す明日菜。

「ネギ、残りの魔力は？」

「大丈夫です！」

俺の言葉に気合の声で答える魔法使いの少年。

「明日菜、体力残ってっか？」

「決まってんでしょ！そういうあんたはどうなのよ！？」

「腹が減って力が出ない」

最後のオチで軽く笑う二人。実際残っているのは気力と意地くらいのものだろう。

呆気に取られている刹那に向き直り作戦を告げる。

「刹那、近衛の救出は頼むわ」

「後は俺らで引き受ける」そう言って敵を見据える。前方に漂う灰色の煙の中に影が見える。

少年がゆっくりとこちらに歩を進めて来ていた。

「で、でも」「さっさと終わらせよう」

「もう眠いんだよ、俺」そう言って締めくくる。こんな戦い終わらせて寝たいのが本音だ。
明日は修学旅行最終日。実はまだお土産をほとんど揃えていない。
明日は明日で忙しいのだ。

「ホラ、早く刹那さん」
明日菜が笑みを浮かべながら急かす。もう刹那の顔に浮かんでいた戸惑いは完全に消え、大輪の笑みが咲いていた。

「ハイ！」

翼ある剣士はしゃがみ跳躍の力を溜める。視線は遥か上空の大鬼神の肩、親友の元へ注がれる。

「雄飛・・・・」

「ん～？」

「・・・・そ、の・・・・・す、好き、です・・・・・」

俺が噴き出すのと、刹那が飛び去って行くのは同時だった。
あのヤロウ、間の抜けた返事をした所にとんでもない爆弾を投下していきやがった・・・・。

不意打ちは卑怯だと思う！

気を何とか取り直して、殺気を前方に叩き付ける。

飛翔した刹那を打ち落とそうとした白髪の少年を牽制。こちらに注意を向けさせる。
少年は弾かれたようにこちらを向き、視線を返す。

「さてここからどうすっかねぇ、姫の兄貴・・・・」

先ほどの刹那との会話を茶化すような声で聞いてくるカモ。

「各自、臨機応変でいいだろ?」

別名ノープランともいう。
打つ手無し。せいぜいが近衛救出までの時間稼ぎくらいしかできない。
しかし俺の石化が着実に進行している今、その時間も残り少ない。
あの少年の相手は俺しかできない以上、動けるうちに叩かなければ。
だとすると・・・・。

(あれしかないか・・・・)

ある種の諦めと共に覚悟を決めた、俺の頭の中に

『・・・・聞こえるかお前ら?』

どこかで聞き覚えのある声が走った。

## 第十六話（後書き）

なんか、真名の戦闘シーンの描写書いていたら以外に時間が掛かりました。
銃撃戦もカッコいいですね！

# 第十七話（前書き）

修学旅行編の戦闘シーンはこの十七話でほぼ終わりです。
何とか二十話までに京都編を終わらせたい・・・・。

え、テレビ？まだ買ってません！

# 第十七話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

小高い丘の上で学ランを着た少年と、チャイナドレスを着た長瀬さん『達』の戦いは続いていた。
金属音と、地面を抉る音が連続で響く。
男の子が腕を振ると黒い直線と共に大きな犬が宙を走る。その牙が長瀬さんの一人に喰らい付く寸前、『他の』長瀬さんが身の丈を超える手裏剣を盾に防御。
更に他の長瀬さんが攻撃を加え、動きが止まったところを大きく吹き飛ばす。
さっきからその繰り返し。素人目の私から見ても多勢に無勢。長瀬さん達が優勢だった。

「ぐっ・・驚いたで糸目の姉ちゃん！こないな使い手がのんびり中学生やっとるなんてなぁ！！」

男の子が距離を取りながら毒づく。まともに攻撃を喰らったのか顔が引き攣っている。
しかしそれでも戦意も、顔に浮かぶ楽しさも一向に色褪せない。

「お主もなかなか見所あるでござるな。しかし、まだ何か力を隠しているでござるな？」

「よいのかな？本気を出さなくて」そう返す長瀬さんの顔にも同じ

様な笑みが浮かぶ。
きっとあれは強い敵と戦えるのが嬉しいんだ。
戦闘と水泳を比べるわけにもいかないが、私にも共感できる部分がある。
すごい選手と会った時、自分の全力を出して戦うべき時、私もあんな顔をしているのだろう。
でも、姫菱くんが浮かべる笑みとは種類が違う気がする。
彼はこんな戦いの中でどんな笑みを浮かべているのだろう。

「こ、これが・・・・現実、なのでしょうか・・・・」

私が身を隠す太い幹の反対側。綾瀬さんがこの光景を見ながら呆然と呟いた。
私もこの状況についていけないが、それでも綾瀬さんほど混乱はしていない。

「現実、だよ。きっと・・・・」

私が推理した『不思議な力』。私はひとつの答えに辿り着いていた。
そして彼がどんな状況に置かれているかも。
高台の上で、ここから見下ろせる湖の真ん中で、
戦いは続く。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「こ、この声は!?」

カモは声の主に驚いているようだが、俺は分からない。

『フフフ・・わずかだが貴様らの戦い、覗かせてもらったぞ・・・・』

上から目線のこの口調、何処かで聞いたことが・・・・。

『まだ限界ではないハズだ。意地を見せてみろ!!あと一分半。持ち堪えられたなら』

「『私が全てを終わらせてやる』、つってもな・・・・」

お前誰だよ?ってのが正直なところだ。頭に直接語りかけている事からこれも魔法らしいが、声だけ送ってくるヤツを信用できるはずが無い。

しかし明日菜もネギも意気消沈していたはずなのに、顔に活力が戻っている。知らないのは俺だけらしい。

『姫菱といったな?先程の戦い・・・・ぼーやとの連携による特攻といい、見事だった』

「そいつはどーも」

『だがな・・・・貴様等、少し小利口にまとまり過ぎだ。たまには後先考えず突っ込んでみたらどうだ?』

『ガキならガキらしく後の事は大人に任せてな！！』と、その言葉を最後に声は聞こえなくなった。

「姫菱さん。行きましょう！」

「信用して良いのか？」

二人にはさっきの声の主が光明に思えたのか、俺の疑問の声に自信を漲らせ頷く。俺は左脇腹を覗く。

既に灰色の染みは肋骨にまで届いている。呼吸も苦しくなってきた事から、石化は肺にまで達しているのだろう。

声の主が信用できるかはともかくとして、術者たる少年を倒さない限り俺も美術品の仲間入り決定だ。

それに刹那が近衛を助けた後の事を考えると、この少年はここで倒しておかないとマズイ。

しかし、あの少年に致命傷を当てるとなると相当の綱渡りをする事になる。

後の事を考えないのなら『オーバーリミッツ』はあと一回は使える。

が

（攻撃一発分といった所か・・・・）

普通の攻撃術だと、遅すぎて防がれるか避けられる。先の奇襲の様に敵の反応速度を超えるような展開、発動の速い低級の術ではそもそもあの防御陣を破れない。

発動そのものが雷撃と同等の速度を誇る神聖術『ライトニングブラスター』ならこの二つの条件を満たすが、相手は石の魔法を使う地術系統の魔法使い。石の槍や金属の柱を避雷針にするなんて、今時小学生でも考え付く戦術だ。

だとすると二人に敵を押さえ込んでもらって、まとめて吹き飛ばす

のが良いだろうか。と考えてすぐさま否定。
どういう訳か明日菜には敵の石化の呪いは通じない。なら俺の攻撃術も効かない可能性がある。
治癒系の法陣術は効果はあったが、今のところ攻撃魔法は全て無効化しているらしい。ヤツも明日菜に魔法が効かない事を知っている以上、明日菜ごと盾にされたら意味が無い。
残る策はあの石と黒曜石と体術の攻撃を掻い潜って、純粋に物理攻撃を叩き込むしか道は無い。
三対一なら攻撃を当てる策はある。しかしそれで終わる相手とはどうしても思えない。少年は間違いなく俺の一撃を警戒しているはず。だとするともう一つ策を弄する必要がある。考えろ、何がある？あった。
二人の居る場所まで後ずさりしながら耳打ちする。

「二人とも俺の悪巧み、聞くか？」

後で聞いた話では、この時の俺の顔には悪代官の笑みが浮かんでいたらしい。

――――――――――――――――――――

「そろそろ行くか二人とも。あんまり待たせると失礼だし」

「はいッ！」「ＯＫッ！」

「来るのかい？・・・・では相手をしよう」

軽口と気合の声の二重奏に抑揚の無い答えが返り、戦端が開かれる。

「ＧＯ！」

カモのヤケクソ気味な掛け声と同時、ネギから従者への肉体強化魔法が発動。残りの魔力量を考えずに主人からもたらされた恩恵を受け、明日菜は疾走。

「やああっ！！」

気合と共に斬りかかる明日菜。しかし眼前に捉えていたはずの少年の姿が掻き消える。気配のまま振り向いた瞬間、上空から右回し蹴りが襲う。

何とかハリセンで防御するも勢いを殺しきれず、明日名は橋に叩き付けられる。

追撃の左後ろ回し蹴りが降って来る。押し込む様な踵の一撃を、俺の鬼丸国綱の鞘が迎撃。超衝撃を何とか押し返し、明日菜の襟首を掴んで後退。

あと、２０ｍ。

「つまらないね」

全く抑揚の無い口調で話しながら繰り出される左正拳。人ひとり分重い体では回避が間に合わず、まともに吹き飛ばされる。後ろのネギを巻き込んで更に後ろに飛んでいく。

石切りのように橋をバウンドしながら何とか停止。少年は追撃もせずに佇んでいる。

あと、１０ｍ。

「まだ、君一人の時のほうがマシだったよ」

俺達の劣勢を笑うように、歩きながら間合いを詰める少年は俺の胸中を指摘する。

「君の本質は攻撃だ。守りながら戦うことに慣れていない」

その言葉を皮切りに一気に間合いを詰め、両の拳から拳打が飛んでくる。

紛れも無い事実だ。正直、二人を守るのが精一杯で反撃に移れない。素人と後衛を前に出さないといけない時点で、俺は前衛として機能しなくなっている。

それでも、この罠を成功させるにはこの方法しかない。

剛力から繰り出される砲弾のような連撃を俺と明日菜で辛くも捌き続けるが、直撃の度に、防御の度に大きく後ろに飛ばされる。

あと、３m。作戦場所には何とかたどり着いた。

そう思ったと同時、俺の膝が落ちる。疲労と肺にまで達した石化の魔術の為、俺の息が呼吸困難にまでなっていたせいだ。

すぐに立て直したものの、その一瞬を見逃す少年ではない。

俺を明日菜ごと吹き飛ばした少年は、攻撃の反動で螺旋を描きながら上昇。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト
小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ」

先程と同様の呪文詠唱。しかし石化の毒ガスをこの距離で、しかも上空から散布する意味が無い。

俺の警戒の通り、続く詠唱は聞いた事の無い言葉。だが先程の石化の煙とは違う。

掲げていた右手に集まっていた光が指先の一点に集中。こちらに向かって指を刺す。

明日菜は本能で危機を察したのか、俺を後方に突き飛ばす。自身と

ネギは間に合わないと判断したのか、ネギをかばったその瞬間、橋の右手の湖面に光が突き刺さった。

そのままレーザーは剣の如く右から左に振るわれ明日菜の背中、橋、左側の湖面と一直線に斬線の軌跡を描く。

木材でできた橋はともかく、光の直撃を受けた両側の湖の水まで灰色に染まり固まっていた。

「ネギ、明日菜！！」

超高速で進む石化スピードに耐え切れなかったのか、灰色に染まった橋の一部が崩落。瀑布を残しながら湖面に落ちていく。

一体どういう原理か知らないが、それでも明日菜と、明日菜に守られたネギは無傷だった。

「やはり、魔力完全無効化能力か？」

後ろに飛んでいく俺は少年の呟きを聞いた。

上半身を灰色に染めながらも立ち上がる明日菜。上着にはガラスが割れたようなヒビが覆い、砕ける寸前だった。背中にレーザーを受けていたはずだが体は特に問題無いようだ。

少年は自分の魔法攻撃が利かない明日菜を最初に撃破しようと宙を蹴り肉薄する。

しかし、

少年の繰り出した拳は鈍い音を立てて停止していた。

明日菜の前に出たネギは半ば殴られながらも魔力を集中させた両手で敵の手首を固定、その砲弾ような一撃を身を挺して防いでいた。

そう。先程の俺の叫びは二人を心配したから出た言葉ではない。作

戦開始の合図だった。

「ア・・・アスナさん・・だっ・・・・大丈夫・・ですか？」

「うんネギ。大丈夫よ」

連動する形で俺も明日菜も動く。上着が明日菜の動きに耐え切れず破砕。石の破片を撒き散らしながら形の良い胸が現れる。

後方に飛ばされた俺は橋を蹴って更に後方飛翔。敵の残した石塔の基礎に着地。地面と横向きになったまま『オーバーリミッツ』を発動し、鋭い光を放ちながら飛び出す。

自身の攻撃が一番弱い子供に止められた事実に停滞している白髪の少年の顔目掛け明日菜はハリセンをフルスイング。ガラスのような破砕音と共に敵を守っていた魔法障壁を一つ残らず割り砕く。

二人はそのまま横に抜け、空いた空間に俺が弾丸の速度で飛び込む。

『オーバーリミッツ』で得たエネルギーと着地の衝撃を全て踏み込んだ右足に乗せ、抜刀。

「全てを切り裂く！」

抜き打ちの一刀が少年の腹部を切り裂く。そして少年の身体が衝撃で後ろに流れるよりも早く俺の刀が跳ね上がり、少年を切り上げる。

「獣破！轟衝斬！！」

跳ね上げた勢いのままに少年を上空に押し上げていく。

猛烈な切り上げで対象を両断する秘奥義『獣破轟衝斬』。

この技は俺の物理攻撃で最強の一撃だ。

戦闘訓練では竜の首すら両断する威力を誇っていた。

しかし、その一撃が、

少年の左肩で鈍い音と共に止まっていた。

跳ね上がった一刀は脇腹に命中し斜めに走り抜け、左腕を肩から斬り飛ばすはずだった。

しかし最初に切り裂いた腹も、斜めに駆け上がった一撃からも出血は無い。

傷跡に見える色は赤ではなく灰。

皮膚の一部とはいえ自身の身体を石化。その部分を魔力強化することで致命傷の一撃を防ぎやがった。

魔法障壁が無くなったとはいえ、この防御方法は目の前で見せられてもまだ信じられない。

少年の顔に初めて苦悶が走る。しかし、それも押し殺して右腕を振りかぶる。

止めの一撃は必ず俺が入れると予測し、その上で左肩を完全に石化させ俺の攻撃を停止させた。

空中にいるこの状態でカウンターを入れられれば絶対に反撃できない。その為に自分の左腕を捨てるという冷酷な判断だった。

白髪の少年の顔は自身の勝利を確信した笑みが少なからず浮かんでいた。

しかし、

その笑みは俺にも浮かんでいただろう。

止めが俺の一撃になると読まれていることは俺も予想していた。来ると分かっている攻撃は防げるし、防げなくても耐えられる、とも。

だから

止めは、俺じゃない。

「うおおっ！！」

自身が上げる咆哮よりも早く月夜の空から影が飛び込んでくる。
あらん限りの魔力を右拳に宿した彼は杖に乗ったまま急降下爆撃を行い、少年の顔面にストレートパンチを叩き込む。
杖の加速と魔力の乗ったネギの拳は少年の右頬に着弾。今度は少年を下に叩き落とす。
高く、高く上がる水柱。
少年は真下の橋と、石造りの基礎を破壊しながら突き刺さり、湖全体に衝撃波の波が起きる。まるで隕石が落下したかの様な轟音が俺の足の下に響く。
ネギは止めの一撃の後、飛行軌道を何とか変更し湖に着水。湖に飛び込んで衝撃を逃がしていた。
俺も橋に着地、できずに無様に受身をとって立ち上がる。
半裸の明日菜を見ないようにしながら納刀。
一連の戦闘で既に橋は半壊状態。まともな足場になるのはほんの一部しかない状態にまで壊されていた。
後衛のはずのネギが敵の攻撃を止め一瞬の停滞を作り、魔法無効化の力を持った明日菜のハリセンが敵の防御を崩す。
止めと見せかけた俺の攻撃で敵を倒せれば恩の字。止められてもネギが空からカウンターを叩き込む。
攻撃を止めたネギの役目は終わったと勘違いしていた少年は、最後の一撃なんて予想すらしていなかったはずだ。
鈍く、小さい爆発音。
聞こえた方向を見ると純白の羽を持った剣士が誰かを抱えて飛び去る姿が見えた。
あっちは、あっちで上手くいったらしい。
未だ戦塵を上げる少年の墜落地点を一瞥し、敗因を告げてやる。

「集団戦だ、クソガキ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

高く、高く。
一直線に敵陣を目指す。
迷いは消えた。重く圧し掛かっていた使命感も無くなった。

「天ヶ崎　千草！」

敵を飛び越し、湖全体を見渡せるほどの高度まで上昇。そのまま急降下して一気に距離を詰める。
彼女を助けるのは『お嬢様』だからではない。大恩ある詠春様から頼まれたからではない。

「私達の友達、帰してもらうぞ！」

ギリギリのタイミングで呪符使いが喚び出した二体の式神を一刀の元に切り伏せ、一気にお嬢様を掻っ攫う。

「スクナ！捕まえ！」

背後にその声を聞き、思わず後方を振り返ってしまう。
上半身の高さだけで建造物に匹敵する召喚魔に天ヶ崎は命令する。
しかし、
５０ｍを超える大鬼神は主人の命令など意に介さないかの様に動かない。

それどころかこちらを一瞥もせず、唯々遠くを見ていた。
理由はわからないが好機であることは確かだ。
再び方向転換し高速飛翔。追撃できない距離まで一気に飛んでいく。

「お嬢様、お嬢様！御無事ですか？」

落とさないように慎重に体を揺する。
瞼が開き、瞳にゆっくりと力が戻ってくる。

「ああ・・・・せっちゃん・・・・・・」

まどろみの中、お嬢様が微笑み、私も思わず顔が綻ぶ。しかし、それも一瞬。
お嬢様は申し訳なさそうな沈鬱な表情を浮かべる。目尻には涙が溜まる。

「せっちゃん・・・・ごめんな・・・・。ウチ、ウチ・・守られてばっかりで・・・・。皆、傷つかんように、したかったんやけど・・・・」

「このちゃん」

途中から涙声に変わる謝罪を遮る。昔の呼び名だったが自然と言えた。

「明日の昼食、楽しみですね」

そう、とても楽しみだ。
明日雄飛を料亭に連れて行く話は元々、お嬢様が初日に企画していたものだ。助ける理由なんてこれで良いのだ。

明日の修学旅行最終日を楽しく過ごす。その程度の理由で・・・・。
私の言葉に一瞬呆けていたお嬢様だが、また笑う。
目尻に溜まり、涙にならなかった水を拭い、楽しそうに頷く。

「せ・・せっちゃん、その背中のは・・」

その言葉で今の自分の状態を思い出す。どうにかして上手い言い訳を考えるが出てこない。やはり私は雄飛のように口は回らなかった。
しかし、お嬢様は

「キレーなハネ・・・・何か天使みたいやなー」

最大級の賛辞を送ってくれた。
今までずっと隠してきた白い羽・・・・。里の中では自分だけが白く、禁忌として疎まれ続け、ずっとずっと嫌いな色だった。

しかし、今日からは

好きになれそうな色になった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「や、やったの？」

「ここまでやって、生きていると思うか？」

懐疑的な明日菜の声に俺は疲れた声を返す。水から上がってくるネギに手を貸しながら、少年のいるであろう方向を見る。
目の前には奈落の様な大穴が口を空けている。
少年の墜落地点には、橋の建材と石垣の基礎を粉微塵に粉砕した後の粉塵が未だに上がっている。
あの速度で湖面ではなく、木材と石材に叩き付けられた少年は死んでいてもおかしくない。
いや、そうでなければおかしい。

「さて、刹那達と合流するか」

俺は苦しげな息を吐きながら皆に号令を掛けようとした。
しかし、ここで違和感に気づく。
左脇腹を見ると未だに灰色の侵食が進んでいた。先程よりは遅くなっているが確実に進行している。
おかしい。
敵に異常状態を付加する魔法はその効果を受けた敵の魔力を奪って進行するが、発動そのものは術者からの常に発せられる信号があってこそだ。
攻撃術系統は少なくともそうだった。
敵の魔法形態が違うと言われればそれまでだが・・・・
否、それ以前の問題だ。俺は敵を倒したと『思っている』。
その死体を確認した訳では、無い。

（敵の、脳と心臓を完全に破壊するまで安心してはならない）

賽の河原での訓練で身をもって思い知った戦闘の掟だったはず。
更に追撃の攻撃術を紡ごうと、振り返った瞬間、

俺の右脇腹を通過し、飛んでいく何かを見た。

それは超高速で射出された石の短槍だった。

反射的に身体を捻った為、直撃には至らなかったものの俺の肋骨と肺を削り取って通過。後ろに飛んでいった。

吐く息に血が混じり、口の中に鉄の味が広がる。

「姫菱さん！」

叫びを無視して、近くにいたネギを後方の明日菜の所まで放り投げる。しかし、俺の身体はそれ以上動かない。

『オーバーリミッツ』の連続発動で、気も魔力も枯渇状態。

それ以上に予想以上に体力を消耗し、膝をつかないようにするのが精一杯。

腹に衝撃。一瞬で二人の後ろまで飛ばされる。

後ろに転がりながら前を見ると白髪の少年が何かを投げた体勢で立っていた。

右頬には拳大の大きな痣を作り、左腕は肩の部分で消失していた。

傷口からは灰色の断面を覗かせている。

残った肩を上下させながら少年は床に転がっていたものを拾う。

人間の腕ほどの太さの、というか文字通り少年の腕だった。

短槍の投擲を回避された後、続けざまに石と化した自分の左腕を俺の腹目掛けて投げてきたのだ。

左腕を肩の断面に押し当てると、接触面から先程の魔術と同じ光が漏れる。それと同時に完全に灰色に染まっていた左腕と肩に上着の白と、手に肌色が戻ってくる。

肩に押し当てていた右手を下ろすと左腕は完全に繋がっていた。息も完全に整い、左の手指を確認するように動かしている。

断ち切られた肩の傷口を石の魔術で繋げた後、石化を解除して致命傷から難無く復帰。

自分の得意系統の魔術を極限まで利用した戦闘術と回復術。俺よりも遥かに戦い慣れていやがる。

「・・・ここまで追い詰められたのは・・・さすがに初めてだよ。姫菱　雄飛・・・ネギ・スプリングフィールド」

ネギの拳で歪んだ顔の奥の瞳から強力な敵意が放射されると同時、今までとは比較にならないほどの魔力強化を施した拳がネギに突き刺さる。

思わず、俺と明日菜の声が唱和する。

「「ネギッ!!」」

その寸前、

小さな手が少年の手首を掴み強制停止させていた。

五指の長い爪に赤のマニキュアを塗られた指、細い手首、白い腕と続き、いつの間にか少年の下に広がっていた黒い染みから夜より濃い闇色に染まった少女が浮き上がる。

その光景に、続く言葉に、俺は恐怖を感じた。

「ウチのぼーやが世話になったようだな?若造」

次の瞬間、トラック同士が正面衝突したような巨大な激突音が周囲に響き渡る。

振るわれた正拳が少年を湖の端まで吹き飛ばしたとわかったのは打ち込まれた左拳が見えた後、という超速度の一撃。

湖面に一直線に描かれた衝撃波が収まった後、援軍が来たと漸く理解した。

「あっ・・エ・・」「エッ・・エッ・・」

足元まで届きそうな金の長髪。一見、小学生と見紛うほど幼い肢体を包む黒のインナードレスは白い肌と相まって扇情的に写る。振るった拳を気だるそうに下ろすその姿は、

「これで借りは無しだな、ぼーや」

「エヴァンジェリンさん！！」

隣の席のヤツだった。

エヴァンジェリン・・・・お前もか・・・・。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇free side◇

「こんばんわ、皆様」

ズン、とい重苦しい音を響かせながら人影が四人のいる場所に下りてくる。

和装の給仕服を身に纏い、背中と踵から青い炎を吹き上げながら絡繰　茶々丸は着地した。３mを優に越すような大型のライフルを軽々抱え直す姿は異様の一言に尽きる。

「ちゃ、茶々丸さんまで・・・・」

両腕でむき出しになった胸を隠しながら明日菜は呆然と呟く。

「姫菱、ずいぶんと息が上がっているな？」

エヴァンジェリンは胴体の左右を灰色と朱に染めている雄飛の状態を笑う。

『信用して良いのか？』という言葉を聴いていた身としてはこの状況を嘲笑ってやりたい気分のエヴァンジェリンだった。

「お前の生足に欲情してるんだよ」

帰ってくる言葉は苦しげだったが、それでもまだ冗談を口にできるらしい。

「ま、ぼーやを始めお前達は良くやったよ」

「だが、まだまだ。だな」と言葉を続けながら笑うエヴァンジェリン。

どこからともなく現れた蝙蝠達が肩や背中にとまり、布切れになっていく。

蝙蝠の羽ばたき音が収まる頃には小さな背中に悪役が着るような黒マントが翻っていた。

「問題だ姫菱。このような大規模な戦いで魔法使いの役割とは、何だ？」

答えられる事を前提で生徒に質問する教師のような表情を雄飛に向けるエヴァンジェリン。雄飛も雄飛で刀を杖にして立っている常態

なのに「はい先生」と軽く手を上げ、小芝居に付き合う。

「遠距離支援を含めた砲台役です」

「つまり前衛が盾となっている間に、防ぎようのない大火力で敵を薙ぎ払うのが仕事です」と締め括る。この状況では望め無い役割だったとはいえ、少し悔しげだった。

「その通り」と不適な笑みで頷くエセ教師。予想通りの答えに満足している顔だった。

「マスター良いのでしょうか？」

そこで茶々丸が抑揚の無い声で主人に尋ねる。彼女の視線が見るのは相も変わらず佇んでいる大鬼神と、自らが持つ巨大なライフルだった。

「構わんよ。結界弾頭なんぞ必要ない」

言外に『ヤツの動きを止めなくて良いのでしょうか？』と聞いてくる機械仕掛けの従者に鼻を鳴らして答える。

「そうだろう？デカブツ」

向き直りその大鬼神に言葉を投げるエヴァンジェリン。

あの巨大すぎる敵に声を掛ける行動を始め、援軍の行動に全くついて行けない三人。

どういう事？という視線を背中に向けられるも金髪の少女は振り返らない。

「・・・・人の子らよ」

突如、幾星霜を重ねたような声が湖全体に響く。
最初、声の主はその場にいる全員が分からなかった。
否、唯一人。『語り掛けた人物』を除いて――

「我を討て」

「・・・・いいだろう」

続く言葉に答えたのはエヴァンジェリンだった。彼女は不敵な笑みを雄飛達に見せる。

「お前達、私が今から『最強の魔法使い』の『最高の力』を見せてやる！」

「ふはははは」と、悪役の様な笑い声を出しながら当然のように空に飛び上がる。闇と血色にはためくマントを見た雄飛はまるで悪魔のようだと感じた。
しかし、夜空に飛んでいく姿が一時停止。再び振り返り「いいな！よ――く見とけよ！」と念押しするその姿は只の小学生にしか見えなかった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。契約に従い、我に従え、氷の女王」

遥か上空まで飛び上がった少女が手を掲げた瞬間、雄飛は背中を貫く氷柱のような感覚に身震いした。
莫大、という言葉すら愚かしいほどの魔力開放と一極集中。
太陽を思わせるほどの圧倒的な存在感だった。

「来れ、とこしえのやみ！えいえんのひょうが！！」

天に掲げられた右手が振り下ろされた瞬間、何の前触れも無く湖が青白色に覆われた。巨人を中心とした広大な空間が軋み音を上げながら一瞬で氷原に変わる。

大鬼神の胴体を貫くように氷の穂先が連続で氷原にそそり立ち、一本一本がビルのような太さと高さの氷塔を花弁とした白い花が湖面に咲いた。

「何や、何なんや――――あんた何者や！？」

極低温の空間から辛くも逃れた千草は混乱しながらも当然の疑問を叫ぶ。しかし、時既に遅し。

「くくくく、相手が悪かったなぁ女・・・・ほぼ絶対零度１５０フィート四方の広範囲完全凍結殲滅呪文だ。個人の装備や呪文では防ぐこと適わぬぞ」

両手に凄まじいほどの魔力を携えながら笑うエヴァンジェリン。

リョウメンスクナノカミは周囲を死の世界に変えられても身じろぎ一つしないものの、顕現している上半身の大部分を白く染められていた。

絶対零度を喚び起こした余波が吹き荒れ、周囲を冬の森に変えていく。

「我が名は吸血鬼　エヴァンジェリン！！『闇の福音』！！」

季節の流れを逆転させるような極大魔法を鼻歌交じりで操る人物が、高笑いと共に自らの名乗りを上げる。

「最強無敵の悪の魔法使いだよ！！」

「ノ・・・ノリノリねーエヴァちゃん」

最早笑うしかない、と言った口調で眼前の光景を見届ける明日菜とネギ。雄飛もこの神の鉄槌にも思える『戦略魔法』に言葉も出ない。確かに遮蔽物や障害物の無い広大な開けた空間ならば、何の躊躇いも無く大魔法を使える。

しかし、ここまでの大破壊を行うには膨大な魔力とそれを精密に操る技術が必要なのだ。

「全ての命ある者に等しき死を」

この世の終焉のような空間を作り出した吸血鬼が両の手を合わせ、分かれていた魔力を右手に集中させる。

それと同時に巨人を貫き咲いていた氷の花が中心に集まってくる。

飛騨の大鬼神を中心に据えたまま青と白に彩られた花弁が閉じると、リョウメンスクナノカミを幽閉するような超巨大な蕾が出来上がった。

それはさながら縦に起き上がった棺のようだった。

「其は安らぎ也」

浪々と紡がれる呪文詠唱が聳え立つ棺桶に縦横無尽にヒビを入れる。

湖全体に巨人の死刑宣告の音が響き渡る。

「『おわるせかい』」

「砕けろ」と、術者が指を鳴らすと同時、棺桶が自重に耐え切れず崩落。内部の巨人ごと粉微塵に割り砕く。

悪の魔法使いがマントを鳴らしてその光景に背を向ける。
１６００年の時を経て、現代に喚び起こされた飛騨の大鬼神は細かく粉砕されて湖に沈んでいった。

## 第十七話（後書き）

フェイトとエヴァがとんでも無く強くなってしまった・・・・まぁいいか。
スクナの一件は次回の話でご説明します。

最後に
注：姫菱はロリコンではありません！

## 第十八話（前書き）

今回で「京都編」は終了です。
無理矢理締めに入った為、前回の倍近く長い話に・・・・。
第十八話御覧下さい。

（注）後書きにアンケートがありますので良ければご返答願います。

## 第十八話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

遠くに見えていた光の柱と巨人が掻き消える。大鬼の一体はその光景を見て、納得と不満が半々に入り混じった声を敵に掛ける。

「どうやら勝負あったみたいやな」

大鬼は半分ほどの長さになった棍を肩に担ぎ直しながら溜息を付く。

「あんたらの勝ちや。どうする？ねーちゃん」

残念そうに自身の負けを口にする烏族の剣士。

大敗。

そう思えるほどの結果だった。１５０体もいた妖怪軍団も今やたったの６体にまで削られ、その全員が小さくない傷を負っている。術者からの魔力供給が途絶えた今、消えるのは時間の問題だった。

「こっちも助っ人なんでな。そっちが退くなら戦る理由はない」

拳銃を下ろした龍宮が答える。彼女も小さいとはいえ切り傷や打撲が身体を覆っている。それでも未だ戦える、といった様相だった。

そして古の不満そうな声を無視して戦闘状態を解かない人物に視線を向ける。

「お前はどうなんだ？神鳴流剣士」

声を掛けられた月詠は光の柱が立っていた方向を名残惜しそうに見ていた。スカートもパンプスも切り裂かれ、ドレスの袖も布切れと化したゴスロリ風の衣装を身にまとった女剣士はいつも通り間延びした口調でしゃべる。

「そうですねーお給料分は働きましたし・・・ウチも帰りますぅ～刹那センパイによろしくお伝えください、拳銃使いのお姉さん」

「センパイと戦えへんかったのは残念ですけど」と途中で不満を口にしたものの大小の刀を腰に納め、一礼。そのまま戦場を後にする戦闘狂。

龍宮は内心ホッとする。結局衣装はぼろぼろにしたものの、彼女には傷一つ与えることはできなかった。

中州跡から歩いて帰るその後ろ姿には一切の隙が無い。正直退いてくれて安心したのが本音だ。

「ほななー嬢ちゃん達」「なかなか楽しめたぞ大陸の拳法使い！」「さっきの坊ちゃん、嬢ちゃん達にもよろしゅうなー」

思い思いの言葉を残し、煙を上げながら消えていく妖怪達。そこには自分が消えていく恐怖など無かった。彼らにしてみれば再び眠りにつくだけなのだろう。

「久しぶりに愉快やったわ。今度会った時は酒でも飲もう」

その言葉を最後に妖怪達は完全に塵となって消えた。後に残ったのは中州に徐々に流れ込んでくる水の音だけだった。

「ふ・・・私達まだ未成年なんだがな」

とてもそうは見えない。という言葉を何とか飲み込んだ古も、微笑している龍宮に言葉を返す。

「結構いい人（？）達だたアルね」

ほんの少しの清々しさを残して、妖怪軍団との戦いは終わった。

―――――――――――――――――――――

祭壇から離れた湖の真ん中。そこでは未だ氷の崩落が続く。

全長６０m近い大鬼神ごと砕いた氷塊が着水。水面を砕く瀑布の音と、冗談のような高さの水しぶきが連続で発生しネギ達を圧倒していた。

「や、やったー！すごーいエヴァちゃん！！」

その光景と音に負けじと大声で賞賛を送る明日菜。エヴァは崩落の光景をつまらなそうに見ていたが、声に振り返ると不敵な笑みを浮かべて降りてきた。

「どーだぼーや、私のこの圧倒的な力。しかと目に焼きつけたか？」

「すごいよ！！エヴァちゃんやるじゃん！最強とか自慢してただけあるわね、見直しちゃった！」「とんでもねぇな・・・・」

明日菜や雄飛の賛辞や呆れ混じりの声にも禄に反応しなかったエヴ

ァだが、

「ス・・スゴかったです。エヴァンジェリンさん」

というネギの賞賛には笑顔で答えていた。

「で、でも登校地獄の呪いは？」「あ、そーよ学園の外に出られないんじゃなかったの？」

頭の中に出てきた疑問を口々にまくし立てる二人。「呪い？」と、事情を知らない雄飛は置いてけぼりにされ、そのまま聞き役になっている。

「それですが・・・・」

今まで沈黙を貫いていた茶々丸が口を開く。その合成音じみた声で明日菜とネギの疑問に答える。

「強力な呪いの精霊をだまし続けるため今現在、複雑高度な儀式魔法の上、学園長自らが5秒に1回、『マスターの京都行きは学業の一環である』という書類にハンコを絶えず押し続けています」

「準備に時間がかかってしまい申し訳ありません」と事も無げに言う従者。三人はその拷問にも等しい作業内容に絶句していた。

「今回の報酬として明後日の昼、私が京都観光を終えて麻帆良に戻るまでじじいにはハンコ地獄を続けてもらう」

「こんな機会もうないからなー」と快活に笑う吸血鬼。

「5秒に1回って・・学園長大丈夫なの？」

地獄の責め苦が麻帆良学園につく明後日まで続くその光景を思い浮かべる三人の顔は少し引きつっている。

「ふん！この事件のそもそもの原因はじじぃの見通しの甘さにある！この程度の苦労、当然だ」

今から明後日までの一日半近く、書類と向き合う地獄を当然と言い切ったエヴァ。その肩にかかっていたマントが蝙蝠に変わる。四方八方に散っていった黒い影は明日菜の肩に、背中に、胸元にとまる。驚き、身を捩る明日菜を無視してその裸体が黒に包まれる。蝙蝠の鳴き声と羽ばたき音が止まる頃にはさっきまでエヴァの身を包んでいたマントを今度は明日菜が掛けている状態になる。さすがに同性として不憫に思ったようだった。

「登校地獄と学園結界から逃れた今の私の力は、ほぼ全盛期と同等。反則気味の最強状態という訳さ」

そう言うエヴァの小さな身体から立ち上る魔力強化の光。火花のように散っていく燐光の一つ一つに宿る魔力ですら濃密な量を有している。

満身創痍の中、雄飛は言葉も出なかった。

三対一でも倒せなかったあの少年を吹き飛ばした体術。飛騨の大鬼神を一撃で葬り去った無慈悲なまでの『戦略魔法』。

ただ、膨大な魔力だけではない。卓越した戦闘技術と魔法制御の一端を垣間見た。

まさしく『最強無敵の悪の魔法使い』に相応しい人物だった。

しかし、

「久々に全開でやれて気持ちよかったよ。ぼーや」

そう言って笑う彼女はまるで全力で遊んだ年相応の子供のようだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「いいかぼーや。今回のことを私が暇な時にやっている日本のテレビゲームに例えるとだな。

最初の方のダンジョンとかで死にかけてたら、なぜかラスボスが助けに来てくれたようなものだ」

「ずいぶん親切な、裏ボスも、いたもんだ・・・・」

エヴァのツンデレぶりに俺は息も絶え絶えに軽口を返す。

息を吸う度に、吐く度に、右の脇腹が傷の存在を訴えてくる。体から出て行く血の量に比例して眠くなってくる。

左の脇腹の感覚は既に無い。膝にも力が入らない為、鞘と刀をスキーのストックのように突き立てて身体を支えている状態だ。

周囲には雪が降っている。瞬間的に喚び起こされた極大の冷気が周囲の大気中の水分を凍らせ、ダイヤモンドダストを作り出していた。

初めて見るその光景を暢気に観賞している余裕は今の俺には無い。

再生術で傷を塞ぐことはできない。石化の呪いを受けた時点で、自分に石化治療の『リメディ』をかけて石化の進行を遅らせている。

魔法の二重発動ができない俺は、出血を無視してでも石になる事に

抵抗するしかなかった。
しかし、それも限界が近い。
『オーバーリミッツ』の連続発動と、瞬間的な発動しか想定していない治療系神聖術を『使い続ける』という荒技に魔力も、その制御も限界が近い。俺が嫌いな言葉である『気合と根性』でどうにか持っている状態だった。
俺は周囲の水溜りの位置を確認、終了。問題はタイミング。モグラ叩きの要領だと自分に言い聞かせる。
まだ俺は倒れるわけにはいかない。今も尚、『石化は進行している』のだから・・・。

「む・・さすがにキツそうだな小僧。大丈」

最後まで聞いている暇は無い。既にエヴァンジェリンの後ろの水溜りに向かって刀を振り下ろす、と見せかけて鞘を投擲!
水溜りから頭だけ出していた少年の顔に投槍となった鞘が突き刺さり、額が飴細工のように歪んで水が弾ける。
その光景を見る事無くすぐさま振り返り、エヴァの斜め前方に下から現れた少年めがけ攻撃。
水を利用した移動。これは敵を倒したと『勘違い』している俺たちに奇襲を掛けるには打って付けの能力だが、屋敷の風呂場で一度見た以上、対応は可能だ。
そもそも俺の性格の悪さを知っている少年が、『エヴァンジェリンの背後』なんていう見え見えの位置取りをするはずが無い。
囮を出す事を含めると、出現する場所も順番もある程度予想がつく。後は対応できるかどうか。
一抹の不安通り、俺が攻撃動作に入るよりも一刹那甘んじて少年の腕が振られる。橋を食い破って石の槍が飛び出し、伸びる。敵の狙いは最大戦力のエヴァンジェリンだった。
破壊しようと灰色の穂先に向かって刺突を繰り出す。槍と刀が交差

し鈍い音が響く。俺の持っていた得物から出た音だった。
湾れ乱刃の刀身が半ばから破断。気の乗っていない鬼丸国綱の刃は石の槍の質量と速度の前に簡単に敗北した。
軽々と国綱の刺突を突破した剛槍は勢いを全く減殺させずに少女の腹に突き刺さる。背中から噴き出す血がインナードレスを更に黒く染める。

「貴様っ・・」

不意を衝かれ、血を吐きながら敵を睨むエヴァンジェリン。その身体は斜め下から突きあがった石の大槍によって宙に縫い止められていた。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル・・・・『人形使い』か・・・・」

「エヴァンジェリンさん!!」「エヴァちゃん!!」

ネギと明日菜の悲鳴が重奏となって響く。しかし俺はすぐさま次の行動に移る。ネギを抱えていた明日菜の足元へ地を這うような低空回し蹴りを放ち、転ばせる。
鬼丸国綱が折れた事に呆けている暇は無い。
俺は見逃してなどいない。少女は自らの腹を巨大な槍で貫かれながらも、『笑って』いるのだ。
体勢の崩れた二人をそのまま抱え、転がりながら距離を取る。
突如、エヴァンジェリンが爆発。煙を上げて分かれたその身体は無数の蝙蝠に変わっていた。

「そのとおり。『不死の魔法使い』さ」

その声は少年の背後から響き、魔力で肉体強化した右手を構え、消えた。次の瞬間、轟音が炸裂。
視界の端でアッパースイングの軌道で放った抜き手が見えた。その頃には足場の橋と、祭壇の舞台と灯篭、石造りの基礎の一部が粉微塵に吹き飛ばされた後だった。速すぎる。
岩盤掘削のような一撃を至近距離で浴びた少年の体は胸から下が消失していた。

「・・・・なる程。相手が吸血鬼の真祖では分が悪い・・・・」

少年は無表情のまま抑揚の無い口調で話す。吹き飛ばされた体の破片は無色透明。

「今日のところは僕も退くことにするよ・・・・」

その言葉を最後に残っていた身体も歪む。後に残されたのは宙に撒かれた水だけだった。

「逃げたか・・」

鼻を鳴らして笑うエヴァンジェリン。相手は不利を悟ったのか、水で作った幻影に注意を向けさせ、その間に本人は逃走。水の人形が敵を倒したら御の字。倒せないなら勝てる手は無いと判断しそのまま逃げる。鮮やかな引き際だった。

「マスターご無事で」「エ、エヴァちゃん！い、い、今のって」「エヴァンジェリンさん大丈夫ですか！？」

抱えた俺の手を振り解いた明日菜やネギ達の三者三様の声が響く。
が、俺が見れたのは、聞けたのはそこまでだった。

仰向けのまま自らの血溜まりに寝転がる。顔が上がらず、夜空しか見えない。いやその視界も歪んでくる。
俺の現状を示すように持っていた刀の柄が手から滑り落ちた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇木乃香　ｓｉｄｅ◇

さっきまでいた祭壇にウチらが着いたのは一番最後だった。
楓さんや夕映にアキラ、古や龍宮さん達の人垣を掻き分けて中に入る。何となくだが嫌な予感はしていた。やけど・・・・

「・・姫、菱・・・・」

これはあんまりだった・・・・。身体の左側は灰色になっていて肩近くまでシャツの色が変わっていた。右半身は流れていく血で赤黒く染まり、下に小さくない血溜まりを作っている。他にも切り傷や火傷などが全身に刻まれていた。
素人のウチでも分かる明らかな重傷。一刻も早く手当てしないと命を落とす。ネギ君が自分の手から出る光を押し当てているも、出血の勢いは止まらない。
頭を鈍器で殴られたような衝撃が走る。突きつけられたその結果に、姫菱に駆け寄ることもできない。
ウチの問題が、ウチの存在が、遂に誰かを死なせる事になった・・・・。

「・・・・危険な状態です」

左半身を抱きかかえた茶々丸さんが、傷の状態を告げる。

「左肺の石化と右肺の傷からの出血がひどい状態です。このままだと・・・・・」

「気道部、分が石化・・して窒息、死・・・・か、出、血多量・・で死ぬか・・・・どっ、ちが楽だろ・・・・うな・・・・」

掠れた声で軽口を叩く姫菱。まるで命の灯火が消えるかのようだ。茶々丸さんの無慈悲にも思える冷徹な診断にも、彼は皮肉の笑みを浮かべていた。

「・・・・ど、どうにかならないのエヴァちゃん!!」

話す余裕も無いらしいネギ君の代わりなのか、アスナの悲痛な声。しかしそれもウチの耳を通り過ぎるだけで、その懇願にも似た絶叫を聞いてもウチは動けなかった。

しかし、

「手が無い、訳じゃない」

この状況に不満げに鼻を鳴らしながら、エヴァちゃんは答える。そして、その深い海のような色の瞳でウチを見据えた。

「近衛木乃香。お前が仮契約すればこいつは助かる」

「え・・・・仮、契約?」

皆の視線が集中する中、いきなり降って湧いた単語を聞いて思わず

オウム返しになってしまう。

「・・・そうか！仮契約には対象の潜在能力を引き出す効果が・・・」

いきなり聞いたこともない声が響く。見るとネギ君の肩にいるペットのオコジョのが喋っていた。ウチの驚きを置き去りにしたまま、エヴァちゃんが頷いて説明を続ける。

「コイツの魔力の本質は癒しだ。術式で縛らずとも、引き出すだけで周囲の人間の傷を治す効果がある」

皆に言葉を投げながらも、エヴァちゃんの視線は全くウチから逸れない。まるでウチの動揺を見逃さないように・・・。

「・・エヴァ、ンジェリン、てめぇ・・・何を、言ってん・・のか、分かって・・・・」

姫菱は死人のような声色に苛烈な怒りを混ぜた言葉をエヴァちゃんに向ける。
しかし、そんな激情に晒されても眼差しは逸れない。

「私はできるかどうかを言ってるまでだ。判断は本人に任せる・・・・それに『魔法の存在をばらさない』なんて約束、自分の命を掛けてまでも守るものか？」

「近衛、の・・人、生を決・・・・める、選択に、俺の命、を乗せるな・・って言っ・・てん、だ！」

「分かってないのはお前だよ・・・・。近衛木乃香、助けるのか、

見捨てるのか。お前が決めろ」

視線を姫菱に向け、深い溜息をこぼしつつ言葉を続ける。そして再びこちらを見て疑問を投げかける青い瞳。
その深い眼差しに射竦められ、たじろいでしまったが何とか見返す。
助けるのか、否か。

（決まっとる）

「エヴァちゃん。ウチは何をすればええ？」

大きく息を吸って覚悟を決める。状況に理解が追いつかないが自分の選択が重要なのはイヤでもわかった。

「なに。簡単だ、この魔法陣の中でコイツとキスすれば良い」

エヴァちゃんが爪先で床を蹴ると姫菱の下に広がっていた血溜まりが波打ち、ひとりでに動く。赤い線となった小さな波が不可思議な図形と文字を描いていく。
瞬く間に血色で描かれた魔法陣が橋の上に現れた。それはまるで悪魔との契約の儀式にも思える光景だった。

キス。

要求された行動に思わず顔が赤くなってしまう。が、それでも一歩を踏み出す。皆に道を空けてもらって姫菱に近づき、抱きかかえる。
足袋が、浴衣の裾が、血を吸って赤黒く染められる。腹部に姫菱の脇腹が当たり流れ出ていく熱も感じられた。
出血も限界なのか土色になっている顔を覗き込む。

彼への気持ちも固まっている。だからなのか気恥ずかしさはあっても嫌悪感は無かった。

「・・近衛、止めと・・け・・・・。これ以・・上『こっち』に、関る・・とロクな、」

「決めたんや」

そう言って姫菱の言葉を遮る。周りの人間は皆こうだ。ウチに何もさせてくれない。それが『私の為』と言って。

だから姫菱にも知ってもらう。『無理矢理助けられる』側の気持ちを。

ウチの気持ちを。

「守ってくれる人のために何をするのか。一緒に戦うことも、その人を守ることもできひんのなら・・・その力を身に付ける。って」

『何ができるのか』では無い。他人に聞いている時点でどうせ何もさせてくれない。

だから、『何がしたいのか』を自分に聞いて、考え、決めた。

「その為に魔法の力が必要なら、その『世界』に入る。って、決めたんや」

この先にも問題はきっとあって、ウチ一人では解決できないものは多いだろう。

でも、

この『力』と『状況』に二度と振り回されない為に、何もできない

『自分』にならない為に・・・・。

「これから先もウチの周りで傷つく人を助けられるように・・・・
強くなるって決めたんや」

息を吸って言葉を区切る。今までの言葉も紛れも無い自分の本心だ。
しかし、それ以上の感情が、ある。

「好き・・です。雄飛・・・・傷ついている貴方を、助けさせて下
さい」

答えを聞く勇気も時間も無く、目を閉じ顔を近づける。二人の距離
が零になった瞬間、血の味を感じた。
それと同時に眩い輝きが周りを覆いつくす。衝撃波にも似た光の波
を感じて目を開けると今までで一番近くに彼の顔があった。
いつの間にか両手にはそれぞれ扇子を握っていた。着ていたはずの
浴衣もお父様が着ていたような狩衣に変わっていた。
しかし一番変わったのは彼の容態だ。石になっとったはずの左脇も
シャツ本来の色に戻り、服の切れ目から見える右脇の傷も完全に塞
がっている。全身を覆っていた刀傷や火傷も跡形もなく消えていた。
頬を撫でる感触に目を向けると血色が良いを通り越し、真っ赤にな
った顔があった。

「サンキュ」

気付かぬ内に流していた涙を拭かれながらお礼を言われた。

ようやく長い、長い、そして長い一日が終わった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

「主犯は自首してきたらしいな？」

「失敗したらその時点で罪を償うつもりだったらしいです」

長い一日の全てが終わり朝を迎えた。

荷物を纏めたザックを背中に回し、夕凪と一緒に肩に掛ける。最後に彼と一緒に描かれたカードを胸のポケットに入れ、一歩外に出る。強烈な朝日が寝不足の眼に刺さった。

雄飛が回復した後は色々と忙しかった。仮契約時に溢れ出た光の余波でその場にいた皆の傷は治療されたが、石にされた人達の治療は全てお嬢様一人で行っていた。逆再生を掛けるように石化を治療していく様は凄まじいの一言に尽きた。お嬢様もさすがに疲れたのか今は他の皆と一緒に寝ている。

「皆さんぐっすりとお休みのようですね」

「まあ、ハードな一夜だったからな」

最後の最後で良いところを全部持っていったエヴァンジェリンさんが言うと笑いが込み上げてくる。手摺に乗った彼女は足を揺らしながら、ボーッと外を見ていた。

「・・・・何も言わないんですね・・・・」

旅支度をした私を見ても特に質問も、引き止めもしない。今はそれが逆に有り難かった。

「引き止めるのは私の役目ではないしな・・・・。そもそも意味が無い」

心底どうでも良い。といった口調で言うエヴァンジェリンさん。しかし私はその言葉に引っかかる。

「・・・・意味が・・無い・・・・・？」

言葉の意味が分からない。

「予言してやろう、桜咲刹那。お前は逃げられない」

疑問符を顔に浮かべた私にエヴァンジェリンさんは更に疑問符を増やすような事柄を告げる。逃げられない？イヤ、そもそも『引き止めるのは私の役目ではない』って・・・・、一体どういう意味・・・・。

「『引き止めるのは俺の役目』ってか？」

その言葉に振り返る前から正体は分かっている。やはり雄飛だった。枯山水の庭の岩に腰掛けていた彼はこちらに軽く手を上げ、挨拶してくる。

「な、何で雄飛が・・ここに・・・・」

「彼は３０分くらい前からそこに気配を消して待機していました」

「そこは空気読んで黙っといてくれよ絡繰・・・・」

私の疑問を聞いていたのか律儀に答えてくれる茶々丸さん。驚きはしたものの確かにその光景は少し間抜けだった。

咳払いを一つして彼がこちらに向かってくる。表情は少し怒っているようだが、何故か呆れの感情も感じた。

「一族の掟。木乃香達に知られた。近衛家や神鳴流への恩も返した・・・・。出て行く理由で、他に何か言うことあるか？」

区切る言葉と共に右手で指折り数えながら距離を詰め、止まる。手が届くような距離で向かい合うと後ろめたさもあって、彼の顔をまともに見れない。

俯いたまま出る言葉は搾り出すかのようだった。

「・・・・無いです。・・・・だから」

「だから後はよろしくお願いしますって？・・・・さすがにそれは楽観視しすぎだ」

しかし涙目になって言った言葉は雄飛に軽く否定される。

「アイツを取り巻く環境は実は何も変わっていない。あいつを狙う人間は依然として存在するし、東西の和平もこんなクーデターがあった以上白紙に戻さざるを得ない。本人は魔法の存在は知りはしたが、未だ素人の域を出ない」

今度は左手の指が折られていく。告げられる事実に言葉も出ない。雄飛の言う通りだった。お世話になった近衛家や神鳴流への恩返しをしただけで問題は未だ山積みだった。私は一体何を解決したつも

りになっていたのだろう・・・・。
彼は両手を下ろして溜め息をつく。私のこの行動の理由を知っているからこその、優しい眼差しを向ける。

「めでたしめでたし。で終わるのはお話の中だけだ・・・・。現実は昨日とほとんど何も変わっていない。それなのにお前は終わったと判断して出て行くのか？」

本当はここで泣いてしまいたい。それくらい全て許してくれた彼の優しさが胸を埋めていた。しかし、昨日の、彼のお嬢様とのキスを思い出して涙腺を何とか保つ。このままだと・・・・

「でも・・・このちゃんとの『縁談』の話がある以上、ウチなんかがいたら邪魔に」

「・・・ちょっと待て」

最後まで言い終える前に彼が声を少し大きくして遮った。暫くして彼は重々しく疑問を切り出す。

「何の話だ？」

―――――――――――――――――――――

（なんじゃい？）

彼の持つ携帯電話の向こうから疲労を感じる声。そしてその後ろから小さく紙を捲る音と、規則的に何かを叩く音が聞こえる。机の固

定電話の音声を開放して会話しているらしい。
どうやら本当に5秒に1回ハンコを押し続けているようだ・・・・。

「学園長、突然で悪いが面白い小噺が頭に浮かんだので聞いてくれ」

そう言って受話器の向こうにいる学園長に話しかける。

（知っての通り儂、今すごく忙しいんじゃが・・・・）

「まあ、そう言わずに」と言葉を返す雄飛の顔は今まで見たことも無いほどの悪い笑みを浮かべていた。悪魔の親玉も逃げ出すような恐怖を感じる。

「ある老人が娘夫婦と孫に内緒で孫の縁談話を進めていた噺だ」

一瞬、ハンコを押す音と、紙を捲る音が凍りついたように止まる。しかしすぐさま再開される。だが動揺を隠す余裕が無いのか、音の間隔が不規則になっていた。

「縁談話なんて全く知らなかった相手の少年はその孫を敵の魔の手から守って関東に帰るんだが、護衛の最終日にそれが発覚してしまってな・・・怒り狂った娘夫婦とその相手の少年、ひいては孫まで敵に回してしまうんだ」

受話器の向こうからはハンコを押す音と紙を捲る音しか聞こえない。しかしその沈黙がすさまじく耳に痛い。
傍で聞いている私ですら冷や汗が出る。笑っているのは小噺をしている本人と、同じく傍で聞き耳を立てているエヴァンジェリンさんだけだ。

「その後、その老人は関西呪術協会からの猛烈な抗議によって『何故か』閑職に回され、
少年が流した噂の所為で教員や生徒からも『何故か』白い目で見られ、
可愛い孫娘には「じいちゃんの顔なんて見たくもない」と『何故か』嫌われる。
老人は自分の人生の一体何処が間違いだったかを煩悶する愉快すぎる余生を送りましたとさ・・・・」

「めでたし、めでたし」と昔話風に雄飛は締めくくる。その後ろの腰に黒い尻尾が付いていないのが不思議なくらいの性格の悪さだ。
私も、お嬢様も、そして恐らく大河内さんも。どうしてこんなヤツを好きになってしまったのだろう・・・・。

（・・・ほ、ほう・・・お、面白い冗談じゃな・・・・）

途切れ途切れの声は印鑑の押し疲れだけでは絶対に無い。声色だけで受話器の向こうの学園長が冷や汗を大量に掻いているのが手に取るように分かる。

「なあに、この噺は最後にすごいオチがあってな・・・・。今日、この世のどこかでこの噺が現実のものとなるんだ」

そう言って受話器の向こうからの制止の声も聞かずに通話を切る。
その後雄飛は、声も出ないほど笑っているエヴァンジェリンさんとハイタッチしていた。何か通じる物があったのだろうか・・・・。
しかしこれで最後の疑問が解けた。どうやら学園長はこの話を振る事で私の注意を雄飛に向けさせ、監視させたかったらしい。
皮肉な事に私の心も、そしてお嬢様の心も彼に奪われてしまった。
ここで無理矢理出て行こうにも、彼は逃がしてくれない。

それ以前に・・・・きっと私は彼から『逃げられない』のだ。遠くに行っても結局戻ってきてしまう予感がある。

「雄飛」

彼を真正面から見つめる。真面目な話と感じたのか笑顔を引っ込めてこっちを見返す。

「私は貴方が好きです・・・・。でも・・・・貴方が迷っているのも分かっています」

彼と仮契約を結んだときに出た『パクティオーカード』をずっと持っていると・・・・何となくだが分かる。
私を好きでいてくれる。だけど同じくらいお嬢様や、他の人にもその感情を向けている事が。
こんな事を言うのは正直、『女の子』としてどうかしている。多分、雄飛本人も呆れ返るだろう。

「答えは出さなくても、私を選んでくれなくてもいいです・・・・。でも・・・・従者としてでもいいから・・・・近くにいさせて下さい」

『英雄、色を好む』と言う言葉を自分から受け入れることになるとは思いもしなかった。
でもこれが自分の正直な気持ちだ。

彼のそばにいたい。

従者などと『都合の良い女』扱いされても別に構わない。彼の隣に立っていたい。

意を決して行った『宣言』に呆気に取られていた雄飛だったが、「卑怯だ・・・・」とこぼし、ばつが悪そうに頭をかく。

「そう言われると・・・・男は断れない・・・・」

そう言って赤い顔で溜息を付く。私は思わず笑ってしまう。しかし、肝心な事を忘れていた。

「若いな、お前ら・・・・」

「イキナリ老け込まないで下さい、マスター」

この一連の告白シーンに観客がいた。昨日も似たような事があった気がする・・・。

4月25日　AM　06：00　修学旅行最終日の朝が始まった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇free　side◇

「ユウ・・・・その・・・・そこウチの布団なんやけど」

「気にすんな」

嵐山旅館の一室「３－Ａ」５班の大部屋で雄飛、刹那、明日菜、ネギ、木乃香の五人は再びダウンしていた。
旅館に帰ってきて皆が最初にやったことは寝ることだった。昨日が濃密すぎて誰一人として最終日に動く気をなくしていた。
雄飛にいたっては木乃香の布団を強奪して完全にお休みモード。明日菜がそれを面白半分で邪魔して遊んでいる。

「パトラッシュ・・・僕もう疲れたよ・・・・」

「誰がパトラッシュか」

明日菜の枕の鉄槌が雄飛の寝顔に突き刺さる。雄飛は心底イヤそうに眉根を歪め寝返りを打つ。

「見てごらん、ナスカの地上絵だ・・・・！綺麗だね・・・・」

「・・・ユウの中のネロはペルーまで行ったんか・・・・？」

木乃香のツッコミに誰も答えない。
因みに『フランダースの犬』の舞台はベルギーなので、国境どころか大陸と海を越えたことになる。疲れたとかいう以前の問題だ。
それはさておき『人が寝ているのを見ると自分も眠くなる』のは最早『真理』である。その場の人間全員が疲れているのならば一気に睡魔が襲ってくるのは当然の摂理であった。
ネギは時計を確認する。まだ詠春さんと待ち合わせた時間までかなり余裕がある。念の為、携帯のアラームをセットする。
この場の全員が睡眠欲に敗北した瞬間だった。
しかし、

「コラ、起きろーっ！ぼーやとその他！！」

勢い良く空いた襖が乾いた音を響かせる。音と声に驚いて振り返るとそこには昨日屋敷に行ったメンバーを後ろに従えたエヴァンジェリンが立っていた。

「今日は私の京都観光に付き合うがいい！！」

完全な命令形の言葉が部屋全体に響き渡る。それでも雄飛は眠っていた。

――――――――――――――――――――

中学生の身分では絶対に入ることはない。それくらい敷居の高そうな料亭。

団体用の個室からは庭が見渡せ、料理に舌鼓を打ちつつ優雅な時間を過ごす空間だった。

雄飛達を散々連れまわしたエヴァンジェリンの京都観光はひとまず詠春と合流し、昼食と相成った。

奇しくもそこは木乃香と刹那が雄飛を連れて行こうとした小料理屋だった。

代金は接待役の詠春持ちということもあって皆、思い思いの品を注文し楽しい一時を過ごす、

はずだった。

ただ一人、冗談のような勢いで料理の掃討作戦を遂行している少年のせいで雅な空気はぶち壊しになっていた。

「お代わり」

明らかに高級そうな刺身の盛り合わせ。雄飛はその中央に陣取っていた一際大きな伊勢海老の生け造りを殻ごと噛み割り、飲み込む。空き皿を下げ、次の料理を持ってきた給仕の人の皿を受け取り、また食べる。

既に両脇には空き皿が所狭しとならんでいる。女中さんが皿を下げ、次の料理を持ってくるころには一品食べ終わっている。

お品書きを見て「ここから・・・・ここまで」と言って料理を注文する客は料亭始まって以来の事らしい。

「鮫の食事みたい・・・・」

大河内の独白は的を射ていた。呟きを聞いていた女中さんも含め、その場の全員が心の中で同意していた。

既に本人は四、五人で食べるはずの鴨鍋を一人で食べている。手元にあるご飯の器は丼ですらなく、おひつを直接抱えて食べている始末。

「すいませーん、うどんありますかー？」

見ているうちに鴨肉を腹に収めた雄飛は更に追加注文を繰り返す。周りの人の箸は完全に静止していた。雄飛の食事の勢いにみんな圧倒されているのだ。

食べ方が汚い訳ではない。しかしやたらと高速で目の前の料理が消えていく。

「雄飛は好き嫌いとかあるのか？」

もしあるならば出して箸の止まる様を見てみたい。と思って聞いた刹那だった。

「・・・・蟹は殻があって食いづらいから、あまり好きじゃない」

鴨鍋に大量のうどんを投入しながら答える欠食少年。答える間も、麺の解し具合を見るその目は真剣そのもの。

皆は納得はしていたが、その言葉を聞いた大河内の脳裏には一つの疑問が浮かぶ。

「姫菱くん、それは殻を『剥くのが面倒』だからだよね・・・・・？殻が『食べにくい』からじゃないよね・・・・・？」

鍋がひと煮立ちするまでの間も雄飛は天ぷらの盛り合わせを食べる。目を逸らし、答えないのが怖い。

「・・・・良くそんなに食べれるね・・・・」

詠春も現役の頃は大食漢だったが、ここまでではなかったらしい。皆も一通り食べ終えたのか雄飛の鴨鍋うどんの食べっぷりを鑑賞していた。雄飛以外が食後のお茶を飲む。

「昨日は全力で動いたからか、やたらと腹が減っていまして」

豚の角煮をおかずに鴨鍋のうどんを平らげる雄飛。確かに気や魔力を扱う人間は常人よりも健啖家が多い。しかし限度があると思う詠春と刹那だった。

「長。昨日の戦いで一つ質問が・・・・」

図書館探検部の三人は愉快に談笑しているのを確認した刹那は、鍋にご飯を入れて雑炊を作り出した雄飛を無視して詠春と小声で話す。

「どうしてリョウメンスクナノカミは何もしなかったのですか？」

その口ぶりは詠春が答えを知っているものとして投げかけたものだった。ネギも明日菜も興味深げに聞いている。

刹那はここに来る途中、詠春が『大岩の再封印は完了しました』とエヴァンジェリンと会話していたのを聞いていた。『スクナ』ではなく『大岩』と。

この違いはきっと答えに繋がっているはずだ。

詠春は「フフ・・」と含み笑いをしてエヴァンジェリンを見た。視線を動かすと彼女も同じように笑っていた。

「アレの『正体』に気付いたのは、どうやら小僧だけのようだな・・・」

お茶を飲みながら、エヴァンジェリンが愉快そうに言う。その一言で鍋が煮立つのを待っていた雄飛に視線が集中する。

今の今まで食べる事のみに集中していたように見えた彼だったが、ここで会話に混ざってきた。

「推測になるが・・・」と前置きしながら、鍋の蓋を開け雑炊の掃討に取り掛かる雄飛。

「アレは鬼とか妖怪の類じゃない」

その言葉も、続く言葉も、にわかには信じられない事だった。

「多分、アレは『山』そのものだ」

―――――――――――――――――――――

「あの巨人は山の噴火とかの力が神格化した姿なんじゃないかと思う」

料亭を出て並木道を歩く。因みに食事代の精算の時に金額を見た詠春の顔が引きつるのを全員が見ていた。だが誰一人その金額を見る勇気は無い。

次の目的地は先導する詠春しか知らないので、全員ついて行くしかないのだが、どんどん森の方へと入っていく。

その間も雄飛の推測の話が続く。

「恐らくそのエネルギーを木乃香の魔力で『引っ張り出した』だけだと思う。昔の人があれを見て『大鬼神』と呼んでいただけで本当は『ただそこにある』だけの存在なんじゃねえかな？」

「だが、それなら何故エヴァンジェリンさんに攻撃を促したんだ？」

刹那の疑問に対する答えすら、雄飛は推測していたのか淀み無く答える。

「あの女は『飛騨の大鬼神』って言っていた。って事は飛騨山脈のどこかにアレの本体があるんだろう。

『スクナを封印しなければ！』と勘違いした昔の人間が寄代の一部の大岩を京都に移した所為で、もう自分の意思で元の場所に戻れないんじゃないか？」

雄飛は時折、エヴァンジェリンや詠春の背中に確認の視線を送りながら話を続ける。二人が割って入ってこないという事は大筋は合っているらしい。

「魔力で引き剥がされた意識を元の大岩に戻すために、エヴァンジェリンに討たれる事を選択した。と考えれば大体の筋が通る・・・・・」

「確かに・・・・山が人間を狙って攻撃するはず無いし、人間の言う事を聞くとは思えないわね・・・・・」

明日菜から呆れ交じりの言葉が出る。それもそのはずだ。
勘違いとはいえ『足で踏んで』上る『山』と戦おうとしていたのだ。
『無謀』と言う単語の前に『間抜け』の三文字が相応しい。

「でも、それなら何でエヴァンジェリンさんが現れるまで何もしなかったんですか？」

今度はネギの質問が飛ぶ。確かにそうだと刹那は思う。
スクナに元の場所に『戻ろうとする』自意識があるなら、そもそも出てくるはずがない。
雄飛はその質問に苦い顔をして「ここから更に荒唐無稽な話になるんだが・・・・」と前置きする。とうとう話し手本人にも半信半疑の領域に入る。

「エヴァンジェリン、一個質問いいか？」

「聞くだけ聞いてやる」

聞き役に徹していたエヴァンジェリンは投げられた問いに対して傲岸不遜に答える。しかし雄飛は機嫌を損ねる事無く「そいつはどうも」と軽口を返し、質問を口にする。

「アレを『存在』と『現象』のどちらかの二つに入れようとすると・

・・・どっちに入る？」

明日菜やネギ、刹那も質問の意図が分からない。完全に雄飛の思考に付いて行けていない。
しかし質問された方の反応は顕著だった。エヴァンジェリンは大きく目を見開いて小さくない驚愕を表し、詠春も一瞬歩みを止めて雄飛を見ていた。

「お前の推測の通りだよ・・・・・」

雄飛の質問に答えになっていない答えを返す吸血鬼。しかしその声には驚きと感心の成分が入っていた。
雄飛は雄飛で深い溜息を付いて「やっぱな・・・・・」と少しうな垂れた。「どういう事？」と明日菜が先を促す。ネギも刹那も似たような心境だった。

「つまり・・・・スクナは生物や精霊といった確固たる自意識を持った『存在』じゃなくて、
どっちかっていうと噴火とか地震みたいな『自然現象』にオマケで自意識がくっついている『モノ』なんだと思う」

「へぇ～」とただ感心する明日菜とネギ。刹那は「どういう事なんだ？」と更に先を促す。雄飛はその三者三様の反応に呻く。

「お前ら分かってねえだろ・・・・・。エヴァンジェリンが来なかったら、木乃香死んでたんだぞ・・・・・？」

「「「え？」」」

雄飛が口にした言葉は、三人ともさすがに聞き逃せない。六つの驚

きの瞳に晒された雄飛は再び推測を口にしていく。

「エヴァンジェリンという自分を倒せるヤツが来たから進んで討たれたが、それまでアイツは一切『動いていない』。天ヶ崎千草と・・・・フェイト・アーウェルンクスだっけ?あいつらが攻撃してこないと仮定して、スクナの『上半身』だけが顕現したままだったらどうなると思う?」

「どうなるって・・・・そのまま魔力が切れるまで・・・・!」

明日菜の言葉で全員が理解する。あの常識外れの大質量の巨人は木乃香の『魔力』で喚び出していたのだ。

「スクナの身体全部が出てたらその限りじゃ無いとは思うが、顕現してたのは上半身だけだ。下半身は木乃香の魔力で『開かれ続けていた』召喚の扉の向こう側。あの場にいた全員にスクナを倒す事はおろか、命令を聞かせる事すらできない以上、木乃香の魔力は減り続ける一方だったはずだ・・・・」

「で、でも、何で・・・・そんな事・・・・」

ネギの悲痛な声の質問が飛ぶ。雄飛はあの時のスクナの冷徹な計算と腹の内を明かす。

「簡単だ。スクナはその場に自分を倒せる存在がいないと分かった時点で『木乃香の魔力切れ』による自動封印を待ってたんだ」

『ただそこにある』だけのスクナが自分から動く選択肢を取るはずが無い。只の『現象』に人間の生死を考える『心』など有りはしない。

持っているのは眠り続けようとする本能に近い希薄な『自意識』と、自らの事のみを考える冷徹なまでの『思考』だけ。
人間と同列に扱う時点で間違っているのだ。

「し、しかし、お嬢様の魔力がいつ切れるかなんて・・・・」

「１６００年眠り続けてたスクナの時間間隔を人間の間隔で測るな」

例え木乃香の魔力が数十年単位で続こうともスクナは待っているだろう。５０年、１００年と・・・・木乃香が力尽きるその日まで。
ここでようやく三人は理解した。スクナはただそこにあり続ける『山』のように待ちの一手を選択していたのだ。
アレは人間の尺度で図れる『存在』ではない。『リョウメンスクナノカミ』という名前の『現象』なのだと・・・・。

「・・・・十八年前にもアレを大鬼神として操ろうとする事件がありましたが・・・・実はあれほどの『チカラ』を操るのは人間には不可能なのです」

「それこそ山一つを動かそうとするものでして・・・・」と詠春が雄飛の説明の続きを受け取って会話に参加する。

「しかし良くこんな正解にたどり着きましたね」

「あいつは攻撃してこないどころか一度も俺達を見ませんでした。
自分を討とうとしたエヴァンジェリン以外は・・・・」

勝手に呼び出されて「アイツを攻撃しろ」と言われたようなものだ。
百歩譲って自意識が有っても、眠っていることが当然のスクナからすれば迷惑以外の何者でもない。

しかし良く考えると互いの了解があったとはいえ、スクナを討ったエヴァンジェリンの理不尽なまでの強さは表現のしようが無い。『山』そのものを消すことができる存在なんて何と比べればいいのだろう・・・・？

振り返り遠くを見る雄飛。視線は昨日戦った湖に向かっていた。

「良くも悪くも、人間の手に余る『モノ』。か・・・・」

遥か彼方に鎮座する大岩には、今も『神』の一文字が相応しいモノが眠っている。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

俺の長広舌が終わった頃、草木に囲まれた建物が見える。やっと目的地に到着した。

木々の隙間と上からは天文台のような外観が覗けた。話によるとここはネギ先生の父親が使っていた別荘らしい。

「なんか、秘密の隠れ家みたいねー」

俺も抱いた感想だったが早乙女に先を越される。しかし草木の茂り具合といい実に俺好みだった。

中に入るとそこはかなり洒落た内装の家だった。

一階から三階までは吹き抜けの構造になっていて、建物の中央にある本棚は中二階の高さまで伸びている。縦に細長い空間を利用するため本棚の裏側に階段を、両脇にリビングや書斎等を配置した造り

の家だった。

「住みづらそうな家だ・・・・」

「いきなり見も蓋も無いわねアンタ・・・・」

明日菜に窘められた。だが、三階まであるならエレベーターが欲しいと思うのは俺だけかね・・・・？

「ここに・・昔、父さんが・・」

高い天井の家にネギ先生の独白が響く。羨望と、感動と、色々な感情が入り混じった声だった。

散策が始まると皆思い思いの行動を取る。狙っていたソファが朝倉と大河内に取られた俺は、所在無さげに詠春さんとネギ先生の作業を一階から見ていた。

ネギ先生の父親を知らない俺は特にやることが無い・・・・。暇だ・・・・。

「このか、刹那君、姫菱君こっちへ・・・・明日菜君も」

「あなた達にも色々話しておいたほうがいいでしょう」と詠春さんに言われ、二階の一室に集められる。

見せられたのは一枚の写真。日焼けの進み具合が古さを感じさせた。背丈がネギ先生くらいの少年。赤毛と不敵な笑みが目を引く青年。日本刀を突き立てているのは若かりし頃の詠春さんだろう。

大きな本を抱いて、長髪を横に流した男性。同類の匂いを感じる・・・・。何故だろう・・・・・。

その反対側には視線すらファインダーに向けない中年男性が写っている。その一団の後ろ、詠春さんより頭一つ分高い大きな体躯で更

に大きな大剣を担いでいる男がいた。

「ネギ先生の父親はずいぶん背が高いな・・・・うらやましい」

「イヤ、髪の色から考えても真ん中の人物だろう・・・・」

断じて最奥の剣士ではない。と刹那からツッコミが入る。そう言われると同じ杖を持っているのが目に入る。・・・・よく見ると確かに似ている。

「私は、かつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした」

詠春さんの目はここではなく遠い過去を見つめ、話し始めた。

「・・・・そして２０年前に平和が戻った時、彼は既に数々の活躍から英雄・・『サウザンドマスター』と呼ばれていたのです」

大戦。２０年前。英雄。知らないキーワードが多く出ているがそれ以上に気になる事がある。

（『サウザンドマスター』って・・・・どこの厨二だよ・・・・）

頼む。誰かツッコミを入れてくれ！俺の腹筋が耐えている間に！しかし、俺の心の叫びを無視して話は続くらしい・・・・。

「以来、彼と私は無二の親友だったと思います。しかし・・彼は１０年前、突然姿を消す・・・・」

それ以降はお決まりの通り、足取りは掴めず行方知れず。公式記録

では既に死亡している。らしい・・・・。
しかしそう語る詠春さんはその公式記録なんて信じていないだろう。
死亡の件で何とも言えない表情をしていた。

「それ以上のことは私にも・・すいませんネギくん」

そう言ってネギ先生に頭を下げる詠春さんは沈鬱な表情を隠せない。
友人の息子の力になれないのが辛いのだろう。

「い、いえ、そんな・・ありがとうございます」

そう言って恐縮するネギ先生も、期待が外れた失望感はさすがに隠せなかった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

外に出て、庭『だった』場所で大石に腰掛け、一人黄昏てみる。中では未だ資料の探索が続いているので逃げてきた。
それなりに手入れされていたであろう敷地は１０年の間に草木の侵略を受けて、藪になっていた。
昨日の夜から今日の朝にかけてそれはそれは色々あった。
連戦に次ぐ連戦を抜きにしても、一晩で女子二人に告白されるなんて今までの人生から考えると絶対におかしい。誰かの陰謀説を唱えたくなってくる。
というか陰謀説を提唱する前に考える事がある。二人の告白についてだ。
刹那への返事は本人の言葉に甘えるのもどうかと思うが、あれ以外考え付かない。木乃香への返事については考えすら出てこない。男

として好きな女に告白されて嬉しくないわけは無いし、できるなら『ハーレム』みたいな選択肢を選びたい自分もいるが・・・・

「ここにいましたか」

苦笑いを含んだ声に思考を中断させられる。隣を見ると詠春さんが座ってきた。どうやら俺を探しに来てここに辿り着いたらしい。

「木乃香を助けて頂いたこと、本当にありがとうございました」

そう言ってまた頭を下げる。今日の朝にも同じような事があったのでさすがに恐縮する感情も続かない。

「最後の最後で助けられたのは俺ですよ。それに最悪に近い形で巻き込んでしまいました・・・・」

しかし謝る気は無い。俺の命を救う事も含め、木乃香本人が選んだことなのだ。本人以外が否定できることではない。

「ネギ君には今回結ばれるはずの友好を白紙に戻すように綴った親書を渡しました・・・・。修学旅行が終わったらあちらの長に届くことでしょう」

事後処理の話かと思って聞いていたら、詠春さんはとんでもない事実をさらっと口にした。

「・・・・何でまた・・・・・？」

驚きのあまり奇声を上げそうになったがどうにか抑える。が、軽く流していい話ではない。ネギ先生の任務が無駄になったのだ。

詠春さんはばつが悪そうに頬を掻きながら理由を告げる。

「その・・・・今朝、このかに親書を破り捨てられまして・・・・
『今、友好を結ぶべきでは無いと思う』とも、言われました」

『友好を結ぶべきではない』？さすがに意味が分からない・・・・。
木乃香は一体何を言いたくてそんな行動を・・・・？

「私は関西呪術協会の長として、そして大戦に参加した一人として・・・・平和を築くのが責務だと考えていました」

また遠くを見て話を切り出す詠春さん。しかし先程とは違い、急に年老い疲れきったような声と、表情だった。
その眼差しは遥か遠くの地獄を見るような虚ろな目。口にするのも躊躇われるような・・・・どうしようもない現実を見てきた双眸だった。

「無駄な犠牲を出さないよう、魔法協会や『本国』とも水面下で交渉を続け、小競り合い程度の戦闘を行う緊張状態を維持してきました・・・・」

言葉の端々にほんの少しだけ誇らしげなものを感じた。しかしそこまで言った後は、自責と後悔の念が等配分された台詞になる。

「しかし・・・・大戦以降の犠牲者を出さないようにする為に、大戦で散っていった仲間の死を蔑ろにしていたのも事実です。
その結果・・・・天ヶ崎千草のような人間を生み出し、クーデターを行うまで追い詰めてしまった・・・・。
死んでいった人たちの責任を取らせないまま友好を結んでも、それは『平和の言いなり』になっているだけだと・・・・このかに気付

かされました」

「こたえましたよ・・・・自分のやってきたことが独りよがりだったなんて・・・・」と自嘲気味な話す詠春さんの顔は、憑き物が落ちたかのように吹っ切れた表情に見えた。

物語で良く耳にする『本当の平和』なんてものは、この地球上には存在しない。

戦争が起きる度に犠牲が出て、人は死ぬ。英雄の力で戦争が終わっても、死んだ人間は生き返らないし、家族や友人を奪われた人々の悲しみが癒えるわけではない。

そして俺たち人間は奪われた命に対して無制限の復讐と対価を求め続ける。

ただ何時だって『政治家』が少数の犠牲と怨嗟の声を、大多数の利益と平和を求める声で押し流してきたのだ。

そこに『正義』や『悪』の二次言論が入り込む余地は無い。どちらも人間が心から望んだ結果なのだ。

詠春さんも関西呪術協会の長という『政治家』の立場として選択した結果、間違っていたに過ぎない。

クーデターの実行犯を捕まえて一夜明けても、現実は何も変わっていない。魔法の力や賢さなんて何の役にも立たない。

確かなのは木乃香をたった四日間守ったという事。それだけだった。

「このかについても同様です。結局、あの子の視野を狭めた所為で危険な目に合わせてしまった・・・・」

そう締めくくって立ち上がる詠春さんはこっちに向き直り頭を下げる。

「姫菱君。私の娘を、見習い魔法使いをよろしくお願いします」

今までで一番深く頭を下げられた。それを見て思わず立ち上がってしまう。

「ちょっと待ってください！俺は・・・・」

「君が迷っていることも、何となくだけど分かる」

頭を下げたまま俺の言葉を遮る詠春さん。

「君がこのかを選んでも、選ばなくても・・・・『他の選択肢』を選んで、このかが不幸になったとしても・・・・それはもう、このかの責任だ」

頭を上げて俺を見る目には優しさが、語る言葉には独り立ちした娘への誇らしさがあった。

「自分の意思で『魔法の道』を選択した時点で、このかは私の手を離れたも同然だよ・・・・」

俺の肩を軽く叩く。「だから・・・・」と、続ける声には力が無い。娘をこんな優柔不断な男に託す事に一抹の不安を感じているはずだ・・・・。

「このかの『主人』として娘を守ってほしいんだ」

「・・・・分かりました・・・・」

さんざん迷って、呻くように搾り出した俺の声が同意を示す。
それを聞いた詠春さんは満足げに頷いて、別荘に戻っていく。
庭だった場所には選択の重圧に押し潰されそうな俺だけが残った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇木乃香　ｓｉｄｅ◇

お父様に呼ばれて庭への道に出るとユウがいた。その後ろ姿を見ると、お父様から聞いた通りかなり落ち込んどった・・・。
静かに後ろから近づいて・・・後ろから抱きつくっ！
しかしユウはさして驚くわけも無く、「木乃香か・・・」と、言い当てた。

「・・・何で分かったん？」

ユウくらいになると気配とか、そんなんで分かるんやろか・・・？

「背中に当たる膨らみで、ストップ、ストップ！」

言葉にセクハラ発言が出た時点でチョークスリーパーを掛ける。ウチの力では首は絞まらないが、怒っとる事を知らせておく。
タップされたので両腕を緩め、前に回り込みユウの正面に立つ。
昼下がりの陽射しはユウの顔に影を作ってしまい、その表情は読めなかった。

「ユウ・・・ウチのこと・・好き？」

「ああ、好きだ・・・」

すぐに答えが返ってきたせいで思わず赤くなる。が、質問を続ける。

「でも・・・・せっちゃんも、アキラも・・・・同じくらい・・・・好き、やろ・・・・？」

「・・・・ああ・・・・・」

血を吐くような呻きと共に答えが返ってくる。昨日、死に掛けとった時の方がまだ声に力があったと思う。

分かっていたとはいえ・・・・さすがに少し凹む。どうやらウチとせっちゃん、アキラも含めてとんでもない『女たらし』を好きになってしまったようだ・・・・。

盛大に溜息を吐くとユウは本当に申し訳なさそうにこっちを見る。きっと『浮気がバレた男』は皆こんな顔をしているのだろう。

「・・・・みんなと付き合ったらエエんちゃう？」

乙女としてこの言葉は、彼氏の『ハーレム』を許す発言は本当にどうかしている。だがユウを見ていると『しょうがないな・・・・』という感情しか出てこない。

言いながら石に腰を下ろす。となりのユウには起死回生の言葉のはずだが未だにうな垂れている。

「朝・・・・刹那にも同じような事を言われた・・・・」

「知っとるよ・・・・。さっきせっちゃんと話してきたんやから・・・・」

アキラはまだ告白しとらんらしいので『この件』は話していない。

大方気付いていると思うが・・・・。

昨日の夜。契約の証として現れた二枚のカードの内、肩に人形を着けたユウが前に描いてある方を渡す。それとは反対にユウと背中を合わせた状態でウチが扇子を構えた格好のカードはポケットに入れる。

「このカード持ってると・・・・何となくユウの気持ちが分かるんや・・・・。選べん位にウチ等の事が好きなんやって・・・・」

せっちゃんも同じような事を言っとった。多分このカードにはそういう効果があるんやろう。

ユウの顔は未だに上がらない。だからもう一度ウチの気持ちを聞いてもらう。ハッキリと。

「ユウ・・・・。二股でもええから、ウチと付き合って下さい」

自己嫌悪に苛まれながらの答えを貰った。

割り切ってほしくは無いが・・・・吹っ切れるのは・・・・当分先の話みたいやな・・・・。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇free side◇

4月26日　AM 08:30　京都駅　ホーム

別荘から帰り何事も無く夜が明けると、もう帰る日になっていた。

新幹線が出発する。車両が最高速度に達して関東を目指す。

客席は下りの時とは打って変わって静かなものだった。聞こえるのは皆の寝息と、毛布を掛ける先生方の呆れた声くらいのもの。

京都での戦いはようやく終わりを告げたのだった。

そんな中、雄飛は一人席を移動する。向かう先は車両の端に陣取っている人物の元へ足を進める。

対面は空席だったので遠慮なく座り、窓の外を眺めていた『彼女』に声を掛け、頼み事を口にする。

「エヴァンジェリン。俺を鍛えてくれ」

# 第十八話（後書き）

言い訳その一
「ハーレム」オチになったのは私の執筆力の無さが原因です。刹那ファン、木乃香ファンの皆様に心からお詫び申しあげます。
言い訳その二
スクナの解釈は作者の勝手な妄想です。どうかご了承くださいますようお願いいたします。

アンケート
今回で「鬼丸国綱」は破壊してしまいましたが、次回以降の武器を募集させていただきます。
「ＴＯＶ」と「ＴＯＧｆ」に登場する剣、刀であることが条件です。
（因みに「ニバンボシ」と「明星二号」の登場は決定しています）
皆様回答宜しくお願い致します。

# 第十九話（前書き）

テイルズファンの皆様にお詫び申し上げます。
一つだけとはいえ、この話から「テイルズ」とは全く関係無い武装が出ます。
本当に申し訳ありません。
・・・・どうしても出したかったんです！

## 第十九話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

京都駅から出発した新幹線が麻帆良学園駅に到着する。生徒はそこで解散となった。
クラスの殆どが学生寮に向かう中、雄飛の足は反対方向の麻帆良学園に向かっていた。今回の護衛の依頼者たる学園長の元に報告の為だ。
しかし指定された場所は学園長室ではなく、

「来たか・・・・待っとったよ」

そこは広々とした公園だった。その場所は麻帆良を代表する『神木・蟠桃』を中心に一段、二段と段々畑のように波打ちながら高くなっていき、大樹が植わっている場所まで上がれば周囲の建物を見下ろせるように作られている公園、通称『世界樹広場』だった。
麻帆良に来て日の浅い雄飛にはわからないが生徒には人気が高いデートスポットの一つだ。
しかし、どういう訳か人がいない。
休日の昼前であるにも関わらず雄飛の周囲に全くといっていいほど人の気配を感じない。ちらほらという程度でもなく、深夜または立ち入り禁止場所のように静寂が公園全体を包んでいる。校舎との境が曖昧なこの学園都市に公園で遊ぶ人間がいないとは考えられない。
雄飛は似たような現象を京都で目にしていた。可能性は一つ。

（人払いの呪符と同じ、か・・・・）

西洋魔術師でも同じ効果のある魔法や道具はあるらしい。まあ『あれだけいるのなら』誰か一人くらい使えるのだろう。

階段の上に修道服の女性が立っていて、褐色の肌が帽子の下とスカートの下から見える。

オールバックの黒髪にサングラス、整えられた顎髭の上にある口元にタバコを銜えた男性。強面に引き締めた表情をこちらに向けている。

隣に立つのは眼鏡を掛けたストレートロングの髪を持つ女性。タイトスカートから見える細い足に目を奪われそうになるが、手に持っている白鞘の野太刀とその佇まいから、刹那や京都で目にした月詠のような剣士の印象を受ける。

太った男性とその隣の学者然とした男性からはそのような感じは見受けられないが、こちらを見る視線には確かな警戒と力量を感じる。その場の誰よりも背が高いスキンヘッドの男性は俺を正面から見てはいないものの意識はこちらに向けているらしい。

制服を着た女子は三人。古めかしい箒を持った女の子のスカート柄からいって本校女子中学のもの。三つ編みに眼鏡をかけた少女は少し怯えるような表情でこちらを見ている。黒のワンピースのような制服を着た少女は雄飛より少し年上の印象を受ける。

厚い唇と角刈りの髪の黒人男性が両手をポケットに入れて立っている。少し砕けた佇まいだが、眼鏡の奥の瞳がこちらを油断無く見据える。

その隣にいる女性は少し日焼けした顔を柔和な微笑みに変えてこちらを見ていた。

そして細い線で描かれた顔立ちの・・・・あれは確か、瀬流彦先生だ。どういう訳か一緒に修学旅行に行った教員までいた。

この『周りに人がいない』状況でここにいる以上、答えは一つ。

「瀬流彦先生も魔法関係者か・・・・」

呟きが聞こえたらしく、遠くから雄飛に向かって謝っているジェスチャーをしている。という事は、木乃香の襲撃事件には関わりたくても関われなかった様だ。

そこまで考えて初日以外、他の生徒に被害が出なかった理由を雄飛は理解した。

目立つネギ先生を囮にして木乃香を少なからず狙いやすくし、また紛れ込ませた魔法使いの教員を牽制に使い、他の生徒を人質に取られる事を防いでいたのだ。

一見孫を見捨てるような選択肢にも思えるが、『学園長』の肩書きは、１５０名以上の生徒を無事に麻帆良に連れて帰ってくる責任は想像以上に重い。たった一人の孫をだけを守る事を良しとできる立場ではないのだ。

だからこそ関西に感づかれないギリギリの策として素性不明の雄飛を護衛に送り込んだのだろう。

「旅行の帰りで疲れている所、わざわざ悪いのう」

「疲れてるのはそっちでしょうに・・・・」

後ろに魔法使い達であろう集団を従えた学園長の声からは疲労しか感じられず、髭と長い眉で隠れた顔には憔悴が色濃く滲んでいる。

ほんの数十分前までエヴァンジェリンに京都観光をさせる為に、ただひたすら書類にハンコを押し続けていたのだ。丸一日半もの間、単純作業を繰り返すのは肉体的にも、精神的にもキツイだろう。

「で、この状況は一体何ですか？」

修学旅行から帰った直後の雄飛としては報酬を貰って帰りたい。と

いうのが正直なところだ。報告書そのものは先に『高畑先生経由で』メールを届けておいたので知らないはずが無い。口頭で詳細を伝えて、後の用事を済ませるはずだったのだが・・・・。

「うむ、おぬしにはまだ紹介してなかった、と思っての」

両手を広げて後ろを示しながら「まあ大方分かっておると思うが・・・・」と言葉を続ける。

「ここに集まっとるのは学園都市の各地に散らばる、小・中・高・大学等に常時勤務する『魔法先生』・・・・及び『魔法生徒』達じゃよ」

そう紹介されて軽く手を上げて挨拶する先生数人と、会釈する女子生徒二人。他の先生や生徒達は雄飛に視線を向けるだけ。雄飛本人も向けられる視線の色は大体理解できる。疑い、不審、警戒・・・・敵意。

雄飛も自分の置かれている状況が宜しく無い事は知っている。常に張られている侵入者防止用の学園結界が、停電で解除されたわずかな時間に湖に現れた『素性不明の魔法使いの少年』。

そして次の日、半ば立ち消えになっていた『本校の共学化テスト生』としてのゴリ押しに近い編入。

敵か味方か未知数の存在の少年を信用しているのは学園長ただ一人。しかも、その少年は今回の修学旅行の一件で『それなりの成果』を上げる。

間近で本人を見ていた刹那や依頼で動く『傭兵』の龍宮はともかく、これだけ不審な点を持つ雄飛を警戒しないのは善人ではなく、ただの世間知らずだろう。

組織の長が信用しているかどうかは二の次。雄飛としては敵意を向けられる覚えは無いが、教員にしてみれば灰色の人物などいてほし

くないのだろう。

「で、顔合わせというわけですか？」

言外に『置かれている立場は理解している』とその場の全員に言う雄飛。しかしその不遜な物言いに、更に幾人かの視線に篭もる敵意の密度が上がる。

ここで自分にかかる不信感を取り除いておこう。と思う雄飛だったが、「それもあるんじゃが・・・」という言葉を聞いて雄飛は嫌な予感に顔を顰める。

「ちょっと、ここの誰かと手合わせをして貰いたいんじゃよ」

「お断りします」

清々しいほどの礼儀正しさで雄飛は断りの意を示した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「では、失礼します」

その言葉と共に一礼し、回れ右。俺は公園を後にした。

「待たんか」

とはいかなかった。学園長にシャツの後襟を掴まれ強制停止。振り返ると至近距離に髭と眉毛に包まれた顔があった。うわ、気持ち悪い。

「ここはどう考えても、誰かと手合わせする流れじゃろう！？」

「学園長。俺は無色透明な物は読めない人間なんです」

場の空気なんて知った事か。手合わせをして友好を図るなんて俺は御免だ。

『意味の無い戦いなんてしたくありません』なんて善人ぶった考えは心の何処を探しても存在しないが、面倒くさい事は極力しない主義だ。

『必要な事だけする』と言った方が正しいかもしれない。余計な努力をしてもそれ以上の結果が出ないならそれこそ意味は無い。

「そもそも、どうして俺が学園長の命令を聞かなければならないんです？」

この洋梨は何か勘違いしている。俺が木乃香を守ったのは『依頼』だからだ。

だからこそあれだけの脅威の中、『修学旅行』をしながら護衛した。依頼が無ければ木乃香が狙われている事など知りもしないし、それが分かった時点で、敵陣のど真ん中で暢気に観光なんてせずに強制的に連れて帰ってきている。報酬無しで命なんて賭けない。二度目の人生が全員にある訳ではないのだ。

例え学園長が俺の衣食住全てにかかる費用を負担している事を理由に挙げても意味は無い。俺を『この学校に入学させて、色々便宜を図ってやってくれ』というのは学園長とサイとの契約なのだ。サイ本人の了解無しに破棄はできない。

ここで無闇に命令に従って手駒扱いされるのは危険だ。自分の安売りは絶対にしない。

「儂の言う事を聞く気は無い。と？」

学園長も俺との関係を思考で辿り、単なる上下関係では無いと理解したらしい。だから俺は『ある一点』でだけ訂正しておく。

「いえいえ。金が支払われる限り、姫菱雄飛は学園長の味方です」

「それ以外の時は？」

「道で会っても話しかけないで下さい。妖怪の仲間だと思われたくありません」

「傭兵の鏡じゃな・・・・」と半分呆れながら答える学園長。そして金銭でやり取りするような『契約』関係なら、自分個人の裁量が利くと判断したのか俺を解放する。

しかし、

「あなたは・・・あなたはそれでも『魔法使い』なのですか！？」

そんな言葉が敵意と嫌悪感が入り混じった視線と共に俺に突き刺さる。顔を上げると大部分の人が似たような目を俺に向ける。

そんな中でも黒の制服を着た、恐らく高校生であろう女子生徒が怒りに顔を歪ませていた。さっきの言葉は彼女のものらしい。

・・・俺そんなに変な事言ったか・・・・？

「君には『ココ』での魔法使いの立ち位置を教えておらんかったのう・・・・」

学園長が俺達二人にしか通じない単語を入れて説明を始める。
それはそれは疲れた声と、表情だった。

――――――――――――――――――――

「なるほど・・・・」

『この世界』での魔法使いの大多数は正義の為に、悪人や悪い魔法使い達と戦って人々の役に立つ『マギステル・マギ』という存在を目指しているらしい。
確かにそんな人間が実在すれば『立派な魔法使い』と呼べるだろう。
説明を聞き終えた俺は学園長に視線を向ける。あっちもあっちで俺がどんな反応をするか予想していたのか苦虫を噛み潰した表情をしていた。

「で、学園長。俺にそんな団体に加入しろと？」

「っ！」

視線の集中砲火の威力が一気に上がる。俺に向かって叫んでいた金髪の先輩に至っては攻撃寸前なのか魔力の高まりを感じる。
学園長は魔法先生と魔法生徒に手を上げて落ち着くようにジェスチャーを送る。

「できれば仲間になってほしいんじゃが・・・・君が『ココに来た理由』を考えれば無理なお願いじゃな・・・・」

学園長は俺が国家権力や正義を当てにしていない理由には行き着いているらしい。それでも顔合わせの流れでどうにか引き込もうと画策していたのだろう。

「すみませんが・・・・『宗教』には興味ないので」

その言葉を聞いても誰も暴発はしなかったが、すさまじく居心地が悪くなった。俺にはどうでもいいことだが。

踵を返して公園を後にする俺を今度は誰も止めようとはしなかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇free side◇

「エーヴァーちゃん。遊びましょー」

全く抑揚の無い声が玄関前に響く。世界樹広場を後にした雄飛はその足で指定されたエヴァンジェリンの家の前に来ていた。

そこは映画に出てきそうな造りの風情溢れるログハウスだった。自由奔放、傲岸不遜のエヴァンジェリンの家のイメージではなかった。

「姫菱さま。お待ちしておりました」

玄関ドアを開けて迎えるは絡繰茶々丸。ボケをスルーされた雄飛は少しへこみながら家に入る。

「良くぞここまで辿り着いたな小僧・・・・。褒めてやろう」

「未だにラスボスネタ引っ張ってんのかい・・・・」

そのままリビングに通された雄飛は、テーブルでお茶を飲んでいるエヴァンジェリンと向かい合う形で座る。

新幹線の中では答えをもらえなかった雄飛は、茶々丸がお茶を持って来る前に本題を切り出す。

「で・・・・俺を鍛えてくれる話はどうなったんだ?」

「まあ、その前に・・・・お前の使っていた剣を出せ」

一瞬言葉の真意を推測するも、意味は無いと割り切る。「来たれ」と唱えて少し軽くなった鬼丸国綱をテーブルの上に置く。

エヴァンジェリンは柄に手を掛け無造作に引き抜くと、無残な姿の刀が現れた。

美しい波頭のような湾れ乱刃の刃紋は半ばから消失して、断面から痛々しさを感じさせる。拵えも見て分かる程に傷つき、鈍い光を返すだけだった。

懐から眼鏡を取り出したエヴァンジェリンが刀身を検分し始めた丁度そのとき、茶々丸がお茶を持って現れた。雄飛の前にお茶請けの八つ橋を置いて反対のエヴァンジェリンの前に小さな小槌を置く。

それは雄飛にも見覚えがあるものだった。

「・・・・目釘抜き・・・・・?」

雄飛の独白に答える事無くエヴァンジェリンは流れるような手つきで柄を分解。鍔まで外して茎をむき出しにする。

再び検分を始めたエヴァンジェリンを見ていると茎に刻まれた銘が目に入る。

そして雄飛は思い出してしまう。自分が一体何を壊してしまったかを・・・・

「・・・・そう言えば俺、天下五剣の一振りをぶっ壊したんだよな・・・・」

「いえ、姫菱さま。これは本物の鬼丸国綱ではありません」

という雄飛の再びの独白に、それまで沈黙を守っていた茶々丸が答える。それを聞いた雄飛からは「え、そうなの？」という期待に満ちた言葉が出てくる。

「ま、これをレプリカや贋作といっていいかは別だがな・・・・」

意味深な言葉に視線を戻すと既に柄は元通りになっていて、エヴァンジェリンは茶々丸から渡されたタオルで手を拭いていた。湯飲みを傾け、温くなった中身を一気に飲み干すと、

「ついてこい」

綺麗な金髪を翻してエヴァンジェリンが席を立つ。向かう先は下へ伸びる階段があった。

慌てて後を追う雄飛はどんどん地下に降りていき、大きな部屋に出た。

そこは大量の人形が置かれた空間だった。

一階リビングより遥かに広い大部屋に四隅の壁が見えなくなるくらいの厚い人形の壁ができていた。

ブランド店のショーケースに置いてあれば違和感は無いものの、薄暗い地下室で大量に無表情の顔が並んでいるとさすがに怖い。

その不気味な大広間を抜けて更に奥に進む一行。

茶々丸が小走りに主人を追い越して目の前の大きな扉の錠前に鍵を差し、回す。
重々しい金属音と共に扉が開かれ二人は中に入っていく。雄飛も後を追っていくと、その部屋には凄まじいほどの威圧感に満ちていた。壁や部屋の中央に配置された間仕切りに立て掛けられた剣や槍からは、遠目から見ても禍々しさが漂ってくる。
柄まで赤黒い『何か』で染まった大斧。人間には扱えそうも無いほどの大きさの大剣。
そしてそのほとんどの武器が呪符や鎖で拘束されていた。
威圧感の正体は魔剣や妖刀の類を抑えている拘束や封印から漏れ出る魔力や妖気。そして・・・負の感情だった。

「・・・革命でも起こす気か・・・・？」

最早、武器庫という名前以外思い浮かばない雄飛は呆れながら家主に聞く。これは一個人が持っていて良いレベルの量ではない。
「それも良いな」と快活に笑うエヴァンジェリン。冗談に聞こえないのは気のせいだと信じたい雄飛だった。
エヴァンジェリンは近くに立て掛けてあった剣を掴むと雄飛に向かって放り投げる。

「その剣を気で強化してみろ」

その瞳には有無を言わせない圧力が少なからず込められていたので雄飛はとりあえず言う通りにする。
鞘を引き抜くとそこには何の変哲も無い剣身があった。どうやら魔剣の類ではないらしい。
体内から湧き上がる気を右手から柄、切っ先にまで宿らせ、強化完了。

「今度は魔力で強化してみろ」

間髪入れずに次の指示を出すエヴァンジェリン。質問は後でまとめてしよう。と結論付けた雄飛は気での強化を解除、今度は魔力を集める。

気が湧きあがる場所が丹田なら、魔力は脳から放出するイメージ。生成した魔力を剣に送り込んで・・・・

「あり・・・・？」

その結果は顕著に現れていた。剣身は既に歪み始め、表面は土壁のように脆く剥落していく。銀光を跳ね返していた剣全体が腐食の早送り映像を見ているかのようにどんどんと劣化していく。

慌てて強化を解除すると剣の劣化は止まったものの、もう剣とは呼べる代物ではなかった。

「・・・・どういう事でしょうか、マスター」

「どういう事も何も・・・・これが当然の結果だ」

呆然としていた雄飛の変わりに茶々丸が主人に質問する。エヴァンジェリンは特に驚いた様子も無く従者の疑問に答える。

「本来、『相反する気と魔力での強化の切り替え』なんて普通の剣が耐えられるはずが無い」

聞き逃せない単語を聞いた雄飛は驚愕の目でエヴァンジェリンを見る。しかしその本人は雄飛の後ろにあるコンテナを指差すだけ。

「それ、捨てておけ」という意味を受け取った雄飛は、もう鞘にも納まらなくなったそれを放り投げる。

向き直ると再び似たような剣が飛んできた。

「今度は白髪の少年との戦いで使っていた『あの』肉体強化を使え」

もう何が起きるか予想できた雄飛は身体からなるべく離して剣を持つ。一拍置いて気と魔力を同時に生成し強化を行う。

オーバーリミッツが発動。雄飛の身体から先程とは違い、鋭い光が生まれ周囲を照らす。

そして、右手に起こっていた変化は雄飛の予想を超えていた。

剣身は既に消え、砂や塵となって下に落ちる。小さな塊も床に落ちてまた小さくなっていく。

オーバーリミッツを解除しても崩壊は止まらない。既に消失は鍔から柄にまで進行し、掌からサラサラと零れ落ちていく。

音が止まるとそこには小さい砂の山が出来上がっていた。

「さて。私がお前を呼んだのは『ソレ』が理由だ」

眼鏡を外して雄飛を見るエヴァンジェリン。その深い海のような色の瞳から静かな重圧を放出する。

「本来なら相反するはずの気と魔力を融合も反発させる事も無く、全く同時に使える。

なんて聞いたことも無い芸当をする人間に興味を待ったからだ」

どうにか弁明を考える雄飛だったが次の言葉に完全に沈黙した。

「小僧。お前、一体何者だ?」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「小僧。お前、一体何者だ？」

言い逃れできる状況じゃない。意を決して俺は口を開く。驚愕の真実を今、明かそう！

「・・・・実は俺・・・・超一般人（スーパー）なんだ！」

「茶々丸。こいつの髪を剃髪して、木っ端微塵に爆殺しろ」

「スイマセン、もう一度チャンスを！」

絡繰の口から「イエス、マスター」という単語が出る前にどうにか遮る。

というか俺がその役かよ・・・・。

オチもついたところで再びの沈黙。気まずさに目を逸らすも、正直言って自分の素性を話す気は無い。どうしても言わなければならない日が来たとしても、

（さすがに刹那や木乃香が最初だよな・・・・）

いつかはあいつらにも言わなければならない日が来る、と思う。それまでは秘密にしておきたい。

乾いた声に目を戻すとエヴァンジェリンが笑っていた。

「その様子だと自分の『嫁達』にも言ってないみたいだな？」

見下す視線で痛烈な皮肉を口にするエヴァンジェリン。思考を見透かされた俺は完全に二の句が継げなくなってしまう。
どうにか思考を切り替えて考える。この交渉を成功させるにはどうしたらいいか。
エヴァの目的は読める。だがここで譲歩しすぎる訳にはいかない。
こちらの立場は弱いが、交渉の後にもその力関係が続くと後々面倒だ。
やはりこの『カード』を切るか・・・・。
俺の目論見も含みでエヴァの興味を引ければこの交渉は成功。だが逆鱗に触れれば俺の負け。伸るか反るかの大勝負だ。

「エヴァンジェリン。こっちから『俺を鍛えて貰う』条件に提示できる物は一つだけだ」

覚悟を決めた声にエヴァが表情をほんの少し強張らせる。

「俺の『師匠』から送られた『魔術書』と『奥義書』の閲覧だ」

この先才能だけで強くはなれるはずが無い。だが努力しても独学で術や技の修得ができるとも思っていない。
エヴァンジェリンの目的は俺の素性ではなく、使用していた技術のはず。
この永い時を生きた吸血鬼は自分には無い知識を求めている。ならその知識を満たしてやれば良い。
そして長年生きてきたエヴァンジェリンの知識は俺のまだ修得していない術の解析に役に立つはず。それを利用しない手は無い。
閲覧なら魔術書等が奪われる心配は無いだろう。この少女は約束を違えるような三流の悪党では無い。
だがそれでもどうしても譲れない一点がある。

『師匠』

「弟子入り」ではなく「鍛えてもらう」という条件。

素人の俺をここまで鍛えてくれたのはサイだ。
次に出会ったらフロントガラスに突っ込んでもらう予定でも、後にも先にも『師匠』と呼ぶのはアイツだけにしたい。

「・・・・フフッ・・・・ハハハッ、ハハハハハハッ！」

地下室に響く笑い声。心の底から笑っているその声の音源はやはり、というかエヴァンジェリンだった。
彼女は腹を抱え、膝を叩き、大口を空けて、涙を浮かべて大笑いしている。
しかしそれも数秒。すぐに俺を見据え直す。

「お前ぐらいの年なら他人の善意を当てにしそうなものだが・・・・私の目的を理解して、なおかつ利用しようとするとは・・・・。ジジイの言っていた以上の性格の悪さだな。小僧」

そう言って再び笑いそうになるのを堪えるエヴァンジェリン。どうやら俺は周囲の人間に『性格が悪い』という共通認識をもたれているらしい。
謂れの無い誹謗中傷を浴びて傷つく俺の耳に「良いだろう」という言葉が聞こえた。

「小僧。その条件でお前の『指南役』を勤めてやろう。私は厳しいぞ」

「覚悟しておけ」という言葉と共に悪魔の笑みを浮かべる指南役。
俺は手を伸ばし握手を交わす。
ここに吸血鬼との契約は交わされた。

―――――――――――――――――――――

渡された『ソレ』を手に取ったとき胃の底から湧き上がる不快感にも似た感覚には覚えがあった。
やけに冷たい柄に手を掛け灰銀色の鞘から引き抜くと、北極の氷山を押し固めたような刃が現れる。
頑丈さを思わせる拵えは剣特有のもの。剣身を走る蒼と白に彩られた装飾は美しさよりも残酷さを感じさせた。
切っ先は消失しており、先端は四角くなっている。罪人の首を切る為だけに作られた『処刑剣』のようだが、絶対零度を思わせる威圧感は魔剣の類の一振りだろう。

「アイスコフィン。お前が持っていた二代目鬼丸国綱以上の強度はある。大事に使え」

「二代目？」

その割には無造作に投げてきたエヴァンジェリンに疑問の目を向ける。『氷の棺』の名を冠す剣を鞘に納めてエヴァを見る。
オウム返しした俺の疑問に答えてくれたのは絡繰だった。

「あの一振りは確かに鬼丸国綱の贋作なのですが・・・気や魔力の伝導率、構造強度などは本物とは比べ物にならないほど高いので

す」

『これをレプリカや贋作といっていいかは別』と言っていたのはそういう意味だったのか。

確かに「美術品」としては贋作でも、「刀」として本物以上の価値があるものを偽物とは呼べないだろう。

「それと、あの刀にはお前専用に改造した痕跡もあったぞ。師匠とやらに礼を言っておけ」

どうやら俺はサイに想像以上に心配を掛けていたらしい。

ありがとう、サイ。でも車の衝突実験には参加させるよ。ソレとコレとは話が別だから・・・・。

「因みに」とエヴァが再び説明を始める。

「改造された鬼丸国綱が折れたのは想定以上の強化に耐えられなかったからだ。・・・・これは恐らくお前が行った仮契約の所為だろう」

『仮契約』。カモの話では魔法使いを主人として他者と主従関係を結ぶ行為だとは聞いている。しかし、

（中身はきいてねぇ・・・・）

明日菜の様に『アーティファクト』なるおもしろアイテムが出るようだが、そもそもの使い方が分からない。

懐から取り出した二枚のカードはそれぞれ俺の背後に刹那と木乃香が描かれた代物だった。

知らない事は聞いてみよう。

「そう言えばこれどうやって使うんだ？」

「教えてやる。どれ貸してみろ」

特に疑問も抱かずに手渡す。小さな手がそれを持っていくと、エヴァの顔が一気に驚愕に変わっていく。

「・・・・お前・・・・本当に何者だ・・・・？」

再び答えようの無い疑問が突きつけられた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

買いすぎた。

修学旅行から帰ったばかりで冷蔵庫に何も無いからって、土曜日で野菜が安かったからといって、この量はレジに持っていく時点で気付くべきだった。カゴで持つのと袋で持つのとでは勝手が違うのだと・・・・。

見つけたベンチで一休み。持ち手のビニールが手に食い込んで指が痛い。

（ゆーなやまき絵も買い物に誘えばよかったかな・・・・）

実際もう日没近い。このままだと夜道を一人で帰る事になる。それは少し怖い。

友達を荷物持ち要員と考えるのはどうかと思うが、この量を眺めると今からでも遅くは無い。と本気で考えてしまう。
しかし携帯のアドレス機能で一人の名前を見つけてしまうと一気に思考が切り替わる。

『姫菱雄飛』

表示してある番号も彼の携帯を借りたときに『偶然』知ったものだ。
彼の携帯には私の番号は入っていない。
この名前を見て思い出すのは近衛さんとのキスと、昨日の別荘での一件だ。

（「二股でもええから、ウチと付き合って下さい」・・・・か・・・・）

正直、彼女が二股を許すとは思わなかった。女の子として好きな人には自分だけを見ていてほしい。彼女の親友らしい桜咲さんが恋敵であるなら尚更だ。
でもそれ以上に、

（不潔だ・・・・）

彼が頷くとは思わなかった。いや、その考えも押し付けだ。当人達が了承しているならそれこそ『三人』だけの問題だ。私が口を出す権利は無い。
これは嫉妬だ。
私が姫菱くんの秘密の中に入っていない事。そして『三人』の問題の中に入っていない事。
好きな人の周りに自分が入って行けない劣等感からの嫉妬だ。
姫菱くんに彼女がいても諦めきれない自分に、心の整理がつけられ

ない自分にも劣等感があった。
そんな決して人には言えない感情に苛まれていると、

「何、百面相してるんだ？大河内」

ある意味一番会いたくない人物に出会ってしまった。

―――――――――――――――――――

「・・・・だから今回の事件が起きた。と・・・・・」

「そう・・・だったんだ・・・・・」

学生寮への帰り道。自分の心の内を悟られないように姫菱くんと前々からの予定だった『答え合わせ』をしていた。
隣を見ると全く同じ高さに彼の顔がある。その手には私の荷物である買い物袋全部が下がっている。対して私は手ぶらだった。
「俺を女に荷物を持たせる男に仕立て上げたいのか？」と少し泣きそうな顔で言われると、それ以上何も言えなかった。
自分の考えを喋っていれば少なくともこんな感情と向き合わずに済む。
しかし、そう思っていたが『答え合わせ』が終わる。そのほとんどが正解だった為に以外にも間違いの指摘がなかったのだ。
再び自分の感情と向き合う拷問がやってくる。好きな人に彼女がいる事実に、未だ諦められない現実に、晒され続ける。

「・・・・私もその・・『仮契約』をすれば魔法が使えるの・・・・？」

自分が一体何を言ったのか、すぐには理解できなかった。
しかし帰ってきたのは言葉ではなく強い衝撃だった。
いきなりの事態に踏ん張る事もできず、倒れそうになる。一体自分は何にぶつかった?
違う。姫菱くんに突き飛ばされたからだ。彼のいた方向を見ると買い物袋をこっちに投げている瞬間だった。

「来たれ!」

次の瞬間、その言葉をかき消すような爆発音と共に、特大の炎柱が立ち上った。
尻餅を着き、周囲に落ちた買い物袋から卵が潰れる嫌な音がする。
全身に叩き付けられるような熱風と、夕闇を塗り潰すオレンジの閃光が辺りを照らしたところでようやく事態を理解した。

「姫菱くん!!」

「何だ?」

悲鳴のような私の声に緊張感の欠片も無い涼しい声が返る。風切り音と共に炎柱が霧散。見ると石畳の上に紙一枚ほどの隙間を残して蒼と白に彩られた剣があった。しかし、それ以上の異常なモノが目の前にある。
その剣の持ち主はさっきまで燃え盛っていた炎の赤よりなお紅い、朱色に染まった鎧に身を包んでいたのだ。
それは時代劇や戦国ドラマなどでよく見るような、美術館にあるような鎧兜だった。
一連の事態を考えればこの鎧武者は姫菱くんなんだろうと思う。でもこれも・・・『魔法』・・・?

しかし詳しく聞いている暇はなかった。
衝撃波をも伴った轟音に一瞬目を瞑ってしまう。続いて聞こえる悲鳴のような金属音。
音の正体はその武者を押しつぶそうとする巨大な獣だった。大型バイクほどの体躯を黒に染めたその姿は犬というより狼に近い。
全く視界に入っていなかったとはいえ気付かなかったという事は、風のような速度で激突したのだ。
しかし、朱色の武者の位置は最初に見た場所から一ミリも動いていない。あれだけ大きな獣に突進されたのに壁のように立ちはだかり、完全に受け止めていた。
悲鳴のような金属音が続く。見ると黒い獣は左肩を大きな口で挟み込み腕を根元から食いちぎろうと牙を突き立てていた。
しかしナイフのように鋭い牙の群れは、腕を食いちぎるどころか鎧の表面で空しく火花を上げるだけ。
鎧武者が緩慢な動作で剣を持ち上げる。
獣は獲物を食らうことを未だ諦めていないのか左肩を銜え込んだまま炎を吐き出した。さっきの炎の柱もこの獣の仕業らしい。
しかし、半身が橙色に染まっても武者の右手の動きは止まらない。
信じられないことにあの至近距離で炎を浴びても、その一切を防いでいるらしかった。
夜空に掲げられた剣が逆手に持ち変えられ、霞んだ。右手が見えたのは獣の背中に剣が完全に突き刺さった後だった。

「崩雷殺」

その声は確かに姫菱くんのものだった。
その言葉の後、黒い獣の身体と周囲に紫電が這い回り、肉が焦げたような異臭が煙と共に立ち上る。
しかしそれも一瞬。狼は黒い泥のようなものになって消えていった。
後に残されたのは剣を鞘に収める鎧武者だけだった。

こちらを向いた武者の顔は下半分が仮面のようなもので覆われていた。が、その目は、皮肉が少し混じった優しい眼差しは私には分かる。
間違いなく姫菱くんだった。
「大丈夫か？」そんな言葉を掛けられると思った寸前、彼は後ろに飛んだ。
一瞬前までいた地面に黒い『何か』か突き刺さる。刹那の間も置かず連続で黒、白、赤い帯のようなものが武者を取り囲む。
あまりの数の多さに姫菱くんは逃げ切れず大量の帯に縛られてしまった。
急変する事態に付いて行けない中、
「これは一体どういう事です？姫菱くん」
突然隣で、いつも部活で聞いている声が響いた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇free side◇
「これは一体どういう事です？姫菱くん」
「鏡見て言ったらどうです？」
いつの間にか雄飛の視線の先にはスーツ姿の男と野太刀を持った女性が立っている。厚い唇、角刈りの髪に眼鏡を掛けた黒人の男、ガンドルフィーニは昼間とは違い剣呑な視線を雄飛に向けていた。

雄飛は声の聞こえた方向を目だけで確認。座り込んだままの大河内を介抱している女性がいた。少し日焼けした顔から油断の無い眼差しを向ける。
雄飛は完全に動けない。鎧を纏った上半身を余す事無く包んだ帯は四方向から伸びていた。
影の黒、風属性の白、赤と黄色の帯は火と雷を纏った捕縛の魔術。
右の木の上、その下の幹の影、左手方向の車の後ろと建物の二階の窓。それぞれの方向から拘束魔法が完全に発動していた。

「その状態でよくそんなことが言えるな、君は」

ガンドルフィーニが苛立ちを含ませながらも笑う。だがその顔は自身の優位性を確信しているようだった。
だからなのか雄飛も似たような声で返した。行動を伴って。

「これで俺の動きを封じた。と・・・・？『先生方』の冗談はつまらないですね！」

言葉と共に全身に力を込める。四種類の拘束魔法で構成された帯が抵抗できたのは一瞬。それらは『力任せ』に引きちぎられる。
雄飛を除くその場の全員に驚愕が走る。
それもそのはず。『魔法』を力技で破られるとは思いもしなかったのだろう。
そして破った本人が驚愕に固まる一瞬を笑顔で見逃すわけが無い。
それぞれの方向から伸びていた帯を掴んで両腕を振りぬくっ！
赤と黒の帯を右手で掴み腕を引くと、黒い制服を着た金髪の女生徒と本校中学の制服を着た少女が石畳の上に叩き付けられる。
左手で風と雷の拘束魔法の帯を握り手首を翻す。車の後ろに隠れていた褐色の肌の修道服の女性と二階の窓から引っ張られたサングラスを掛けた男性が空中で激突。

巨大な十字架を背負ったシスターが石畳に叩き付けられるその寸前、ストレートロングの髪をなびかせた刀子が野太刀で黄色の帯を切り裂きその身体を受け止めていた。
大河内を介抱している女教師は戦う気が無いのか、この光景を見て唖然としている。しかし、雄飛と向かい合う魔法先生と生徒達は完全な警戒態勢。
相手が教師や生徒であることなんて無視。雄飛の思考は完全に戦闘状態に移行していた。
都合六人。受身を取っていたことから恐らく全員が前衛、後衛を少なからずこなせる。そして綿密な連携を取ってこられた場合、ちょっとした一大戦力になるだろう。
結論、

（知ったことか！）

「来たれ！」

雄飛は更にアーティファクトを呼び出す。木乃香と背中合わせに描かれたカードが目の前で光り輝き、左肩に移動。輝きが収まるとそこには紫のツインテールを生やした人形が肩の装甲版にしがみ付いていた。

「全員、座布団没収！」

雄飛特有の軽口で戦端が開かれ、距離を詰める。その間に反射的に発動した先生や生徒の魔法や攻撃が雄飛に殺到する。

しかし、

飛来する『魔法の射手』も、連続で放たれた銃弾も、影色の槍の穂

先も、フィンガースナップと共に叩き込まれる風の刃も。
朱色の装甲の前に虚しく弾かれ、無残に砕け、火花と共に反らされ、霞のように消えていった。
再び驚愕に目を開く魔法使い達。遠距離からの攻撃を無効化した本人は飛燕の速度で間合いを詰める。雄飛は一番近くにいたガンドルフィーニを自身の殺傷圏に捕らえ、抜刀。
しかしアイスコフィンの白青色の円弧は刀子の掲げた野太刀の一刀で防がれる。が、鎧武者の攻撃は未だ終わらない。
止まるはずだった絶対零度の刃は疾走を止めず、横手から入ってきた女剣士をそのまま吹き飛ばすっ！
ガンドルフィーニはサングラスを掛けた男性に後襟首を掴まれ後退し、雄飛の一撃を回避。神多羅木は空いている右手で風の刃を放つも、朱色の鎧の表面で空しく弾かれるだけだった。

「『紅き焔！』」

追撃を放とうと一歩を踏み出した雄飛に特大の火球が着弾。周囲が先程と同じように爆発音と共に赤と橙色に包まれる。

「愛衣君！やりすぎだ！」

「す、すみません！！」

愛衣は、ガンドルフィーニからの叱責に縮こまる。
雄飛に向けた箒の先には赤で描かれた魔法陣があった。こちらの攻撃をものともしない鎧武者に恐怖した愛衣は、半ばパニック状態で強力な火炎魔法を発動してしまったのだ。

「ですが・・・これなら・・・・」

高音の言いたいことはその場の全員の心の内にあった。拘束魔法も、牽制程度だったとはいえ銃弾も攻撃魔法も全て効果が無い。そんな存在でもこの火力の魔法だったら・・・・。

しかし魔法先生と生徒の予想は完全に裏切られる形となる。

轟々と燃える音と共に、金属音を伴った足音が聞こえる。家一軒が燃えているような火災現場の中から、全身を炎よりも美しい色合いに装甲を染めた鎧武者が散歩でもしているかのような足取りで現れた。

「馬鹿な・・・・」

まともに直撃しているはずだった。しかし標的の鎧武者は

「・・無傷・・・・ですって・・・・」

絶望に近い声色がシスターシャークティの口から漏れる。

燃え盛る炎が兜と面頬に包まれた顔の凹凸に陰影を作る。それは地獄から呼び出された悪鬼のようだった。

雄飛はアイスコフィンを肩に担ぎ、魔法の効果範囲から『歩いて』抜け出てくる。

恐怖と驚愕に息を呑む六重奏が石畳の道に響く。

熾烈な炎を発生させ対象を焼き払い破壊する『紅き焔』は、『白き雷』と同等の威力を誇る攻撃魔法だ。しかも生物にのみ高い効果を発揮する雷撃よりも熱と衝撃波で攻撃する火炎魔法のほうが安定した威力を誇るだろう。

だが、この鎧の前には炎も、銃弾も、風の刃も無意味だった。

雄飛が纏うは紅蓮絲威鎧（ぐれんいとおどしよろい）。

両の胸を鳩尾板（きゅうびのいた）に栴檀板（せんだんのいた）が、肩を大袖の装甲が守っている。胴体に

は小ぶりな脇壺胴丸。腰から下は細部も美しい草摺（くさずり）に覆われている。
それは面の中央が高くなるように、鎧と腰周りの草摺を鮮やかな緋色の紐に通してある和式の甲冑だった。
頭部には龍が水晶を銜えて睨み獅子が座る姿を表現した獅噛の兜。
庇（ひさし）の下の老爺の面頬は、呵々大笑する表情のまま凍りついていた。
頬から上が無く大口を開けた面から唯一素顔が覗き、鋭い眼光が油断無く敵を見据えている。
とある世界で自軍に絶対の勝利と畏怖を、敵に恐怖と絶望を与えるとさえ言わしめた、『最も速き刃』と呼ばれた侍の名を冠する戦装束。

鎧型アーティファクト『サナダ』

雄飛の剣となる事を望んだ刹那との仮契約は主人たる雄飛に強固なる鎧をもたらしていた。

超装甲に身を纏った雄飛は魔法攻撃に一切怯む事無く、再び近接戦闘を挑んでいく。
その疾走は重装甲の鈍重さを一切感じさせないものだった。
最早、手加減できる相手では無いと判断した教師陣は、自分の得物に気や魔力を注ぎ接近戦に移る。高音も同じ結論に達したのか奥の手の使い魔の召喚を行う。
コンバットナイフと野太刀の二連撃をアイスコフィンが迎え撃つ。
耳を塞ぎたくなるような金属音と共に三人の得物が空中で停止する。
ガンドルフィー二と刀子は眼前の光景が信じられなかった。一撃必殺の威力を持った刺突と斬撃は雄飛の『右手一本』で振るわれた剣に軽々受け止められてしまっていた。
そして驚愕は更に続く。
鎧武者の腕が振りぬかれると同時、二人は鍔迫り合いをする余裕も無く身体ごと後方に吹き飛ばされた。

「はぁっ！」

剣を振るい体勢の流れた雄飛の頭上、裂帛の気合と共に巨大な拳が飛んでくる。

高音の背後に浮かぶのは全長２．５ｍはあろう人形の上半身。優雅な黒い装束と白い仮面を纏った召喚魔を従えた影使いは自身の奥義『黒衣の夜想曲』による近接戦闘を仕掛けた。

（入った！）

高音はクリーンヒットを確信。前衛の二人を子供のように吹き飛ばした剛力は確かに驚いたがこのタイミングなら回避不可能だ。

しかしドラム缶を思わせる巨大な拳は不自然な高さで停止していた。

武者を押し潰す一撃の下から聞こえたのは、石畳を破壊する轟音ではなく、

「ぬるい」

老爺の面頬の下から発せられる雄飛の失笑だった。

巨大な拳の下には天に突き出された腕と、朱色の手甲に包まれた五指。

『サナダ』による防御装甲とは別のもう一つの能力、『身体強化』が生み出す剛力が振り下ろされる拳の超衝撃を完全に受け止めていたのだ。

高音は目の前の事実を受け入れられず一瞬とはいえ空中で停滞。しかしその耳で一つの旋律を拾う。

「焔、其は」

呪文詠唱だと本能で判断した高音は反射的に拳打を振るう。再び雄飛を間合いに捉えたガンドルフィーニや刀子、背負っていた巨大な十字架を斧のように構えたシスターシャークティも呪文詠唱を止めようと連続攻撃を叩き込む。
雄飛はその怒涛の攻撃を弾き、逸らし、かわしながら反撃していく。しかし、語りかけるような甘く幼い声の詠唱は止まらない。『その声』は雄飛の、男の声では無かった。
そもそもこれだけの攻撃を捌きながら、精神集中を必要とする呪文詠唱をいくら雄飛でもできるはずが無い。
そう。『雄飛は』。
「乱れ狂う龍神の咆哮！」
教師と生徒の四重奏の攻撃をものともせずに詠唱が完了。
その場にいた魔法先生や生徒の驚愕の視線は武者の左肩の装甲にしがみついている愛らしい人形に注がれていた。
「焦炎、『バーンストライク！』」
小隕石を思わせる大火球の三連弾が上空より飛来、炸裂。着弾で巻き起こる爆発が六人全員を巻き込み吹き飛ばす。
爆炎が過ぎ去った後、左肩に掴まっている少女の人形は誇らしげな視線で雄飛を見ていた。雄飛も頷きをもって返す。
息もつけないほどの近接戦闘時は本来魔法の詠唱はできない。
しかしこのアーティファクト『だっこソフィ』はそれを可能にする。
『使用者が使うことのできる魔法の詠唱を人形が肩代わりし、また単体で発動させることができる』という常識外れの能力は雄飛一人で前衛、後衛をこなせる状態を作り出す。

雄飛の傷を癒す木乃香の願いで結ばれた仮契約は主人たる雄飛に詠唱を受け持つ人形を授けていた。

六対一の戦闘は完全に勝負が付いていた。直撃しないように火球の軌道を精密に調整したとはいえ、爆炎と衝撃波を浴びて、吹き飛ばされた身体ではすぐに動けない。

後は止めをさして終わり。襲撃された理由は雄飛には分からないが、『最後の一人』に聞けば良いと判断。

雄飛は一番近くに横たわっている高音に歩を進める。

人形の重さのせいで、「運悪く」遠くに吹き飛ばなかった影使いは不吉な足音に目を覚ます。そして見たのは自分に向かって歩いてくる朱色の死神。

「ヒッ・・・・」

極限の恐怖に呼吸すら忘れた高音を、雄飛が自分の間合いに捉えるその瞬間、

「ッ！」

舌打ちと共に歩みを停止。石が砕ける音と共に足元に拳大の穴が開いていた。

間髪入れずに鎧の表面で上がる火花と共に連続で乾いた音が響く。

雄飛は拳大の「何か」が飛んでくる方向を睨む。

「・・・・一体これはどういう事だい？姫菱君・・・・」

戦闘開始前と全く同じ質問をその場の全員が聞く。

その声は、眼鏡の下に無精髭を生やした教師から発せられてた。

## 第十九話（後書き）

友人に「敵が強すぎる」と言われたのでアーティファクトで再調整してみたら・・・・

今度は雄飛が強くなりすぎた・・・・。

## 第二十話（前書き）

前回の投稿から随分感覚を空けてしまいました・・・・。
誠に申し訳御座いません。
第二十話ご覧下さい。

# 第二十話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

ああ、思い出した。これは服を買いに行ったときのだ。場所は・・・・ダメだ、思い出せない・・・・。
この日まで、服はなるべく一人で買いに来るようにしていた。
亜子やまき絵達みたいに可愛い服はそもそも私には似合わない。着てみたい気持ちは人並みにあるが鏡の前で自分の体に合わせると、どうしても気後れしてしまう。
二人は私の長身を羨ましがるけど、私にしてみれば身体を取り替えて欲しい。本気で。
ゆーなとは選ぶ服の種類は大体当てはまるけど、あそこまで露出の多い服は私には無理だ。スタイルの良い人間しか似合わない服を私に押し付けないで欲しい。
落ち着いた感じの服や自分に合うジーンズを求めて時折メンズショップに行く私としては一人のほうが行動しやすい。自分の体に合うサイズが無い以上そこで買うしかないのだが、さすがにそこに友達を連れては行けない。
四月始めに行った身体測定の結果、また背が伸びていたので旅行に合わせて服も新調しようと思いこの店に入ったら、

「・・・・大、河内・・か？妙なところで会うな・・・・」

クラス唯一の男子と鉢合わせになった。

「彼女さん、ですか？」

呆気に取られている私と驚いている彼を見たショップの男性店員は恐らく気を利かせたつもりだったのだろうと思う。今思えば、だが。

「ええ。今度、京都まで一緒に旅行に行くんですよ」

（違います！来週修学旅行に行くだけです！）

そう言ったら店員さんは驚いていたが、更にあさっての方向に気を利かせて「それではごゆっくり」と言い置いてどこかに行ってしまった。

二人の間に微妙な空気が流れた。

・・・と思ったらそれは私だけで、彼はジーンズの棚をあさり始めた。

自分だけ恥ずかしがっているのが馬鹿馬鹿しくなったので私も物色しようとしたが、手を止める。

（サイズは・・・見られたくない・・・）

運動しているから太っている訳ではないが、それでもウエストのサイズを男に見られたい女性なんていない。

気まずさと気恥ずかしさを等分した表情を横に向けると、既に二、三本のジーンズを抱えていた彼と目が合った。

「最近のレディースショップにはジーンズは置いていないのか？」

質問しながらも彼は、もう一本のジーンズを探す。話しかけられると思っていなかった私は一瞬面食らってしまった。

（・・う・・・・ううん。でも、そういう店だとスカートを勧められるんだよね・・・・。私には似合わないのに）

だからクローゼットの中はジーンズが大部分を占めている。可愛い服が似合わない以上、買っても意味は無いのだがどうしても割り切れない。

しかし彼は視線を上から下に動かして、満遍なく私の身体を見る。・・・・これ、セクハラじゃない・・・・？

「似合うと思うが・・・・勿体無いな・・・・・」

（え？）

聞き間違いだと思い、疑問をそのまま返してしまう。ゆーな達にも言われていた言葉だったが・・・・男の人に言われると・・・・・。何と言うか・・・・。

（で、でも似合わないのは本当だよ？）

「とりあえず着てみてから考えれば？」

彼は目当てのものが見つかったのか試着室へ向かう。私の悩みなんて小さなものだと笑われた感じがして、あまりいい気分ではない。しかし、彼は振り返り「因みに」と前置きしてから、

「俺は、試着して店員に褒められるとつい買ってしまうタイプだ」

悪戯小僧のような笑顔を残して試着室のカーテンを閉める。

結局、その店ではジーンズを買わずに店を出た。理由は無い。

ただ、何となくだ。

二件目に寄ったブランド店で店員に勧められるままにスカートを買ったのも、そのレシートが未だに財布の中に入っているのも、たまにこの日の会話を思い出すのも、理由は無い。

ただ、何となくだ。

――――――――――――――――――――

徐々に覚醒する意識がゆっくりと瞼を開かせる。カーテンを通って入ってくる光に細めた目に飛び込んでくるのは、

「・・・・『知らない天井だ』・・・・・？」

そう書いてあるポスターが天井に張ってあった。私でも知っているアニメの主人公の名台詞が何で私の部屋に・・・・・。

疑問のままに起き上がろうとして、違和感。左手が・・・・握られている？

そのまま視線で追っていくと私の左手を握る左手があった。その先にはシャツに包まれた腕と肩。少し長い黒髪に覆われ、隠れた横顔。

どういう訳かベッドを背もたれにするように姫菱くんが寝ていた。

（――――何があった私――――――！！！）

何、これは？何があったの？何でこんな『ゆうべはお楽しみでしたね』みたいな状態で朝を迎えてるの？

「ん・・・・起きたか・・・・・」

そう言ってこちらに向ける顔には少し疲れが見えた。そしてその肩には蒼と白の装飾を施された剣が寄りかかっていた。

「あ・・・お、おはよう・・・・」

思い出した。昨日怖くて、どうしても一人になれなくて・・・・

（隣にいてくれたんだよね・・・・）

彼のベッドに無理矢理に投げられ、そのまま寝かされた。寝るまでは怖くないように手を握ってくれていたが、そのまま朝になってしまったらしい。

恋する乙女を自覚してしまった身としては嬉しいことこの上ないシチュエーションだが、『手を出されなかった』ことは女としてどう考えればいいんだろう・・・・。

「朝飯にするか」

そう言うものの互いの左手は中々離れなかった。どちらかが離れるのを拒んでいるわけではなく、ただ手を繋いでいるだけ。

五秒経過。

私もベットから起き上がるために手を離すべきだし、彼も台所に行くためには手を離さなければならない。

十秒経過。

だけど互いに手を離すことはしない。まるで相手が手を離すのを待ってるみたいに。

十五秒。とうとう彼の左手は私ではなく剣を持った。そのまま立ち上がり台所に消えてしまう。

名残惜しかった私は、少し唇を尖らせながら彼を見送る。彼も名残

惜しかったんだろうか・・・・？
そう信じたい。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇free side◇

時間は昨日の夜まで遡る。

――――――――――――――――

「・・・・一体これはどういう事だい？姫菱君・・・・」

「だから、鏡見て言ったらどうです？」

先刻と同じ言葉で聞いてくるタカミチに同じ言葉で返す雄飛。緊張感が無いのは互いに交わされる言葉のみ。
タカミチは両の手をポケットに入れてはいるものの戦闘体勢の威圧感を放っているし、雄飛もそれを感じ取っているのか剣の切っ先に高速発動可能な低級攻撃術の魔法陣を描いていた。
完全に一触即発の状態。その重圧に誰一人として動けずにいた。
そんな状態でも、互いの会話は続く。

「僕には一見、高音君を手にかけようとしているように見えるんだけど・・・・違うのかい？」

「概ね合ってますよ高畑先生。襲い掛かってきた連中を『叩きのめしていた』ところでしたし」

「襲い掛かってきた?襲おうとしていたのはそっちだろう!」

怒りを叫びながら雄飛の背後で拳銃を構えるガンドルフィーニ。スーツのあちこちが焦げているがそれでも銃口の奥からは濃密な魔力の集中を感じる。周りを見れば地に伏していたはずの教師や生徒は、タカミチとの会話の間に雄飛の背後を取って攻撃魔法を放てるよう準備していた。

よく見れば高音も影槍をアンカーのように後方に伸ばし、いつでもその場から離脱できるように準備しているのが見えた。

こちらの一瞬の隙を逃さず、瞬時に体勢を立て直す。確かな戦闘経験からなる手際の良さに雄飛は内心で感心していた。

その一方で雄飛とタカミチの思考はガンドルフィーニの発言を解析していた。

しかし、

「違います!」

二人より先に双方の齟齬と不可解な状況を理解した人物がいた。

「姫菱くんは・・・私を助けてくれたんです!」

その言葉でガンドルフィーニ達の顔に驚きが走る。しかしそれでも不審が上回っているのか警戒を解かない。

お互いに「勘違い」している状況だと雄飛も気付いたが、それを疑われている自分が言うと更にこの話の信用度が下がるので切り出せない状態にあった。

その状況で唯一、中立役になれるタカミチが助け舟を出す。

「雄飛君。とりあえず何があったか、一から説明してくれるかい？」

「自分もこの状況を理解した」という意味を込めて完全に警戒を解くタカミチ。ゆっくりとポケットから手を出して話を聞く体勢を作る。

雄飛は背後への警戒を続けながら説明を始める。

「帰り道に突然黒い犬だか狼だかに襲われましてね・・・・。大河内を逃がす間もなかったので撃退したんです。で、その後間髪入れずに魔法で拘束されたんですよ」

その言葉を聞いてガンドルフィーニ達の表情は苦虫を噛み潰したような顔に変わったが、それでも銃口は下ろさない。しかし自分たちがここに来た経緯を説明し始めた。

「・・・私達は先週から麻帆良学園内に時折出現している「黒い獣」の討伐を行っていた・・・・・。いつものように魔力の発生源を辿ってきたら・・・・」

「俺がいた・・・・と。まぁ傍から見れば『大河内に鎧武者が襲い掛かる寸前』に見えるでしょうね・・・・」

互いに苦い沈黙が続く。雄飛は疑われてもしょうがない状況だった事に。ガンドルフィーニ側は全くの無実の生徒に魔法を放った事に。しかし誰も警戒は解かない。これが間の悪い遭遇戦になるのは互いの言葉が「本当」だった場合の話だ。

「獣の魔力を辿った先に素性不明の要注意人物がいた」なんて偶然を魔法先生側は信じないし、

「いきなり魔法を放ってきた」先生方を雄飛は信じていない。
お互いがお互いを信用しない状況の中、ただ魔力と気だけが高まっていく重圧が場に残る。
本来なら先に武器を下ろすべきは最初に攻撃を放ってきた魔法先生達側だ。しかし雄飛は信用を得るために自分が先に剣を下ろすべき、と結論付けた。
雄飛はその場の全員に聞こえるように舌打ちをしつつ、

「お互いに勘違い。そういうことでいいんですかね？」

警戒を解かない魔法先生達に共通項を確認する。ガンドルフィーニが「ああ・・・・」と、頷きを返してようやく剣を納める。しかしそれでも右手は柄から離れない。雄飛は背後の魔力の高まりが沈静化したのを確認してから自分の武装を戻していった。

「去れ」

その言葉と共に鎧が、人形が光の塵となって霧散。一瞬遅れて鎧武者の姿が崩れ、中から雄飛の素顔が現れる。
目の前に浮かんだカードを取ってポケットにしまい、剣も左腰にストラップになっていった。
雄飛は全員を見回して戦闘の意思が無い事を確認すると、大河内に近づく。

「大丈夫か？」

その言葉に大河内は気丈に頷きを返すものの身体は震えていた。一般人が目の前で切った張ったを見れば誰だってこうなる。

「詳しい話は明日でもいいですかね？」

雄飛は有無を言わせない力強さで了解を取る。タカミチとガンドルフィーニが頷くのを確認して大河内を介抱していた女性から受け取り、買い物袋の全てを片手に持って大河内を立たせる。
背中に突き刺さる視線と様々な感情を全て無視して雄飛はその場を後にした。

――――――――――――――――――――

雄飛はそのまま強引に大河内の手を引いて学生寮に入り、大河内の部屋の前まで来た。そこで男にとって器の大きさが試される場面に遭遇する。
大河内の右手は部屋のドアノブに掛かっているのだがそれ以上動かず、左手は雄飛の手をどうしても離すことができない。

「え・・・・」

大河内はそこで自分の体が意思に反して動かないことに気づいた。ドアノブを回す、たったそれだけの行動ができない。まるで手が回転するのを忘れてしまったかのようだった。

「あ、あれ・・・・」

力を込めようとすると、右手は震えを返してきた。その震えはどんどん大きくなり、全身に回る。
疑問の声が嗚咽に変わるのに時間はかからなかった。
そこでようやく気付いてしまう。自分が言いようのない恐怖に支配されているのだと・・・・。

堪えていた涙腺が決壊。両手で隠したいが左手は離せない。
雄飛が手を握っているから、自分の精神の均衡が保たれている事を大河内は頭のどこかで理解していた。
雄飛は大河内を見る。いや、見ていられなかった。
繋いだ手は離さずに、そのまま無言で踵を返す。強引に引っ張られた大河内は顔をしかめるものの、なす術も無くついていくしかない。
雄飛はそのまま乱暴に自分の部屋のドアを開けて照明を付ける。靴を脱ぎ捨て、買い物のビニール袋をソファに置き、最後に大河内をベッドの上に放り投げる。

「きゃっ」

可愛らしい悲鳴を上げる大河内を無視して雄飛は背を向けてベッドに寄りかかり、アイスコフィンを取り出して肩に立て掛ける。
最後に左手を後ろに回して大河内の左手を握る。
驚いて体を起こそうとした大河内だったが手を握られると雄飛が多少強引でも気遣ってくれているのを知った。

「面倒なことは明日考えよう・・・・」

そう言われ、手を強く握られると抗議の言葉を何も言えなくなる。
だから大河内は一言だけ言った。

「・・・・ありがとう・・・・」

しばらくして、雄飛は背後から小さい寝息が聞こえてきたのを聞いた。
その声の安らかさに安心しつつ雄飛も眠りについた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「わざわざ、手伝ってもらって悪いな」

「別にかまわんで～」

「ええ。これくらいなら苦になりませんし」

「でも何でこんなにたくさんの本、エヴァンジェリンさんのところに持っていくの？」

森の中の小川のほとりを一男三女が歩く。俺を先頭とした四人は皆紙袋を持っていた。

中には鈍器として使えそうな厚さと大きさの本。それを持って刹那、木乃香、大河内を従えた俺は昨日の契約を果たすために魔術書や奥義書を持ってエヴァンジェリンの自宅を目指す。

昨日襲われた件についても少し聞きたいこともあり、再び訪問することになった。最初は迷惑かと思ったが・・・いいや、別に。

要求が増えるかもしれないが、襲ってきた魔物について長年生きてきた知識を借りておきたい。

この後に学園長室に行くことになっているものの前情報は多いに越したことは無い。魔物の生態や出現の理由、そして何よりどうして俺を襲ってきたのか。

昨日と同じ風景と趣のあるログハウスが見える。両手が塞がっているものの何とかドアをノック。

「エヴァンジェリン、持ってきたぞー」

「ようこそいらっしゃいました、姫菱様」

ドアの向こうに声を掛けると、しばらくして絡繰が出てくる。しかし

（・・・・なぜメイド服・・・・・？）

昨日は普通に私服だったろうに・・・・・。いや好きだから良いけどね、メイド・・・・。

「・・・・貴様と・・・・・敵なん・・・・・」

大きな声での会話が家の奥から聞こえてくる。どういう訳かエヴァンジェリンは怒っているらしい。

「誰か来てるのか？」という疑問そのままに視線を絡繰に向けると先回りして答えてくれる。

「ネギ先生が今いらっしゃっています」

「「ネギ先生が？」」「ネギくんが？」

三者三様の疑問の声が上がるが、俺はネギが何を考えてここに来たのか大体分かる。昨日俺も同じ考えに至りここを訪ねたのだから。

「入って良いか？」

これほどの重さの荷物持ったまま家の前で待たされるのは少々キツイ。それにネギ先生の「頼み事」が成功すると俺も無関係ではなくなる。

絡繰の了解を得て、四人で中に入る。そのまま声のする二階に上がっていく。

「戦い方などタカミチにでも習えばよかろう！」

「今日はそれを承知で来ました！」

二人の押し問答を聞きながら木製の階段を上っていく。

「こんちわー」

気の抜けた挨拶をしながら二階に上がると予想通り片膝を着いて頼みごとをしているネギ先生と付き添いなのか脇に立っている明日菜がいた。
そして、ベッドから出る気が無いのか未だパジャマ姿のエヴァンジェリン。
もう昼だぞエヴァ・・・・。まぁ個人の自由だけど・・・・。

「姫菱さん！」「あんた何で・・・・！ってか・・このか、刹那さん、大河内さんも」

ネギ先生と明日菜の驚きの声を聞き流しながら荷物を茶室用の畳の上に荷物を置く。その隣に後から来た三人から受け取った紙袋をどんどん置いていく。

「俺も昨日、先生と似たような事頼んでな。俺の師匠の魔道書とかを見せる代わりに、エヴァに鍛えてもらうことになった」

説明しながらその一冊をエヴァに渡す。その分厚い本を受け取ったエヴァンジェリンは軽く斜め読みして、ベッドの脇に置く。

「後で読ませてもらおう」

「ちょ、ちょっと待って！雄飛、あんたエヴァちゃんに弟子入りしたの？」

絡繰とエヴァ以外の全員の意見を代表して明日菜が聞いてくる。エヴァの戦いぶりを直接ではなくとも見ていた刹那はともかく、捕らわれていた木乃香や後から駆けつけた大河内はさすがに驚いている。しかしネギ先生は「自分の考えは間違っていなかった」とばかりに頷いている。

「厳密にゃ違うけどな。しかしネギ先生・・・・物の頼み方を知らないみたいだな・・・・」

「え？」と疑問の声を上げるネギ先生。イギリス人には理解が及ばない感覚なのだろうか？

しょうがない・・・・。ここは人生の先達として処世術を教えておかねば！

「いいか？日本には古来より『袖の下』や『山吹色の御菓子』と言われる言葉がある。これは」

「ガキに何教えてんのよッ！」

快音。

京都の森でツッコミに使われたハリセンが再び俺の頭に叩き込まれる。無警戒だったとはいえ異様に早い抜き打ちだ。こいつ本当に素人なのだろうか？

「しかし、世間の世知辛さを教えるのは早いほうが・・・・」

それ以上の言葉は鬼の形相で睨む明日菜を見てしまっては続けられなかった。保護者の説得は諦めて話し相手をネギ先生に変更する。

「ネギ先生、よく考えろ。エヴァンジェリンの性格から考えて普通に頼み込んでも無理に決まっているだろう？」

そう言ってベッドの上に陣取る吸血鬼を見る。「お前の言うとおりだ」とでも言わんばかりに悪い笑みを浮かべている。あれは変なことを思い付いた顔だな・・・・。

「そういう事だ・・・悪い魔法使いにモノを頼むときはそれなりの代償が必要だぞ・・・・？」

暗い笑い声を出しながら組んでいた足を突き出し、告げる。

「まずは足をなめろ」

頬杖を突き、退屈そうに自分の要求を言うエヴァンジェリンの顔は完全に悪役のソレだ。

「我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれから」

「アホか――ッ！」

言葉を最後まで言わせることなく再び快音が炸裂。従者たる絡繰の反応速度を超えたハリセンの一撃はエヴァの魔法障壁を破砕し、頬に叩き込まれた。

奇声を上げてベッドから転げ落ちる悪の魔法使い。・・・本当に

あの白髪の少年を退けた少女と同一人物だろうか・・・・？

「何突然子供にアダルトな要求してんのよ――っ！」

一瞬Ｒ－１８の世界の扉が開いたと思ったが、どうやらお笑いの世界の扉が開かれていた。

「あああ、貴様、神楽坂明日菜！！弱まっているとはいえ真祖の魔法障壁をテキトーに無視するんじゃないっ！」

泣きながら頬に手を当て抗議するエヴァンジェリン。先日感じた畏怖も威厳もどこかに置いてきたかのようだ。

「それにエヴァちゃん！ネギがこんな一所懸命に頼んでるのにちょっとひどいんじゃない！」

「頭下げたくらいで物事が通るなら世の中苦労せんわ！！」

まあ、確かにその通りだ。だからこそ俺も魔術書云々の交渉をしたんだし・・・・。

エヴァはこの後も、その論理で攻めれば良かった。しかし自分の優位を確信した人間は言わなくて良いことまで付け足す。

それを人は「蛇足」と呼ぶ。

「ハン・・それより貴様・・・・何でぼーやにそこまで肩入れするんだ？」

「身内でもないのに」。そう指摘された明日菜は言葉に詰まり顔を赤くする。同性故かエヴァはそこを見逃さない。そしてネギを除く全員が勘付いていた事を口にする。

「やっぱりホレたのか？１０歳のガキに」

明日菜がいつも通り返していればエヴァも強くは追求してはこなかった、と思う。しかし本人の顔の赤みは更に広がる。

否定の言葉が言い合いに、言い合いが喧嘩になるのにそう時間は掛からなかった。

俺は何でこんな大人気ないやつに指南役を頼んだのだろう・・・？

取っ組み合いを始めた二人を頬っておくのもアレなので仲裁に入る。

二人の襟首を掴んで引き剥がすと、両者とも犬猫のように手を伸ばして相手を引っ掻こうとしていた。

「二人ともハウス、ハウス」

ようやく場が落ち着いたので話を再開する。どうせこの場の落とし所を作らないと永遠に二人の「弟子にしてやれ」「断る」といった押し問答が続くだろう。助け舟を出すか・・・。

「エヴァ、追い返すにしても理由がないとネギ先生は帰らねえぞ？」

その言葉に押し黙るエヴァ。明日菜は俺がエヴァ側に回ったと感じたのか睨んでくるので今度は先生側に船を出す。

「ネギ先生にしたって『帰れ』の一言じゃ納得できねえよな？」

「は、はい・・・・」

この手の問題は如何にして互いの用件を満たす部分を見つけるかに尽きる。両者が少ずつ譲歩して、自分の意見が結果に反映されたように「見せかける」のが一番だ。

「エヴァ、ネギの弟子入りをテストしてやれば？ネギの本気を見るためにもどっちみち必要だろう？」

「・・・ふむ・・・・」

急に思案顔になるエヴァンジェリン。数秒の後、溜息を付き条件を口にする。

「今度の土曜日もう一度ここへ来い。弟子に取るかどうかテストしてやる」

「それでいいだろ？」と気だるげに話すエヴァンジェリンにネギ先生は年相応の笑顔で答えた。

―――――――――――――――――――――

「で、お前は何の用件で来たんだ？」

ネギ先生と明日菜を見送った後、俺たちは一階でお茶を飲んでいた。私服に着替えて降りてきたエヴァンジェリンは開口一番に本題を聞いてくる。

帰った二人は魔術書の運搬要因としてしか大河内を見ていなかったらしいが、エヴァはもちろん木乃香と刹那も何となく勘付いていたらしい。

この後に用がある俺にとっても時間は惜しい。さっさと本題に入ろう。

「・・・あの後、偶然会った大河内と一緒に寮に帰っている途中で突然黒い獣に襲われてな・・・・」

「「襲われた!?」」

俺が襲われた事実に驚く木乃香と刹那。二人に黙っていたのは悪いと思っているが、昨日の今日では言い出す暇も無かったのだ。

「知っていることを教えてくれ」

『何か知らないか?』とは聞かない。さっきの発言を聞いてもエヴァンジェリンは一切驚かなかった。顔色すら変えなかったところを見ると黒い獣の存在は知っていたらしい。

「・・・私も詳しいことは知らん。ウチのクラスが修学旅行の間は私も学園警備を免除されていたからな・・・・。ただ、マルタの話では先週くらい前から出始めたらしい」

「丸太?」「マルタ先生が!?」

何故ここで木材が出てくる?しかし大河内も驚いた顔で聞き返す。

「何だ知らないのか?」と、エヴァンジェリンは思わせぶりな態度で前置きして、話す。

「マルタ・シュトック。ぼーやの教官になる予定の魔法先生だ」

## 第二十話（後書き）

今回登場したマルタは「ラタトスク」のマルタとは一切関係ありません。
某国の水泳選手の名前をお借りしただけです。

# 第二十一話（前書き）

前回の更新から一ヶ月近い・・・・。
完全にスランプってました。本当に申し訳ありません。
テイルズの新作に現を抜かしていたわけではありません。決して！

# 第二十一話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「教官、ね・・・・。つまりネギ先生を『鍛えること』すら最初から決まっていたわけか・・・・」

「ジジイから聞いていないのか？ぼーやは『魔法使いになる修行』の為にここに来たんだぞ？」

そう言って笑うエヴァンジェリン。俺は喉元まで上がってきていた苦い考えを、お茶と共に飲み込む。
ネギ先生の父親「ナギ・スプリングフィールド」が英雄と呼ばれる存在である事は京都の隠れ家での会話等で知っている。
これまで断片的だった取るに足らない情報が頭の中で繋がってくる。
その息子がたった十歳でイギリスから日本に教育の名目で来日した事、陸の孤島を思わせる麻帆良の情報操作力、何より「正義の魔法使い」の集団の中に「悪の魔法使い」を名乗る吸血鬼がいる事実。
つまり、

「ネギ先生は島流しにあったのか・・・・」

「半分はぼーやを守るための措置らしいがな・・・・」

「・・・・えっと・・・・どういうことや・・・・？」

俺は横を確認すると三人とも理解が及ばない、という顔をしていた。
確認の意味も含めて木乃香達に説明していく。

「つまり『英雄の息子』であるネギ先生は、どこに置いておいても角が立つ存在なんだろ」

英雄に恨みを持つ者、ネームバリューを利用しようとする者、英雄の血脈に取り入ろうとする者。本人に魔法の才能がある以上、政治的価値だけでは無くその血筋にあやかろうとする者もさぞかし多いことだろう。
そうなってくると誰がネギ先生を保護していても不満が出てくる。いくらその人物が私心無くネギ先生を守っていても、その人物に少なからず利益が出る限り周りはそれを良しとはしない。それを妬む者、その利益にあやかろうとする者、それを止めようとする者。そこに「正義」の二文字が入れば足の引っ張り合いは更に加速する。最終的には、ネギ先生を保護している陣営は『英雄の子供を利用して利益を生み出している悪の組織』に周りから仕立て上げられる。どんな学校でも組織でも同じだろう。これだけ本人の事を考えている。と言葉を尽くしても、学校の評判や組織の名が売れる以上周りはその事実を重視する。
不正を正す「立派な魔法使い」で在るが故に。

「くっだらない政治の話だ・・・・」

三人への説明の後、お茶を一気飲みして口の中の不快感を流す。言葉と共に反吐を吐いた気分だった。
十歳の子供一人ちゃんと守れない大人と社会。本来なら遊びまわっている年齢のはずだ。時折見せるあの年齢に不相応な雰囲気と落ち着きは、少なからず大人の事情に振り回されてきたからなのだろう。

「でも、それなら何で麻帆良に修行に来たの？」

「ここも魔法使いがいる学園だよ？」というニュアンスで聞いてくる大河内。ここから先はさらに面白くない話だった。

ネギ先生本人はここに送られた意味を理解しているのだろうか？

「ここは相当特殊な場所なんだろ」

それこそ、「悪の魔法使い」エヴェンジェリン・A・K・マクダウェルがいるほどの。

西洋魔術と東洋呪術がせめぎ合うここ、麻帆良学園はそういった影響がほとんど無い場所なのだろうか。詳しくは知らないが悪と正義が隣人同士でも大きな問題にならない程度には。

ネギ先生がここに来たのは大人の思惑があったにせよ必然だったのだろう。

自分が居ても他人に迷惑が掛からない。そんな場所が地球上にたった一つしかない以上は。

「ネギ先生本人が悪いわけでは無いのに・・・・」

遣り切れない感情をこぼす刹那。彼女も大なり小なり大人の事情に振り回されてきたのだろうか？

「かといって『取り巻く環境が歪んでいても、本人を歪ませるわけにはいかん。』そう言って本国からわざわざ教員を一人引き抜いてきたのさ。あのジジイは・・・・」

言葉を零すエヴァンジェリンの顔には少なからず哀れみと慈愛があった。

英雄の息子。才能ある魔法使い。いや、それ以前に教職に携わる人

間として十歳の子供をしっかり育てるべきだ。と学園長は感じたのだろう。
しかしネギ先生を鍛える人間が前もって確定しているとなると疑問が一つ浮かぶ。

「エヴァンジェリン。どうして弟子入りテストなんて話に乗ったんだ？」

生臭い政治の話を聞かせないように「教官」の話は伏せておくのは分かる。しかし元々弟子を取るのに乗り気では無かったエヴァンジェリンがこの賭けを受け入れた理由がいまいち分からない。
しかし俺はその顔が悪魔の笑みに変わるのを見て理由を聞いた事を後悔した。

「簡単な話さ。テストなら私の匙加減しだいでどうとでもなる」

臆面もなく言ってのけるエヴァンジェリン。魔術書の閲覧を交換条件とした俺とは違い自分にメリットの無いネギ先生を鍛える気は皆無らしい。
つまり無理難題を出してネギ先生の弟子入りの件を断るつもりだ。

「エヴァちゃん・・・・さすがにそれはひどいで・・・・」

「そうは言うが、遊び半分で弟子入りされて困るのはこっちだぞ？」

木乃香の諌める言葉に対して、冷たい反論を返すエヴァンジェリン。
刹那も大河内も批判の視線を浴びせていたが、その言葉を聞いて先ほどのネギ先生の高揚ぶりを思い出し、次の口が告げなくなっていた。

「つまりネギ先生を鍛える気は最初からなかったというわけか」

「よく言う。お前もそれを断る理由にするために誘導したのだろうが」

エヴァンジェリンに冷たい笑みをこちらに向ける。そう言われて今度こそ俺は黙らざるをえない。

確かに自分の鍛錬の邪魔になる可能性がある以上、ネギ先生の弟子入りは歓迎できなかった。

しかし、

「本気なら俺は問題無いと思うけどな・・・・」

エヴァンジェリンは嗜虐的な表情を崩さない。現実が十歳児の意地やプライドでどうにかなるならそもそも修行の必要はない。

ネギ先生が少しでも甘さを見せればその瞬間に完膚無きまでに叩き潰すつもりだろう。

その笑みは最早同学年の少女のものではなく、６００年の長きにわたって辛酸を舐めてきた吸血鬼のもの。自分の目に留まらない程度の意地など本気などと呼ぶ気も無いのだろう。

「というか、どうして大河内が知っているんだ？」

その冷徹さに気圧されていた俺達を無視してエヴァンジェリンが話を変える。確かに俺も気にはなっていた。

「え、えっと、マルタ先生は水泳部の顧問だよ？」

いきなり会話を振られた大河内は戸惑いはしたものの衝撃の事実を口にした。

何か色々間違って・・・・いないか、別に・・・・・。教師が部活の顧問やっているだけだし。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇木乃香　ｓｉｄｅ◇

「じゃあ私はここで」

「ああ。また後でな」

そう言って顔を少し赤くしながら水泳部の部室への道を行くアキラの後ろ姿を見送った。

ええなぁ・・・・。ウチも送り迎えしてほしい・・・・。

いや、別にどこに行くわけでもないけど。

ユウに心配されているのが素直にうらやましいのだが、面と向かって口には出せない。

「じゃ学園長のとこに行くか」

そう言ってユウはウチとせっちゃんの手を取って麻帆良学園への道を行く。

結局、エヴァちゃんのところではユウの欲しかった情報は得られなかったみたいや。

でもユウがエヴァちゃんに弟子入りしたのも驚いたけど・・・・昨日アキラと一緒にいる所を襲われたのには驚いた。

ウチを頼ってくれれば、と思うものの頼られても今のウチでは何も

できないだろう。
自分は誰かの傷を治せる力があるだけで、誰かが傷つかないと力はふるえない。
何もできない自分になりたくない。と思い、魔法の力を手にしても未だに好きな人の助けにもなれない現実があった。

「・・・ウチもエヴァちゃんに弟子入りしたほうがエエんかな・・・」

知らず知らずにそんな思いが口から零れていた。独り言を聞かれたと思いユウを見る。

「自分で決めたことなら止めないが・・・もっとゆっくり」

「あら、姫菱君」

ユウの言葉を途中で遮る声が学園への階段上に響いた。
午後の陽光に光る短めのブロンドの髪。濃紺のスーツとタイトスカート。こちらに柔和な笑みを向けてはいるが・・・緑の瞳はうちら三人を静かに見ていた。
何となくだがユウを少なからず警戒しとる。この佇まいは素人のウチでも一般人ではないと分かる。

「あなたがマルタ先生ですか」

「ん、ああ。アキラに聞いたのね。聞いての通り私がマルタ・シュトックよ」

ユウの言葉に一瞬驚きを見せるもののすぐに元の笑みに戻る。「よろしくね」と挨拶するその姿は普通に先生にしか見えない。

でもよく考えるとネギ君も魔法使いだ。ユウもせっちゃんも、何よりウチも。
この場の全員が一般人とは言えない状況だった。

「これから学園長のところに行くのかしら？」

そう言ってマルタ先生は背後にある麻帆良学園の校舎に視線を向ける。しかし「はい」と、軽く頷きを返すユウに先生は学園長の意外な居場所を告げる。

「学園長なら今は保健室よ」

――――――――――――――――――――

「さすがに歳ですか・・・・」

「わざわざすまんのう」

保健室特有の硬いベッドにうつ伏せ状態のじいちゃんがユウに申し訳なさそうに謝る。

病名「急性腰痛症」

つまり「ぎっくり腰」やった。原因はどう考えても判子押しの無理が引き金だろう。
『骨折はケガの内に入りません！』と描かれたポスターの上の壁掛けの時計を見る。あと数分で救急車が来るらしい。身内としては心配なので付いて行こうと思う。

ユウとのデートはまた今度やな。
保健の先生は今はいなかった。呼んだ救急車を待って今は裏門のほうに行っているらしい。
せっちゃんはここに来るまで心配そうだったが、それなりに元気な事を知って安心しているようや。

「それで葬式、いや人生の卒業式はいつになるんですか？」

「さすがに口が悪いぞ姫菱君」

入口近くからユウの軽口をたしなめる男の人の声。面識は無いけど何度か見たことのある人やった。
厚い唇と角刈りの髪、眼鏡を掛けた黒人の先生。名前は確か・・・・。
思い出そうとするのを遮るように保健室の扉が開く。素早く入ってくる保健の先生と二人の救急隊員の人達があっという間にじいちゃんを担架に乗せていった。

「ガンドルフィーニ君。すまんが後の事は・・・・」

「分かりました学園長」

思い出した。確か高等部で教えとるガンドルフィーニ先生や。この状況でここに居るということは・・・・先生も魔法の関係者なんやろうな。
何や知らんけど周りに魔法使いが多いなぁ。

「お嬢様」

せっちゃんの声でようやく我に返る。

感慨に耽っている内に担架が保健室を出て行ってしまっていた。

「雄飛。すまないが・・・・」

「あー、行ってこい行ってこい」

せっちゃんが皆まで言わずとも分かっていたようだ。確かにウチひとりだと入院に必要な物とか揃えられんし。

「ユウ。また後でなー」

「夕食は鍋の予定だ。食いたければ部屋に来るといい」

廊下に出てからそう聞こえてきた。せっちゃんは嬉しそうに笑っていた。ウチも自然と笑みがこぼれる。夕食のお誘いは荷物持ちのお礼も兼ねているのだろう。

せっちゃんと同じ人を好きになった後、こんな風に一緒に笑えるようになるとは思っていなかった。他人から見たら歪な関係に見えるのだろうが、自分の気持ちに整理が付いている以上迷うことは無い。

既に担架は廊下の角を曲がっていた。早く追いつかんと。

手を繋ごうと伸ばした右手が掴まれる。遠慮をしているような力加減だが、確かな暖かさが胸にこみ上げる。

親友と同じ人を好きになる。漫画や小説ではよくある不幸な話だが、

「せっちゃん急ごう」

「うん。このちゃん」

ウチは今、幸せやった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

窓の外を車が走り去っていく音。患者を乗せた救急車が発進していた。しかし俺はその光景を驚愕の表情で見送る。
駐車場を抜けて裏門を出て行く救急車。しかし、

その車体の色は黄色だった。

(都市伝説じゃなかったのかよ!?)

はたして俺はあの救急車が向かった病院に見舞いに行くべきなのだろうか・・・・?

「姫菱君」

俺を少し遠慮がちに呼ぶ声。本来の目的をすっかり忘れていた。
若干申し訳なさそうに振り返る。そこには少々居心地が悪そうにたたずむ黒人の男性がいた。
昨日の夜、コンバットナイフと自動拳銃を同時に使って前衛を務めていた男だ。

「ガンドルフィーニだ。高等部の教師をやっている」

「姫菱雄飛です。今日は昨日の事について聞きに来ました」

前置きは無視して無味乾燥な自己紹介を行う。相手にしたって俺を警戒している以上、長々と会話はしたく無いだろう。
しかし、ガンドルフィーニ先生は意外な行動に出る。

「昨日の夜は本当にすまなかった」

「申し訳ない」と言って短く刈り込まれた頭を下げる。一瞬呆気に取られてしまったが、すぐに戻る。

「正直、意外です。不可抗力と言い切るつもりかと思ってました」

「私達でもそこまで傲慢じゃないさ」

上げた顔には微苦笑が張り付いていた。「しかし」と前置きして先生は話を続ける。

「問答無用といえ、あの時は君を拘束する必要があった。という事はわかって欲しい」

「さすがにそこまでバカじゃないですよ」

その言葉でガンドルフィーニ先生の口から吐息が漏れ、合わせて肩に入っていた力も抜ける。
そう。さすがにあの状況では強行手段に出なければならなかった。
魔法先生方は魔物の放つ魔力を追跡して俺と大河内のいた場所まで来たのだ。
そこにいたのは尻餅をついた一般人に近づく鎧武者。しかもその武者がそれなりの魔力を有する魔剣をもっていたら・・・・。
一般の警察だって拳銃か警棒を構えて警告してくるだろう。しかも剣が納まった状態だったとはいえ、俺達のいる場所に辿り着くまで

に戦闘があった事は音や魔力の探知等で分かっていたはず。
魔法は使い方次第で一瞬で人を殺せる。

この事実がある以上、鎧武者が犯人かどうかなんて確認は後で良い。
あの場で守らなければならなかったのは俺の人権や、魔法先生方の面子などではなく、『大河内の命』だ。
だからこそ先生方は有無を言わさず捕縛魔法を使ったのだし、俺も大河内共々、殺される可能性があったから反撃に移った。
俺の立場なら非難することはいくらでもできる。考えすぎだ、俺がそんな事をすると思っていたのか、と。
だがそれはいくらなんでも想像力不足の発言だろう。

「正義と悪ではどうあっても悪が先手を取る。それくらい分かってます」

正義とは悪事があって初めて行使を許される。その悪事が金や元通りになる物ならましだろう。
しかし『命』は違う。
死んだ人間は墓から出てくることは無いし、遺族には心をえぐるような傷が残る。そして、その場に立ち会った人間には「何かできたはずなのに、何もできなかった」という無力感を心に打ち込んでいく。
修学旅行の夜に思い出した事だが、俺の心の奥底にも未だに傷が残っていた。

「むしろ、面子を気にするような『正義の組織』じゃなくて安心しました」

「それこそドラマの見すぎだ」

「心外だな」と、言葉を付け足したガンドルフィーニ先生。ほんの少しだが怒りの声色が入っていた。

「正義であれば何でも許される。そういう妄想は世間知らずの『立派な魔法使い』がよく抱きがちだが、生憎と私はそんな正義崩れのチンピラではない」

そう言って丸椅子を俺に勧めてくる。「昨日の魔物の件だったね」と話を本筋に戻しながら本人も座る。

「結局、昨日の黒い獣については情報と呼べるようなものは無いのが現状だ」

いきなり気が滅入る事実を告げられる。エヴァンジェリンのところでほとんど情報を得られなかった時点で予想はしていたが、やはり気持ちが沈むのは否めない。

「最初の事件は先週の月曜の夜。出歩いていた一般生徒が黒い獣に襲われているところを周囲を巡回していた魔法生徒が撃退したのが最初だ」

言いながら胸ポケットから出した手帳を開き続きを読み上げていく。

「目撃した一般生徒はその姿と雄叫びですぐに気絶した為に詳しいことは覚えていないらしいが、撃退した魔法生徒の話では黒い獣はその生徒の匂いを嗅いでいたらしい」

「匂い・・・・？」

獣の習性としては別に間違っていない。しかしそれをわざわざ報告するということは・・・・。

（何か違和感があった。か・・・・）

言葉にならない程度の違和感があったのだろう。
そもそも鼻を近づけて匂いを嗅ぐ行為は「食べる寸前」に見えてもおかしくないはず。それを「匂いを嗅いでいた」と言い切った以上、ただの勘違いではないだろう。

「その撃退した生徒って誰です？」

ガンドルフィーニ先生はメモ帳を閉じ、その名を口にする。後で話を聞いてみるか。

「その他にも何回か黒い獣は出現しているが、出現場所、時間帯、襲われそうだった生徒にも共通性は一切無い」

再び胸ポケットに納めたということは本当に情報はこれくらいしかないのだろう。しかしその言葉に一つ引っかかりがあった。

「襲われそうだった？」

「ああ」と頷きながら話を続けるガンドルフィーニ先生。本人も引っかかりを感じているようだった。

「実はその獣と一般生徒が直接接触したのは最初の一件だけだ。以降は獣が人を襲う前に全て撃退できている。警備を強化した結果といえば聞こえはいいが・・・・」

「そうは思えない。と・・・・」

嘆息交じりの言葉を俺は受け取る。どうやら先生も言葉通りに考えていないらしい。

「襲う意思、というかそういうものを感じたのは確かだが・・・・、それが目的とは思えない行動がいくつかあったのは確かだ」

そう言って再びの溜息。顔には難問を前に立ち尽くす学者のような苦悩の表情が覗いていた。

「そういえばあの獣、魔物とかそういう『生物』の類じゃないらしいですね」

嫌な沈黙が続きそうだったので話の方向性を変えてみる。ガンドルフィーニ先生も表情を戻して同意を示す。

「魔獣などを呼び出す『召喚』ではなく、どちらかというとプログラムで動く自動人形に近いらしい」

そう補足説明をするも、視線が一気に険しくなる。眼鏡の奥から確かな威圧感が飛んでくる。

「それで、その情報は一体誰から聞いたんだい？」

「エヴァンジェリンからですけど？」

刃物のような眼光を風と受け流し、俺は臆面も無く答える。答えを予想していたのか先生は三度の溜息を吐く。その溜息は今までで一番長い長いものだった。

「確かに私達だって彼女の知識には幾らか助けられてはいる。しかし彼女には関わらないほうが良い」

その言葉には有無を言わせぬ圧力が込められていた。しかし言葉を発するその顔は何かを堪える表情を作っていた。

「俺の人間関係までご指導が入るとは、最近の教師にしては珍しい熱意をお持ちで」

言外に『余計なお世話だ』と返す。しかしそんな皮肉を聞いても口調も表情も変わらなかった。

「前途有望な若者が犯罪者に関わるなと言っているんだ。付き合う友達は選べと教わらなかったのかい？」

「教わりましたよ。ただ、俺の友達の方がそう言われる事が多かったみたいですけど」

最早処置無しと言った視線を送るガンドルフィーニ先生。これ以上は有益な情報は出てこないらしい。

「それでは俺はこれで」

席を立って扉を開ける。しかし背中を向けた俺にガンドルフィーニ先生の言葉が飛んでくる。

「どうして君はこの件に首を突っ込むんだい？誰の依頼も受けていないのだろう？」

昨日の世界樹広場での俺の発言を踏まえての疑問だった。「一銭の得にもならないぞ」と言外に告げるガンドルフィーニ先生に向き直る。

「別に大した理由はないですよ？飼い主に『ペットの躾はちゃんとしとけ』と文句を言いたいだけで」

「捜査や警備の妨げになるから勝手に動かないでほしいのだが？」

明らかに邪魔者を見る目を俺に向けるガンドルフィーニ先生。しかし俺にも言いたいことはある。

「ガンドルフィーニ先生。思い出してみてください。あなたが１５歳の頃、教師の言葉を大人しく聞いていましたか？」

突然の質問に一瞬面食らった先生だったが、都合四度目の溜息を吐く。

「いや・・・・・、大人の言うことに反発するのが日課だったよ・・・・」

どうやら反抗期が訪れる時期は世界共通らしかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

「それじゃ失礼します」

「ああ、アキラ。ちょっと待ちなさい」

別れの挨拶もそこそこにして、部室のドアを開けようとしたら呼び止められる。

「どうかしましたか？マルタ先生」

今日のマルタ先生は、正直らしくない。と思った。

ミーティングギリギリに来たかと思えば、その後すぐに雲隠れ。休憩時間ですら明確に決めて部活をやるほど時間に厳しいマルタ先生を知っている水泳部一同としては、珍しいの一言では済まされない一日だった。

そんなマルタ先生がこっそり近づいて耳打ちしてくる。まぁ、何となく用件の予想は付くけど・・・。

「昨日のことだけど・・・まだ犯人は捕まったわけじゃないんだから気をつけなさいよ」

やはりというか、予想の通りだった。ミーティング直後に昨日の顛末の説明と、巻き込んでしまった事についての謝罪があった。

その事については姫菱君に

『昨日の件で、先生方を責めるなよ』

と釘を刺されてしまったので、私からは何も言えない。理由は分かるけど、好きな人に魔法で攻撃するような人達に良い感情を持てる訳は無く。

しかし目の前の水泳部顧問は私の感情なぞどこ吹く風と言うように

話を続ける。

「アナタもうシャワー浴びた？」

「はい。浴びましたけど・・・・」

というか正直な話、普通浴びる。

部活が終わる頃には心身ともに疲れきっているのだ。そんな状態ならせめてシャワーを浴びて心だけでもいリフレッシュしてから帰りたい。

「じゃ、一緒に帰っても大丈夫ね」

そう言ってにこやかに笑いかける先生。どういう訳か脳内で警報がなっている。「最後まで聞く前に逃げろ」と本能が訴えてくる。が、時既に遅し。

「彼氏がお迎えに来てるわよ」

その場にいた部員全員の耳に入る事態となった。

―――――――――――――――――――――

「明日、絶っ対からかわれるよ・・・・」

「呼ばれて迎えに行った俺の立場は・・・・？」

呻く私の独白に対して姫菱君は的確にツッコミを入れてくる。確か

に姫菱君に罪は無いんだけど・・・・、なんていうか・・・・ゴメン。
昨日の今日だから一人で返すのは心配というマルタ先生は、姫菱君を呼んでくれた。
勝手に決めないでほしいとは思う。が、自分の気持ちもあるし、こうやって黄昏から夕闇に染まりつつある帰り道を二人きりで帰っていると幸せな気分になる。
彼の左右の手にはそれぞれ二つのビニル袋。今日は鍋ということで「四人分」の食材を買った帰りだったらしい。
エヴァンジェリンさんの家に魔術書を運ぶのを手伝ってくれた御礼という事で夕食に呼ばれた。
正直な話、彼の料理の腕は私より上。今日の朝食を作ってもらったときにそれを知った。割ってしまった卵を全て使った豪華なオムレツはもう一度食べたいと思ってしまうほどだった。
一つ欠点を上げるとしたら・・・・その量だろう。
多い。テーブルに所狭しと並んだ料理は最初は食欲をそそっていたが、満腹になるにつれて残すのはもったいないという心理的負担を負わせるものとなった。美味しそうに見えるから余計につらい。
結局、そのほとんどは冷凍して明日の食卓に出すらしい。
なんかもうお母さんみたいになってる・・・・。
台所に立つ後姿といい、残り物を冷凍庫に入れる手際の良さといい、完全に主婦にしか見えなかった。
女子寮の一階ロビーを抜けて、階段を登る。自分の部屋はすぐそこだ。手早く着替えて夕食の準備を手伝わないと。
彼を小走りに追い越し、自分の部屋へ。鍵を鍵穴に差して、回・・・・らない。
鍵を間違ったと思い引き抜く。しかし、その勢いでドアはひとりでに開いてしまった。
鍵は掛けた。間違いない。最後にドアノブを回して確認するのは最早習慣だ。いくら女子寮といっても一人部屋である以上、そこまで

無用心じゃない。
ドアが更に開く。隙間から漏れ出る風がドアを押しているのだ。
おかしい。ベランダの窓を開けたのは修学旅行前だ。風が入ってくるはずが無い。
そのままドアが動き、部屋の中の様子が目に入る。
人は本当に驚くと置物のように固まってしまうらしい。肩に掛けていた水泳道具が入ったバッグが床に落ちても拾うなんて考えが出てこなかったくらいだ。
フローリングを光らせているのは割れたガラスだろうか。無残に引き裂かれ、最早布切れと化したカーテンの奥には歪んだ窓枠だけがあった。
入寮したときから使っていた家具類は壊され、倒されている。原型は留めているものの、もう一度使おうとは思えないくらい壊れている。
時折吹いてくる風で揺れている白い綿や布は、恐らく布団やタンスの引き出しから出ている服だったものだろう。

この状況では答えは一つしかない。しかし現実を受け入れられない自分がいる。思い出したように寒さを感じているのは吹き込む風のせいではない。
歯の根が合わないほどの恐怖に視界が歪み、尻餅をつく。認めたくは無い。無いけど、

部屋が、荒らされていた。

## 第二十一話（後書き）

原作では魔法先生や生徒が正義を盲信しているような描き方なので、少々違う書き方をしてみようと思います。

## 第二十二話（前書き）

スランプ脱出！
って訳ではないですが、何とか書けましたので投稿します。

年内にアキラ仮契約編終わるかな・・・・？

## 第二十二話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

幾重にも施錠された分厚い強化ガラスの扉を三回通ってようやく病院の外に出る。学園長の入院している部屋を見上げると頑丈そうな鉄格子が掛かっており病室内の様子など全く見えなかった。

「すごい厳重な病院やね、せっちゃん」

「ここならじいちゃんも安心して入院できるわ」と隣で感心しているお嬢様。私としては曖昧に返事をするしかない。

『周囲からよく見えるように』との配慮で救急車の車体の色が白から黄色に変わった、とは先程聞いた。

鉄格子や病室のドアの施錠に、警備員どころか医者や看護士まで警棒やスタンガンで武装している理由も『ＶＩＰ御用達の病院だから』と説明があった以上、まあ納得はしよう。

だが、「ここの事は秘密だよ」といって金一封を渡してきたのは一体何なのだろう・・・？

その上、黒塗りの高級車で学生寮の前まで送る。と言われれば不信感は更に募る。

（まぁ、いいか・・・・）

正直、今の私の心の内は雄飛との夕食に向いている。学園長には悪いと思うが好きな人に食事に誘われればどうしてもそっちを考えて

しまう。
部屋を訪問する前に良い肉でも買っていこうか？それともこのお金で今度食事に誘おうか？
そんな事を考えている内に学生寮の前に車が止まったので二人で下りる。
走り去る車を見送っていると、小走りでこちらに近づいてくる人影。
短めのブロンドの髪と風に流れるストレートロングの黒髪の二人だった。
一人は昼に校舎前で会ったマルタ先生、もう一人は私と同じ神鳴流の葛葉刀子さんだった。
しかし、

「・・・どうかしたんですか？」

二人のその険しい顔を見て静かに質問する。二人も私達の姿を見て近づいてきていた。
マルタ先生は私達を見て、刀子さんに視線を向ける。事情を話していいのか逡巡しているらしい。

「大丈夫です。刹那は信用できる人間です」

刀子さんにそう言われ、嬉しさを感じたのは一瞬。『話すべきかどうか』を考える時点で恐らく危険な話なのだろう。そして少なからず私達に関係のある問題だということ。

「大河内アキラさんの部屋が荒らされたそうです。私達は今からそれを確認しに行きます」

顔を近づけ小さな声で告げられる衝撃の事実。直には事態を理解できなかった。

「あなた達は他の生徒達が来ないように見張っていて下さい」

そう言って玄関に入っていく先生達を見てようやく自分も我に返る。

「お嬢様。行きましょう」

未だに驚きから立ち直れないお嬢様の手を取り、急いで後を追う。

黒い獣に襲われたのは昨日で今日はこれ。

どう考えても偶然とは思えない。

（嫌な予感がする・・・・）

当って欲しくない予感を感じながら玄関の扉をくぐった。

---

見張りと言っても実際は必要なかったらしい。大河内さんの部屋の周りに人払いの結界を作るのを手伝っただけで、後は先生方二人で部屋を調べている。

終わるにはもう少し時間が掛かるという事なので大河内さんを保護している雄飛の部屋に行くことになった。

話によると大河内さんの部屋が荒らされているのを見た雄飛がマルタ先生に通報したらしい。

同じ女子として『部屋を荒らされた』事実を大事にしない為に担任のネギ先生には知らせず、同姓のマルタ先生を呼んだのは的確な判断だと思う。しかし、

どうして私は呼んでくれなかったのだろう。

この件だけではない。昨日の襲撃のときも含めて雄飛は私を頼ってはくれない。

『一人で切り抜ける自信があるから』と言われるとそれまでだが・・・・

（少しは・・・・頼ってほしい・・・・）

好きな人の役に立ちたい。

それが正直な感情だ。近くに居られるだけで良いと思っていたが、雄飛に心配され守ってもらっている大河内さんを見ていると、どうしても羨ましく思ってしまう。

従者として傍にいると言ったが、それすらも叶わないのだろうか？

「・・・・せっちゃん・・・・・？」

その言葉に横を見ると心配そうなお嬢様の顔があった。どうやらかなり沈んだ顔をしていたらしい。

「大丈夫です」と言って、気持ちを切り替える。ひとまず大河内さんの様子を見に行こう。

雄飛の部屋の前に立ちドアをノックしようとして、止まる。

やはり緊張する。京都では一緒の部屋で寝泊りしたとはいえ、修学旅行の時とは勝手が違う。男性の部屋にはいるのはそれなりの勇気がいる。

大きく深呼吸してドアをノックする。

「刹那です」

「刹那か。入ってくれ」

ドアの向こうから返事が返ってきたのでドアを開け中に入る。そこには雄飛と大河内さんと

「姫の兄貴・・・・いいかげん色々説明してほしいんだけど・・・・」

まな板の上に乗せられたカモさんがいた。

――――――――――――――――――――

「さて全員揃ったことだし、始めるか」

雄飛は台所から居間へ土鍋を持ってきていた。

居間のテーブルの中央にはガスコンロ。その脇には長ネギや白菜、椎茸や白滝などの具材が入ったザルがあり、雄飛が座っていたであろう場所の前にカモさんが乗ったまな板が置いてあった。

玄関口に立っているのも何なので、そのままお嬢様共々部屋に上がり、席に着く。

部屋の奥には大河内さんが座っていた。

「アキラ大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫、大丈夫」

「心配してくれてありがとう」と、お嬢様の言葉に笑顔を返すその顔はやはり青ざめている。自分の部屋が荒らされたことが相当堪えているようだ。

しかし、自分の目の前の状況に苦笑いしているところを見るに、ほんの少し元気は戻ってきているようだ。

「さて・・・カモ、お前に状況を説明しておこう。先程、大河内アキラの部屋が荒らされているのが発見された」

「ええっ!?荒らされたって・・・アキラの姉さんの!?」

雄飛の口からもたらされる情報に驚くカモさん。対して雄飛は無表情のまま。僅かな嘘も見逃さない刑事のような横顔だった。

「お前は魔法の国で下着を盗んで刑務所に収監されるも、脱獄してここにいる。しかも神楽坂明日菜の下着を寝床にする為に盗んだ事があるらしいな?」

雄飛は言葉と共に視線の重圧をカモさんにかけていく。ここでようやくカモさんはここに呼ばれた理由が分かったらしい。

「い、いやだなあ姫の兄貴!いくらなんでも俺がそんな事する」

「まずは首に切り込みを入れ、血抜きをする」

カモさんの調子の良い反論も、雄飛がいきなり始めた物騒な話に遮られる。

なぜだろう。最悪のレベルで嫌な予感がする。

「血抜きが終わったら今度は喉から股間まで縦に切って皮を剥ぐ」

話の間も雄飛の視線はカモさんから一切逸れない。その光景に苦笑いをしている大河内さんを除いた私とお嬢様は一体何の話なのか分

からない。カモさんの取調べではなかったのか？

「そして腹から両脚、背中、首まで皮を剥いだら頭を切り落とす」

しかし直接話しかけられているカモさんはどういう訳かガクガク震えている。その顔は大河内さんよりも遥かに蒼白に染まり、極大の恐怖に歪んでいた。

「縦に裂いた腹から内臓を取り出したら中を洗う。後は部位ごとに切り分けるだけだ」

私やお嬢様にもこの状況がわかってきた。確かにこれは苦笑いしか出てこない。

テーブルの上に置かれたガスコンロと土鍋のセット。

その脇に置かれた野菜『だけ』の材料セット。

まな板の上に座らされたカモさん。

テーブルを囲んでいる私たちもある意味利用されている。

「なあアルベール・カモミール」

完全に逃げ場を無くした『まな板の上のオコジョ』の前、雄飛はテーブルの下から一つのものを取り出す。

厚い刃と三角形の形状が特徴の、出刃包丁だった。

「『カモ鍋』ってどう思う？」

しかし雄飛が次の行動に移る前にノックの音が聞こえた。雄飛はカモさんから視線を外してドアの方に向かう。

「姫菱君。部屋の検分が一通り終わったので大河内さん達と部屋に

来て下さい」

ドア越しに刀子さんの控えめな声が聞こえた。どうやら夕食はもう少し後になりそうだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「何か分かった事はありました？」

割れたガラスが散乱しているのでスリッパのまま上がる。大河内の顔色はさっきよりも悪くなっている。

現場を保存しなければならないとはいえ、自分の部屋をこんな無残な状況のままにしておくのは少々つらいだろう。

なるべくなら部屋を早く片付けたい。

「・・・・いえ・・・・分かった事はほとんどありません」

声色に悔しさを滲ませた葛葉先生は首を横に振る。

「誰が、又は何が部屋に入ったのか、その目的、時間帯等々・・・・それらの証拠が一切無いのよ・・・・」

忌々しげに割れた窓ガラスを睨みながらマルタ先生が話を続ける。

「アキラ、気落ちしているところ悪いんだけど・・・・何か無くな

っている物とかない？」

マルタ先生の躊躇いがちの声が大河内に掛けられる。大河内は少し怯えたように辺りを見回す。しかし

「わかりません・・・・。でも取られるようなものは置いてなかったので・・・・」

そう言って目を伏せる大河内。その手は強く握り過ぎて白くなっていた。

「すみませんけどこれ以上は・・・・」

そう言って大河内の前に立つように一歩前に出る。これ以上心労を負わせたくない。

葛葉先生も大河内の様子を見てある程度納得してくれたようだ。

「そうですね。これ以上ここを調べても意味はなさそうですし・・・・」

手をかざすと同時、部屋の四隅から札が飛んできて先生の手元に収まる。どうやら精密探査用の呪符の一種らしかった。

マルタ先生に目を向けると同じような結論に達したのか軽く頷いていた。

しかし、大河内を心配そうな目で見た後、とんでも無い事を口にした。

「それで今後の事なんだけど・・・・」

―――――――――――――――――――――

「どうしてこうなった・・・・」

「何ていうか・・・・ゴメン・・・・・」

「私達は監視役です」

「男は狼やからな」

四人で鍋を囲み夜も更けた頃。
俺の部屋にはいつも使っているベッドの脇に布団が敷かれている。
その数三組。
ベッドに大河内。その隣に木乃香の寝床。テーブルを退けた場所に刹那。玄関近くに俺の布団。といった具合だ。

「夜でもアキラを守れる状況じゃないと本人も安心できないでしょ？」

とマルタ先生はひとまず大河内を俺の部屋に泊める事を提案し、

「教師の宿舎は今空きがありません」

という葛葉先生の言葉に俺は反論を返せず、

「じゃあウチらも一緒に泊まるわ」「三人で泊まれば雄飛も手を出せないでしょう」

という発言で木乃香と刹那の宿泊が勝手に決まり、

「わ、私は別にいいけど・・・・」

という顔を赤らめた大河内の言葉に俺は同意するしかなかった。
諦めが入った俺は体を投げ出すように布団に寝転がる。
男の部屋に泊まるとか、教師がそれを許可するとか、色々ツッコミたい部分はあるが何かどうでも良くなってきた。

「お休みー」

未だに騒いでいる三人を無視して部屋の灯りを消す。どういう訳かさらに騒ぎが大きくなった。さしずめ修学旅行の気分なのだろう。
一昨日帰ってきたばかりだろうに・・・・。
早く寝よう。明日は普通に学校だ。
その上、先生方に今日の事についてどういう対応をとるのかも聞かなければならない。
シーツを被って寝る体勢に入る。しかし俺ははじかれたように体を起こす。重要な事を忘れていた・・・・。

「カモ食い損ねた・・・・」

「ホンマに食べる気やったんか!?」

疑いが晴れたカモには秘密厳守の誓いを立てさせた上、釈放したので夕食は鳥団子の鍋になってしまった。
もともとそのつもりで食材も用意していたので別に影響は無かったのだが、残念なのは否めない。

「またの機会にするか・・・・」

「姫菱くん、まだ狙ってるの・・・・？」

「しゃべる動物は食べる気がしないよ・・・・」という大河内。

「美食家としては一度食べてみたかったんだが・・・・」

「お前の職業は学生だろう」

真っ暗な部屋の中、刹那にツッコミを入れられた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

自分が狙われている。
その実感を得たのは一昨日の夜に襲われた時でも、昨日部屋を荒らされていたのを見つけた時でもなく、
四六時中、彼の視線を感じるようになってからだった。
姫菱くんの席は一番後ろにいるエヴァンジェリンさんの隣なので授業中でも斜め後ろから視線を感じた。
昼食は私はゆーな達と、姫菱くんは刹那さんや木乃香さん達と食べていたが、彼は私が視界に入るように席の位置取りをしていた。
そして今ボウリング場でも、

「じゃあ次、俺投げるぞ」

そういってボールを投げる姿は中々さまになっていたが、

ボールの軌道は右に逸れてガターのレーンに吸い込まれるように入っていった。姫菱くんは現在六投目で５０点。
控えめに言っても地味に下手だった。
落ち込む彼を同じチームのゆーなや亜子が慰めているが、チーム内で最下位になっている姫菱くんの心には届いていないらしい。
嬉しい。
それが正直な思いだ。
好きな人が一日中自分を心配してくれる。こんな事をされて嬉しくない女子がいるだろうか？いや、いない。
襲われる事そのものは怖いが、守ってもらえる事が感じられるからか安心感の方がずっと大きい。

（ずっとこうなら良いのに・・・・）

不謹慎だと思うがそんな事を考えている自分がいる。
姫菱くんに頼んで私も魔法使いにしてもらえる契約をしてもらおうかな・・・・？

「アキラー。次だよー」

ゆーなの声で我に返る。他人には見せられない嫌な考えを頭の中からかき消して、レーンの前に立つ。ボールを振りかぶり

「つっ！」

ボールは一直線にガターに入っていった。後ろから落胆の声が聞こえてくる。しかし私は結果を見ている余裕は無い。手首が腫れている。動かすと更に痛くなる。どうやら右手首を痛めたみたいだ。
結局その後の成績は思うように伸びず、一位にはなれなかった。
そして、やはりというか最下位は姫菱くんだった。

―――――――――――――――――――

「ファーストエイド」

右手首が彼の両手に包まれ、その隙間から新緑の光が零れる。
夕暮れに染まるボウリング後の帰り道。手首の怪我を見抜いた姫菱くんは私に回復魔法を使ってくれた。
光の粒子と暖かさが手首に浸透して痛みが散っていく。

（この感覚は・・・・）

思い出す。修学旅行の二日目の夜。押入れの中天井に頭をぶつけた時に、急速に痛みが引いていった覚えがある。

「あの時の・・・・」

「やっぱ覚えてたか」

姫菱くんは苦笑いしながらショルダーバックを肩に掛け直す。
確認するように手首を動かしても捻ったとは思えないほど軽快に動く。これなら明日の部活も問題なさそうだ。

「ユウ、ええんか・・・・？」

後ろから、窘めるような木乃香さんの声が聞こえた。その隣の刹那さんも少し睨むような視線を向けてくる。

「今回だけ大目に見てくれよ・・・・。そこまで回復魔法は多用しねえよ・・・・」

二人からの抗議の視線を煙に巻きながら寮への道を四人で歩く。
今日が終わりを告げる夕暮れの中、世界樹広場に差し掛かる。
周りには部活帰りの生徒や買い物袋を提げた主婦が通り過ぎていく中、姫菱くんが不意に立ち止まる。
その視線の先には二人の女子生徒。
一人は本校中学の制服を着た小柄な女の子で、もう一人は聖ウルスラ女子高の制服を着た、

「・・・佐倉愛衣、と高音・D・・・バットマン先輩でしたっけ・・・・？」

「グットマンです！ヒトを勝手にコウモリ男にしないで下さい！」

いきなり名前を間違われる先輩。何かトラウマありそうだな・・・・。
まあ、その黒い制服もあってそう言われると見えなくもないけど・・・。
二人はそのままこちらに近づいてくる。佐倉さんはともかく、高音先輩の眉間にはシワが寄っているのであまり良い予感はしない。

「姫菱さん。一昨日の件もあるのですから、この時間帯の外出は」

「わかってますって。今帰る」

高音先輩が怒っているのも、姫菱くんがへらへらと愛想笑いを返していたのも、途中までだった。
二人は一瞬息を呑むのと同時にはじかれたように振り返る。しかも

反応したのは二人だけではない。

「雄飛・・・・！」

「お姉様！これって・・・・」

佐倉さんと刹那さんもほぼ同じタイミングで動く。四人はそのまま私と木乃香さんを囲んだ円陣を組む。

「先輩。襲われるのは夜に出歩いているような生徒じゃないんですか？」

「獣の事情は獣に聞いて下さい」

周りに睨みをきかせながら声を掛ける姫菱くん。高音先輩も視線を姫菱くんに一切向ける事無く言葉を返す。

「ユウ・・・この魔力の感覚って、まさか・・・・」

「ああ・・・囲まれてる」

その言葉とともに円陣が少し狭まり六人に緊張が走る。
でも姫菱くんの言う通り確かにおかしい。一昨日襲われたのだって夜に姫菱くんと一緒に歩いていたからだ。
だけど今は夕暮れだし、公園の中には人がいる。
魔法は一般の人には秘密だからこういう状況だと黒い獣は襲ってこないとばかり思っていた。
まって、おかしい、何か変だ。
私は変な思い違いをしていないか・・・？
周囲を見回す。周りには普通の人がいる。

部活帰りの高校生の三人組。買い物帰りの主婦。作業服に身を包んだ男性二人組。世界樹の近くにあるベンチには楽しそうに談笑しているカップル。ふとした一日の、日常の風景だ。何の問題もない。

「ねえ・・・・姫菱くん・・・・・」

「何だ・・・・・？」

いつもより少し険しい声が帰ってくる。本当は邪魔したくはないけど・・・・最悪の考えが頭をよぎる。

「一昨日の獣は最後に黒い泥になってたよね・・・・」

あの獣が泥から作られていたら？
その泥は毎回獣の姿になる必要があるのだろうか？
ありえないとは思う。しかし可能性がある以上、意を決して考えを口にする。

「おい・・・・まさか・・・・・」

私から見て高校生は前方にいる。
主婦は右手に、作業員の二人は左方向に。
そしてカップルが座っているベンチは、後ろ。

「私達・・・・囲まれてるよ・・・・・」

その光景は見ていて面白いものでは無かった。正直思い出したくない部類に入る。
笑いあっていた高校生達の顔が表情そのままに溶ける。
作業員二人が石畳に倒れて、黒い染みが一気に広がる。

主婦の持っていた買い物袋が落ちるとそのまま黒い泥になって、主婦の足に吸収されていく。
後ろを見ると半分溶けた姿でうずくまっていた。
その後の変化は一瞬だ。
粘土で作られた人形を別の姿に作り変える、小学生の工作の時間のような作業。

それがさっきまで人間を形作っていた黒い泥で行われた。

突き出た鼻、口の端から見える犬歯、鋼のような体毛、一昨日同様大型バイクに近いその体躯。
身体の作成が終わった証なのか遠吠えが連続で世界樹広場に響き渡る。
一昨日と恐らく同じ狼のような黒い獣。都合八頭が、
私達六人を取り囲んでいた。

## 第二十二話（後書き）

因みにネットではオコジョの調理方法は載っていませんでした。
どなたか知りませんか？
雄飛が食べるかどうかは別として・・・・。

## 第二十三話（前書き）

話を作ったら高音も愛衣も意外に強くなった・・・・？
気分を害したら申し訳ございません。
第二十三話御覧下さい。

※あとがきにアンケートがありますので、できればお答え下さい。

# 第二十三話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

獣の唸り声が全方向から聞こえる。静かな威圧感が自分達が狩られる側にいるのだと否が応でも感じさせる。
猟犬達は周りを回りながらゆっくりと距離を詰め、その爪を、その牙を、突き立てる瞬間を窺っている。

「『しかし　まわりこまれて　しまった』って、こういう状況なんだろうな・・・・」

「いや、別に私達逃げてないけど・・・・」

「『いきなり　おそいかかってきた』じゃないんか？」

「お嬢様。まだ膠着状態です」

「貴方達！うるさいですわよ！」

「お姉さま・・・静かにしないと・・・・」

高音の大声に獣の群れが更に警戒を強める。獣達の鼻の皺が深くなったのを見て六人に再び緊張が走る。
雄飛の前方には獣が三頭、その左方向にいる刹那の前には二頭の獣。愛衣は元は主婦だった黒い獣と睨み合い、雄飛と背中合わせになっ

ている高音はカップルだった獣達と相対している。
凄まじく厄介な状況だ、と軽口を叩きながら雄飛は思う。
修学旅行の時のよりも単純な戦力は多いが、あの時はその場にいた全員がそれなりに戦えた。
魔法使いとして目覚めたと言っても木乃香は未だ実力不足。大河内にいたっては完全な素人だ。
そして周りを取り囲む獣が吠え声を出し合っているのが嫌に気に掛かる。
狼を始めとした群れで行動する動物は集団行動での狩りを行う。
中州で戦った妖怪軍団よりも数は少ないが、全頭が一斉に飛び掛ってきたら中心の二人を無傷で逃がせる保証は無い。
どーしたものかと考えている内に、雄飛の思案顔を隙と見たのか、一頭が石畳を蹴立てて疾走。
大口を空けてそのナイフのような牙を肉に突き立てんと飛び込んでくる。
しかし、次の瞬間。

「来たれ」

獣の跳躍は一歩避けた雄飛の左脇を抜け、その後ろのアキラと木乃香の間を飛び、高音の前方に着地、できずに転ぶ。
石畳に内臓を撒き散らしながら倒れた黒い体躯は下顎と四つ脚、胴体の下半分だけしか残っていなかった。
頭部をはじめとした『上半分』は慣性のままに飛び、滑るように断面で着地。そこだけだと犬が地面に半分だけ埋まっているという奇妙な状態に見えるだろう。
目の前で起きた驚愕の光景に囲まれている状況も忘れて高音は振り返る。
そこにあったのは右腕を水平に掲げた雄飛の背中と、握られた蒼と白の装飾が走る剣身。

気や魔力を集中させるとそれを見越した獣が一斉に襲ってくる可能性がある以上、下手な行動はできなかった。
だから互いに相手の出方を窺っていたのだし、この奇襲に雄飛は肉体強化をしている余裕はなかった。
事実、雄飛は自身にそれらの強化を一切施していない。ただ、腕力と抜刀の技量、そして絶対零度の剣の鋭利さが生み出した一閃が放たれ、口の端を境に黒い獣を横に両断したのだ。
同胞を一瞬で惨殺された獣達に動揺が走る。囲んでいたのは食われ殺されるだけの獲物ではないとようやく気付いたらしい。

「さあかかって来い犬公！」

剣士の掲げたカードが輝き足元に魔法陣が出現。
鎧の下に着る肩衣の黒いさざ波が雄飛を身体を包むと同時、鮮烈な赤が吹き上がる。緋色の炎が走り朱色の金属が全身を包んでいく。
炎が頭部に覆い被さり、遅れて獅噛の兜が現れる。顔に装着された老翁の面頬の奥の表情は更に不敵に笑っていた。
鎧を纏う雄飛を横目に刹那は夕凪を正眼に構え間合いを計る。高音の両脇に影が立ち上り、白い仮面の使い魔が次々と現れる。愛衣もカードから出てきた箒を突き出し、呪文の詠唱を開始。
出鼻を挫かれた獣達の隙を逃さずに四人は迎撃の準備を行う。

「飼い主に代わって俺が躾してやる！」

『サナダ』の全身甲冑を纏った雄飛は左手を掲げ、手招き。
挑発に乗ったのか、獣の群れは我先に飛びかかってきた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

神鳴流『斬空閃』

こちらに向かってくる狼の一頭に向かって気の斬撃を飛ばす。しかし射線を読んでいたのか寸前で方向転換。その一撃は石畳に刻まれるだけで終わった。

狼は避けた勢いを殺す事無くそのまま弧を描いてこちらに向かってくる。しかし牽制の攻撃を避けた分だけ手前の狼との連携が遅れる。刃を返し、単独で向かってくる獣を迎撃。開けられた口腔めがけ刺突を放つ。

カウンターで放たれた夕凪の切っ先は狼の上顎に突き刺さる。突進の勢いのまま狼が前進した結果、頭蓋を貫通し後頭部から抜け出た。どれだけ大きかろうと犬や狼は一頭ずつ相手にできれば脅威では無い。前脚がほぼ縦にしか振れない骨格の為、猫や虎のように爪を使った横殴りの攻撃は殆んどしてこないのだ。

一番最初に来る攻撃が牙や突進と分かっていれば、高さを合わせてカウンターを急所に叩き込めばいい。

野太刀を上に振り抜き、上向きの刃は狼の鼻面と頭部に縦の線を刻みこむ。頭が二つになった狼はそのまま地に伏す。

返す刀で私の脇を抜けようとする獣の首を上から下へ一刀両断。頭だけになった獣はあらぬ方向へ飛んでいき、地面に落ちた。

「ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の徴よ」

声に振り向くと箒を掲げた佐倉さんに向かって三頭が一気に飛び掛るところだった。

「わが手に宿りて、敵を喰らえ」

詠唱が続く中、雄飛を避けて一番弱そうな人を狙う狼達。しかしそれを見越していた魔法使いの罠に嵌る。

「『紅き焔！』」

喚び出された火球は敵に向かって飛ぶ事無く足元に停滞。佐倉さんは箒を旋回させ、一抱えもある炎の塊を敵に向かって掃くように撃ち出すっ！

「『風よ！』」

爆発寸前の熱量が風魔法と組み合わさり、炸裂。術者前方の空間を炎が塗り潰すと同時、爆音と共に発生した衝撃波が獣達に襲いかかる。

距離を詰めていた狼達は風の魔法によって加速された火炎の散弾をまともに受け、吹き飛ぶ。

しかし、黒が紅蓮の炎を突き抜けてくる。一頭だけとはいえ爆裂、風の刃、火球の散弾の三重攻撃を受けてなお、狼は生きていた。

「えっ・・・・！？きゃあっ！」

援護しようにも私の距離と立ち位置では間に合わない。

闇色の体毛を更に黒く焦がし、自身の身体から煙を上げながらも佐倉さんに一矢報いようと狼は肉薄する。

だが、

「伏せ」

飛びかかった獣の軌道は寸前で垂直落下。言葉と共に石畳に頭から突き刺さる。
獣の頭部と一緒に埋まっているのは朱色の手甲。そこから伸びるのは篭手に包まれた腕と、大袖の装甲が装着された肩があった。
佐倉さんに飛びかかるその瞬間。雄飛が横から狼の後頭部を掴み、そのまま地面に叩き付けたのだ。
初めて見たがあの鎧が雄飛のアーティファクトのようだ。

「中々便利な魔法だ。と褒めたいところだが・・・油断しすぎだな」

雄飛が石畳から左手を抜くと、そこには頭を無くした狼の伏せた身体だけが残る。
佐倉さんは雄飛の言葉に申し訳無さそうに縮こまっていた。

「そちらも終わっていましたか」
背の高い人形達を両脇に従えた振り返る。やはりと言うかその姿に一切の乱れは無かった。
後方には更に四体の人形が、そしてその下にはあの黒い狼。左右から伸びる手やマントが鎖となって四肢と胴体、口を完全に拘束し押さえつけていた。

「捕まえたのですか!?」

「その発想はなかったな・・・・」

「今は少しでも情報が欲しいですからね」

驚きとも呆れともつかない雄飛の声に高音さんが少し誇らしげな声で答える。

確かに魔物の一体でも捕獲して調べれば色々分かることもあるだろうが、捕獲できるとは思わなかった。
暴れる狼を楽々と地面に押さえつけている影の人形。その横には獣の死体。体中に空いた穴から察するに剣か槍で全身を貫かれたのだろう。
影を実体化させる戦闘スタイルは攻撃や防御だけでなく、人形タイプで召喚すれば敵の捕縛等も容易に行える、応用力に富んだ魔法。
そして、威力はともかく複数の敵への攻撃にも瞬時に対応した佐倉さんの魔法制御。
二人とも学園の治安を守る魔法生徒の名に恥じない実力の持ち主だった。

「お嬢様、大河内さん。お怪我はありませんか？」

敵には一切触れさせなかったから怪我は無いはずだが一応聞いておく。見ると怖がってはいたが特に問題ないようだ。
血振りをして納刀する。周囲に敵の気配は無い以上、ここに留まっていても意味は無い。早々に移動しよう。

「せっちゃん」

右手に暖かな光を感じた。見ると右手の甲から手首にかけて傷が走っていた。そしてそこに灯る魔力の光。
お嬢様のかざした両の手から溢れ出た癒しの光が傷を徐々に埋めていく。

「お嬢様・・・・これは・・・・・」

驚きで言葉が続かない私にお嬢様が答えてくれる。

「修学旅行の感覚を思い出してたら・・・・できるようになったんや」

言い終わらないうちに傷が塞がる。指摘されるまで気付かなかった程度の傷だったが、完全に消えていた。

『コイツの魔力の本質は癒しだ。術式で縛らずとも、引き出すだけで周囲の人間の傷を治す効果がある』

雄飛と仮契約した時のエヴァンジェリンさんの言葉を思い出した。速さは雄飛の魔法には遠く及ばないものの、確かに傷は消えて、動かしても問題ない。

「初めてやったけど、成功してよかったわ・・・・」

笑顔で私の手を握るお嬢様。私にも覚えがあるが、自分の力が誰かの役に立った事が純粋に嬉しいのだ。

「ありがとう。このちゃん」

昔の呼び方で呼んでしまったのは、友人としてお礼を言いたかったからだろうか。よく分からない。

だけど確かに、今までの溝がほんの少し埋まった気がした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

左手を振ってこびり付いた獣の返り血を飛ばす。獣の頭蓋とその中の脳漿を潰した感触が未だに残っていて気持ち悪い。

「大河内・・・・？」

戦闘も終わったので振り返ると、大河内の表情が曇っていた。俺の呼びかけにも答えない。

「大河内！」

「えっ！な、何！？」

少し声を大きくして再度呼びかける。二回目の呼びかけでやっと我に返ったのか、本気で驚いている。

「大丈夫か？、どこか怪我でもしたか？」

「ううん、何でもない」と手を顔の前で振り、自らの無事をアピールする大河内。

しかしさっきまで、俯きがちに木乃香を見ていたその姿は何かを堪えている様だった。しかし今は本人の言葉を信じる他ない。

「都合七頭、終わりましたわね」

声の方向に向き直ると高音先輩と箒を抱えた佐倉がいた。その背後には捕らえた獣を戦利品のように揺らす人形がいた。

捕獲された獣は人形達に抱えられた上、影色の鎖で尻尾から首まで縛られ簀巻き状態になっていた。口は特に警戒しているのか、縛った鎖の上下左右に小さな魔法陣が浮いている。どうやら拘束用の鎖

を強化する魔法らしい。

「私達はこのまま先生方を待ちますので、あなた方」

「ちょっと待って」

高音先輩の言葉を強めの声で遮る大河内。高音先輩が眉根を寄せて睨むも、周囲を見ている大河内は無視。
緊張感を孕んだ顔がせわしなく辺りを見回していく。先輩達はその行動についていけないみたいだが、俺は大河内の視線を追っていく。
見つめる先には獣の死体。

(・・・・ちょっと待て)

どうして死体が残っている？

一昨日の夜は倒したら消えたはずなのに。

順々に見回す大河内の視線は最後に拘束されている獣に行き着く。
それは俺が最悪の考えに行き着いたのと同時だった。

「全員ここから離れろ！」

俺は反射的に面頰を首元まで引き下ろし、叫ぶ。
その瞬間、周囲は闇に塗り潰された。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

夕闇に染まりつつある世界樹公園広場。そこに横たわっていた七つの死骸。
横に両断されたもの、全身を貫かれたもの、頭や首を切られたもの、爆裂で四散したもの、頭部を圧搾されたもの。
それぞれ四人の攻撃を受けて死んだ黒い獣の成れの果てだった。
しかしその死骸の色は黒よりも暗い闇色の泥に変わり、爆発的に膨張。
七箇所から間欠泉のように闇が吹き上がり、雄飛達の周りに泥の柱が立つ。

ゥオオーーーン

空を震わせるような獣の遠吠え。それはすぐ近くで聞こえたものだった。
見ると拘束されていたはずの獣が口に巻かれていた鎖を魔法陣ごと引き千切り、夜空に向かって吠える姿があった。
七本の泥の柱が弧を描き生き残っていた獣の上空に集まってきていた。吠え声に吸い込まれるように空から落ちてくる泥の滝を一身に浴びる。
自身の直感に従った雄飛はアキラの腰に手を回し、跳ぶ。一瞬遅れて刹那も木乃香を抱えて後退する。
捕獲した獣よりも自分達の安全を優先と判断した高音も愛衣の襟首を掴んで後ろに下がる。しかし獣の一番近くにいた二人は逃げ切れず泥の濁流にのまれてしまう。
逃げようにも身体に付いた泥が触手のように纏わりつき、蟻地獄のように濁流の中心部に引きずり込んでくる。

「高音さん！佐倉さん！」

雄飛に抱えられたアキラがその光景に悲鳴を上げる。
辛くも闇色の泥にのまれるのを逃れた雄飛達は後方の階段近くに着地。周囲の死骸から吹き上がり、中心に向かって落ちる泥の滝のせいで迂闊に近づけない。

「刹那、援護！」

疾走。アキラを地面に下ろした雄飛は滝に向かって一直線に走る。
掲げたカードが輝き『だっこソフィ』を展開。ツインテールの愛らしい人形が左肩にしがみつく。
距離を詰めてくる雄飛に気付いたのか、泥の塊が持ち上がり、大量の触手が出てくる。
鎌首が持ち上がり先端が鋭く尖った瞬間、雄飛に向かって飛んでいく。

（其は耐え無き息吹！）

「乱れ飛べ翠影！」

鎧武者は掲げた剣の切っ先に魔法陣を描く。連動して左肩の人形も詠唱を開始。既に触手が雄飛の眼前まで迫って来ていた。

「フォトンブレイズ！」「ウィンドニードル！」

爆発。雄飛を貫かんとしていた触手が届く寸前、炎や爆裂で焼かれ吹き飛び、灰や泥の飛沫となって脇に散っていく。
続けざまに今度はだっこソフィが『ウィンドニードル』を発動。
雄飛の前方に発生した火球が大きな空洞を作り、その空いた空間を

風の刃が走る。雄飛の前進を止めようと更に伸びてくる触手を切り裂き、雄飛を援護する。

「裂壊桜！」

石畳に突き立てたアイスコフィンから泥の滝に向かって桜色の衝撃波が走る。二人をのみ込もうとしていた闇色の波濤を切り裂き、散らす。

見るとそこには影色の球体があった。高音は逃げられないと判断した時点で影槍で編んだ檻を作り、泥の津波にのまれるのを防いでいた。

だが檻は既にひび割れ、今にも押しつぶされそうだ。割れ目から覗ける影使いの顔は防壁の維持と恐怖で蒼白になっていた。

次の太刀を放つ。繰り出される刺突と共に桜色の闘気が一直線に伸び、今度は檻に纏わり付いていた泥を吹き飛ばす。

「伸ばせ！」

雄飛は最低限の言葉で考えを伝える。振り向いた高音は声の方向に影槍を射出。

雄飛は執拗に伸びてくる触手を切り裂きながら目の前まで届いた影槍を左手で掴み、次に納刀し自由になった右手で帯を握り締める。

両腕と背中の筋肉が鎧を内側から押し上げるほどに膨張した瞬間、雄飛は一気に影槍を引く。力任せに引っ張られた影の檻は一本釣りされた鮪の様に空に高く舞い上がる。

獲物を逃がすまいと伸びる闇色の波濤。しかし触手が檻に触れる瞬間、夜空に銀の線が引かれた。

地面から空に向かって放たれた十数条の銀光は、影の球を絡め取ろうとした闇に突き刺さり断ち切っていく。

落下してくる檻をキャッチした雄飛はそのまま後退。球体のヒビに

手を掛けそのまま力任せにこじ開ける。

「無事か！？」

卵の殻を割るように檻を破壊すると二人がいた。しかしその瞬間異臭が鼻を突く。

顔を歪ませ歯を食いしばる愛衣の身体から立ち上る匂いだった。泥の侵食を受けたのか腹から両脚までの肌がドス黒く変色している。シャツや靴下も焼けたように穴が開いていて最早服の役割を果たしていない状態だ。

肩で息をしている高音の呼びかけにも反応できないのか激痛に身を捩って耐えている。

「愛衣！！」

悲鳴のような高音の声を聞きながら雄飛は愛衣に駆け寄る。

「ソフィ！」

「浄化せよ！アンチドート」

だっこソフィは雄飛の左肩から愛衣の肩に飛び移り、回復術を発動。二重の青緑のリングが回転しながら患部を照らしていく。

同時に泥に犯された服を剥ぎ取る。スカートやショーツをむしり取る行為に少々抵抗があったが治療の為だと割り切る。

解毒用の回復術が効果があったのか少しずつ脚や下腹部に肌色が戻ってくる。この世の終わりのような表情で見ていた高音の顔に安堵の笑みがこぼれる。

「後は任せろ」と言わんばかりに親指を立てるだっこソフィ。頼もしいその姿に頷いた雄飛は立ち上がる。

振り返るとそこにあったのは大小の刀を持った剣士の後姿。その周囲には幾つもの短刀が浮かび、威嚇するように切っ先を泥の集合体に向けていた。
距離を取りはしたが、泥の集合体は未だ俺達を諦めていないのか触手を構えこちらを警戒している。
闇色の泥と睨み合っている刹那の隣に立ち、間合いを計る。

「アーティファクトが匕首（あいくち）とはね。極道にでも目覚めたか？」

「雄飛こそ。その鎧兜、どこの五月人形かと思ったぞ」

軽口を叩き合いながらも二人で敵の出方を窺う。泥の塊は伸ばしていた触手の槍もしまい込んで完全に静止した。
だがそれも一瞬。再び泥の粘土細工が始まる。だが今度は規模が大きい。一頭一頭が大型バイクのような大きさの獣を形作っていた泥が今度は八頭分もあるのだ。
収束した泥の塊から出てくる獣。今度は犬だった。しかし大きさが今までとは桁が違う。
地を踏み締める四肢は電柱ほどの太さ。踏み出した一歩で石畳を削る音が雄飛達のいる場所まで聞こえる。
遠目で見ても分かるほどの巨体。恐らく体高だけで約２ｍ以上あるだろう。全長からして大型のトラックほどもある巨大な犬。
全身の体毛は金属質の輝きを帯び、両肩から生える毛は逆立ち、まるで襟のようにも見える。
長い犬歯は口に収まりきらず、口唇の隙間から涎と荒い息が絶え間なく出ている。
そこにいるだけで威圧感を撒き散らすような巨大な獣が出現した。

「『くろいけものは　がったいして・・おおきなけものが　あらわれた！』ってどこのモンスターだよ・・・・」

険しい顔をする刹那の横で、緊張感の欠片も無い雄飛のツッコミが入った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　side◇

「お待たせしました」

言葉と共に横に並ぶ高音先輩。横目で確認すると黒を基調とした制服ではなく、胸元が空いたドレスのような服装に変わっている。
更にその背後には一昨日の夜にも見た巨大な人形の上半身が浮かんでいた。

「後ろの三人は？」

確認したくても後ろは振り返れない。飢えた獣に背を向けようものなら一気に飛び掛ってくる。

「世界樹の高台のところまで下がらせました。愛衣の治療には近衛さんも手伝ってもらっていますが・・・・」

「本格的な治療を考えると、急いで『アレ』を片付けなきゃいけませんね・・・・」

エヴァンジェリンの話では木乃香のアーティファクトは完全治癒、

毒や火傷の治療などといった回復系に特化したものらしい。
自身の魔力が持つ治癒効果を増幅させるタイプなので訓練無しでは使えない、とのこと。
刹那の傷を治すような軽い怪我なら魔力を放出するだけで何とかなるが、解毒も含んだ怪我の治療はだっこソフィがいても完全にできるかは分からない。
一刻も早く回復専門の魔法使いを呼ぶか、病院に連れて行かなければならないだろう。

「しかし・・・まさか『ガットゥーゾ』ですか・・・・」

苦い言葉を搾り出すように高音先輩が呟く。その顔は出会いたくなかったといわんばかりに眉根が寄っていた。

「知ってるんですか高音先輩？」

「まさかあの犬・・大きくなりすぎて、飼えなくなったから捨てたとか・・・・そんなオチですか？」

「確かエフミドの丘と呼ばれる山岳地帯に生息する凶暴な魔獣です。幼体程度なら私ひとりでも倒せますが・・・・」

「そもそも魔法世界の魔獣をどうやって・・・・」と、俺のボケを無視して説明を続ける高音先輩。ちょっと傷ついた。
睨む先には全長５ｍはあろう巨大な魔獣。話から察するにあれほどの巨体を相手にしたことは無いのだろう。

「高音先輩。残りの魔力から考えて、どの程度戦えますか？」

俺の指摘に息を呑む影使い。溜息をついた後、首を振り申し訳なさ

そうに言う。

「正直なところ・・援護の真似事が精一杯です・・・・。奥の手の使い魔を出してはいますが・・・・」

「期待しないでくれ。と・・・・」

言葉を引き取り言うと悔しそうに頷く。

それもそのはずだ。濁流のような泥の攻撃を防ぎきるほどの高密度の影魔法の防壁を全方向に展開していたのだ。

限界を超える魔法の発動で魔力が尽きていてもおかしくない。

ゆっくりとガットゥーゾが左に動く。それに合わせて俺たちも円を描く様に歩を進める。

敵の狙いは完全に俺達に移ったようだが、警戒するに越したことはない。常に敵の弱点を突くのが戦いの基本である以上、ヤツがいつ木乃香達に向かわないとも限らない。

鎧に突き刺さるような濃密な殺気が放たれる。対抗するように首まで垂れ下がっていた面頬を引き上げ、気合を入れ直す。

獣が身体をたわめた瞬間、疾走。一気にこっちに突っ込んできた。

その体躯は巨像のようでありながら鈍重さなど感じさせない、軽やかな走り。俺達は風のような突進を左右に分かれて回避する。

だが体勢を立て直す暇も無く再びの突進。石畳をドリフトしながら方向転換したガットゥーゾは一直線にこっちに向かってくる。

隣の高音先輩の事も考えると、ここで守勢に回ると危険と判断。俺も一気に距離を詰め撃って出る。

ガットゥーゾが小さな跳躍と共に左前脚を振り下ろす。顔めがけて降ってくる鉄槌のような一撃を灰銀色の鞘で受け止める。

重い衝撃に耐える暇も無く、続けざまに繰り出される右の脚。その爪は怪しく緑色に濡れていた。

毒だと判断する前に身体が動く。俺を押さえ込む左の爪を外に逸ら

しながらアイスコフィンを抜刀。絶対零度の刃が死神の鎌のような爪と、猛毒の一撃を弾く。
そのまま追撃を放とうとしたが猛烈に嫌な予感が脳内を駆け巡り、本能のままに後ろに飛ぶ。
だが逡巡した分、敵の攻撃が先になった。俺の後退より一瞬早く、開かれた獣の顎が襲い掛かり左肩に喰らい付くっ！
巨大な口が閉じられた瞬間、鎧の装甲、肩の筋肉と肩甲骨を太い犬歯が表と裏から貫通する。
装甲と骨が砕ける不快な音が聞こえたが、あまりの激痛に声も出ない。だが、ガットゥーゾの攻撃はまだ終わっていない。
犬が人形やおもちゃを口に咥え振り回す行動。
それが本当の人間で行われた。
獣の顎の力と首の筋力が俺の体重を上回った瞬間、身体が浮き上がりそのまま振り回されるっ！

「ガッ、アアアアッ！！！」

「雄飛！！」「姫菱さん！！」

左肩を引き千切るような激痛と地面に叩き付けられる衝撃に視界が真紅に染まる。二人の叫びも俺の口から出る絶叫で聞こえない。
俺は反射的に「フォトンブレイズ」を紡ぐ。大きな口元に剣を突っ込み、発動。爆裂と衝撃波が獣の咥内で発生。口を強制に開かせる。
ゼロ距離での火炎魔法が俺の肩に更なる激痛を生むが無視。このままでは左腕が丸ごと喰われてしまう。
一瞬だけ無重力を感じた。その後、体を引き抜くような感覚。
振り回されていた状態で強引に口を開けさせた為、俺の身体は放り投げられた形になっていた。
壁かどこかに叩き付けられる衝撃を全身で感じた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

鞭のように振られる長く太い尻尾を夕凪で受け止める。重い一撃に思わず後ずさる。
刃を切り返して切り飛ばそうとするも、鋼のような体毛に阻まれてしまう。踏み込み無しの一撃では弾くことしかできない。
左腕に激痛が走る。鞭の先端が掠めたのか、返しきれなかったのか。二の腕部分まで大きく切り裂かれ、シャツに赤が滲んでいた。
迫ってくる巨体を横に転がって回避。そのまま後ろに大きく飛んで距離を取る。
高音さんの絶妙な援護がガットゥーゾの追撃を阻んでくれるが、止めるだけだ。魔力残量が心許ない影槍では一瞬の牽制にしかならない。
横目で雄飛が飛んでいった方向を確認する。
高台への階段近くに吹っ飛んでいった雄飛の事はこの上なく心配だが、助けには行けない。
まともに戦えない高音さん一人にこの魔獣を任せるわけにはいかないし、最悪避難したお嬢様たちのところに向かう可能性がある。
何より雄飛があの程度の攻撃で死ぬわけが無い。
注意を私達に向けさせた隙に奇襲を仕掛ける。くらいの事は考えているだろう。
今は戦闘に集中。毒の爪で攻撃してくる以上、迂闊に接近できない。
カウンターを狙って攻撃をしていくしかない。
高音さんと二人でガットゥーゾを囲んだ状態での睨み合い。周囲の緊張が高まる中、

「ピッチャー第一球、投げましたぁー！！」

明らかに場違いな声が聞こえた瞬間、轟音と共にガットゥーゾの巨体がくの字に曲がった。

横手に吹っ飛んでいく魔獣。そして私の手前に大きな立方体が金属の悲鳴を上げながら転がる。

「・・・・コカ・〇ーラ・・・・？」

立方体の横には有名な清涼飲料水会社のマークがあった。

ガットゥーゾの横っ腹に突き刺さったものの正体は私よりも背の高い自動販売機。

中の商品も考えると７００～８００ｋｇ近くある自販機がぶつかったのだ。幾ら巨大な魔獣とはいえ、無事では済むまい。

「審判。判定は？」

飛んできた方向に振り向く。誰が審判だ。

確かに階段の近くには自販機が幾つかあったが、あんなものを投げるなんて信じられない。が、信じるしかない。一体どれほどの剛力の持ち主なのだろう。

それでも隣にいるだけで頼もしさを感じる。軽口に笑いと嬉しさが込み上げる。

戦闘中とはいえ、ああやっぱり私は彼が好きなんだな。と再確認させられる。

多分顔には出ていただろうけど、言葉には出したくなかったので、

「・・・・デッドボール」

不機嫌を装って答えた。
バレバレだったのか、笑われたのが少し悔しい。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

「紡ぎしは平穏、痛み忘るる光の奇跡に名を与うる！ハートレスサークル」

高音も集まった状態で回復系法陣術が発動。描かれた弧方陣がドーム状の光の空間を形成。光に包まれた三人の全身にあった大小の傷が新緑の燐光が塞いでいく。
しかし、雄飛の肩の傷はそうもいかない。
大部分は治癒されたとはいえ、ガットゥーゾの大顎に砕かれた肩甲骨や鎖骨は未だに折れたまま。
砕けた鎧の下に見える長い犬歯が作った穴は塞がったものの、鮮血が雄飛の左半身を紅に染めていた。
『サナダ』の装甲が無ければ左肩は振り回された時点で千切れ飛んでいただろう。

「不用意な接近戦は危険ですね。涎でベッタベタにされます」

自らの負傷など気にも留めていない雄飛の軽口。慣れていない高音は呆れた表情しかできない。

「雄飛、手はあるのか？」

起き上がるガットゥーゾを警戒しながら質問を投げかける刹那。

「怖いのはあの顎だけだ。だから・・・・」

そう言って雄飛は言葉を区切り、少し考える。出た結論は、

「囮」

そう言って高音を指差し、

「奇襲」

刹那を指名し、

「止め」

最後に自分を示す。

「で、行こう。これ以上時間かけてられない」

ガットゥーゾとの戦闘が始まって結構時間が経っている。愛衣の治療の件もそうだが、雄飛の肩の傷も重傷だ。一刻も早く片付けて、本格的な治療をする必要がある。

「――――グォオオオ――――」

夜の大気を震わせる咆哮。突然吹き飛ばされた事が余程許せないのか、激昂しているのが手に取るように分かる。

雄飛は先ほどの奇襲が上手くいった事に笑みを浮かべる。血が頭に

上った敵ほど罠に掛かりやすいものはない。
後は倒すだけ。そう結論づけた三人は一気に距離を詰める。
高音は影槍を連続で放ちながらガットゥーゾの真正面を捉える。
あの巨体で広い公園内を走り回られては、速さで劣る私達は勝てない。最初に敵の動きを止める必要がある。
そのための「囮」だ。
敵の間合いに入った影使いの顔目掛け振り下ろされる無慈悲な爪。
『黒衣の夜想曲』の拳が何とか受け流すも大きく体勢を崩す。
獲物の致命的な隙を見つけたガットゥーゾは血の滴るような笑みを浮かべ、大きな口を開ける。
恐怖に歪む顔を飲み込み、その牙を柔肌に突き立てた。しかし口の中の感触は霞を噛んだような感覚。
閉じた顎の範囲に入っていた『黒衣の夜想曲』の上半身が煙のように消える。その後ろにいたのは、突き出した両腕に大量の影槍の帯を絡めた高音・D・グットマン。
残りの魔力ではまともな戦闘ができないと判断していた彼女は自分そっくりの影の人形を作り、自分はその後ろで影の使い魔を有線操作していたのだ。
顔を前に突き出した形でガットゥーゾの動きが一瞬停滞。
自分の奥の手を囮として使うのは屈辱だったが、残り二人の狙いが分かっているからこそこの役を引き受けた。
高音の背後から出てくる赤い影。帯刀状態で疾走する雄飛はそのままガットゥーゾの側面に回り込む。
先ほどの恨みも込めて、もう一度噛み殺そうとするガットゥーゾ。
しかし最後の一人が何処にいるのか確認するべきだった。
鼻先に衝撃、そして激痛。ガットゥーゾは自分の視界全体に敵だった女を見た。そして理解した。何をされたかを。
刹那はガットゥーゾの顎に夕凪を突き立てる。上空から全体重を乗せた兜割りは上下の顎を貫通し石畳に突き立ち、顎の開閉を不可能にしていた。

脚が前にしか振れず、尻尾の鞭は間に合わず、頭を縫い止められたガットゥーゾは側面にいる雄飛に対して一切攻撃できない状態に陥る。
雄飛の技に巻き込まれないように刹那が後方宙返りを決め距離を取る。同時にがら空きの喉元に雄飛の一撃が襲う。

「裂震虎砲！」

ガットゥーゾの雄叫びが狼のものだとしたら、それは虎の咆哮だった。
叩き込んだ剣の柄尻から発生した闘気が猛虎となってガットゥーゾの喉笛に喰らい付くっ！
固定された状態で衝撃波を受けた魔獣の喉は血霧となって爆散。頭と肩から下を二つに分ける。
胴体は衝撃の余波で吹き飛び、黒血の線が引かれる。残った頭部は突き立った野太刀に従って滑るように下に落ちた。
虎の咆哮が世界樹公園に響き、消えた。
二つに分かれたガットゥーゾの輪郭が崩れたと思った瞬間、黒い泥になり、泡立つように消えていった。
そこで三人は大きく息を吐く。
連戦で一人の戦闘不能者と重傷者を出したのだ。これでもし泥がまた違う魔獣になったらさすがに戦えないだろう。
高音が魔力枯渇の疲労で尻餅をつき、刹那が空を見上げて一息つく中、雄飛は

「よし、急いで美人の看護士さんがいる病院に行こう」

その発言でその場にいた二人から冷めた視線を浴びることになった。

## 第二十三話（後書き）

カットゥーゾを出した事で大方判ったと思いますが、今度はモンスターを募集します。
因みに条件は

1．テイルズシリーズのモンスターであること

2．人物でないこと
（人物背景が書ききれなくなる為）

3．強すぎないこと

です。全部出せるかは判りませんが回答お待ちしております。

一応、ギガントモンスターとジェントルマンは出演決定です。

# 第二十四話（前書き）

遅れて申し訳ありません。随分時間がかかりました・・・・。
アンケートは皆様のご協力のおかげで沢山の案が集まりました。
本当にありがとうございます。

しかし・・・・ソードダンサーが無かったのが、意外といえば意外でした・・・・

# 第二十四話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

樫の扉を叩く金属の手。中にいる人物の返答を待たず、隣にいた少女は取っ手に手をかける。
重苦しい音と共に開かれた扉を乱暴に開けた少女は部屋の中央を進む。その足取りは自らが不機嫌である事をこれでもかと言わんばかりに表していた。
早歩きで大部屋の最奥に向かい、そこで待っていた人物に向かって紙包みを放り投げる。
憎しみのこもったオーバースローではあったが悲しいかな、少女の力では速球にはならず丁度よく受け手の胸元に収まった。

「ありがとう御座いますエヴァンジェリン。コレは最近中々手に入らないものでして」

「私を『こんな所』に呼び出すとはイイ性格しているな。シスターシャークティー・・・」

一方は思わず殴りたくなるほどの笑顔で。もう一方はこめかみに血管を浮かべるほど清々しい笑顔で。
教会の礼拝堂で修道女と吸血鬼は夜の挨拶を交わした。

――――――――――――――――――

「シャークティー先生！愛衣は！愛衣の容態は・・・・！」

「落ち着きなさい高音さん」

大方の処置が終わったのか『処置室』のプレートがかかった部屋から修道女が出てくる。奥の部屋全体に張り巡らせた十字架で編んだ結界の中に横たえられた愛衣が一瞬だけ見えた。

左腕に持った点滴台を倒さんばかりにシャークティーに詰め寄る高音。魔力・気力の枯渇は身体に様々な悪影響をもたらす為、外傷のほとんど無い高音でもかなり衰弱していた。

「腹部から下の解毒は成功しましたので命に別状はありません。傷そのものは全治一週間といったところです」

笑顔で告げるシャークティー。気が抜けたのかその場に崩れ落ちる高音を信徒席の長椅子に座らせる。

「今日は泊まっていきなさい。貴方も一日、二日はまともに動けませんよ？」

シャークティーから心配と呆れを等配合した声を掛けられた高音は力無く頷く。

再び処置室の扉が開く。そこにいたのは顔に出ている不機嫌を隠そうともしないエヴァンジェリンとその従者、茶々丸が立っていた。

「重ね重ねありがとう御座いました、エヴァンジェリン。『ルルリエの花弁』の提供もですが、調合も手伝っていただいて・・・・」

「社交辞令は良い。私は帰るぞ」

声にまで苛立ちを滲ませたエヴァンジェリンはそのまま来た道を帰るが如く礼拝堂を出る扉に向かっていく。

「エヴァンジェリンさん！」

ふらつきながらも立ち上がった高音はエヴァンジェリンに声を掛ける。呼び止められたエヴァンジェリンは振り返りはしないものの立ち止まった。

「愛衣を助けていただいてありがとうございました・・・・」

その言葉を聞いたエヴァンジェリンは鼻を鳴らして立ち去る。

樫扉が乱暴に閉まる音を聞きながらシスターシャークティーは溜息を付く。

「『神の家』たる教会に吸血鬼を招くシスターがいるとはね・・・・」

「教会には、というか・・・・この麻帆良には色々とあるのですよ・・・・」

先程よりも大きな溜息を付いたシスターは声の方向に向き直る。

「次は貴方の番ですよ。姫菱さん」

汚れないようにYシャツを脱いで待っていた雄飛はその笑顔に嫌な予感を感じた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「痛でででっ！痛い痛いイダイッ！」

「余計な力を抜いて下さい。治療ができません」

そう言いながらシャークティー先生は俺の左肩を背中側から引っ張り、傷口を思いきり押す。

あまりの激痛に暴れる俺を刹那や木乃香、大河内の三人がかりで押さえつける有様だ。

「骨の形を整えて治療しないときちんと接合できないのです。そう、これは仕方の無い事・・・・」

「じゃあ、何で・・・・その、顔に満面の笑みが・・・・浮かんで、るんですか・・・・？」

「気のせいです」

激痛の為まともに喋れない俺の疑問に涼しげに答えるシャークティー先生。この女絶対Ｓだ。

それでも何とか骨が先生の望む形になったのかようやく治癒魔法が発動する。

肉の下で何かが蠢く感触と共に痛みが消えていく。一分ほどの時間を掛けて鎖骨と肩甲骨が繋がったらしい。

「二、三日は安静に。本格的に動かすのは完治してからにして下さい」

涙目で睨む俺の抗議を無視してシャークティー先生の両手は左肩にガーゼを張り、包帯を巻いていく。

この程度の傷なら魔法で一気に治せないことも無いが、基本的には自然治癒と魔法を交互に組み合わせ、時間を掛けて治療するほうが身体への負担も少ない。

治りきらない傷口に包帯を巻いてもらった後は、左肩を庇いながらYシャツに腕を通す。左肩から下が血で真っ赤に染まっているシャツだが何も着ないで帰るわけにも行かない。変質者扱いは御免被る。

諸々の道具を片付けたシスターシャークティーは高音を連れて奥の部屋に行ってしまった。

左肩の傷を見下ろすと朱に染まった布地の中、肩口に大穴が開いていた。血で汚れた時点で着る気は無かったが、買ったばかりのYシャツをこうも簡単に捨てる羽目になるとは・・・・。

「ユウ・・・・」

悲しげな声に横を見ると泣きそうな表情の木乃香がいた。両の瞳に涙を溜めたその顔は何かを堪えるように見えた。

「木、木乃香・・・・？どうし」

「ゴメンな・・・・。ウチちゃんと治せんで・・・・・」

俺の言葉を遮るように木乃香が謝ってくる。この言葉と、この表情で俺は木乃香の言いたい事を理解した。

「この傷は俺の傷だ。別にお前が気に病む事はない」

そう言って木乃香の頭を撫でる。しかしその顔の憂いは一向に晴れない。

「違うんやユウ・・・・あのな・・・・・」

木乃香が続きを話そうとしたところで扉が開いた。高音先輩を奥の部屋に寝かしてきたらしいシャークティー先生が現れた。

「大体の顛末は高音さんに聞きましたが・・・・遂に人的被害が出ましたか・・・・」

「それで、魔法先生方はどんな対応を？」

俺は皮肉を込めて尋ねるも沈痛な面持ちのシスターは首を横に振るだけだった。

「それはこれからの会議で決まります・・・・。貴方達、今日はもう遅いので帰りなさい」

「刹那さん。お願いしますね」と言い残し、そのまま処置室に引っ込んでしまうシャークティー先生。どうやらこの後も佐倉の治療が残っているらしい。

「・・・・帰るか」

教会の主がこの場にいない以上、ここに居ても意味は無い。

泣きそうな顔のままの木乃香と、俺に何か言いたそうな刹那。

そして襲撃の後、ほとんど口を開かない大河内。

三者三様の沈黙を引き連れて俺は礼拝堂を後にした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

『怪我人にベッドを使わせる』と言う案件は女子３票、男子１票の多数決で決まり、私はベッドの隣に敷いた布団で寝ることになった。両隣からは既に二つの寝息が聞こえる。ベッドの上で眠る姫菱くんの顔は見えないが、反対側で眠る近衛さんの目に涙の後があるのは月明かりで何とか見えた。

起きている間は泣かないように努めていたが眠りの中で無意識に涙を流してしまったのだろうか。

魔法の力があっても姫菱くんの傷一つ治せない自分が、好きな人の力になりたくて魔法を手にしたのに未だ足を引っ張っている自分が許せなくて、キライで、嫌なのだろう。

桜咲さんもそんな近衛さんの葛藤を知ってはいても手は差し伸べられない。近衛さんを頼ることはそれだけ本人を危険に晒す事になるからだろうか。

自分の胸の奥に暗い感情が湧き上がる。

二人は役に立っているだけ、まだマシだ。

囲まれている時、姫菱くんの後ろに隠れているだけで桜咲さんの様に敵の前に立つ力は無かった。

高音さんや佐倉さんが泥にのまれそうになった時も、姫菱くんの様に助けに行く勇気なんて無くただ見ていることしかできなかった。

佐倉さんの傷を治している近衛さんの横にいた時は、あまりの無力感に泣きそうになった。

私は何もできなかった。
戦うことも、助けることも、傷を癒すことも。
一切役に立っていない。
巻き込まれた私にはそんなことは必要ない。と言われればそれまでだが、もうそんな単純な関係ではない。
私を守ってくれると知ったときは本当に嬉しかった。
自分が狙われているらしいと聞かされても、部屋を荒らされても遠い国の出来事のように感じた。
登校や部活への送り迎え、休み時間の度に視線が合うだけで顔が赤くなるのを堪えていたくらいだ。
姫菱くんが近くにいるだけで、近くにいられるだけで十分だった。

だけど今、胸の内にある感情はそんな華やかなものではない。

好きな人の為に何もできない無力感と、それを受け入れられないみっともないプライド。
他人はおろか、自分でも目を背けたくなるような黒く、暗い想い。
腕で目を覆っていると涙が出そうになった。嗚咽が出る前に洗面台に行く。
蛇口を全開に捻ると水が出てくる。排水溝に流れる音で何とか声を隠す。
冷たい水を叩きつける様にして顔を洗う。そうでもしないと自分を保っていられない。
今の今まで気付かなかった。
私って

「・・・・こんなに・・・・こんなに弱かったんだ・・・・」
心の在りようですら桜咲さんや近衛さんに劣る。そしてその憤りを埋める方法ですら・・・・。

『仮契約』

従者は主に仕える事を条件に魔力等の力を得る。私もそれを結べば確かに力は手に入るだろう。だが、

（何のために？）

力を得て、彼の役に立つ。それだけだ。
結局自分は姫菱くんとの距離を、今の関係を繋ぎ止めたいが為に、都合のいい魔法の力が欲しいだけだ。
なんて醜い感情だろう。
だが今の自分ではこの無力感に耐えられない。そのくせ、このぬるま湯のように心地良い毎日を終わらせる勇気も無い。
目に映る螺旋を描きながら流れる水が羨ましく思う。
私も排水溝に洗い流してほしかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇free side◇

「入っていいですか？」「どうぞ」

二種類の声色を使って一人芝居をした雄飛は勝手に樫扉を開ける。ステンドグラスに彩られた朝日が差し込む礼拝堂にはある種の清廉な空気に満ちて、神の家たる教会の荘厳な雰囲気を醸し出していた。しかし雄飛は居心地の悪さを感じているのかしかめ面で奥に進む。

「もう、それなりに回復はしたんですね」

説教台の前、磔刑にされた聖者の像の下に跪き祈りを捧げていた高音が点滴の支持台を掴んで立ち上がった。

「大事を取って今日一日はここに入院らしいです」

振り返った高音の顔は未だ青白い。悔しそうに言うもののどこか諦めが入った声からして、自分が本調子ではないのはわかっているのだろう。

朝練に行く大河内を水泳部の部室まで送り届けた後、昨日の事もあり雄飛は再び教会に高音と愛衣の見舞いに来ていた。

「ケーキ屋が開いてなかったんで、コンビニで買ってきたんですが・・・」

「良かったら」と雄飛が差し出す右手には白いコンビニの袋。高音の好みが分からないので適当に買ってきた結果、結構な量になってしまった。

礼を言いつつ受け取った高音は信徒席に座る。

「それで、何を聞きたいのですか?」

自分が切り出そうとした話題を先取りされた雄飛はほんの少し眉根を寄せる。バレバレだったらしい。

まあ、昨日共闘した人間を気遣うなんて自分でもらしくない行動だとは思った雄飛だったが。
企みが看破されたとはいえ、入院患者相手に余計な時間を掛けたくないので本題を切り出す。

「実は、今回の一番最初に起きた獣の事件の話を聞きに来ました。ガンドルフィーニ先生に聞きました。最初に撃退した生徒が貴方達二人だと・・・・」

説教台に背中を預けつつ話を続ける。真正面に立って見ると、その顔には疲労が滲んではいても、表情そのものは病人とは思えないほどに気力に満ちていた。

「・・・私と愛衣が現場に着いたときには例の獣が臭いを嗅いでいました・・・・。というか彼女の周囲をぐるぐる回っていたのです。まるで・・・・」

「困っているみたいに？」

言葉を先取りすると高音は同意を示しながらも理解不能という顔をしていた。向かいの雄飛も似たような顔を返すしかない。
飼い犬じゃあるまいし・・・・。獣がその女子生徒を助けようとしていたとでもいうのだろうか？

「まったく・・・・わけがわからないよ」

「その発言の意図も、私には分かりませんわよ・・・・」

色々と危ない発言をする雄飛から目を逸らす高音。雄飛も分かっているのかそれ以上は口にしない。

「というか、よく俺に協力する気になれましたね・・・・。俺が言うのもなんですが正直意外です」

「もっとプライドの高い人間だと思ってました」とは、さすがの雄飛も口にしない。

「敵でもない人と争っても意味はありませんわよ。私の目的は事件の解決なのですから」

「『偉大な魔法使い』として、ってヤツですか・・・・」

当然だ、とでもに言い切る高音に雄飛は皮肉を混ぜて返す。
しかし当の本人は気付いていないのか話を続ける。

「ええ。私はいずれ、英雄『サウザンドマスター』のような魔法使いになりたいのです」

「・・・・『英雄』サウザンドマスターね・・・・」

誇らしげに胸を張る高音。対する雄飛は「英雄」の二文字に顔をしかめる。
雄飛にとってその言葉は、聞いていても、口に出してもあまり面白い物ではない。

「彼は敵を多く倒して有名になった、所謂『戦争英雄』ではありません。
寧ろ彼の英雄と呼ばれる由縁は戦争が終わった後にあります」

雄飛のしかめ面を英雄に対する不信感の表れとでも思ったのか、高

音は言葉を重ねていった。

「英雄一人では世界は救えません。一人の力で、魔法使いの力で救えるほど『魔法世界』は小さくはありませんでした」

大戦の後の魔法世界では、訪れた平穏を享受できたのはほんの一部の国と地域。

戦争によって崩れた経済が貧困を、荒れた国土が飢餓を生み、再び世界を地獄が覆っていった。

全世界を巻き込んだ戦いに身を投じた人々の感情は最早擦り切れ、抗う術など持っていなかった。

飢餓と貧困が紛争を呼び、その紛争が周りの国に更なる飢餓と貧困をもたらす。

その無限地獄が魔法世界を包み込むのにそう時間はかからなかった。

戦争を止めたとされるサウザンドマスター達ですら、そんな紛争地域を回り目の前の誰かを助けるのが精一杯で、泥沼の紛争を止めることなどできなかった。

「しかし、争いは止まりました」

最初、それは数人の魔法使いだった。

彼らはサウザンドマスターと同じように紛争地帯を回り、同じように目の前の誰かを救った。

それはかつて彼に紛争地帯で命を救われた者達だった。

「そして、彼らに救われた者達もそれに続いたのです」

少しずつではあったがその輪は広がっていき、全ての戦場に届いたという。

救援物資の配布に奔走した政治家や民間人の救助に当った軍の指揮

官達とは違い、本当の意味で救った人間の数は少ない。
だが立場や役割を超えた場所で、誰もが持っている大きさの正義感で地獄のような現実と向き合い、自分にできることから決して逃げなかった。
そしてその魂の輝きで敵と味方の区別無く、人と人とを繋いでいった。

「私にとってサウザンドマスターは只の英雄ではないのです」

高音の顔には、その瞳には、心からの尊敬があった。
一人の力で世界と向き合える事を証明し、人々の意識すら変え、多くの人を立ち上がらせた。云わば『英雄を生んだ英雄』
高音は、そこに本当の「偉大な魔法使い」の姿を見たという。

「自分語りもこれくらいにしておきましょうか・・・・」

長い溜息の後には苦笑。
雄飛には「理解されないだろう」という諦めの入ったものに見えた。

「それじゃ、俺はこれで」

話は終わった、と返答も待たずに踵を返す雄飛。呆気に取られている高音を他所に一度も振り返る事無く礼拝堂を出る。
学園に向かう歩みは無意識に速くなり、疾走になった。

『学園長。あなたは『この世界』で何を成したんですか?』

まるでそうしないと何かが壊れるかのように、走る。

『そう言う君は何を成したいのかな?』

「この世界」に来たあの日。学園長に聞き返された言葉が雄飛の脳裏によみがえる。
あれ以上、雄飛は彼女の前にはいられなかった。
それは、自分の力でやりたい事を見つけていた高音への嫉妬なのか。
未だ力を使う理由が曖昧なままの自分に対する劣等感なのか。
雄飛は考えたくなかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇木乃香　ｓｉｄｅ◇

自分のではない鞄のベルトを肩に掛けて昨日も通った道を歩く。
せっちゃんはウチに荷物を持たせてるんが申し訳ないのかこっちを見ているが、勝負の結果なのでどうしようもない。
肩を怪我しているユウにあまり荷物を持たせないようにしよう。と始まったジャンケンだったが、本人が「女に荷物を持たせる男にはなりたくない」と徹底抗戦の構えを見せた。
結局「二人で両腕に胸を押し付ける」という色仕掛けで呆気無く陥落したが、説得に随分時間がかかった。

「失礼しまーす」

扉を開き中に入ると染み渡るような厚みのある音で創られた曲が流れていた。
説教台の横、パイプオルガンを弾いているシスターの背中が見える。
声を掛けようか逡巡していると丁度引き終わったのか演奏が終わる。

鍵盤の蓋を閉めた後、シャークティー先生が振り返った。

「生きとし生ける者はみな神の子・・・・。我が教会にどんなご用でしょう・・・・？」

・おいのりをする
・おつげをきく
・いきかえらせる
・どくのちりょう
・のろいをとく
・やめる

「え・・・・？え・・・・・！？」

目を擦りもう一度シャークティー先生を見る。当然だがそこには変な物など何も無い。
何か選択肢みたいなもんが見えた気がしたんやけど・・・・気のせいやったんか？

「肩の治療で来たんですよ・・・・。というか『来い』と言ったのは貴方でしょう・・・・」

そう言ってYシャツの下にある傷を指差すユウ。
先生も「ええ、わかっています」と、笑顔で答える。
踵を返したシャークティー先生とユウが奥の部屋に歩いていく。置いていかれまいとせっちゃんと共に後を追う。
「診察室」のプレートが掲げられた扉を潜る二人。閉まる扉の縁に手を掛けて、それを止める。

「あっ！あの・・・・ウチも見てて、ええですか・・・・？」

「俺の裸を?」

その一言に一気に顔に熱くなる。言われてから気がついたが肩の治療である以上、どうあっても上着は脱ぐのだ。

「お・・お嬢様・・・・」

声に振り返るとせっちゃんが顔を赤らめながらも、劇画タッチの顔で引いていた。

「ちゃう!それを見たいんやない!」そう否定する為に口を動かすが、羞恥で血が上った頭では何も言えない。

結局、ウチら二人とも入室は許されたが弁解は叶わんかった。

---

思ったより広い診察室の中央、こういう場所特有の丸椅子に腰掛けた雄飛はYシャツと下のTシャツを手早く脱いでいく。

(わ・・・・!うわー・・・・!)

厚い胸板、鋼を束ねたような腕、贅肉なんて欠片も無い腹筋。

筋骨隆々ではないものの、確かな筋肉に包まれた上半身が露わになる。

さっきとは違う恥ずかしさで顔が赤くなる。思わず顔を逸らすも、つい視線を向けてしまう。

不意にせっちゃんと目が合う。気まずそうに顔をそむけてはいるものの、真っ赤になりながらもチラチラと見ていた。

だがその身体の至る所に細かな傷が縦横無尽に走っていた。
恐らくそれは治す暇も無く刻まれた、修行と戦いの証。
あの身体には京都で負った傷も、ウチを守って付いた傷もあるんやろうか？
シャークティー先生は包帯を解き、その下のガーゼに手を掛ける。

「ツッ！」

小さな呻き声が上がる。ガーゼの下にあったのは未だに血が滲む傷口。先生はガーゼを脇のトレイに置くと、懐から片眼鏡を取り出した。

「すごい・・・・！もう骨が完全に繋がっているなんて・・・・」

「すごい回復力ね・・・・」と感心していた。どうやらあのモノクルで骨の接合状態がわかるらしい。
驚きながらも治療は続く。今度は左肩全体に軟膏を塗っていく。少し引きつっているユウの顔を見る限り、かなりしみるようやな・・・・。

「そういえは・・・朝、高音先輩の見舞いにここに来たんですけど・・先生いなかったですね」

「ええ。朝はエヴァンジェリンのところに調合素材を分けてもらいに行っていたので・・・・。丁度その時でしょう」

気を紛らわそうとしているのか、ユウは先生に話しかける。シャークティー先生も傷口に軟膏を塗りこみながら言葉を返す。

「・・・・意外そうな顔ですね？」

「そりゃ修道女と吸血鬼がご近所付き合いしていたら変でしょう・・・」

「私とエヴァンジェリンに付き合いがあったらオカシイですか？」

という先生の視線に一般的な正論を返すユウ。

神様に仕える人間が『神の敵』たる吸血鬼と友好関係を結んでいるなんて普通なら考えられない。

しかし「ここは麻帆良学園だ」と言われれば納得しそうな自分がいた。

「私の育った教会には色々な人がいたので・・・・」

十分に塗り込んだのか軟膏の瓶の蓋を閉めるシャークティー先生。

溜息を付きつつも昔を懐かしんでいるのか、どこか嬉しそうだ。

「私を育ててくれた神父様は人間だったのですが・・・・」

「その教会に身を寄せていた子供達は多種多様の一言に尽きました」

と苦笑しながら話は続く。

国、言葉、信じる神、文化の違いだけではなく獣人やそのハーフ、果ては魔族の孤児まで受け入れる、節操の無い教会。

当然、諍いやケンカは毎日の日課のように勃発した。しかし、小さなで済んだのは、終わった後に全員が笑顔だったのは、

「神父様のおかげでした」

壁際の戸棚から新しいガーゼを取り出し呪文を唱える。ウチの力にも似た癒しの力がガーゼにしみ込んでいく。

魔族との戦いで負った怪我の為に第一線に立てなくなったその神父

は、故郷に孤児院を建て、そこで暮らすようになった。
そう聞いたとき先生は、「どうして魔族まで助けるのか？憎くはないのか？」と聞いたらしい。
しかし帰ってきた答えは

「『助けて』って言ってんだから、助けてやりゃあ良いじゃねえか」

さっきまでとは全く違うぶっきらぼうな口調。
その時の事を思い出しているのか過去を語る表情は笑顔そのものやった。
軟膏を塗った上に新たなガーゼを貼り、テープで固定していく。治療と共に話は続く。
生きとし生ける者全てが手と手を繋げるとは思えない。聖者が現れて二千年経った今も、未だ人は争っている。
だが、足を悪くした神父様に代わり教会と孤児院を受け継いだ新たな神父が、魔族の「義兄」である事を私は知っています、と先生は語る。

「だから、私は誰であろうと助けます」

必要ならエヴァンジェリンの手を借りても、求められれば本人も。

「私を救ってくれた教えに、私が泥を塗るわけにはいきませんから」

そう締めくくって笑うシャークティー先生。ウチにはその笑顔が、とても印象的で。
聖母のように見えた。

「さて・・肩の動きはどうですか」

長い話の中、いつの間にか肩の両面のガーゼの固定は終わっていた。
シャークティー先生の言葉に従ってユウは肩を大きく回す。右も回して比べることで違和感が無いか入念に調べているようだ。
しかし、その左手が胸元に伸びてくる。

「うわ、大変だ！俺の意思とは関係なく左手が木乃香の胸に触れようと！？」

「桜咲さん、その刀を貸して下さい。病巣を切り落とします」

「いえ、もし良ければ私に切らせて下さい」

「腕を切るんか？首を切るんか？」

「スイマセン、ナオリマシタ・・・・」

吸血鬼とは友好を結んでも、セクハラには情け容赦無し。
それがその場にいた、三人の共通項やった。

---

「姫菱さん。これを」

治療も終わり、教会を後にしようとしたウチらを呼び止めるシャークティー先生。渡された紙袋の中を覗くと、栄養ドリンクのような大きさの緑色の小瓶が四本。手製なのかラベル等は貼られていなかった。

「解毒用の『ポイズンボトル』です。敵が毒を使う以上、持ってい

て損は無いでしょう」

数からして一人一本ということらしい。

「いいんですか？」

「俺達がこの事件に関わっても」。言葉の裏にそんなニュアンスを含ませながらユウは先生に視線を向ける。

「戦うにしろ逃げるにしろ、備えは必要でしょう」

「貴方はどちらを選ぶのでしょうね？」という笑みを残して先生は礼拝堂に戻っていった。

アキラを迎えに行く道の途中。前を歩くユウの手に下がる紙袋の中の小瓶は残り二本。それぞれユウとアキラの分だ。

石畳を歩きながら考える。昨日の事とさっきの事を。

今のままではダメだ。傷を負うユウを治しきれない。

京都の時も、昨日の戦いも。ユウはいつも誰かをかばいながら戦っている。後ろにいるウチやアキラだったり、隣にいるせっちゃんだったり。

でもユウを守る人は、いない。

守る力も、戦う力もウチにはない。今、この身にあるのは癒しの力のみ。だから、

（治すのはウチの役目や・・・・！）

考える。考えて、考えて、考えて・・・・決まった。

「二人とも、先に帰っててくれんか？」

答えも聞かずに回れ右。ポイズンボトルを鞄に納めながら歩いてきた道を走る。

「え！？お、おい」「お嬢様！？」

呼び止める二人の声が聞こえたが聞こえないフリ。そのまま走る速度をあげて、十字路を曲がっていく。
見えた、教会や。後は最後の直線のみ。
もう息が上がってきた。正直運動はあまり得意やないけど、精一杯今のスピードを保つ。

「シャークティー先生！」

礼拝堂の扉を開け、驚いとる先生に詰め寄る。荒れる息をどうにか整える。
決めた。

「ウチに治癒魔法を教えて下さい！」

ユウの傷はウチが治す。それがどんな傷でも。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

未だ皆は眠っているであろう時間、白み始めた空を見上げながら待ち合わせ場所への道を歩く。

「寒・・・・」

明日から五月に入るとはいえこの時間帯だと冬のような寒さが未だに残っている。本人の許可なく着てきてしまったが、雄飛のクローゼットから長袖のYシャツを借りてきて正解だった。

男もののYシャツは小柄な私には完全にブカブカだが、袖を折りたたんで着ている分には大丈夫だ。

どうせ一度寮に戻る。そのときに着替えれば良い。

そろそろアスナさんの新聞配達が終わる時間だ。

早朝と放課後、暇な時間を見つけてはこうやって剣術の稽古をつけている。

京都のときの戦いでも感じたが、アスナさんは筋が良い。と言うよりカンと反射神経がずば抜けていて、とても素人とは思えない。

今はまだ身体の動かし方や、戦いにおける考え方が馴染んでいないのでチャンバラとしか呼べないものだが、一月もすれば形になってくるだろう。

道が開けてると世界樹公園か見えてくる。思わず肩に引っ掛けた夕凪を抱え直してしまう。

一昨日の戦いの後、皆どこか変だ。

大河内さんは昨日一日ほとんど口を開いていない。こちらから話しかける分にはちゃんと答えてくれるが思いつめた顔で黙り込まれると取り付く島も無いように思える。

お嬢様も昨日の放課後までは同じような状態だったが、教会を尋ねた後、「シャークティー先生から借りてきた」という魔術に関する文献や使い込まれたノートを机に広げ、熱心に勉強を始めた。

いつもおかしい雄飛ですら、黙って何か考え込んでいる。

かく言う私もこうやって稽古場に向かっている以上、すれ違いの原因を作っている人間の一人だろう。

不意に人影が視界に入る。一昨日の事もあり反射的に警戒してしま

うが、

「桜咲くん、か・・・・おはよう」

疲れた声で挨拶するのは長躯の黒人。高等部所属の魔法先生、ガンドルフィーニ先生が自販機のボタンを押しながらこちらを見ていた。挨拶を返すとこちらに何かを投げてくる。飛んでくるそれをキャッチして確認すると、小さなペットボトルだった。

ラベルには「近右衛門」と書いてあり、横にはキメ顔の学園長がプリントされていた。

確か麻帆良学園プロデュースの緑茶だったはず。

「値段も手ごろで味もなかなかだが、商品名とパッケージがこれでもかと足を引っ張っているという大変残念な一品」だと綾瀬さん達が話していたのを思い出す。

在庫処分を手伝わされた、と思うのはさすがに被害妄想だろうか。

礼を言いつつ一口。確かに美味しい。

しかし緑茶特有の苦味と甘みが口の中に広がった後、ボトルを見下ろすとキメ顔の学園長と目が合う。

（確かに・・・・。コレは売れない・・・・）

妙に納得しつつ、ガンドルフィーニ先生を見ると、あっちは苦味とカフェインの量が通常の数倍の濃度を誇る缶コーヒー「ＬＡＳＴＢＯＳＳ」を口にしていた。

半分以上飲むと「第二形態」と呼ばれる更に強力な味になるらしいが、私は飲んだことが無いので知らない。

「君はいつもこんなに早いのかい？」

「いえ、今日はちょっと用があって・・・・お疲れなんですか？」

互いに飲みながら会話が始まる。しかしガンドルフィーニ先生は途中で欠伸を噛み殺している。
あのコーヒーを飲むくらいだから相当の寝不足なんだろうか？

「今の今まで捜査や情報収集で走り回っててね・・・・家で着替えたらこのまま出勤さ」

スーツを見せるガンドルフィーニ先生。その姿は激務を証明するかのようにあちこちに汚れが付いている。
不意に胸に痛みが走る。
その苦笑が、自分を省みない姿が、どこかの誰かによく似ていた。

「・・・・どうして・・・・そんなにがんばれるんですか・・・・」

「え？」

先生から疑問の声が上がる。知らず知らずの内に考えを口にしていた事に気がついた。
慌てて否定するのもなんなので、そのまま心中を話していく。

「あの、その・・・・友達の話なんですけど・・・・ゆ・・姫菱くんがボロボロになってまで戦ってるのを見てると・・・・その・・・・」

「心配かい？」

正確に言い立てられ、頷きを返す。
京都での連戦にしろ、一昨日の大型の獣との戦いにしろ、もっと頼って欲しい。

戦闘上役割分担は必要だが、雄飛は傷を負うのを自分の役目だと捉えている節がある。
昨日の診察室で見た身体にも消しきれないほどの傷跡が残っていた。

（どうしてそこまで・・・・）

「彼の理由は分からないけど・・・・僕ががんばるのは、家族のためさ」

そう言って力なく笑うガンドルフィーニ先生。その顔は疲労が色濃く残っていても、父親のそれだった。

「高畑先生は海外出張が多いから、今回みたいに不在のときは私がその穴を埋めることがほとんどでね・・・・」

件の高畑先生は修学旅行で私達が帰ってきたのを見届けた次の日には、とんぼ帰りで再び海外に飛んだらしい。殺人的な忙しさだ。

「その度に家を空ける事が多いから、妻と娘には迷惑ばかり掛けているけど・・・・」

言葉を区切り、私を見る。

「悪人がはびこる場所では妻も娘も安心して暮らせない。だがらこの仕事をがんばっているのさ」

その瞳は決意と使命感に満ちていた。
「ちょっとカッコ付けすぎかな・・・・」という独白をこぼした先生は、缶に残っていたコーヒーを一気に喉に流し込んだ。
「それじゃあ」と、別れの挨拶もそこそこに恥ずかしそうに去って

いくガンドルフィーニ先生。
高等部へ向かうその後ろ姿は、ちょっとカッコ良かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「はよーう」

いつもの通り、ＨＲの時間ギリギリに現れるエヴァンジェリンに挨拶する。
しかし本人曰く「低血圧というより無血圧」と開き直りに近い発言の通り、そのまま机に突っ伏す吸血鬼。
手を軽く振ったのは挨拶のつもりだったのだろう。
しかしそのまま夢の中へ行かせるわけにもいかない。旅立つ前に言っておかなければならない用件がある。
顔を近づけ耳の辺りに小声で話しかける。

「エヴァンジェリン。今日の放課後、魔法修得に付き合ってくれ」

親指を立てた答えが返ってきた。お礼といっては何だが静かに寝かしておこう。
しかし、彼女は知らない。今日の一時限目は新田先生の授業なのだ。
予想通りというか・・・・真っ先に叩き起こされた。

## 第二十四話（後書き）

今回は雄飛の戦う理由が曖昧な事を浮き彫りにする為、魔法先生や魔法生徒側の心情を書いてみたら・・・・、
何か高音やシャークティー、ガンドルがいい人っぽくなった・・・・。
原作とは大分違う感じになりましたね。申し訳ない。

次はＴＯＶの術技の修得とか、急変する事態とか・・・・

書ければいいな・・・・

## 第二十五話（前書き）

今回は一気に話が進んだかもしれません。その分中身が・・・・
後、この話は年内一段落つきそうです。

第二十五話。どうぞ。

# 第二十五話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

「フハハハ！見ろ小僧！これが私の別荘『ＥＶＡＮＧＥＬＩＮＥ'Ｓ　ＲＥＳＯＲＴ』だ！！どうだ・・・」

「素晴らしかろう！」と続くはずだったエヴァンジェリンの言葉が尻すぼみになっていく。後ろで驚いているはずの雄飛がどういう訳か居ない。
いや、いた。
転送用魔法陣の遥か後方、足場の無い空中に。
ゆっくりと自由落下を始めた雄飛と目が合う。万有引力に引かれて落ちていく彼の顔は自分の身に起きたことが理解できず呆然とした表情だった。

「マスター」

「何だ、茶々丸」

落ちる雄飛と見送るエヴァ。お互いの視線にどんどん角度がついていく中、平坦な声で会話が続く。
「魔法陣の設定で、『ゲスト権限で入った者の転送先を５０ｍ後方に変更する』という命令が残っているのですが・・・」

「ぁ～・・・・」

思い出した。
最後に別荘を使ったタカミチへの嫌がらせとして設定を変更しておいた事を。そしてそのまま放置していた事も・・・。
塔の下に広がる青い海に吸い込まれていく哀れな被害者を見下ろしながら考える。
あの小僧を助けるのが先か、忘れないように設定を戻しておくのが先か。

「茶々丸」

「はい」と感情の篭もらない声を返す従者に命令を下す。

「その設定、解除しておけ」

何かが海に叩きつけられた、というか小僧が海に落ちた音が遥か下から聞こえる。水飛沫が高く高く舞い上がる光景を見て、吸血鬼は証拠隠滅が先だと判断した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「ったく・・・・ひでぇ目にあった・・・・」

左肩を回しながら脱衣所を後にする。傷も完治しているので何の問

題も無いようだ。
さっきのノーロープバンジー及び着衣水泳の件は「転送の術式設定の異常により起こった不幸な事故」と言い切られた以上、そこから先は追及できなかった。
これ以上無いくらいの無表情で受け答えをしていたエヴァンジェリンはどう考えても怪しいが・・・・。
タオルで頭を拭きながら、そういえばと思い出す。

（「この世界」に転移してきたときも・・・・）

湖で溺れかけた。そして今回の転送事故。
偶然だろうか？いやでも「二度あることは三度ある」というし・・・・
階段を上がっていくと湯上りの身体を潮風が撫でていく。屋上に出て上を見上げると夏の青空が広がっていた。
限定空間内での時間の流れる速度を変える魔法具「ダイオラマ魔法球」。ここはその魔法球で作り出した避暑地「ＥＶＡＮＧＥＬＩＮＥ'Ｓ　ＲＥＳＯＲＴ」。
「私の別荘だ」と持ち主は言っていた。
テラスから見える屋外プールに人のいない完全なプライベートビーチ、従者が作る三ツ星レストランのシェフ顔負けの料理、景色の良い露天風呂。
ここで丸一日遊び呆けても「外」ではたったの一時間！というリゾート施設完備の精神と時の部屋。
ここにいたら人間ダメになるな・・・・。とか関係ない事を考えてしまう。

「ゆっくりしろはと言ったがな・・・・くつろぎ過ぎだ貴様」

「いやぁ～悪い悪い」

形だけの謝罪を返しながらテラスに出る。全く悪びれる様子の無い俺に、エヴァンジェリンは半ば呆れながらも、自分の手元から視線を動かさない。

その手と、座るテーブルの両脇には分厚い本が置いてあった。

その古びた装丁は年代を感じさせる。しかしそれ以上に、閲覧を拒むように細い鎖や呪符で縛られ、厳重に封印されているのが目を引いていた。

それはあまりの強力さ故に修得そのものを禁じている中級、上級魔術の術式を記した「魔術書」や、技の流出を防ぐ為に封印された「奥義書」の証。

「お前の持ってきた魔術書は本当に興味深いな・・・・。

『蒼破刃』などの気を風の刃として飛ばす技というのはまだ分かるが、魔術書のほうは未だに理解不能だ・・・・。

赤や青、緑といった『色』そのものに意味がある魔法陣や数式が入った術式ならまだ分かるが・・・・『エアル』やら『原素(エレス)』なんて言葉聞いたことも無いぞ・・・・」

それでもメモを片手に解析を進めていくその姿は学者のように見える。

俺も目当てのものを取り、鎖を外す。封印を解いた途端に魔術書が暴れ出すっ！

・・・・ということはないが、漏れ出した魔力が常夏の空気を押し退け、重苦しい雰囲気が満ちる。

本を開いて頁を指で軽く叩く。すると魔術書に書いてあった術式が空中に展開される。

赤、青、緑の色彩豊かな魔法陣や複雑怪奇な記号と計算を含んだ数式が魔術書と俺の周囲に散乱し、周囲に万華鏡のような光景が広がる。

エヴァンジェリンと茶々丸もその現象に驚きを隠せないようだった。
術式の端を掴み魔力を流していくと、その流れを逆走するように魔術理論と術式構築陣が俺の頭に流れ込んでくる。
不快感を押し殺しつつ読み解き、理解し、覚えていく。ひたすらにそれを繰り返していく。
ある程度進んでくると、今度は空いている手で術式の一つ一つを丁寧に再現していく。
分析と再現を同時に行いながら、俺は新たな魔術の修得を開始していった。

――――――――――――――――――――

砂浜にアイスコフィンを突き立てる。足を投げ出して座り込むと共に、荒い息を吐く。
闘技場のある塔の下に広がるプライベートビーチ。無人の海岸で俺は魔法の練習を続けていた。
術式を構築しつつ安定させながら剣身で増幅。発動できるかどうかを確認し、また再構築。その繰り返し。

「どんな感じだ？」

「もっとがんばりましょう、ってとこか・・・・」

背中からのエヴァの声に振り返る事無く答えを返す。
どうにか形にはなった。しかしまだまだ術式の構築も甘く、効果範囲の設定も雑だ。
実践で使えるレベル。と言えなくも無いが、使った後の事を考えると一抹の不安が残る。

「さすが上級魔術、といったところか・・・・」

使用魔力も然る事ながら、術の制御が今までの魔術と比べ物にならないほど複雑な代物。

しかしそれに見合っただけの威力を持った魔法だ。覚えていて損は無い。

息を整えながら立ち上がり、剣を鞘に戻す。

エヴァの隣にある魔術書を手に取り、再び解析をやり直す。

「ん？何だ、もうやめるのか？もっといろんな魔法を見せろ」

「お前は俺を廃人にしたいのか！？」

限界を超えた魔法の反動は脳を始めとした神経系に負担がかかる。

実戦でそれをやるならまだ分かるが、修行で死にかけるのはゴメンだ。

いもしない蝶々を追いかけるようなステキな脳の持ち主になる予定はない。

「しかし・・・修行を続けるのは構わんが・・・お前いつまでここにいるつもりだ・・・・？」

「は？」

熟考し始めた俺にエヴァンジェリンが声を掛ける。要領を得ない質問に俺は呆けた答えしか返せない。

「ここに篭ってもう十日目だぞ」

軽く告げられた衝撃の事実に俺は凍りついた。

――――――――――――――――――――

「朝帰りする事になるとは・・・・」

「完全に自業自得だ」

五月一日　ＡＭ　４：３０。夜と朝の境目に当る時間の中、世界樹公園へ向かう二人と一体。
寮への帰り道のついでにエヴァの散歩に付き合って、朝日に照らされつつある道を歩く。
昔から何かに集中すると時間を忘れる傾向にあったが、時間を気にしなくて良い別荘の環境がそれに拍車をかけた形になった。
どうせ今帰ってもギリギリに帰っても、大して変わらない。最悪、大河内の朝練の時間に合わせて帰れば良い。
開き直りと諦めを心に持ちながら顔を上げると、石畳に何かを引きずったような跡が目に入る。

「エヴァンジェリン」

月曜の夜、自販機を放り投げたときの跡だ。
あの時の戦いでの違和感。恐らく高音先輩や他の人達は気付いていないだろう。
俺の重い声に視線だけで答えるエヴァンジェリン。

「あの夜の事だが・・・・多分、敵の狙いは大河内だ・・・・」

「・・・・続けろ」

俺と同じように広場に刻まれた傷に目を向けながら、エヴァンジェリンは錆びたような声を返す。

「囲まれた時、俺達は『あの場にいた全員』が狙われていると思った・・・・。だが獣の殺気は大河内に向けられてた・・・・」

「・・・・事実なのか？」

頷きを返しながらあの時の立ち位置を思い出す。

木乃香と大河内を中心に円陣を組んではいたが、佐倉のところに三頭の獣が突っ込んだ。

当初は一番弱い人間に向かったと思っていたが、その割には脇にいた俺を一切足止めしないのはどうしても腑に落ちない。

そして刹那と高音の間をすり抜けようとした獣もいた。もし抜けていればその先には背を向けた大河内がいたはずだ。

そもそもあの獣は泥から作った「人形」の一種。同胞が惨殺されて動揺する「本能」が存在するとは思えない。

「だがガットゥーゾは違った。俺を一直線に狙ってきた・・・・」

刹那の話では俺が吹き飛ばされた時、ガットゥーゾが追撃向かわない様に視線を強引に誘導しながら戦っていたらしい。

今まで得た情報から筋道通るように考えていく。

「獣八頭では大河内を殺そうにも守っていた俺達が邪魔だった。だから俺達を先に倒す為に『奥の手』を出した・・・・俺の考えはこんなところだ」

「５０点」

俺の推理を鼻で笑うエヴァ。内心は結構自信があったので、その点数は少し衝撃的だ。

「ゴーレム種に打ち込める命令は実はそんなに多くない。人間から狼、狼が集合して更に大きな獣になる・・・なんて命令全てを入力するなんて不可能だ」

「それこそ一体一体がガットゥーゾくらいのサイズになる」とエヴァが指を回しながら続ける。

「ソモソモ犬ガ、自分ヨリ遅イヤツノ相手ヲスルワケネーゼ」

「ケケケ」という笑い声。茶々丸の頭に目を向けると、チャチャゼロが俺の考えの浅さを指摘してきた。

確かにガットゥーゾの狙いが大河内だったらそのまま向かっているはずだ。機動力で劣る俺達の相手なんてする必要は無いのだ。

しかし、そうするとガットゥーゾの狙いは大河内ではなく俺だった事になる。だとしたらおかしな話だ。

複数のときは大河内、強力な一体なら俺を狙う・・・？整合性がつかない。

「恐らくガットゥーゾに変身したのは術者が追加命令を送信したからです。かなり近くまで接近しないとできないとは思いますが・・・」

袋小路に陥った俺の思考を茶々丸が補足してくれる。追加命令を受けたガットゥーゾが俺を狙ってきたということは・・・。

「狙いは・・・・最初から俺だった・・・・・？」

忘れていた。

修学旅行から帰ってきた日の夜、炎の攻撃は大河内も巻き込む形だったが獣が喰らいついてきたのは大河内、ではなく俺。

大河内の部屋は荒らされたものの、獣に直接襲われて怪我を負ったのは俺だけだ。

そもそも部屋を荒らしたのが獣だと決まったわけでもない。一連の事件だと勝手に考えていた。

俺だけが狙いなのかは知らないが・・・・少なくとも『獣が大河内に襲い掛かる』ことは術者にとっても予想外だったのだろうか？

元々狙っていたのか、異常事態を隠すための措置かは分からないが・・・・

「追加命令で狙いを俺に変えた、か・・・・・ん・・・・」

いつの間にかエヴァと茶々丸が俺を置いて消えていた。見ると世界樹に向かう階段のところにいた。

話の途中で置いていくなと思いつつも追いかけると話し声、というか言い争いが聞こえてきた。朝の静かな空気に似合わない騒がしさだ。

思考を中断して二人の後を追って階段を上がっていくとそこには

「エヴァちゃんなんかに教えてもらわなくても、すぐに達人だよーだ！」

エヴァに啖呵を切っている佐々木まき絵と狼狽しているネギ先生がいた。

「何だよこの騒ぎは・・・・」

こめかみに青筋を浮かべているエヴァと佐々木を見るにそれなりに険悪なムードらしい。
とりあえずいつでも冷静沈着な茶々丸に説明を求める。

「何があったんだ?」

「かくかくしかじかです」

「そうか・・・・」

まさかこの八文字だけで事態を理解できる日がこようとは・・・・。
これも修行の成果なのだろうか?
しかし・・・今回の件に関して言えばネギ先生は少し考えが足りない。
エヴァンジェリンに教えを請うておいて、何も言わず中国拳法に手を出すとは。エヴァでなくとも自分を蔑ろにされていると思うだろう。
しかし、

「はいストップ」

怒りのままに色々と言い出しそうなエヴァンジェリンの前に手をかざし、前に出る。

「ネギ先生一つ確認だ。カンフーと「こっち」の修行、本気で両立するつもりか?」

「・・・・はい!」

いきなり話に割り込んできた俺に多少驚いていたものの、「本気」の二文字を問われると真正面から俺に視線を返してくる。

（・・・・こりゃ説得は無理だな・・・・）

「・・・・だってよ。どーするよ、エヴァンジェリン？」

背後に向き直るとそこには俺達が話しているうちに怒りを抑えたエヴァンジェリン。俺の考えを読み取ったその顔は、眉根を寄せながらも冷静さがあった。

「・・・・いいだろう。たった今貴様の弟子入りテストの内容を決めたぞ」

良からぬ笑みを浮かべつつ、親指で自分の従者を指差し、告げる。

「そのカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れてみるがいい。それで合格にしてやろう・・・・ただし一対一でだ」

最後の言葉で俺を睨みながら、太い釘を刺してくるエヴァンジェリン。

ネギ先生に有利になるように喋ってはいても、いくらなんでもテストにまで介入しねえよ・・・・。

「いーよ♪わかった！！そんなのネギ君なら楽勝だよー」

「ま、ま、ま、まき絵さんっ」

何故か全く関係の無い佐々木が真っ先に答える。自分の意見を無視して事態が進行する様を見てネギ先生が悲鳴を上げる。

「もんでやれ茶々丸」

「ハ、しかし」

主人の命令に一旦は疑問を挟むも、念押しされた要求に首を縦に振る従者。「ケガせん程度でいい」という条件を加味したガイノイドは思考を戦闘モードに切り替える。

「失礼します。ネギ先生」

その言葉は俺に聞こえた頃には、茶々丸は既にネギ先生の眼前にいた。

一閃。

たたんだ右腕をコンパクトに振って先生の首筋に手刀を叩き込む。

辛くも反応した左手で防御できたものの、視線を目の前の攻撃に誘導されたネギ先生は、

「はぐっ！」

続く回し蹴りに全く反応できなかった。

一直線に石壁に叩き付けられたネギ先生はそのまま目を回していた。

その光景に溜息を付く俺とエヴァンジェリン。半ば予想はしていたものの・・・もうちょっと頑張ってほしかった。

「茶々丸に一発も入れられないようなら、どの道貴様に芽はない」

先生に対し、申し訳なさそうに一礼する従者を侍らせたエヴァは軽い嘲笑を上げる。

「場所はここ、時刻は日曜日、午前０時にまけてやる」

「ま、せいぜいがんばることだな」と言い残し立ち去るエヴァンジェリン一行。完全に悪役の去り方だ。

俺を置いて自宅の方向に向かう以上、散歩も終わりらしい。

襲撃の件や、先程のエヴァとの会話など考えることが多いので、俺もこのまま立ち去りたいが・・・・。

「先生・・・・生きてるか・・・・？」

とりあえず担任の介抱はしていこう。

今の俺でもそれくらいの余裕はある。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

『新しい情報は無い』

昨日の昼休みに言われたガンドルフィーニ先生からの言葉を思い出しながら雄飛は覚えたてのを繰り出す。

「三散華！」

踏み込みと同時、巻き上がる砂に向かって鞘を握った左拳の三連撃を叩き込む。白い砂の壁にできた三つの穴、その形が崩れる前に蛇の息吹にも似た声と共に一刀を放つ。

上に打ちあがった白の波濤に描かれた蒼白色の斜線が壁を切り裂い

ていく。
剣士は抜刀の勢いを殺さずに旋回。遠心力と気を絶対零度の刃に込め、砂浜を切り上げる。

「義翔閃！」

剣身が突き立ち、地面から衝撃波と気の刃が炸裂する。
巻き上げた白砂をかき消すほどの爆発が雄飛の眼前で発生。
周囲が白く染まる。

「ほう・・・・」

別荘のプライベートビーチ。雄飛の訓練場になりつつあるその場所の後方、石造りのテラスで雄飛の技を注意深く見ていたエヴァンジェリンは興味深そうな声を上げる。
昨日と同じ様に放課後の時間を訓練に充てる雄飛は、ただひたすらに剣を振り、技を放つ。
拳、斬撃、衝撃波というリーチの違う攻撃を速度の速い順で組み込んだ連撃。
基礎的、と言ってしまえばそれまでだが距離を取ろうとする相手には有効な連撃だ。
しかし、

「荒れているな・・・・」

６００年を生きてきたその目は見逃さない。
集中できてはいるが、動きそのものには何かズレを感じる。
頭で違うことを考えているかのように。

（やっぱ分かるか・・・・）

小さな唇から漏れた呟きが、不意に雄飛の耳にも入るが、気づかない演技をして再び技の練習を続ける。
今の雄飛の頭の中は様々な事柄が絡み付いて解けない状態だ。
考えないフリもできるが、ふと思い出したかのように思考の穴にはまる。
今まで意識したことは無い。いや、無いからこそなのか。

『やりたい事がない』

才能の有無を教えられ、自覚して、鍛えて。持ったは良いが明確な使い道が見つからない。
例えるなら・・・旅行先で買ってはみたものの、部屋に置くには明らかに邪魔な魔除けの像のようなものだ。
才能は場所をとることはないが、高音のように目的を持って鍛えている人間を見ていると、嫉妬と劣等感が湧いてくる。
学園長には「金が支払われる限りは味方」とは言ったが、流石に金のためには死ねない。
魔法先生や魔法生徒達と顔合わせをしたあの日のことを思い出してしまう。

（何が、『宗教には興味ないので』だ・・・）

高音やシスターシャークティーのような「信念」や「志」を持っていない自分が言って良い言葉ではなかった。
今でも『正義なんてくだらない』と高音達に笑ってやりたい自分もいるが、笑っている自分はもっとくだらないのだろう。
正直な話そんなもの無くても剣は振れるし、魔法は使えるし、戦える。
しかし頭では割り切れない。

（青春ごっこもこれくらいにしておこう・・・・）

最近癖になりつつある溜息を吐いて剣を構える。どうせここの時間の流れは外とは違う。時間も、やるべき事もまだ残っている。

「戦う意味」や「志」なんて持たなくても剣は振れる。

ならこのままでも問題ない。そのはずだ。

そんな事を考えながら雄飛は訓練を再開していった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

走る。

ＨＲが終わった瞬間競歩の速度で廊下を歩き、靴を履き替えたら全速力で寮を目指す。

昼休みに大河内が早退した。

走る。

運動場のフェンスを飛び越え、塀の上を駆け抜け、文字通り一直線に自分の部屋に向かう。

自分でいうのも何だが、気が気ではない。

木々を抜けて寮の庭に着地。スリッパに履き替えるのも面倒なので裏口からそのまま階段を上る。

『ＹＵＨＩ　ＨＩＭＥＢＩＳＩ』のプレートの前に到着すると急いで来た事を悟られないように息を整え、鍵を開ける。

「大河内大丈夫かー？」

「ひ、姫菱くん！？」

部屋に入っても姿は無い。代わりに水音と脇の部屋から大河内の声が聞こえた。脱衣所の明かりが点いているのでシャワーを浴びているらしい。

寝汗でも掻いたのかなと思いつつ鞄を下ろす。しかし、そこで違和感に気づく。

（どうしてこの部屋でシャワーを浴びている・・・？）

同居するようになった後、三人は必ず備え付けの風呂ではなく大浴場を使っていた。

さすがに入浴を俺に見られたく無いのか、特に気にも留めていなかった。

違和感に従って、脱衣所に入ると脱いだ服があった。洗濯用の籠には長袖の服が入っているのが目に入り、俺の違和感が更に膨れ上がる。

体調が悪くなったのは今日の昼から。しかし大河内はその何日も前から水泳部に顔を出していない。

凄まじく嫌な予感。そして俺は負の方向の予感は高確率で当たる星の元に生まれた。

「大河内ちょっといいか？」

「えっ！な、何・・・・」

刷りガラスの向こうで大河内のシルエットが跳ねる。その声は驚き

ではなく、不安と緊張を孕んだもの。

「お前・・・・『大丈夫』か？」

そう、まるで隠し事を問い詰められた子供のような声。
扉の向こうから答えは無い。それだけで俺は確信してしまった。

「・・・開けるぞ・・・・」

どんな理由があろうと女の子の入浴中に扉を開けるのは犯罪行為だとは思うが、どうしても確認しておくべきことがある。

「ま、待って！」

無視して扉を開く。シャワーの湯気の中に両手で裸身を隠す大河内がいた。
直接目にするのは二度目だが、今回俺が目を奪われたのは大河内の大人びた身体ではなかった。
服が濡れるのも構わずに浴室に入り、彼女の手首を掴む。

「駄目、見ないで！」

悲鳴を無視して強引に両腕を開かせる。
大河内は泣く寸前の顔になっていた。しかし俺も同じくらい顔が悲痛に歪んでいたと思う。
お湯で淡い桜色染まった四肢、大きな乳房、無駄な贅肉の無い腹と下腹部を覆う蔭り。
しかし今回に限り、俺はそんな部分に一切目が向かなかった。
水着に包まれているであろう胸は白ではなく黒に染まっていた。

上は二の腕と首元、下は太腿近くまで斑の染みになり、その美しさを蹂躙していた。

そして俺は思い至った。このドス黒い染みは佐倉愛衣を苦しめていたものと同じ色。

「ゴメンな・・・・」

手を離して浴室を後にする。部屋の柱に背中を預けるが、膝が震えてそのまま座り込んでしまう。

嘔吐感にも似た感情が胸と頭を埋め尽くし、視界は真っ暗になっていた。

どうして?

事件解決に集中して大河内の事を気に掛けてやれなかった。

今日の朝、一緒に登校したのに気分が悪そうだったのにも気付かなかった。

どうして?

身体の異常を俺や他の誰かに話さなかった。

部活に出られなくなるまで、半袖の服を着られなくなるまで黙っていた。

どうして?

「ごめん、なさい・・・・」

言葉と共に肩に感触。
気付くと身体をバスタオルで隠した大河内が隣にいた。隠しきれない肩や腕の黒い染みが痛々しかった。
涙で顔をくしゃくしゃにしながら、それでも俺の事を心配している。

「ごめんなさい・・・・」

肩に置かれた手が震えている。それを握っている俺の手も。

「ゴメンな・・・・」

言えるわけが無い。
普通の女の子が、こんな身体の異常を他人に話せるわけが無い。
周りにいた人間が、俺が、気付いてやるべきだった。
手を取って強引に引く。そのまま力なく寄りかかってくる大河内を抱き寄せる。

「ゴメンな・・・・」

「ごめんなさい・・・・」

互いに謝罪を口にしながら、俺達は極大の後悔に苛まれていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇アキラ　side◇

窓から入る夕焼けがカーテン越しにエヴァンジェリンさんの寝室を茜色に変える。

「もういいぞ」

着替えた後、私は黒い染みについてエヴァンジェリンさんの診察を受けていた。

外していた下着を付け、シャツに袖を通す。首まで廻った黒い染みを隠すために、タートルネックのシャツを着なければならない。

眼鏡を外したエヴァンジェリンさんはそのまま一階に降りていく。

無言の彼女に付いて行くとリビングには憔悴しきった姫菱くんがいた。

裸を見られたこともあるが、この件を黙っていたこともあり顔をまともに見れない。彼も目を合わせてはくれなかった。

「エヴァンジェリン、大河内の容態」「茶々丸、紅茶を頼む。小僧のも入れ直せ」

姫菱くんの声を無視するように絡繰さんにお茶を頼むエヴァンジェリンさん。

「エヴァンジェリン！」

「座れ。飲み終わるまでは何も話さん」

声を荒げる姫菱くんに一歩も引かず、エヴァンジェリンさんは有無を言わせない迫力で切り返す。

姫菱くんは更に何か言いたそうだったがそれも一瞬、大人しく腰を下ろす。

私の不安と姫菱くんの焦燥感が満ちたリビングに、絡繰さんがカッ

プを置いていく音だけが響く。
出された紅茶は取っ手まで熱く、口をつける気にもならない。恐らく飲める温度になるまで時間を置くことで姫菱くんを冷静にさせる為だろう。
結果、姫菱くんが紅茶に口をつけるまで五分。飲み終えるまで更に五分。しばし無言の空気が流れる。
カップをテーブルに置いた姫菱くんはエヴァンジェリンさんを真正面から見据える。その顔は自分の動揺を隠せるくらいには余裕が戻っていた。

「・・・・『マーキング』だ」

「何・・・・？」

心の平静を取り戻した姫菱くんにエヴァンジェリンさんは私の診察結果を伝える。

「大河内アキラの体には『打ち込まれた対象の周囲の人間を術者の使い魔の標的にする』という魔法がかかっている」

「周囲の人を標的にする・・・・？」

意味が分からず聞き返す私にエヴァンジェリンさんは言葉を続ける。

「この魔法そのものは人間に直接的な被害は出さないが、『マーカー』になった人間の周囲にある程度の魔法使いが何人か集まると発動し、信号を出す。そして信号を拾ったゴーレムや使い魔は自動でその場に集まる仕掛けだ」

「元々は敵の潜伏先を見つける為に使う術式でな・・・・」と続け

るエヴァンジェリンさん。しかし私の耳にその言葉は入っていなかった。

「魔法使いが何人か集まる」と発動する。

ということは月曜の夜、襲われたのは・・・・私の所為・・・・？

「だがエヴァンジェリン」

「ああ、だが獣どもは大河内アキラを狙った。どういう訳か術式が歪んでいて『周りの人間だけ』ではなく『本人を狙う』ようになっている。全身に広がる黒い痣もその所為だ」

「心当たりはないか？」という問いかけも、まるで遠くで聞こえるみたいだった。

高音さんや佐倉さんが入院したのも・・・・姫菱くんがケガしたのも・・・・私の所為・・・・。

「解除する方法は？」

「仮契約」

「「っ！！」」

その単語に反射的に顔を向けてしまう。エヴァンジェリンさんは私達の視線を浴びながら説明を続ける。

「お前の仮契約は主従契約ではなく「同等の関係」で結び、互いの気や魔力を共鳴させ、循環させている。

『共鳴契約（リンクパクティオー）』とでも呼んでおこうか。

根本的な解決にはならないが、この共鳴契約なら大河内を蝕んでいる術式お前に渡すことはできる」

エヴァンジェリンさんは紅茶に口をつける。診断結果、原因、対処まで提示した以上、最早自分に話すことは無いという事なのか。

「・・・わかった・・・・」

搾り出すような声が姫菱くんの口から聞こえた。自責の念に染まったその声は聞いているだけの私でも辛い。

「大河内・・・・」

ああ。彼のこの言葉をこんな声で、こんな泣きそうな表情で、聞きたくはなかった。

「俺と『仮契約』してくれ」

――――――――――――――――――――

眩い光を閉じた瞼越しに感じる。お互いの身長は同じなので背伸びも必要なく、顔を傾けるだけで良かった。

唇が遠ざかる。雑誌に書いてあるような甘い味など全くしない。

ただ、軽く触れて離れただけ。

目を開けて見える顔が罪悪感に染まった顔だというなら、私も同じようなものだろう。

収束する光が眼前に集まり、一拍遅れて現れる二枚のカードが私達の視線を遮る。

「終わったぞ」

エヴァンジェリンさんの言葉と共に、足元の魔法陣から湧き上がっていた光も消える。

思わず手にとって見てしまう。カードの中に描かれた私は誇らしげに姫菱くんの背中を守っていた。

もう一枚が音も無く落ちる。彼のものであるはずのカードは持ち主の手に収まる事無く床に倒れた。

「お前ら、今日はもう泊まっていけ」

私も彼も何も言えない沈黙の中、エヴァンジェリンさんの声が落ちた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「大河内は？」

「たった今眠ったところだ」

砂浜に座り込んだ俺と椰子の木の木陰に立つエヴァンジェリンの間を常夏の潮風が抜ける。

仮契約の後、俺達は魔法球の中の別荘に来ていた。

それは大河内に聞かれたくない話をする為なのか、静かに泣いていてい

た彼女から逃げ出す口実なのか。
今の自分では判断はつかなかった。

「『マーカー』の術式がお前に移った以上、大河内が狙われることはないが・・・・」

「俺に移ったことがわかったら、これ幸いと獣の大群が来るだろうな・・・・」

無人の海岸に俺の乾いた笑いが流れる。笑ってはみたものの心の中にはそんな感情は一切無い。

「エヴァンジェリン。明日一日、大河内のこと頼んでいいか？」

立ち上がり、振り返るとエヴァンジェリンの面倒そうな顔があった。

「明日で全部終わらせるから、頼む」

「・・・・終わるのか・・・・？」

軽く驚いているエヴァに頷きを返すと、呆れと共に了解の言葉が返ってきた。
どうして俺が狙われたのか。ここまで周りくどい事をしたのか。
その理由はわからない。
しかし、大河内が魔法が使えない事を知っていたはずなのに、彼女を巻き込んだ。
最早、情けも、容赦も、情状酌量の余地も無い。
俺の中で判決は下った。

「明日、マルタ・シュトックを殺す」

## 第二十五話（後書き）

基本的にＴＯＶ・ＴＯＧｆの技・奥義のコンボ制約は無いものとお考えください。

次回はほぼ戦闘シーンの予定です。無駄にがんばります。

## 第二十六話（前書き）

申し訳ありません。

この話今年中に終わりそうもありません。

自分の無計画さに泣きたくなってくる・・・・。

第二十六話ご覧下さい。

## 第二十六話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

麻帆良学園の喧騒より遠く離れた森の中。山道とも獣道ともつかない坂を上る人影。長い黒髪と、均整取れたスタイルが目を引く女性だった。
昼下がりの陽光が木々の間を縫って降り注ぐ中、その足は目的地にたどり着いた。

「こんな場所まで呼び出しておいて、待たせないでくれない？」

そこは朽ちかけた神社だった。亀裂が入った鳥居をくぐると、両脇に苔で覆われた狛犬が、奥には倒壊寸前の社殿が見える。
そして社殿へと続く参道の石畳の中央にいたのは短めのブロンドの女性。
学校でいつも穿いているタイトスカートではなく濃紺の背広とスラックスに身を包み、背中に細長のバックパックを背負った彼女は緑の瞳で待ち人を見据えた。

「お待たせしましたマルタ先生」

「こんにちは、大河内」

社交辞令の挨拶の後、互いに言葉に詰まる。緊張を孕んだ二人の間を風が抜けていく。

「で、話って・・・・？」

「私が・・・・修学旅行から帰ってきた日の事で聞きたいことが・・・・」

マルタは無言。話を進めても良いと判断したアキラは緊張に息を呑みながらも続ける。

「姫菱くんが先生達に襲われた時・・・・先生、私を助けてくれましたよね・・・・？」

「ええ・・・・。あの時は驚いたわ。姫菱くんがアナタに襲いかかろうとしてたんですもの」

「まぁ、勘違いだった訳だけど・・・・」とばつが悪そうに頬を掻くマルタ。アキラはその言葉でビクリ、と震えた。

「・・・・あの時先生言いましたよね・・・・・。『これは一体どういう事です？姫菱くん』って・・・・」

「ええ。言ったけど・・・・？」

アキラの言葉が震えている事にも気付かないマルタは「それがどうかした？」とでも言いたげな口調を返す。

俯きながら、拳を握り締めながら放たれた言葉は、マルタに突き刺さった。

「どうして・・・・どうして、あの鎧武者が姫菱くんだとわかったんですか・・・・？」

鎧を纏った雄飛の顔の下半分は面に覆われていて、素顔が見えるのは頬から上の眉間部分だけ。
その状態で人など判別できるだろうか？
あの場所に後から来た魔法先生や魔法生徒は、最初は彼が誰だか分からなかったはずだ。
マルタの発言が当っていたが故に、あの場にいた全員が彼女の言葉を鵜呑みにしてこの齟齬に気付かなかった。
あの時、あの鎧武者が雄飛だと分かるのは彼が鎧を纏ったのを見ていた人間だけ。

アキラか。

獣を差し向けた犯人か。

そのどちらかだけだ。

「――――」

驚愕に目を見開いていたマルタの呼吸が途絶していたのはおよそ五秒。
その後長い、長い溜息を吐いた。
その反応が何よりの証拠だと思ったアキラは更に問い詰める。

「・・・・私の部屋を荒らしたのも・・・・・」

「・・・・ええ、私」

「月曜の夜に狼達が襲ってきたのも・・・・・！」

「私よ」

その淡々とした受け答えに歯軋りしながらも、襟に手を掛ける。

「『コレ』を私に仕掛けたのも先生だっていうんですか！？」

鎖骨の下、泥を塗りこんだような黒いシミが肌を蹂躙している様をマルタに見せ付けるアキラ。

その光景に驚愕と同性としての同情心が表情に表れるが、それも一瞬だった。

「ええ」

告げられた言葉よりも、その眼差しにアキラは気圧された。

緑の双眸は炎のように激情を湛えているのに、向けられる視線は氷点下のように冷たい。

「・・・どうして・・・どうして、こんなことを・・・」

「アナタに、彼の足枷になって貰う為よ」

それが搾り出した問いに帰ってきた答えだった。

『足枷』

アキラはその単語に一瞬耳を疑った。しかしマルタの言葉は続く。

「自分と一緒にいるところを襲われた後、アナタの部屋に侵入した形跡があれば彼は二つを関連付けて考え、こう結論を出す。

『狙われているのは自分ではなく、アキラではないのか？』とね。

その上、被害に遭い危険に晒されているのが自分に好意を寄せる人間であれば彼は絶対に無視できない。

アナタは彼の動きを制限する『足枷』であると同時に、獣達の狙いを誤魔化すための『疑似餌』だったのよ」

「ちゃんと踊ってくれてありがとう」と、憎悪が滴るような笑みを浮かべながら礼を言うマルタ。

向けられる嘲笑に唇を噛み締めながらもアキラは耐える。

「どうして・・・・・・どうして彼を狙ったんですか！姫菱くんが一体何をしたっていうんですか！？」

彼の重荷になってしまった事と自分の恋心すら利用された怒り、アキラは感情のまま言葉を叩き付ける。

「アキラ。アナタは一つ勘違いをしているわ」

わざとらしく含みを持たせた声。それはまるで他人の間違いを悪意を持って指摘する、嘲りの声だった。

「『獣達の狙い』が姫菱雄飛であっただけで、『私の狙い』とは一言も言っていないわよ？」

告げられた真実はアキラも、雄飛も、そして「本人」も。誰一人として予想していなかっただろう。

「私の狙いは、『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』よ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

姫菱くんはいない。
「今日はエヴァンジェリンのところに居てくれ」と言われた以上、私はここにいるしかない。
最近めっきり口数が少なくなった姫菱くんだが、何を考えているかは私でも分かる。

（私は・・・・邪魔なんだろうな・・・・）

彼は強い。
私では彼の後ろにいることはできても、桜咲さんや近衛さん達のように彼の隣には立てない。
そもそも彼の隣にいて、私に何ができるというのだろう？

（この件が片付いたら・・・・）

彼から離れよう。
沈んでいく気持ちと共にそう結論付けていると、乱暴にドアが開けられる音と、怒りの声が下から聞こえてきた。

「・・・・一体これはどういう事だエヴァンジェリン！」

何かを叩き付ける音と一緒に聞き覚えのある声が二階まで上がってくる。この声の主と事態を確認しようと階段を下りようとする。
しかし、その前に絡繰さんが一階から上がって来て道を塞ぐ。

「ここから逃げて下さい」

「え・・・・?ちょ、ちょっと待っ・・・・・」

声を出そうとした口は彼女の両手で塞がれ、人差し指で自分の口を押さえる。声を出すなの仕草。

二人の間に無言の時間が過ぎる間、階下からは複数の言い争う声が聞こえる。

「匿名とは・・・・獣を・・・・今までの情報と・・・・」

「・・・・その・・・・近い情報を本気で信じて・・・・・?」

「・・・・本国・・・・来た情報・・・・容疑・・・・拘束させて・・・・」

途切れ途切れとはいえ、エヴァンジェリンさんと複数の人の言い争う声が階段を上ってくる。

「理由は分かりませんが、今回の事件でマスターに容疑がかかったようです」

口から手を離した絡繰さんは緊迫した状況にも拘らず無機質な声と表情で驚愕の事実を告げた。

「ですので、巻き込まれる前にここから逃げて下さい」

指で示した場所には玄関とは反対方向にある窓があった。しかし、いきなりの事態に頭が付いていかず私は立ち尽くしてしまう。

膝裏に衝撃。いきなり横抱きにされた。絡繰さんはパニックに陥った私にかまう事無く窓を開け、躊躇無く飛び降りる。

「っ・・・・！」

体の中が浮き上がる感覚に息を呑む。裏手の庭に全くの無音で着地した絡繰さんは私を下ろし、一礼。踵を返し、再び跳躍。

音一つ立てず窓枠に着地した彼女は振り返る事無く部屋の奥に消えてしまった。

裏庭に置き去りにされた私は一連の事態からようやく我に返る。

（エヴァンジェリンさんが事件の犯人・・・・？）

下に来ていたのは恐らく魔法先生。複数で来たということは話を聞く事よりも、身柄を押さえるために来たということだろう。

（違う・・・・！）

情報やら証拠がどうこうという話が聞こえてきたが、エヴァンジェリンさんは真犯人に嵌められたのだ。そして恐らく姫菱くんも。

どうにかして知らせないと。そう思い携帯を取り出す。焦る気持ちを抑えながら電話を掛けるが・・・・繋がらない。

どうしよう・・・・。考えろ、考えろ、考えろ。

今この状況で姫菱くんの居場所を知る方法は・・・・。

（あった！）

胸ポケットから取り出すのは二枚のカード。剣を構えた姫菱くんと私がそれぞれに描かれたカードだった。

一瞬、昨夜の事を思い出して顔が赤くなり、再び気落ちしてしまうが後回し。

裏手の庭から林を抜けて大通りに出て、夕暮れに染まりつつある道を全力疾走する。

私では姫菱くんの居場所は分からない。カードが使えれば分かるのだろうが私には分からない。でも、

（使い方が分からなくても・・・）

知っている人に聞けば良い。
急ごう。
行って何ができるのかはわからない。しかしこのまま何もしないでいるのは耐えられなかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

敵を罠に嵌めるに当って最も効果的なものは「油断しているとき」を狙う事だろう。
相手が勝利を確信したとき。罠を突破したその瞬間。そして、自分が狙われるなんて思ってもいないない状態のとき。
勝負そのものが発生していない状況で、自分に罠を仕掛ける人間がいるとは誰も考えない。

「貴方を狙ったフリをして本当の狙いは姫菱くん、なんて推理は誰でも立てられる。そこから事件性を考えても『素性不明の人物が素性不明の誰かに狙われている』という事実が見つかるだけ」
トリックを暴く探偵のように朗々と真実を告げるマルタ。その顔には勝ち誇った笑みが張り付いていた。

「私は単に貴方を守るナイト君が目立ってくれれば良かったの。女の子を傷物にするのは忍びなかったから、姫菱くんがいてくれて助かったわ」

事件に振り回されるアキラが疑似餌なら、事件解決に躍起になっていた雄飛は舞台で踊る道化。
目立った分だけ事件の重要性が増し、結末に花を添える。

「証拠が揃った状態でエヴァンジェリンを擁護するほど先生方は善人ではないし、本国経由の情報なら先生方は誰一人として疑わない。なにより犯罪者が自分の近くにいる事に不満を感じている魔法先生や生徒は、これを機にエヴァンジェリンの処刑を提案するでしょうね」

悪意で塗り固めたような声で哂うマルタ。対するアキラは俯いて肩を震わせていた。

「・・・・そんなことのために・・・・」

「そんなこと・・・・？・・・・そう・・・・・。貴方にとっては『そんなこと』よね・・・・・」

アキラの口から知らず知らずのうちに言葉が漏れる。
しかし、その何気ない言葉にマルタは諦めにも似た表情を垣間見せる。

「そんな事の為に！大河内をあそこまで追い詰めたのか！」

それは絶叫だった。アキラの口から迸る激情とその内容にマルタは

目を見開く。
アキラが懐から取り出したのは一つの球体。妖しげに光るそれは飴玉だった。
口に放り込んで、一飲み。軽い爆発音と共に、煙がアキラの周囲を包む。

「・・・・女装の趣味があるとはね・・・・」

「ちょっと面白かったのは否定しない」

『彼女』は、いや『彼』はここに来る前に先程食べた物と似たような飴玉を口にしていた。
それはかの「吸血鬼の真祖」たるエヴァンジェリンが直々に調合した変装薬。６００年の永きにわたって敵を欺いた変装技術の粋を集めた一品だった。
晴れた煙幕の中、人影から掛かる声。そのシルエットはアキラと同程度でもその体躯は一回り程度大きく、女の子特有の線の細さなど微塵も存在していなかった。

「姫菱、雄飛・・・・！」

「したり顔で色々と喋ってくれて助かったぜ」

奥歯をかみ締めるマルタに向かって雄飛は画面に「ＲＥＣ」の表示がされた携帯を掲げてみせる。
事件への関与と、その自白。エヴァンジェリンを嵌めるのにどの程度の捏造証拠を用意したのか知らないが、その大前提を覆す一手だった。

「これで詰みだ」

「悪いけど、まだよ」

その言葉を皮切りに今までとは比べ物にならないほどの重圧が神社全体に満ちる。

「その携帯を破壊すれば証拠は無くなるのよね？」

マルタと雄飛の視線が交錯し見えない火花が散る。黄昏に染まりつつある森の中、息が詰まるほどの緊張が五月の空気を吹き散らしていく。

「録音機材が一つとは限らないから、『貴方ごと』破壊させてもらうわ」

「こっちとしても真相を語る『口だけ』あれば良い。両手両足は別に必要ないから、ここで切り落としていく」

正気の一切存在しない無人の森の中。互いに激烈な殺気を叩き付けながら狂戦士達は動いた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

（揺らめく焔、猛追！）

「ファイアーボール！」

無詠唱魔法で発生した五つの火球が、マルタの放った魔法の矢が空中で激突。紅蓮の爆風と蜘蛛の巣の様な紫電が二人の中間地点で撒き散らされ、互いの視界を遮る。

しかし俺は黒と朱色が全身を包むのを感じながら、その爆発に向かって走る。

火炎も雷撃も『サナダ』の装甲が弾くのに任せながら爆壁を突破。

敵を殺傷圏に捉えたその瞬間、抜刀。

アイスコフィンがマルタの心臓めがけ走る。しかし蒼白色の斬線は白銀によって阻まれ甲高い金属音が響く。

そして左腕が振られた瞬間、緋色の火花を散らしながら太刀筋が上に流された。

だがマルタの横に流れた腕で反撃するよりも、俺が剣を振り下ろす方が速い。

落雷の速度で打ち下ろされた一刀はまたしても金属音と共に地面に深く突き立つ。二度目は完璧には受け流せず、女教師の太腿から血が跳ねる。

後方跳躍で距離を取ったマルタがそれぞれの両手に持っていたのは切っ先が三方向に伸びた刃だった。

細長い二等辺三角形を底で繋いだような形状の白銀の刃は十字架を思わせる。

短剣にしては異様に長い柄から察するに短槍に分類される武器なのだろう。

「・・・・十字短槍の二刀、いや二槍流か」

剣を鞘に収め、再び抜刀術の構え。たった二度の打ち合いだが正直俺は驚いていた。

『サナダ』で得た剛力から繰り出す居合いを技術一つで流されると

は思わなかった。単純には計れないが技だけなら京都で戦ったフェイト・アーウェルンクス級だ。

「来たれ」

更に「だっこソフィ」を呼び出し、魔法を詠唱させながら笑みを浮かべるマルタの隙を探す。

「さっきの太刀筋。本当に容赦無いわね」

「姫菱裁判でお前の死刑が決定したからな」

だっこソフィの詠唱を左耳で聞きながらこの槍使いの戦闘能力を計算。

甘く見ていたつもりは無かったが、彼女の強さは他の魔法先生とは一線を画すようだ。

「ずいぶんな不当判決ね。再審を要求するわ」

「無駄だ。ウチの陪審員は全員不景気な葬儀屋でな」

「そう・・・。やっぱり貴方は厄介、ねっ！」

マルタの言葉と共に横っ飛び。

上空より飛来した雷の矢の群れが、一瞬前まで俺のいた場所に突き刺さる。

足止め程度の魔法ではなく、必殺の魔力が込められた矢の雨が連続でサイドステップをする俺を執拗に追ってくる。

九本目の矢が地面を穿つ瞬間、風のように間合いを詰めたマルタの刺突。

鞘を引き抜く暇も無く十字単槍が肩口を強襲。閃光のような一撃を大袖の装甲が受け止める。
だが槍使いの左手首が捻られ穂先が旋回した瞬間、銀十字の刃が装甲ごと俺の右肩を斬り裂いていった。

「水影身！」

肩口を走る穂先と激痛を無視して、素早くマルタの横に回りこみつつ鞘で反撃。今度は右の槍で防がれるも強引に吹き飛ばす。
相手が体勢を回復する前に抜刀の一撃。足を狙った下段斬りをマルタは小さな跳躍で回避。その瞬間を追撃の神聖術が発動する。

「この名を以ちて戒めを刻め！フラッシュティア！」

宙に浮いたマルタの足元の大地に大きな十字が刻まれ、吹き上がる眩い光と衝撃波がマルタの姿を塗りつぶす。
だが俺は悪寒に従い後ろに飛ぶ。瞬間、目の前に巨大な銀の三日月が現れ、兜の角飾りが断ち切られていった。

「不安定な跳躍状態に合わせての高速攻撃。今時素人でもしないわよ？」

冷や汗を掻きながら距離を取る。声の方向にはフラッシュティアの効果範囲にいたはずのマルタ・シュトックが地面に着地していた。

「虚空瞬動か・・・・」

後方に飛びながら空中で更に前に高速移動。俺の神聖術の効果範囲から逃れると同時に上を取り、カウンター。反応できなければ致命傷だっただろう。

エヴァンジェリンから聞いてはいたが、短距離とはいえ空中を高速移動できるなんて確かに厄介な移動術だ。
そして輪を掛けて厄介なのが彼女の持つ『一本の槍』だった。
全長2m近いそれは両端に白銀の穂先がついた長槍。二本の十字短槍を石突で繋ぎ合わせ、旋回半径を広げた十字長槍での攻撃だった。
近・中距離において手数で勝る短槍と、威力に優れた長槍を瞬時に使い分ける戦闘技術。
空中を自在に動き回る移動術と速度と威力を両立させた無詠唱魔法。

「厄介すぎるぞ・・・・」

苦い声を出しながら再び前進。剣戟と攻撃魔法を応酬する轟音が激闘の幕を切って落とした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇このか　side◇

もうすぐ日が落ちる。茜色に染まる室内を見回して、そんな事を思った。
今日の夜の弟子入りテストに備えて仮眠を取っているネギ君の邪魔にならんよう、もはや勝手知ったるユウの部屋で魔法の勉強。
シャークティー先生から借りた治癒魔法に関する文献をテーブルに広げながら、せっちゃんの気による肉体活性についての説明を聞いていた時、乱暴にドアが開いた。

「木乃香さん！刹那さん！」

息を切らせながら飛び込んできたのは

「アキラ！」「大河内さん！」

いきなりの訪問者に思わず駆け寄る。

顔だけでなく全身に焦燥感を漂わせた彼女は「ひ・・・・・姫菱くん・・・は・・・・・」と途切れ途切れの言葉を吐いた。

（どういう事や・・・・？）

ユウは今日一日、アキラと一緒にエヴァちゃんのログハウスにいると言っとったはず。

なのにアキラだけココに来たいう事は・・・・。

顔を向けるとせっちゃんも同じ結論に達したらしくすぐさまポケットからカードを取り出す。

それは純白の翼を背負った剣士と、その背後に背を向けた鎧武者が描かれたパクティオーカード。

そのまま額に近づけて念じるように目を閉じる。

蛍の光のような燐光がカードを包み、壁に向かって伸びていく。根拠はないがきっとユウの居場所を示しているんやろう。

だが示された光の道は数は三本やった。

額に掲げたせっちゃんのカードからの光の帯。遅れて出したウチのカードから灯る燐光の線。そして・・・・。

アキラの胸ポケットから漏れ出る淡い明かりの軌跡。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

「いつの間に！？」という驚きと、「ああ、やっぱなぁ」という諦めにも似た諦観と、「ごめんなさい」という謝罪が三人の視線上で

飛び交う。
事情はまだ知らぬものの明らかに切迫した状況の中、耳が痛くなるほどの三者三様の沈黙が部屋に落ちた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ◇

常に静謐さが支配しているはずの森の中。しかし今は耳を覆いたくなる程の雷鳴や爆発、金属が打ち合わされる大音声が山中に響く。
風の刃や冷気の帯が木々を砕き、紫電の鏃が大木に大穴を開け倒壊させる。
掌から放たれる白雷が河川の大岩を粉砕すれば、上空より飛来する火球の連弾が斜面の土砂を吹き飛ばす。
白銀の槍と石突が絶対零度の刃を逸らし、蒼白色の剣身と鞘が十字の穂先を弾く。
激突する魔法の余波で地形が変わり、交わされる槍と剣の軌道上にあった梢や幹が微塵に切り裂かれていく。
夕闇に染まる神社跡は、さながら戦場のような光景になっていた。

「ずいぶんと荒々しい剣ね」

「まるで獣のよう」と呟きながら左右の槍で突きと薙ぎの連続攻撃を繰り出すマルタ。剣と鞘、篭手も使って弾く雄飛。
鎧武者も連撃の隙を突いて反撃を繰り出し、剣と槍が互いの制空権を奪い合う。

「アンタは・・何でエヴァンジェリンを狙ったんだ・・・・？」

金属の悲鳴が響き渡る中、雄飛は疑問を投げかける。

「簡単な事よ・・・・。人類の『天敵』は・・排除しなければならないの」

会話の中であろうと剣と槍による破壊の嵐は容赦なく吹き荒れる。鎧や服を切り裂かれながら、互いに致命傷の攻撃を紙一重で回避していく。

「『吸血鬼は人間の敵』ってか？今時カビの生えそうな動機だな」

「そういう貴方はどうなの？」

言葉とともに長槍形態で繰り出される雷速の刺突を雄飛は超反応で回避。マルタの側面に出た鎧武者は「朧月夜」を放つ。

満月を描くように旋回する刃がカウンターで教師の首筋に叩き込まれる。が、寸前で停止。

分離させた短槍を右腕の外に掲げて防御。左手で柄を、右肘で穂先を支え剛力を完全に受け止めていた。

「他人に話せるくらいの『剣を振るう動機』が貴方にあるのかしら？」

上空に流した剣をマルタは屈んで回避。突き出された右の短槍と、引き抜かれた鞘が交差。反動で互いの距離が離れる。

「俺は」

「桜咲さんのため？近衛さんのため？・・・・それともアキラのためかしら？」

雄飛の返答を更なる疑問で封じるマルタ。

剣と槍の殺傷圏が遠のくのと同時、雷の矢と爆裂が激突。轟音と共に紫と緋が二人の視界を遮る。

爆煙と雷光が晴れた後には二人の姿は無かった。

「それはね、『単なる下心』っていうのよ」

「言ってくれるね！」

距離を取った二人は素早く物陰に移動。大木を背にした雄飛と大岩の陰に隠れたマルタはそれぞれに回復魔法を発動。

治癒魔法の朧げな光と再生術の淡い燐光が夜に染まりつつある森の中に浮かび上がる。

「なら、あんたの言う『正当な理由』なら他人を巻き込んでもいいのか！？」

「少なくとも、貴方みたいな人間は巻き込んでも心は痛まなかったわ」

再び静寂が戻った森に二人の会話がこだまする。

「貴方が毎日享受している平穏はいったい誰が守ってきたのかしら」

声の方向から自分の位置が割り出されないよう、常に移動しながらもマルタの言葉は続く。

「顔も知らない誰かが毎日維持している平和な日常の恩恵を当然のように受けながら、無関係を気どる・・・・。笑っちゃうほど典型的なガキね」

「カッコ悪いというより、頭が悪い」という嘲弄が自分の頭の中に響く。自分と「だっこソフィ」による再生術の二重発動で傷の治療を終えた雄飛は声と気配を頼りにマルタの居所を探す。

しかし雄飛は間違いを犯した。

一つはマルタの得意魔法の系統を雷撃系だと勘違いしたこと。

もう一つは彼女の姿を見失った事だ。

たとえ気配で追っていても、彼女が何をしているか判るように常に視界に彼女を入れておくべきだった。

そして思い出すべきだった。つい先日『何に』襲われたかを・・・・。

「そろそろ・・・・終わりにしましょうか」

大規模な攻撃術を紡ぎながら捜索をしていた雄飛は遂にマルタを見つける。

木々が開けた大きな空間。そこは二人が最初に出会った神社跡だった。

雷撃で砕かれた鳥居は参道を塞ぎ、朽ちかけていた社は雄飛の魔法攻撃が止めをさしたのか完全に倒壊していた。

出会ったときと同じように、参道の中央には喜悦に顔を歪ませ、血のような赤い燐光の中で哂うマルタ・シュトックが立っていた。

そう。彼女の本領は攻撃魔法ではない。

燐光の正体は、彼女の足元から立ち上る光の軌跡が作り出した魔法陣からのものだった。

「ここからは私流にやらせてもらうわ」

魔法陣の中から出てきた彼女は背中のバックパックから儀礼用の短剣を取り出し、空に投げる。

後方の地面に刺さった切っ先から更に濃密な赤が走り円を、複雑な図形を、何種類もの文字を描き、みるみる内に魔法陣を肥大化させていく。

瞬間、闇が爆発したように吹き上がる。四方八方に撒き散らされるはずの飛沫は魔法陣の外には一滴も出ないまま光の円の中に汚泥が溜まっていく。

妖しい光で形作られた魔法陣の中、円柱状に集められた闇色の液体は瞬く間に見上げるほどの大きさに膨れ上がる。

そして始まったのは、粘土細工という規模を超えていた。

大木のような四肢が大地を踏みしめ地面を揺らす。両の前脚の手首には禍々しい反りの入った刃があった。

大型重機のような胴体を始めとした全身は昆虫のような外骨格に覆われ、赤銅色の輝きを帯びている。

そして後方に伸びる尾の終点には一対の巨刃。鋏の様に開閉される度に甲高い金属音が聞こえてくる。

泥の円柱の外に出てくる蟷螂のような頭部には昆虫特有の大顎と緑に光る複眼があり、俺を見下ろしていた。

毒々しい色の蝶の翅が背中から大きく伸び、森の大気を揺らす度に鱗粉が周囲に散ってある種幻想的な光景を醸し出していた。

「幼生体程度、の大きさとは、いえ・・・『クオイの森』に住む、固有種を元に作ったゴーレム。甘く見ない、ほうがいいわよ?」

限界を超えた召喚と魔力消費の苦痛に顔を歪めながら、それでもマルタは勝利の笑みを浮かべる。

全長約１５m。家一件ほどもある巨大な魔獣を模した戦闘人形を背後に従えた魔法使いは、叫ぶ。

「行け！キマイラバタフライ！」

―――――――――――――――――――――――――

「事情は分かりました。私が行きますので、お二人は」

「『ここで待っていて下さい』って言うの？」

三本の光が指し示す山々の稜線に夕陽が沈み、部屋の中が茜色から夕闇に染まる。
これまでの説明を聞き、一刻の猶予も無いと判断した刹那は切り出した言葉を飲み込まざるを得なかった。
それは言葉を遮られたからではない。
言葉に込められた意思と力、こちらを見据える眼差し。そのどれもが今までのアキラのものとは思えなかったからだった。

「だったら最初からここには来てないよ桜咲さん。どこかに閉じこもって震えているのと一緒だよ」

淡く光る胸に手を当てて、凛とした声と表情でアキラは続ける。

「『私達が信じられないの？』って言ったってダメだよ？私はもう決めたから」

アキラの変わり様に驚いている木乃香と、圧倒されつつある刹那。

信用の有無ではないと言うアキラは強く言葉を発する。

「これはもう私の問題。巻き込まれた時点で、私も関わる権利と義務がある」

「だから連れて行って」そう言い切ったアキラは二人を見据える。

アキラは思う。

今まで何かをするには力が必要だと思っていた。力が無ければ「何もできない」のだと。

だが今は、そんな言葉は何の慰めにもならない。

力を持った人達が自分を襲ったり、守ったり。

こっちの都合はお構いなしで巻き込んで。いい加減腹が立ってきた。

今も「何もできない」事には変わりは無い。仮契約を交わしたとはいえできることが劇的に増えたとは思えない。

それでもいい。できなくてもやるのだ。皆を守るために。

戦っている桜咲さんや、傷を治せる近衛さんを。そして・・・・。

（姫菱、雄飛くん・・・・）

彼も。

「お願い」

「連れて行って」と、再び頭を下げるアキラ。

刹那は困ったように隣の木乃香に視線を送るが、彼女も彼女で『まさかウチも置いていく気やないやろうな?』という冷えた視線を護衛剣士に返す。

刹那が二人の視線の十字砲火に耐えられたのは２０秒にも満たなかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　side◇

天空から降ってくる巨大な鋏を何とか横にかわす。だが頭部をわずかにかすめ、獅噛の兜が粉砕。
今度は逆三角形の頭部が強襲。俺を噛み殺そうと横に開いた大顎が見えた。
掬い上げるように伸びる顎を前方宙返りで回避し、抜刀。絶対零度の刃が赤褐色の外骨格に突き立つ。
首筋から肩口まで一気に切り裂き、アイスコフィンの効果が発動。蒼白の結晶が傷口を覆い、血の赤と氷の白の斑模様が首筋に残る。
追撃を放ちたいが、矢継ぎ早に繰り出される銀の穂先がそれを阻み後ろに下がるしかない。
先程までとは違い、お互い攻撃魔法を連射できなくなってきている。あちらは「キマイラバタフライ」の召喚で魔力が尽きかけ、不用意に魔法を使えないのだろう。
しかし、こちらも似たようなものだ。

「浄化せよ！アンチドート！」

「だっこソフィ」が解毒用の再生術を発動。二重の青緑のリングが回転しながら俺の身体を囲み、黒血に染まっていた鎧や皮膚が本来の色に戻っていく。
一体これで何回目の発動だろうか。途中から数えるのをやめてしまった。
「バタフライ」の名にある通り蝶の翅を持つ敵は、それを震わせた

だけで周囲に毒の鱗粉を散布してくる。
ゲームの様に放置していたら毒で死ぬし、そうでなくとも動きは鈍る。全身を這い回る激痛の所為で治療しないと戦闘が続けられない。
俺自身が攻撃魔法を使ってもいいが、キマイラバタフライの大質量の攻撃と、マルタの緻密な攻撃がその邪魔をする。
通常召喚魔法を得意とする魔法使いは使役するモンスターやゴーレムを前衛に据え、自分は援護に徹するものだと考えていた。
しかし、彼女は違う。隙の大きいキマイラバタフライの攻撃の合間を縫って、高速の槍術を繰り出してくる。
威力と速度に重きを置いた二種類の攻撃を組み合わせた戦闘術の前に、魔法など割り込む隙がない。

「本当にしぶといわね・・・・」

「前世は、クマムシ、でね・・・・」

額から流れた鮮血の筋が眉間を通り唇を濡らす。
邪魔になった面頬を投げ捨て、二人と一体は間合いを計る。口だけでなく、鼻腔からも出血をしている俺の声はどこか掠れている。

「どうやら私の勝ちみたいね・・・・」

こっちは肩で息をするほどの疲労の中、マルタは余裕の表情を崩さない。自身の勝利を確信している顔だ。
こちらが勝つには、まずはキマイラバタフライを倒さねばならない。
戦闘中に解毒魔法を使い続けていては魔力が持たない。
「罠」の仕掛けはほぼ済んでいるものの、発動させる為の大規模魔術を紡ぐ隙が無い。

（さて・・・・どうする・・・・）

「勝敗を分けたのは、覚悟の差。かしらね・・・・」

「単純に、実力差だろう・・・・」

既に勝った気でいるマルタは俺に敗因を告げてくる。爪先の伸縮を使いミリ単位で間合いを詰めていく中、教師の講義は続く。

「私が強いのはね・・・『覚悟』があるからよ」

長槍を構えながらマルタは横に動く。キマイラバタフライは四肢を撓め、攻撃のタイミングを図っている。

「目的の為なら誰であろうと巻き込むし、殺す。その事で言い訳はしないし、復讐で命を落とそうと構わないわ」

「犯罪者の、開き直りと・・何が違う・・？」

再びの静寂。膠着状態に陥った戦場で教師と生徒の会話は続く。

「否定はしないわ・・・・。でも、その『覚悟』を、貴方の剣からは一切感じない」

風斬り音。怪物の前脚が振られ、反り返った刃が目の前いっぱいに広がる。

マルタとの会話に気をとられていた為に回避している余裕が無い。

気による肉体強化を限界まで引き上げ、巨刃を迎撃。半ば吹き飛ばされながらも超衝撃を頭上に流す。

慣性のままに後方の大木に背中から激突。脳震盪は起こさなかったものの、激痛で息が一瞬止まる。

「ガッ、アッ・・・・！」

体勢を立て直す暇も無く、更なる激痛。見ると左太腿から白銀の穂先が生え、その柄を握るマルタが眼前にいた。
その顔には狂人の笑みが、瞳は緑の鬼火が燃えていた。

「どうして、貴方にその『覚悟』が無いか教えて上げるわ」

言葉と共に突き立った槍が捻られ、更なる激痛で俺の視界が赤く染まる。同時に、氷点下の宣告が俺の心に突き刺さる。

「貴方は向けられる好意に対して真正面から向き合えない、臆病な人間だからよ。
だから自分を好きになってくれる娘を場当たり的に守ることはできてもそれ以上のことはできず、彼女達の心の痛みを感じることができない」

傷口が灼熱で焼かれるように痛むのに、頭の中は極限の虚無に塗り潰される。

「自分ひとりでは剣を持つこともできず、持っている他人を羨ましがるけど、それを認めることすらできない。
そんな人間はね、そもそも覚悟を持てる資格なんてないのよ」

否定するように右足でマルタの胸を蹴りつける。片方の短槍で防御されるも大きく距離が離れる。
傷口から穂先が抜け出る不快感を堪えながら追撃に走る。しかし、上空から降って来る紫色の濃霧に進行を阻まれる。
キマイラバタフライがその翅を震わせ、毒の鱗粉を散布していた。

進行方向を強引に変えた終点には俺に向かって疾走するマルタが見えた。
教師の顔面を粉砕する突きと、生徒の眉間を貫く刺突が二人の中間地点で激突。魔女の断末魔のような金属音が山全体に響き渡る。
手から弾かれる剣と長槍。全力の超衝撃に互いの獲物が見当違いの方向に飛んでいく。
瞬時に格闘に切り替えた俺の直拳を避けながらマルタの体が沈み、旋回。地を這う様な足払いが俺の左足を捉える。

「覚悟を持てない人間が」

太腿の傷のせいで堪え切れずに転倒。無様にすっころぶ。
失笑にも似た言葉と共に大地に手足をついた俺の背に女教師が覆い被さる。俺の右手を掴んだマルタは前転。そのまま俺も仰向けに倒され、両足が俺の右腕を挟み、胴体に被さる。

（まず・・いっ・・・・！）

反射的に左手で右手を掴んで抵抗するも、時既に遅し。マルタは俺の右肘を極める腕十字固めの体勢に入っていた。
気と「サナダ」による肉体強化を得た俺の力が、マルタのそれを上回っていようと、腕二本と全身の筋肉の戦いでは勝負にもならない。

「持っている人間に勝てると思わないでね」

鎧の防御力も、桁違いの剛力も残忍な関節技の前に敗北。右腕が一気に伸び、更に捻られる。
肩と肘と手首。三箇所の関節と、右腕の内側から何かが引き千切られる感触と、硬いものが砕ける不快な音が聞こえた。

## 第二十六話（後書き）

クリスマス・イブ？何それおいしいの？

仏に目覚めた私には関係ないですね・・・・。

## 第二十七話（前書き）

今更ですが

新年明けましておめでとうございます。
今年もごまドレを宜しくお願いいたします。

待っていなかった方が大半だと思いますが、第二十七話ご覧下さい。

## 第二十七話

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇刹那　ｓｉｄｅ◇

黄昏から夕闇に変わる時刻の中、とうとう道はアスファルトの歩道から舗装すらされていない山道に変わった。
夜の森は装備なしでは遭難の危険があるが、光の道筋は変わらず闇の奥を指している。行かねばなるまい。

「大河内さん大丈夫ですか・・・・？」

「大、丈・・・夫・・・・」

少し後方には隠せないほどの不快感を顔に滲ませた大河内さんが付いてきている。
さっきからこの繰り返し。山全体に張られた「人払いの結界」のせいだ。
自らの魔力に目覚めたお嬢様ならともかく、魔法使いとして駆け出しの域にも入らない大河内さんは近づくことにも苦労するようだ。
それでも仮契約の効果で雄飛の魔力が本人に流れ込んできているから、不快感だけですんでいる。
魔力抵抗が低い一般人なら近づくことすら間々ならないだろう。
だがその大河内さんの不快感もじきに終わる。

「皆さん止まって下さい」

そこは道の途中。どこからどう見ても何かあるようには見えない場所。
しかし、よく目を凝らして見てみると陽炎が揺らめくように立ち上っている。
ここが結界の狭間。
恐らくこの先に雄飛はいる。
振り返るとお嬢様と大河内さんがいる。表情こそ対照的だが、その瞳には強い意思が宿っていた。
陽炎に手をかざす。揺らめく無色の波の向こうに手首まで隠れてしまう。防御の術式は無いと判断。そのまま一気に飛び込む。

「な・・・・ん・・・・」

そこに広がっていたのは最早、森ではなかった。
夜の森が描かれた陽炎の向こうにあったのは焦土と化した大地だった。
倒壊している木々や、すり鉢上に穿たれた大地、未だ燃えている枝や梢が見え、せせらぎが聞こえてきそうな河原は土砂ごと吹き飛んでいる。

「これを・・・・姫菱、くんが・・・・」

凄まじい大破壊の光景に大河内さんも大口を空けて見入っている。
私もお嬢様も似たようなものだった。
森の一部とはいえ、地盤そのものを丸ごとひっくり返したような光景に誰もが唖然としていると獣の唸り声が聞こえてきた。
それは絶叫だった。
すぐさま駆け出す。残った木々の間を抜け、クレーターを飛び越えて声と気配のする方向へ向かう。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇free side◇

雄飛は右腕の中で靭帯が引きちぎられる不快な音を聞いた。
さらに取られた手首に残忍な捻りが加えられ、各関節が粉砕される。
大木が倒れ大きく広がった空間に押し殺せない絶叫が上がる。

「がっ！ぁあぁあぁっ！」

鎧武者は苦悶と共に右腕を見捨てた。上体を強引に捻り、マルタの顔面に左拳を叩き込む。
しかし横に逃げた女教師は滑るように移動し雄飛の胸板に乗る。

「亡骸は、山頂にでも埋めてあげるわ」

紫電を纏った手刀を首筋に当てた魔女からの死刑宣告が雄飛の耳に届く。
この距離では雄飛のどんな攻撃よりも、右手が首を撥ねるほうが速い。詰んだ。

風斬り音。

鈍い音と共に血が跳ねる。マルタの右腕からだった。
マルタの上腕には銀の刃と白木の柄が突き刺さり、生まれた傷口からこぼれる鮮血が雄飛の胸元を濡らした。

「っ！」

マルタは弾かれたように上体を反らす。一瞬前まで顔や身体があった空間を銀光が通過していく。

下半身の拘束が緩んだのを見逃さず、雄飛は無理矢理起き上がる。

マルタを蹴りつけながら後転。残った左手でアイスコフィンを掴み、柄を支点に更に後ろに飛ぶ。

マルタも体勢を崩したものの、銀光を避けながら槍の刺さった方向に下がる。

雄飛が着地した場所に遅れて人影が現れる。

それは左右の手に大小の刀を携えた小柄な少女だった。

「雄飛！無事・・・・」

刹那の言葉は横目で見た光景に尻すぼみになっていく。

力なく垂れている雄飛の右腕は完全に破壊されていた。

反対側を向いた肩や肘、手首からは骨が飛び出しているのか肩衣の下が歪に膨らんでいる。

見ている間にも指から血が滴り落ち、地面に赤い染みを作っている。

一刻も早く治療しなければ命に関わるし、後遺症も残る恐れがある。

だが、雄飛にこれほどの負傷を与えた「彼女」が果たして治療をする隙を見せるだろうか。

「最近の学生は容赦が無いわね・・・・」

濃紺のスーツを黒血で染めたマルタは腕に刺さった匕首を抜いていた。

傷は右腕だけでは無い。匕首・十六串呂による攻撃はマルタの全身に及んでいた。直撃こそ最初の一撃だけではあるものの、掠めた匕

首の攻撃と雄飛との激戦もあって、背広は破け、体中から血を流している。
それでも、その顔は呆れた表情で後ろの二人を見ていた。

「桜咲さんはともかく・・・・近衛さんに、アキラまで来ちゃったのね・・・・」

マルタの溜息交じりの言葉を聞いて、思わず雄飛は顔を向ける。
横手の木の陰、雄飛の負傷を見て思わず駆け出しそうな木乃香と「何が起こっているのか分からない」という表情のアキラがいた。

「何で、先生が・・・・？」

アキラは現状を理解していても問わずにはいられない。

何故、雄飛と戦っているのか？

何故、私を襲ったのか？

何故、エヴァンジェリンさんを罠に陥れたのか？

どれを指しているのか、自分でも分かっていなかった。

「日曜の夜、私を介抱したときには・・・・既にマーキングを、していたんですね・・・・」

唯一分かるのは、先生が自分を利用したこと。
それだけだった。

「最初に戦闘に参加しなかったのは、貴女が心配だったから。とい

うのもあるのだけれど、ね・・・・」

絶望に染まったアキラに、やりきれない表情で言い訳にもなっていない言葉をかけるマルタ。

しかし、それも一瞬。悲しみを湛えていた翠の双眸は激情を孕んだ眼差しに変わる。

それはまさしく翠に燃える焔だった。

「でもここに、戦場に来た以上、殺される覚悟は持ってきたんでしょう？」

掲げた槍に呼応して、大地が軽く揺れる。横手にいたキマイラバタフライの首がマルタの高さにまで下りてきて、禍々しい殺気を放射していた。

彼女の瞳の先にいるのは、最早自分の勤める学園の生徒ではない。自ら生んだ戦闘人形と同様に、排除すべき敵しか映っていなかった。

異形の怪物が逆三角形の顔を後ろに引き、息を吸う。外骨格に包まれた胸が大きく膨らんだ瞬間、雄飛の背筋に怖気が走った。

月に照らされ始めた森の中。大量の呼気と共に、奔流が吐き出された。

雄飛と刹那に影を落とす巨大な波濤。

勘に従い、雄飛は刹那に体当たり。残った左腕で小さな体を抱えて横に飛ぶ。

波が叩きつけられる音に振り返ると、焦土と化した風景が更に蹂躙されていた。

二人が一瞬前まで立っていた地面が沸騰したように泡立っている。

奇跡的に残っていた狛犬の石像は目鼻立ちも分からない程に溶け、無意味な染みと化していた。

「っ！酸性の、毒か・・・・！」

吐かれた液体から距離を取りながら、雄飛の独白が全員の耳に入る。
キマイラバタフライは自身が持つ強酸の毒液を、まるで竜が炎を吐くように繰り出してきたのだ。
鉄が錆びたような刺激臭と蒸気が立ち込める中、雄飛と刹那は互いに視線を交わし一瞬で結論を出す。

「二人とも！」

刹那は剣を納めた雄飛に夕凪を渡し、反転。
何とか右腕一本で彼を抱えて、二人のいる場所まで全力で後退。
呼びかけの意図を理解したアキラはしっかりと抱きついた木乃香の腰に手を回し、走りながら刹那に向かって右手を伸ばす。
敵に背を向けて走る刹那の背中、Ｙシャツを裾から肩まで押し上げるようにして一対の純白が現れる。
力強い羽ばたき音と共に地面を蹴って、更に加速。

「掴まって下さい！」

アキラの腰に手を回した刹那は背負った翼で大気を掴み、一気に上昇。四人の身体が空に浮き上がった瞬間、下の地面が毒液の波にのまれていく光景が見えた。

「奥へ逃げろっ！」

視界の端で第三射の予備動作を捕らえた雄飛が叫ぶ。近くの木の枝に着地した刹那は更に飛翔。森の奥へ飛んでいく。
だがそれより速く強酸の息吹が吐き出され、刹那の白い翼を襲う。

「其は凍てつきし脅威！クールスレット！」

刹那の頭頂に移動した「だっこソフィ」の魔法が寸前で発動。生み出された冷気の帯が迫り来る強酸の飛沫を凍結させる。
しかし、それも一瞬。凍結した毒液もその奥から迫り来る波濤にのみこまれ、寸前で避けた刹那の脇を通り過ぎていった。
森の奥へと逃げる四人へ次から次へと迫り来る強酸の猛威を爆裂が、風の刃が、何とか打ち落としていく。
下級とはいえ、攻撃術がもはや瞬間使い捨ての防壁程度の役割にしかなっていない。
後方では追いかけてくる波濤の衝撃と、強酸に耐え切れなかった大木が次々と倒れていく。
一人の翼では四人分の体重は支えきれないのか、枝から枝へ連続で飛ぶ白い鳥と、それを執拗に追う怪物の猛攻。
毒液の異臭と、木々が倒れていく轟音を背中で聞きながら四人は森の奥に逃走していった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・・」

月明かりだけが頼りの森の奥深く。十を越える飛翔の後、遂に刹那が大地に膝を付いた。
滝のように流れる汗がＹシャツを透かせる中、荒く息を吐く。

それでも運んでいた三人を丁重に地面に下ろす。

「刹那、だいじょ」

最後まで言い切る前に、破壊された右腕を襲う更なる痛み。右腕に火が着いたような激痛が、沸騰するような激痛に変わる。

掛けられた関節技以上の激痛に思考が、全身を覆う眩い光に視界が塗りつぶされていく。

一瞬が永遠とも思える痛みの中、光の中で骨や神経、靭帯や筋肉が逆再生をかけるように瞬く間に修復されていく。

煌きと痛みが消え去った後には太腿の傷も、右腕の破壊の後も、痕跡すらも残っていなかった。

激痛で止めていた息を吐きながら右を見る。そこには両手に二種類の扇子を持った狩衣を身に纏った女の子がいた。

アーティファクト「東風ノ檜扇（コチノヒオウギ）」による完全治癒。

負傷を更に蹂躙するような協力な回復魔術のおかげで、俺の太腿と右腕の傷は一気に塞がった。

強力すぎる治癒魔法の反動で全身から陽炎にも似た熱気が上がる。

「こ、木乃香・・サン」

しかし顔に叩き込まれた拳の所為でお礼の言葉も最後まで言えなかった。

刹那の小さな拳が鼻を直撃！いきなりの衝撃に後方に吹き飛びそうになるが、仰け反りそうになるのを何とか堪える。

「っ！」

今度の痛みは右から。顔の輪郭が歪みそうな衝撃でいつぞやのシネマ村を思い出した。
平手打ちを放った木乃香は目尻に涙を湛えているが、それでも右手を振り切っていた。
慣性のまま左に流れる身体が優しく抱き止められる。視線で追うと、アキラが困ったような視線で俺を見返していた。

「えっと・・・・ゴメン！」

最後に左頬にアキラのビンタが炸裂。
謝罪の言葉を共にした平手打ちだったが、一切の手加減を感じられない一撃に首が捻れ、脳が揺れる。
三者三様の連続攻撃に目の前に星が出る。
三人の完璧な連携の前に、今度こそ俺は倒れた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◇アキラ　ｓｉｄｅ◇

「・・・・いつつっ・・・・」

大部分の傷が癒えた後に負傷させられた姫菱くんは鼻を押さえながら立ち上がる。

「目は覚めた？」

叩いた左手を軽く振りながら声を掛ける。

以外にも冷えた声色が出てしまい、自分でもちょっと引いていまう。
ここに来る前の話し合いで「一切手加減はしない」という取り決めに従った一発。
彼は叩かれた意味と、私たちの痛みを知ってくれただろうか・・・・？

「・・・・すまなかった・・・・・」

俯いた彼は、感情を絞りだすようにその言葉を口にした。

「・・・・雄飛・・・・私達は・・邪魔、なのか・・・・・？」

答えを聞きたくない。しかし聞かずにはいられない。というように桜咲さんが疑問を口にする。
「違う・・・・」と、直ぐに姫菱くんは否定を返すも、その言葉に、首を横に振る姿にいつもの力はなかった。

「これは・・・・この問題は、俺がどうにかしようと思ったんだ・・・・」

様々な感情をない交ぜにした言葉と表情。それでも顔を逸らさずに真っ直ぐに私達を見てくれた。

「目標に向かって頑張っている周りの人間を見ていて・・・・
明確な意思も、考えも無く、向けられた好意にも中途半端な自分が嫌になって・・・・
結果を出せば、どうにか変われるかと思ってた・・・・・」

「でも・・・・」と言葉を区切り、溜息を吐く。

「心配掛けているようじゃ、世話無いよな・・・・」

苦笑をしながらどうしようもない、というようにうな垂れる姫菱くん。

突然弱体化したような姿に皆が困惑した。

「姫、菱くん・・・・」

初めて見た、見せてくれた姫菱君の弱さだった。

いつも軽口を叩き、笑い、私達の心を軽くしてくれる姫菱くん。

しかし彼の心の奥深く、弱さまでは誰も覗けなかった。

だからこそ、一人でここに来たのだろうか。

彼は守るばかりで、彼を守る人はいなかったから。

「雄飛」

力強い言葉が彼にかけられる。それは剣士からの言葉だった。

「戦うときは、私を隣においてほしい・・・・。私は、雄飛の剣だから・・・・」

姫菱くんの右手に自分の指を絡ませて、桜咲さんは自分の想いと体温を伝える。

「ユウ」

今度は彼の左手が、近衛さんの両手にと優しさに包まれる。

「ウチも連れてって・・・・。一緒には戦えんけど・・・・どんな傷でも治すから・・・・」

強い意志を湛えた眼差しで想い人を見る癒しの使い手。
しかし、

「どうして・・・・」

姫菱くんは向けられる二人の想いに耐え切れないように顔を横に振る。

「どうして俺みたいな人間を好きになった!?

こんな中途半端な男を!

俺は、向けられる好意に今の今まで答えられなかった臆病者だぞ!」

絞り出されるような声で叫ぶ姫菱くんを抱きしめ、彼の言葉を止める。

「それでも良いの・・・・。受け取ってほしい」

すぐ近くに彼の顔がある。眉根を寄せ、自分の弱さをさらけ出した顔だった。

「一緒に戦えないけど、傷も治せないけど・・・・
せめて守るから・・・・自分だけが傷つくことを、当然みたいに考えないで」

彼の鎧の凹凸を体に感じる。自分の服が彼の血と泥で汚れるが、それすらもどこか嬉しく感じる自分がいた。

「好きです。雄飛くん・・・・。あなたを・・・・守らせてください」

昨日の仮契約とは違い、今日は自分から。
深く、濃い口付けを交わす。
触れ合った唇から私の想いを送るような、彼の感情が流れ込んでくるような感覚が確かにあった。
腰と背中に感触。更に身体が密着する。
彼の手が私の後ろに回り、優しく、しかし強く抱き寄せられた。
一瞬驚いてしまったが、無意識に身を任せてしまう。
唇だけでなく身体全体が触れ合う獣のようなキス。
ようやく顔が離れ、互いに貪るように息を吸う。でも顔が赤いのは酸欠のせいでは無い。
時間にして、およそ２０秒。水泳部の肺活量に任せた長いキスだった。

「勇気を出しすぎないで」

刹那さんも、木乃香さんも、そして私も。そんなところを好きになった訳ではないのだ。

「傷つく事を恐れない、省みない英雄になんかならないで」

確かにそんな男の子はカッコイイかもしれない。でもそれだけだ。

「私達を大事だと思うなら、同じくらい自分も大切にして。
どこまで力になれるか分からないけど・・・・刹那さんも、木乃香さんも、私もいるから」

中途半端でも、臆病でも、非凡の中にあるその平凡さに魅かれた。

美点も欠点も、もうどうしようもなく好きになってしまったのだ。

「アキラ・・・・」

「雄、飛くん・・・・」

彼以外が見えないほどの至近距離。抱きかかえられたまま見つめ合う。

さっきの続きを欲してしまい、再び顔が近づく。

しかし、

「「・・・・ズルイ・・・・」」

氷点下よりもなお冷たい声。嫉妬の炎に彩られた二重奏が耳に入った。

一瞬遅れて光速の速さで雄飛くんから離れる。それだけで彼の両脇に刹那さんと木乃香さんの姿が視界に入る。

今、どんな状況か今更ながらに気づいた。気づいてしまった。

さっきまでの事を見られた事も含めて・・・・。

「・・・・しい・・・・」

「え・・・・？」

消え入りそうな声が刹那さんの唇から聞こえ、思わず聞き返す雄飛くん。

「私も・・・・！その・・・・してほしい、です・・・・」

潤んだ瞳で彼を見上げる刹那さん。大人しい彼女から大胆な発言が飛び出す。

「アキラだけズルイ！ウチもずっと我慢しとったのにー！」

鎧の襟を掴んで雄飛くんの首を力いっぱい揺らす木乃香さん。

さっきまでの空気が一転、夜の森で二人の女の子からキスをねだられるというよく分からない状況になってしまった。

結局、「おまじない」という事で、二人の願いは叶えられた。

彼からだったのが、少し、いやかなり・・・羨ましかった・・・・。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇free side◇

「っ！・・・ふぅ・・・・」

治癒の光が収まり彼女の周囲に夜本来の闇と、冷たい月明かりが戻ってくる。

四人を森の奥へ逃げられた後、マルタは自身の回復を行いながら彼らの追跡を行っていた。

もう時間がない。

自分の体力もそうだが、それ以上に、気がかりなのは魔法先生、生徒のエヴァンジェリンへの対応だ。
彼女の存在そのものに不満を持っている魔法先生達はそれこそ鬼の首を取ったかのようにエヴァンジェリンの処刑を強行しようとするだろうが、彼女を庇う存在がいないわけではない。
彼女を擁護する筆頭たる学園長と高畑先生がいない以上、魔法先生方の感情は断罪に傾くだろうが、想定外がないとは限らない。
否、この状況が既にイレギュラーなのだ。
周囲の木々をすり抜けるようにしてキマイラバタフライは進み、その胴体に座り込んでいたマルタは立ち上がり、周囲を警戒する。
探知の魔術は使えない。
残り四人を「行方不明」にすることを考えると、少しの魔力も無駄にはできない。最悪、治癒魔法すら使えなくなるかもしれない。
周囲から魔力の気配が立ち上がる。飛来する銀光。
十字長槍が旋回。飛んでくる匕首の群れを銀の傘が迎撃する。
しかし、右腕からの激痛。残らず弾いたものの、受け損なって体勢が崩れた。
今度は背中に冷たい衝撃。空中で身体を捻り、振り返る。
衝撃の正体は空中に作られた奔流だった。
まるで意思があるかのように動く大量の水が蛇のように動き、瀑布となってマルタを押し流す。
主人を守ろうと、敵がいるであろう方向に強酸の息吹を吐こうとしたキマイラバタフライだったが、自らの意思に反して大顎が強制閉止。
この間合いで毒液を放てば自分も巻き込まれると判断したマルタの

瞬間的な命令だった。
瞬時に思考を格闘へ切り替えた戦闘人形は水の蛇の根元がある木々の間めがけ突進。
しかし、一歩踏み出した前脚に衝撃。巨体が一瞬沈む。
絶妙なタイミングで赤い鎧武者が蒼白色の刃を叩き込み、その前進を阻んでいた。
その瞬間、ゴーレムと召喚者の連携が崩れる。

「アキラ！」

言葉と共に水流が変化。
複雑な軌道を描いて流れる奔流は鉄砲水となって女教師を森の奥へ押し流していく。

「なめるなぁっ！」

彼女は虚空瞬動ですぐさま水流から脱出。だが、羽ばたき音と共に眼前に神鳴流剣士が現れる。

「はぁっ！」

刹那の大上段からの一撃を防いだものの、反動で再び水の中に沈むマルタ。
水に飲み込まれた彼女はそのまま森の奥へ流されていく。
分断されることを恐れたキマイラバタフライは、主人を追おうとするが再び逡巡する。
援護に回ろうにも、主人は既に森の奥に入ってしまった。
木々をなぎ倒しながら進まねばならない自分では流れる水で拘束された主人も巻き込んでしまう。
敵を圧倒する巨体による攻撃も、広範囲を攻撃できる毒の息吹も、

大木や枝に挟まれては思うように放てない。

「お前の相手は俺だよ」

下からの声。見下ろすとそこには先ほどの鎧武者がいた。
巨大な敵を見上げながら、雄飛は腰を落とし抜刀術の構えをとる。
１７５ｃｍと約１５ｍ。
笑ってしまうような身体のサイズ差の一人と一体が睨み合い、戦闘が開始された。

――――――――――――――――――――

「キマイラバタフライに近接戦闘を挑む」

それが作戦会議での雄飛の最初の言葉だった。

「言っておくが、意地を張っているわけじゃないぞ？」

そう。少なくともキマイラバタフライをここで倒さないと逃げる事もままならない状況なのだ。
森を抜けると遮蔽物の無い焦土と化した斜面が広がっている。
この状況で、森の外に出ると攻撃範囲の広い強酸の息吹を上空から連射される。
逃げる俺達はさぞかし良い的に見えるだろう。
なら毒の輪分を喰らうことを覚悟で接近戦を挑み、隙の大きい強酸の息吹を封じる。
それをこなせる身体能力を持っていて、尚且つ解毒魔法を使える人間は俺のみ。

「そこで三人はマルタをキマイラバタフライから遠ざけてほしい」

そのためにはマルタとキマイラバタフライの連携を崩す必要がある。

刹那をが前衛に立ってマルタを引きつけ、回復は木乃香に一任。そして・・・・。

「アキラ。お前は刹那の援護に回ってくれ」

彼女が胸ポケットから取り出したのは一枚のカード。

主人と背中合わせになって杖を構えている自分の姿が映し出されているそれを掲げ唱える。

「来たれ」

その言葉に呼応するかのように、カードから漏れ出た魔力の光が縦に伸びる。

下に伸びた光は大理石の石突を創り上げる。上に伸びた光は螺旋を描きながら上昇し、波を模した装飾を造る。

杖の中心にはしずくを湛えた蒼い水晶が鎮座する。

それは揺らめく海を、流れる川を、降りしきる雨をあらわしたかのような杖だった。

「ブルー・・クリスタルロッド・・・・」

美しさに目を奪われながら杖に彫られた文字を読み上げるアキラ。

昨日エヴァンジェリンから聞いた説明をそのまま伝えた雄飛は三人を見回す。

「じゃあ、作戦開始だ」

その顔にはいつもの不適な笑みが戻っていた。

――――――――――――――――――――

先の二人の激戦によって更地と化した山の斜面で、大太刀と短槍がぶつかり合う。

虚空瞬動で三次元的に移動するマルタを刹那は翼で飛翔しながら追い、キマイラバタフライとの合流を阻止する。

「意外、ですね」

「何が！？」

言葉と共に互いの得物がう激突し、金属の悲鳴が上がる。その度に刹那とマルタの間で緋色の火花が咲く。

「この姿を見たら、大抵の人は驚くんですがっ！」

「そんなの、盆と年末になればっ、いくらでも有明にいるわよ！」

夕凪の一撃を回避してマルタが刹那の懐に滑り込む。首筋へ向かってくる穂先を、刹那はあえて回避しなかった。

水音。

刹那とマルタの間で弾けた音だった。

互いの視界の先が不規則に歪ませる波濤が現れる。それは水の防壁だった。
二人の間に割り込んだ水壁に槍の穂先が埋まるその瞬間、凍結。鈍い音と共に槍の一撃が阻まれた。

「ちっ！」

舌打ちと共に氷壁に変わったそれを蹴り付け、マルタは下がる。
一瞬遅れて夕凪の刺突と、鎚と化した水の蛇が自分のいた場所を通り過ぎていった。
良く組み立てられた連携だった。とても急造とは思えない。

「せっちゃん！」

叫びと共に後方から淡い光が飛んでくる。翼を背負った背中で光を受け取った刹那の身体が朧げに輝き、染み渡るように全身に広がる。
同時に肩で息をしていた刹那の呼吸が急速に戻っていく。

「厄介、極まりないわね・・貴方達・・・・」

マルタは失血で揺れる視界を何とか保ちながら、相手の戦力を図る。
前衛に神鳴流剣士を据え、治癒術を操る近衛が前衛の回復を行う。
治癒魔法は本来、対象に触れるくらい近づかないと十分な効果を発揮しないが桁外れの魔力量が遠隔回復を可能にしていた。
負傷ではなく、体力そのものを回復させる魔術は対象の身体にかなりの負担を掛けるので連続では使えないが、厄介な事には変わりはない。

「先生！どうして・・・・どうして先生がこんな事を・・・・」

全員が自分の獲物を構えて間合いを計る緊張の中、アキラが自分の部活動の顧問に疑問を投げかける。

「アキラ・・・・」

中でも厄介なのが彼女だった。
恐らくは彼女のアーティファクトなのであろう、あの杖で呼び出された水は彼女の意思一つで攻撃にも防御にも転じる。
水系統の魔法で応用で再現できないことも無いが、前衛の攻撃と攻撃の間に水壁を割り込ませた操作スピードを考えるとその干渉力はありえないくらい高速で、強力だった。
水泳部期待のエースであることといい、アーティファクトの能力といい、彼女はとことん水に愛されているようだった。

「貴方達、今日の朝食と昼食・・・・何を食べてきたのかしら?」

「え・・・・」

いきなり告げられた言葉とその意味に誰もが一瞬戸惑う。
しかしマルタの問いは更に続く。

「牛肉とか、豚肉かしら?鶏?魚?それとも・・・・」

「「「っ・・・・!」」」

聞こえた言葉に、その不吉さに、三人は息を呑んだ。
その光景を隙と見たマルタが間合いを詰め、刺突の連撃を繰り出す。
アキラは一瞬反応が遅れたが、刹那は何とか防ぎきり大薙ぎの一閃を放ちながら距離を取る。
しかし、その後に誰も追撃を放てないでいた。

それほどに、マルタの口にした言葉は不吉に過ぎた。
「良いわ。貴方たちの時間稼ぎに付き合ってあげる」
泣き笑いにも似た表情で彼女は自らの過去を語り始めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇雄飛　ｓｉｄｅ◇

倒れつつある木の幹を駆け上がり、跳躍。それと同時に脳裏で魔法陣を組み上げる。

（まだだ）

毒の鱗粉を食らいながらも、更に森の奥へと入っていく。
降り落ちる尾の斬撃を側転で回避し、疾走。一気に懐に肉薄し、回し蹴りを放つ。
全長１５ｍの巨体だろうと、身動きの取れない木々の間ではただのデカイ獲物だった。
体勢を崩した怪物を横目に「ポイズンボトル」を一気飲み。
解毒効果を全身で感じながら後退し、更に詠唱を続ける。

「焔、其は・・・・」

（まだまだ・・・・）

「贖うは地獄の業炎・・・・・！」

左肩の「だっこソフィ」からも詠唱の声が聞こえるが。それとは別に俺も術式の構築を行っていた。

（もう、少し・・・・）

剣はまだ抜けない。魔法増幅体たる剣身で攻撃を受ければ時間を掛けて組み上げた魔法陣が崩壊する危険性がある。

「魂を看取る幽玄の炎・・・・！」

不用意に接近できない以上、魔法でカタをつけるしかないのだが、大魔法の準備をしているのを気取られては意味が無いのだ。

「キマイラバタフライ・・・お前の敗因を教えてやるよ・・・・」

思い出すのは京都での戦い。エヴァンジェリンが放った直径４０ｍ超過の空間を極寒地獄とする戦略魔法。

飛騨の大鬼神を葬るほどの強力な魔法を、あれだけの広範囲で展開することは今の俺には不可能だ。

魔力、術式の構築、制御力。何もかもが足りない。

「一つ。俺を追って身動きの取れない森の中に入ったこと」

だから発想を変えた。広範囲に展開できなくとも、限定した空間なら・・・・。

「二つ。俺の仕掛けた罠を最後まで見抜けなかったこと」

灰銀色の鞘から剣を抜き払うと同時、俺はオーバリミッツを発動。
自身を強化していた力が変質し、周囲に莫大なエネルギーが撒き散らされる。
蒼白色に彩られているはずの剣身は赤熱化したように緋色に染まっていた。
さらに手元まで降りてきた「だっこソフィ」が鍔に触れ、刃に橙色が足される。自身が詠唱を行っていた攻撃術を剣身に流し、増幅させたのだ。

「三つ」

まだらに染まった剣を緩く掲げながら術式を開放。紡がれていた橙色の術式が瞬く間に広がって異界の怪物を囲んでいく。

「三人分の『おまじない』を貰った俺を相手にしたことだ！」

彼女からのキスを貰った男に勝てる存在なんて、この世にはいないんだよ！

「イグニートプリズン！」

「葬炎！ファントムフレア！」

俺と「だっこソフィ」の二重の詠唱が紡がれ、オーバーリミッツによって強化された攻撃術が同時展開する。
前後左右。キマイラバタフライを囲うように表れた紫の大火球が出現し螺旋を描きながら上昇。
同時に怪物の巨体を上回るほどの巨大な魔法陣が大地に描かれ東西南北の四箇所から魔力の光が伸び、上空で繋がれる。
天に上っていった炎が上空で反転し、急降下。それと同時にもう一

つの魔法も発動。

森に、いや山全体の大気を震わせる極大の重低音が轟き渡った。

間を置かず魔術の効果範囲内にキマイラバタフライを飲み込むような紫と橙色の閃光が走る。異界の怪物を拘束する業火の四角錐の檻と、その内部を埋め尽くす劫火がこの世に顕現した。

それは中級陣術「イグニートプリズン」と上級攻撃術「ファントムフレア」の二重発動による焦熱地獄の光景だった。

地獄の業火で作られたピラミッド型の檻で敵を拘束し、焼き尽くす陣術の中で、現世への未練を断ち切り、決別の炎を生み出す上級攻撃術の炎が吼え猛る。

ごをおっ　おをおおをおっ　るううううるぁっ！

檻の中で声にならないキマイラバタフライの絶叫が上がる。
尻尾を、大顎を、四肢を振り回し暴れまわるも最早手遅れ。
一辺１８ｍという異界の怪物を完全に覆うほどの効果範囲に設定したこの炎の魔神の名を冠す結界魔法の中からは出られない。

標的であるお前はおろか、中で発動した上級魔法の炎ですら！

広範囲に撒き散らされるはずの葬炎は檻から出ることなく、内部のキマイラバタフライに襲い掛かる。
前後上下左右。ありとあらゆる方向から紫と橙色の炎が異界の怪物に殺到し、その巨体を蹂躙せんとする。
再びの絶叫。
小さな太陽が顕現したかのような怒涛の爆炎の中、ついに戦闘人形

が炎の嵐に沈んでいく姿が映る。

「っっ！」

掌に激痛。

見るとアイスコフィンの剣身が沸騰したように泡立っている姿があった。

オーバーリミッツと魔法の二重発動という超過負荷に耐え切れなくなっているのだ。

「あぁぁあぁぁあっ！」

獣の咆哮と共に術を強化。焦熱地獄の光景が更に輝きを増した。

それと同時に周到に張っていた「罠」がついに発動する。

キマイラバタフライの全身を覆っていた蒼白の結晶、それはアイスコフィンで凍らせた「傷口」だった。

「氷棺」の名を冠する剣で付けられた封印が、地獄の業火と冥界に葬り去る炎でついに解かれる。

合計十二箇所。各部の結晶が溶けた瞬間、紫と橙の炎が全身の傷口に突き刺さり、喰らいつくっ！

中と外。逃げ場はおろか、防ぐこともままならない地獄の焔で、キマイラバタフライの翅が蒸発し、四肢と尾が燃え落ち、肉体が灰になっていく。

異界の怪物、キマイラバタフライであった残骸は業火の底へと葬られていった。

「ッハァ・・・・！ハァ・・・・ハァ・・・・」

止めていた息を吐きながら魔術を解除。橙色の業火も、紫の劫火も火の粉となって森の夜空に散っていく。
疲労と、緊張の糸が切れたことで膝が落ちる。
最早、柄だけとなったアイスコフィンを放り投げ、大地に両手を着く。
顔を上げるとそこには緋色の海があった。
火炎系魔法の二重発動で大地はコールタールのように溶け、赤熱の坩堝と化して夜空を照らしていた。

「・・・・行く、か・・・・・」

膨大な輻射熱に煽られた俺は何とか息を整え立ち上がる。
休んでいる暇も、破壊の光景に見入っている時間も無い。

もう一人の化け物が待っている。

## 第二十七話（後書き）

今回のキマイラバタフライの強さについてはご容赦下さい。

基本的にこの作品に出る敵は強さに上方修正される運命です・・・・。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4387s/

護り抜く少年

2012年1月11日10時05分発行